

SD ジャーナル1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 1999

The 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

北欧モダンの恒星：エリック・ブリュッグマンの建築

Lodestar of Modern Scandinavia: The Architecture of Erik Bryggman

ハピルバダ1999/2000・ジャナー

HAPPENING: Tokyo Contemporary Design Exhibition

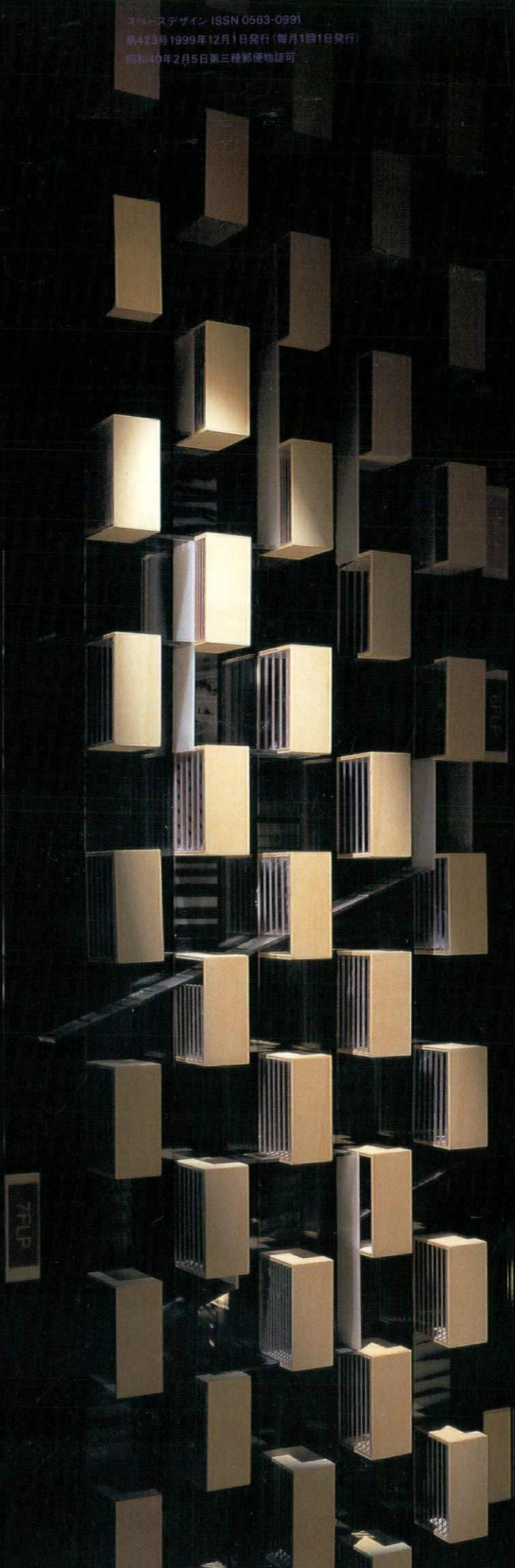
スペースデザイン ISSN 0563-0991
第423号 1999年12月1日発行 (毎月1回1日発行)
昭和40年2月5日第三種郵便物認可

SD

Space Design

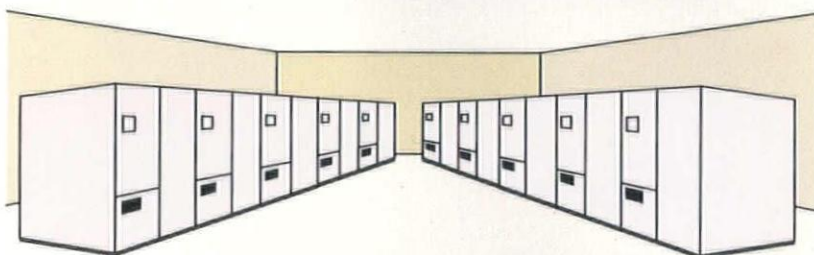
9912

Monthly Journal of Art and Architecture



ビル空調機リニューアル 合理化委員会の評決です。

スーパーアロエスの ロッカー設置



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエスは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

ユニット形冷温水機のパイオニア

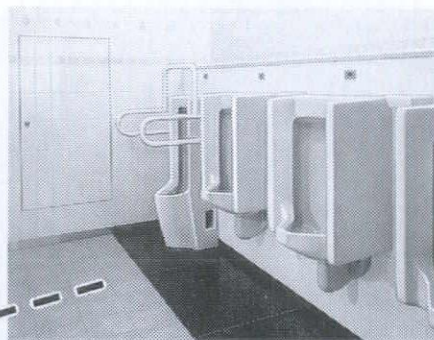
ロッカー設置に最適な スーパーアロエス

矢崎総業株式会社

空調機器事業部：〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

札幌支社 011 (852) 2914	仙台支社 022 (284) 9115	東京支社 03 (3298) 3140
名古屋支社 052 (833) 8415	北陸支社 0764 (41) 6516	大阪支社 06 (6458) 4825
中国支社 082 (923) 2115	四国支社 087 (833) 3336	九州支社 092 (411) 4835

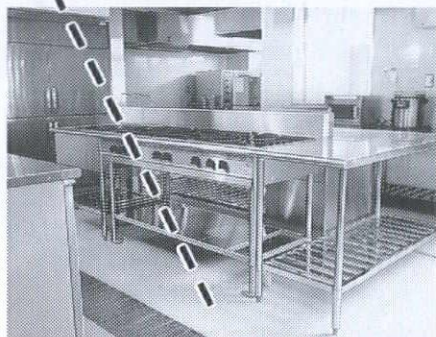
トイレで実証。
不快な臭いが
大きく減少。



阪急グランドビル(大阪府大阪市)

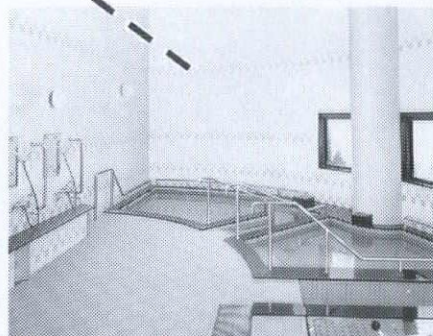
あちらこちらで実証中。 ハイドロテクトタイルの力。

厨房で実証。
油污れも
水洗いでOK。



おとしよりすこやかセンター南部花園館・
西成区福祉センター(大阪府大阪市)

浴室で実証。
日々のメンテは
シャワーで充分。



三笠市デイサービスセンター湯快館
(北海道三笠市)

光を使って抗菌・防汚・防臭。メンテナンスがラクになる、
ハイドロテクトタイル。ハイドロテクトメジとあわせて使えば効果倍增。

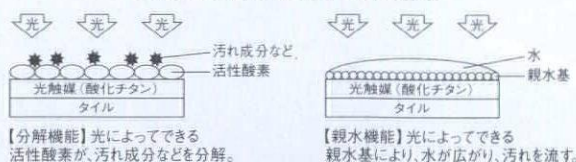
◎光と水の新技术。ハイドロテクトタイル。

光を受けることで汚れを分解。同時に水がなじみやすい
タイル表面を作り出すために、汚れが付きにくく落ちやすい。

◎さらなる新発明。ハイドロテクトメジ。

目的そのものの吸水率をこれまでの1/13に抑えることで、
カビの心配もなし。汚れも付きにくくて、じつに衛生的。

ハイドロテクトタイル、2つのはたらき



(1ヶ月後の比較状態)

汚れを防ぎ、衛生的。

TOTO

ハイドロテクトタイル&メジ(内装用)

商品の技術的なお問合せは技術相談室へ
ナビダイヤル FAX.0570-01-2111 TEL.0570-01-1010 受付時間 9:00~18:00(土・日・祝日を除く)
受信地: 神奈川県茅ヶ崎市・福岡県北九州市

インターネットホームページ
<http://www.toto.co.jp/>

National/Panasonic

AV&C CENTAPS

AUDIO
音響システム

VISUAL
映像システム

COMMUNICATION
通信システム

COMPUTER
コンピューターシステム

FOOD
食品流通システム

LIGHT
照明システム

AIR & AQUA
空調・水管理システム

PASSAGE
搬送システム

SOFTWARE &
SYSTEM
ソフトウェア・
システム

ここにはあります人と自然と技術の調和が

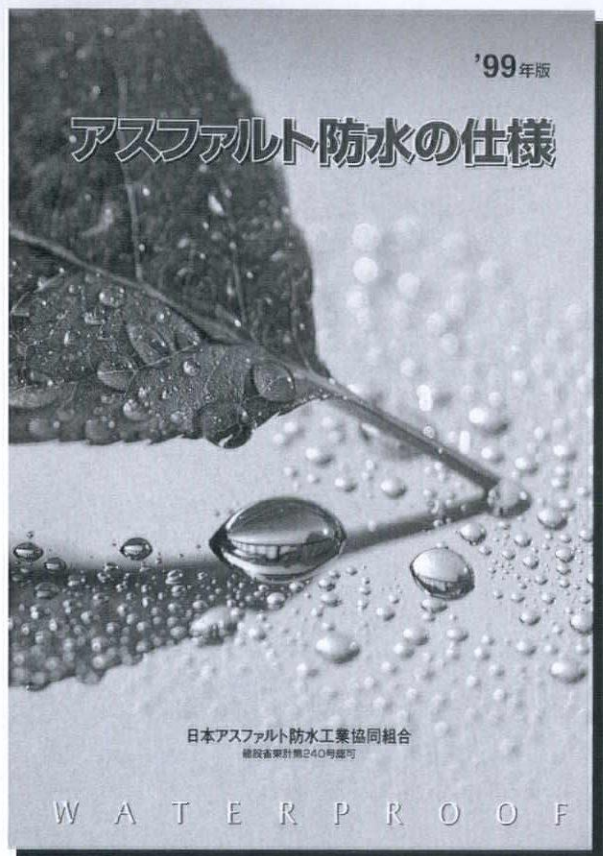
松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。

松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5460-2931
北海道支店 ☎011-207-7722
東北支店 ☎022-711-3551
新潟支店 ☎025-246-1031
関東支店 ☎0286-37-2241
神奈川支店 ☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010
長野支店 ☎0262-26-3990
北陸支店 ☎0762-23-1121
静岡支店 ☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店 ☎06-6949-2111
中国支店 ☎082-247-5272
四国支店 ☎0878-26-1711
九州支店 ☎092-431-1100
沖縄支店 ☎098-869-2926

自然と環境と経済の調和

豊かな経験と新しい技術のアスファルト防水



新仕様書
発刊!

CO₂排出量
の削減

工程数の削減
と
工期の短縮



今日、地球の温暖化やオゾン層の破壊などさまざまな環境破壊が進み、深刻な問題として取り上げられています。そんな中、今私たちにできることは地球資源を有効利用し、環境との共生、また地球環境の保全に力を注いでいかなければなりません。

日本アスファルト防水工業協同組合と日新工業株式会社が作りあげた環境保全型アスファルト防水は、ライフサイクルアセスメントの概念を取り入れ、(財)日本建築センターにおいて防水性能についても在来工法と同等であると証明されました。

私共はこれからも続く未来へ、安心して歩んでいけるように、自然と環境の調和をはかり、社会のニーズに対応していきたいと考えております。

マルエス 総合防水材料メーカー ISO9002 RQ0004 認証取得
日新工業株式会社
営業本部 ■東京都中央区日本橋久松町9-2 〒103-0005
TEL.03 (5644) 7211 (大代)
●ホームページ <http://www.nisshinkogyo.co.jp/>



日本アスファルト防水工業協同組合

営業本部 ■東京都中央区日本橋久松町9-2 (日新中央ビル) 〒103-0005
TEL.03 (5644) 7651
●ホームページ <http://www.nihon-as.or.jp/>

札幌・仙台・春日部・東京・千葉・横浜・名古屋・金沢・大阪・高松・広島・福岡

広告についてのお問合せの際は「SDを見て」と御明記願います

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、

ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。

毎日が健康で、安心して、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、

これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。

そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす

人々の健康にも影響を与えます。鹿児島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



ゼオライト建材



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむの

はとても素晴らしいこと。鹿児島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



エコヒーリングガーデン



ひとの、ふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



ボールベアリングが受皿の上をなめらかに動きます。



免震装置

戸建住宅免震システム

100年をつくる会社

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社:東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

軽井沢
 **ホテル 鹿島ノ森**
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ：
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地 ☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335





ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最大
800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメンバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

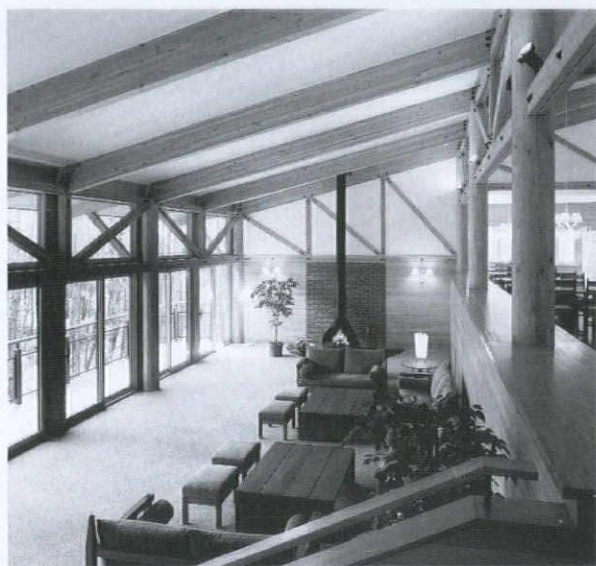
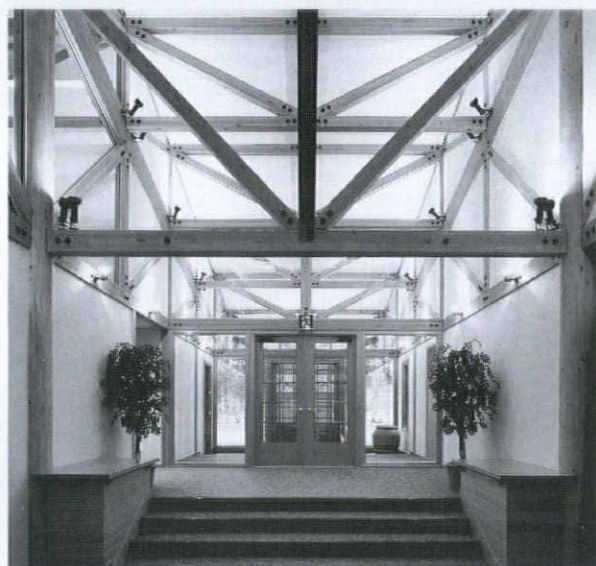
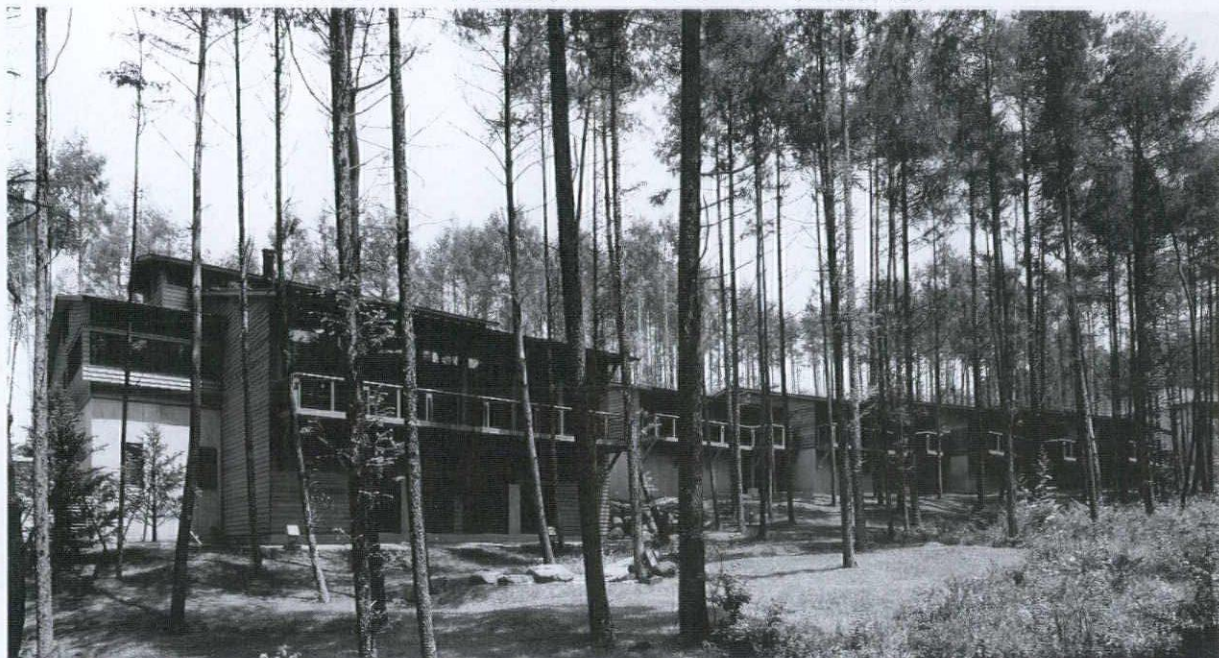
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683代 FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店／札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容／給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。
TOENEK

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181

無限大
夢×技=∞

YUME  TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。

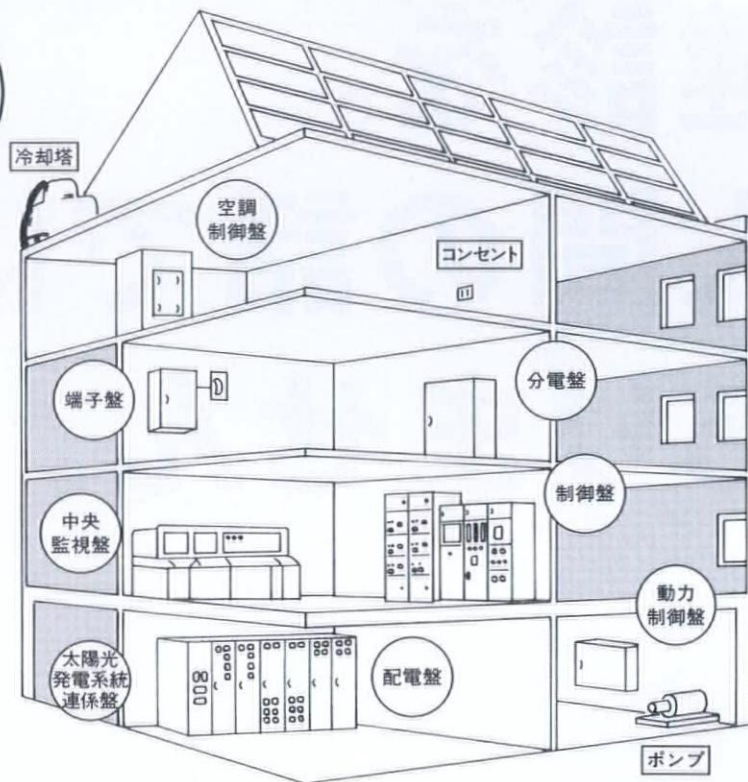


創業1919 あなたの街でお会いしています

K 栗原工業株式会社

本社/〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(6313)1101
東京本店/〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

見えない電気を交通整理 それは**盤**



川崎電気株式会社

- 東京本社／東京都港区芝浦3-7-4
- 本 社／山形県南陽市小岩沢225



CHUDENKO

確かな歩み未来まで……



総合設備の設計施工 電気・情報通信・計装・空調・給排水・水道施設

株式会社 中電工

本店／広島市中区小網町6番12号 TEL (082)291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。

KANDENKO



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。
コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

本社〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

0001

特集

榎 文彦 1993-99

1999年、第11回高松宮殿下記念世界文化賞（建築部門）を受賞した榎文彦。1993年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含めて豊富な写真、スケッチ、図面を用いて詳細に紹介する。

●紹介作品＝ヒルサイド・ウエスト、風の丘葬斎場、浮かぶ劇場、東京キリストの教会、YBG芸術センター、イザール・ビューロ・パーク、幕張メッセ北ホール、富山国際会議場、名取市文化会館、霧島国際音楽ホール、慶応藤沢大学院棟、慶応藤沢セミナーゲストハウス、福岡大学60周年記念館、神奈川大学16号館、YKK R&Dセンター、ノバルティスファーマ筑波総合研究所、横浜市篠原地区センター・地域ケアプラザ、中津市立小幡記念図書館、他。

●序文＝榎文彦

●対談＝ヒルサイドテラス／ウエストの30年
榎文彦×門内輝行

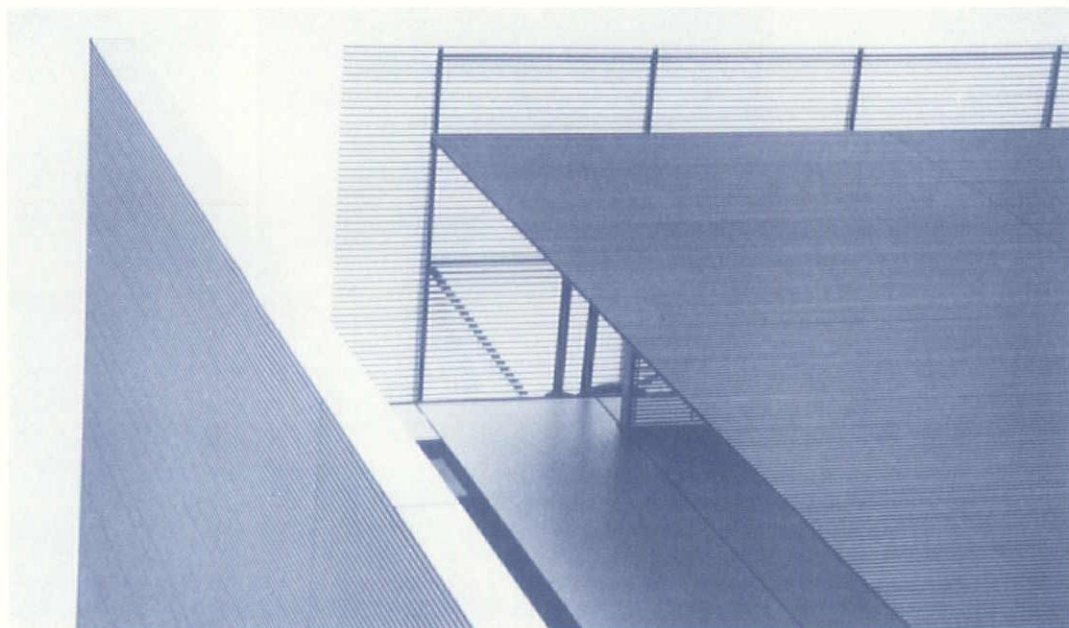
●論文＝デヴィッド・スチュワート、富永譲

●作品解説＝榎文彦＋榎総合計画事務所

連載：

カルチャー・カフェ——今月の舞踊・映画 文＝尼ヶ崎彬、鵜沢隆

〈ヒルサイド・ウエスト〉／設計＝榎文彦
写真＝Judith Turner



9910

特集

東京リノベーション

倉庫や工場、民家を改装して再生転用する事例が増えている。本特集は、場とアクティビティがリンクした事例を紹介し、リノベーションの手法やスペースの新しい可能性を探る。

●事例紹介：EXIT metal work supply、A-Net、北山創造研究所、Deluxe、オレゴンムーン、ギャラリーéf、現代美術製作所、NOPE、コマンドN、TIME & STYLE、Baden Baden、他

●事例マップ：ギャラリー／ショップ、空き倉庫／工場

●ガソリンスタンド再生計画 同実行委員会、A activity
企画編集協力＝粕谷姫中 撮影＝村角創一

文＝安藤寿珠、稲島みちこ、他

トピックス

隅田川再生とリバーサイドスペース

文＝陣内秀信、西野真介、藤澤紫、他 写真＝加藤嘉六

連載：

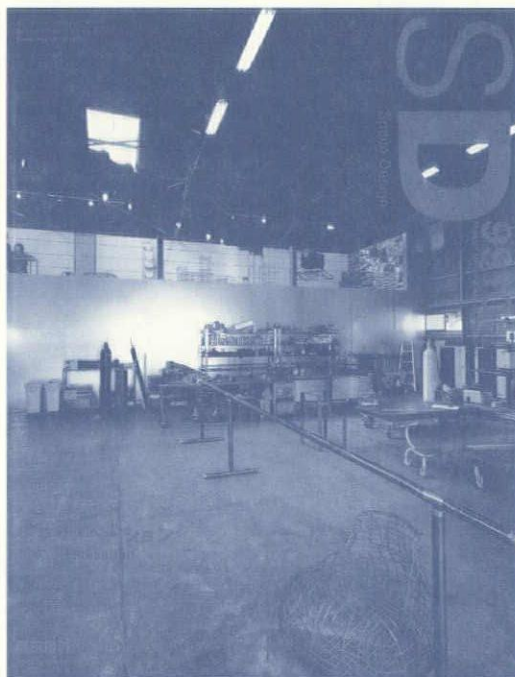
エントロピーの森——都市のインフラストラクチャ10

写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の演劇・音楽

文＝原研哉、服部のり子

定価＝2000円／本体1905円



9911

特集

ジャパニーズ・プロダクツ'99 インディーズなシチュエーション

デザイナーがメーカーの企画やマスマーケットに対する経済的な論理からインディペンデントであること。そんな環境から新しいデザインが創造されている。あるデザインが成立する際の個々のデザイナーのおかれた個別の環境／状況／事情を追うことで、プロダクト・デザインの可能性を俯瞰する。

企画協力・文＝川上典子、青山玲 写真＝高山幸三

●インタビュー＝中牟田洋一 新しいデザイン・クリエーションとしての日本のシチュエーション

●紹介デザイナー＝スキーマ建築計画、LivingType、廣田尚子、エグジットメタルワークサプライ、青山玲、他。

●デザイナーズ・プロデュース

●ショップが生み出すクリエーションの土壌

E & Y、trico、IDEE、pour annick、Time & Style、他。

●対談＝沖健次×酒井俊彦 ふたつのデザイナー像

●プロダクト・ウェブ・セクション

連載：

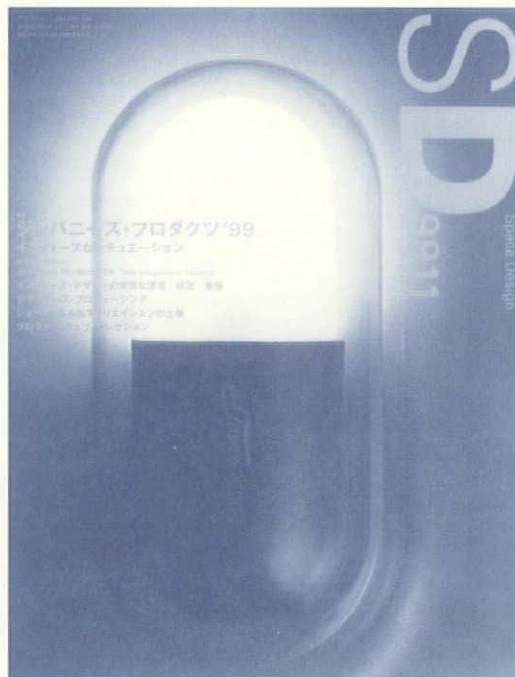
エントロピーの森——都市のインフラストラクチャ11

写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の舞踊・映画

文＝多木浩二、浜野保樹

定価＝2300円／本体2190円



鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address：

http://www.kajima-publishing.co.jp/group/publish/index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号十消費税、送料込み）

SD

Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂本店（神田）03-3233-3314

書泉ブックマート 03-3294-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳屋堂 06-443-0167

札幌／旭屋書店 011-241-3007

横浜／有隣堂本店 045-261-1231

京都／大龍堂書店 075-231-3036

大学生協内書店

東北工業大学 東京工業大学

法政大学工学部 早稲田大学理工学部

関東学院大学

9801 SDレビューの15年

2800円

これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出版作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝横山彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉真琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩

9802 都市へ向かう透明性：

スイス・ドイツ語圏の建築

2200円

スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島純代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝藤原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン

9803 表層革命再考：チェコ・キュビズム建築

2000円

現存するプラハのキュビズム建築を掘り下し写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。[香山壽夫のドローイングと空間] 文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木博、青木淳

9804 次世代のマルチ・アーキテクトたち

2000円

30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナル・ミカングミ、他。[デスクトップ・コミュニティ]

9805 空間演出の最前線

2000円

建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村純平、新宮晋、他。[カールとリベラの家] ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン

9806 風景創出の現在：

ランドスケープ・アーキテクトの挑戦

3000円

風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、ブレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。

9807 シーラカンス

2600円

彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義岳、インタビュー＝山本理顕

9808 光のデザイン・ヴォキャブラリー：

LPAの仕事1990-1998

2500円

LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出薫

9809 ディテールが創る風景：

細部に宿る美と技巧

2000円

建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。

9810 オフィス環境の近未来

2000円

最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]

9811 「白」と「透明」の詩：

モダンデザインの秀作135

3000円

白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。



9812

SDレビュー1998

第17回SDレビュー誌上発表

小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展] [アアルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる造形] 秀平の近作]

2000円



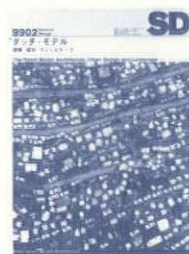
9901

環境共生の現在

プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。

エム・シャーパーク、東京ガス〈アースポート〉、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

2700円



9902

ダッチ・モデル：

建築・都市・ランドスケープ

オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアース、他。

2000円



9903

木の空間

木素材による快適建築

次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンショナル・ミカングミ、河西立雄、葛西淳、みかんぐみ、H DESIGN、他。

2000円



9904

ガウディの愛弟子ジュジョールの夢

ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

2000円



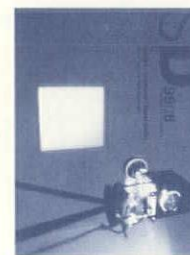
9905

挑発するマテリアリティ：

素材の進化とデザインの可能性

国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。

素材史年表、素材地図1999、他。2500円



9906

小川晋一

Transbody / Super traffic

小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。

2000円



9907

学校建築：

個性を育む環境創出へ向けて

学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、事例を現地レポートを交えて紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代＋佐藤学＋船越徳十郎＋小嶋一浩＋上野淳。

2500円



9908

階段

Beyond Function

近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。文＝渡辺武信、下村純一。

2000円



9909

ベルリン・トポグラフィ

今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。

個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み

2000円



9910

東京リノベーション

スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。企画編集協力＝粕谷延中

写真＝村角創一

隅田川再生とリバーサイドスペース 写真＝加藤嘉六

2000円



9911

ジャパニーズ・プロダクツ'99

インディーズなシチュエーションインディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。

企画協力・文＝川上典子、青山玲 写真＝高山幸三

2300円



9808 Design Vocabularies of Light:

LPA Works 1990-1998

Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende

¥ 2,500



9809 The Landscape of Detail:

Its Art and Techniques

Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥ 2,300



9810 Office Environments for the Near Future:

Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc.

Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration

¥ 2,000



9811 135 Outstanding Works of Modern Design:

Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass.

Kasimir Malevich, Gertrud Vasegaard, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc.

Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥ 3,000



9812 SD Review 1998

The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features:** Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure

¥ 2,000



9901 Sustainable and Ecological Design Today

Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects.

Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥ 2,700



9902 The Dutch Model:

Architecture, Urban Design and Landscape

Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words.

OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaans, Wiel Arets, Bentham Crouwel, etc.

¥ 2,000



9903 Spaces of Wood:

The Elements of Comfortable Architecture

Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards.

Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc.

¥ 2,000



9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:

Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.

Donald Judd: Consistency of Space and Cognition

¥ 2,000



9905 Alluring Materiality:

Evolution of Materials and Their Potential for Design

Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥ 2,500



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.

¥ 2,000



9907 School Architecture:

Toward Environments That Foster Individuality

Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.

¥ 2,500



9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥ 2,000



9809 Berlin Topography

The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.

Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥ 2,000



9910 Tokyo Renovation:

Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.

Reviving the Sumida and Riverside Space.

Photograph: Karoku Kato ¥ 2,000



9911 Japanese Products 99:

Their Independent Situation

Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥ 2,300



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣 I、III、他。

3800円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



Kunihiko Hayakawa

早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



Arata Isozaki

磯崎新 ⑧ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨールディバレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昇磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



Doitsu Hien Shugi no Tensei

ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



Arata Isozaki

磯崎新 ⑨ 1985-1991 part 2

part1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



象設計集団

象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立並原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美主司、他。

4000円

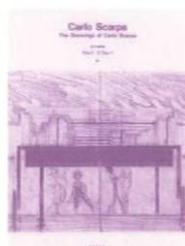


Wooden Architecture Today

続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英 X 安村基。

3708円



Carlo Scarpa

カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



横文彦

横文彦 ②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



Bruno Taut

ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



Tadano Ando

安藤忠雄 ③ アンビル・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトIII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム、他。

3914円

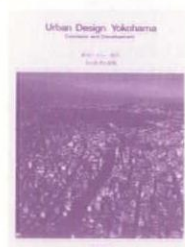


ボザール

ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編。ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



Urban Design Yokohama

都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦 X 義原敬 X 小澤恵一、他。

5000円

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2551

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

005

特集

SDレビュー1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

017

総評

播 繁、芦原太郎

018

I.C.U

[NOx]

020

新井清一／ARAI・ARCHITECTS

KyotoStudio 十京都精華大学新井研究室

[(仮称)京都精華大学実習棟建替計画]

022

アンドリュウ・バーリー＋ミヌストリー

[<s> linear]

024

石田壽一

[flop/フロップ]

027

川人洋志

[庭に住む一札幌]

030

岡河 貢＋PARADISUS ARCHITECTS

[向島洋ランセンター増築計画]

032

金井謙介＋小池聡子

[農村の家]

034

駒井貞治／駒井貞治の事務所

[今月の吉村家]

036

清水祐効

[PLATFORM IN THE CASE]

038

寺岡豊博

[ダモイの砦]

040

平沼かおり

[WIRED SPACE]

042

更田邦彦＋岩岡竜夫＋岩下泰三

[アビタ戸祭]

044

馬淵富夫＋北岡 治＋徳野博子／

大成建設設計本部

[PLATEaux]

046

安田博道

[静岡の家]

048

山田 良

[鹿北町「道の駅」周辺施設]

050

山口 隆

[水上の慰霊空間]

053

講評

林 昌二、播 繁、芦原太郎、小川晋一

059

千年紀末の沈黙

遠藤秀平

060

経過報告

065

北欧モダンの恒星：エリック・ブリュッグマンの建築

066

トゥルクの復活礼拝堂

078

バライネンの礼拝堂

080

ヴィエルマキの体育学校

082

オーボ・アカデミーの学生会館

075

北欧モダンの恒星：

建築家エリック・ブリュッグマン 田中雅美

084

謙譲の美德

ユハニ・パッラスマー 訳＝櫻井義夫

086

E. ブリュッグマン論文 2 題

「機能主義」、「田園の建築」 訳＝田中雅美

088

作品年譜

092

作品マップ&リスト

093

ハブニング1999/2000・レビュー

文：岡田栄造

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・太平洋・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円 [本体1,905円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み

表紙：石田壽一 [flop/フロップ]
表紙写真：堀内広治／新写真工房
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博＋齋藤亜季子

005

Special Feature

SD Review 1999

The 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

017

Comments from the Screening Committee
Shigeru Ban, Taro Ashihara

018

I.C.U

[NOx]

020

Kiyokazu Arai/ARAI+ARCHITECTS KyotoStudio+

KYOTO SEIKA UNIVERSITY Arai Studio

[KYOTO SEIKA UNIVERSITY

Re-VITALIZATION PROJECT]

022

Andrew Barrie+Ministry

[<s>linear]

024

Toshikazu Ishida

[flop]

027

Hiroshi Kawahito

[Living in the Garden: Sapporo]

030

Mitsugu Okagawa+PARADISUS ARCHITECTS

[Extension: Mukai-shima Orchid Pavilion

(Exhibition Hall)]

032

Kensuke Kanai+Satoko Koike

[Country House]

034

Sadaharu Komai/Sadaharu Komai's Office

[The Yoshimura House This Month]

053

Screening Committee Reviews

Shoji Hayashi, Shigeru Ban, Taro Ashihara, Shinichi Ogawa

059

Silence at the End of the Millennium

Syuhei Endo

036

Shimizu Yukoh

[PLATFORM IN THE CASE]

038

Toyohiro Teraoka

[The fort towards liberty]

040

Kaori Hiranuma

[WIRED SPACE]

042

Kunihiko Fukeda+Tatsuo Iwaoaka+Taizo Iwashita

[HABITAT TOMATSURI]

044

Tomio Mabuchi+Osamu Kitaoka+Hiroko Tokuno

[PLATEaux]

046

Hiromichi Yasuda

[House in Shizuoka]

048

Ryo Yamada

[Kahoku-machi Art Project]

050

Takashi Yamaguchi

[Memorial Space on the Water]

061

The Entropic Forest: Urban Infrastructure 12 (End)

Photo: Heiner Schilling Text: Hiroo Yamagata

102

Culture Cafe: This Month: Music,
'HABIB KOITE & BAMADA' Peter Barakan

104

Culture Cafe: This Month: Play,
'KUNISADA' Hiroyuki Shimizu

106

Book Review

Hiroshi Matsukuma

109

Book Information

110

Announcement

113

SD1999 INDEX

065

Lodestar of Modern Scandinavia: Erik Bryggman of Architecture

066

The Chapel of the Resurrection, Turku

078

Burial Chapel at Parainen

080

Vierumäki Sports Institute

082

The "Kären" building the students'
union of Åbo Akademi, Turku

075

Lodestar of Modern Scandinavia:

Architect Erik Bryggman Masami Tanaka

084

The Virtue of Humility

Juhani Pallasmaa

086

Two Essays by Erik Bryggman

'Functionalism', 'Rural Architecture'

088

A Chronological List

092

Map & List

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: 03-5561-2551 [Management], 03-5561-2555 [Editing]
FAX: 03-5561-2561 [Management], 03-5561-2565 [Editing]
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: Toshikazu Ishida [flop]
Photo: Koji Horiuchi / N.P.A.
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

093

HAPPENING 1999/2000 Tokyo Contemporary Design Exhibition

Text: Eizo Okada

特集

SDレビュー 1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

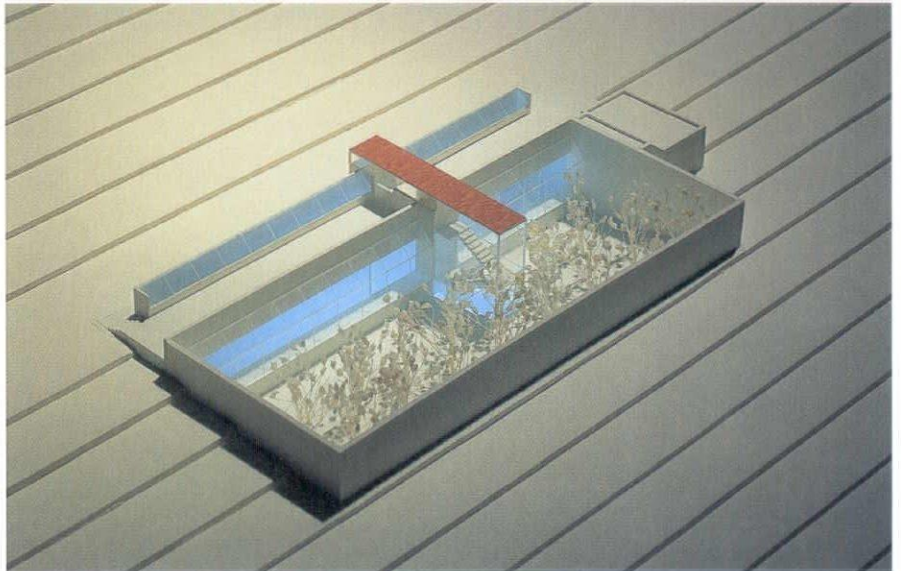
Special Feature

SD Review 1999

The 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

川人洋志

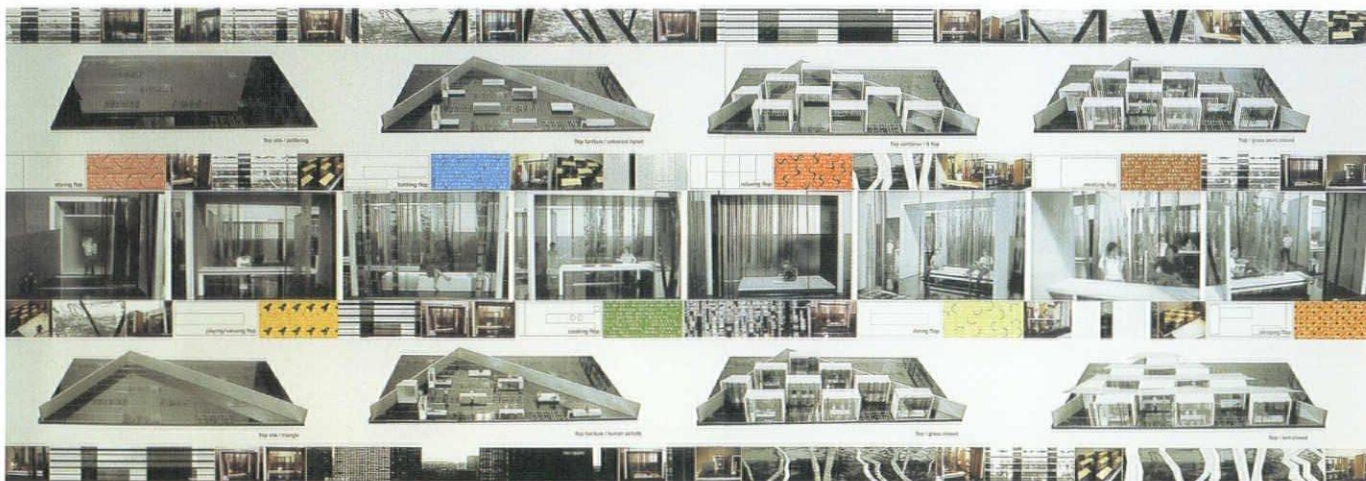
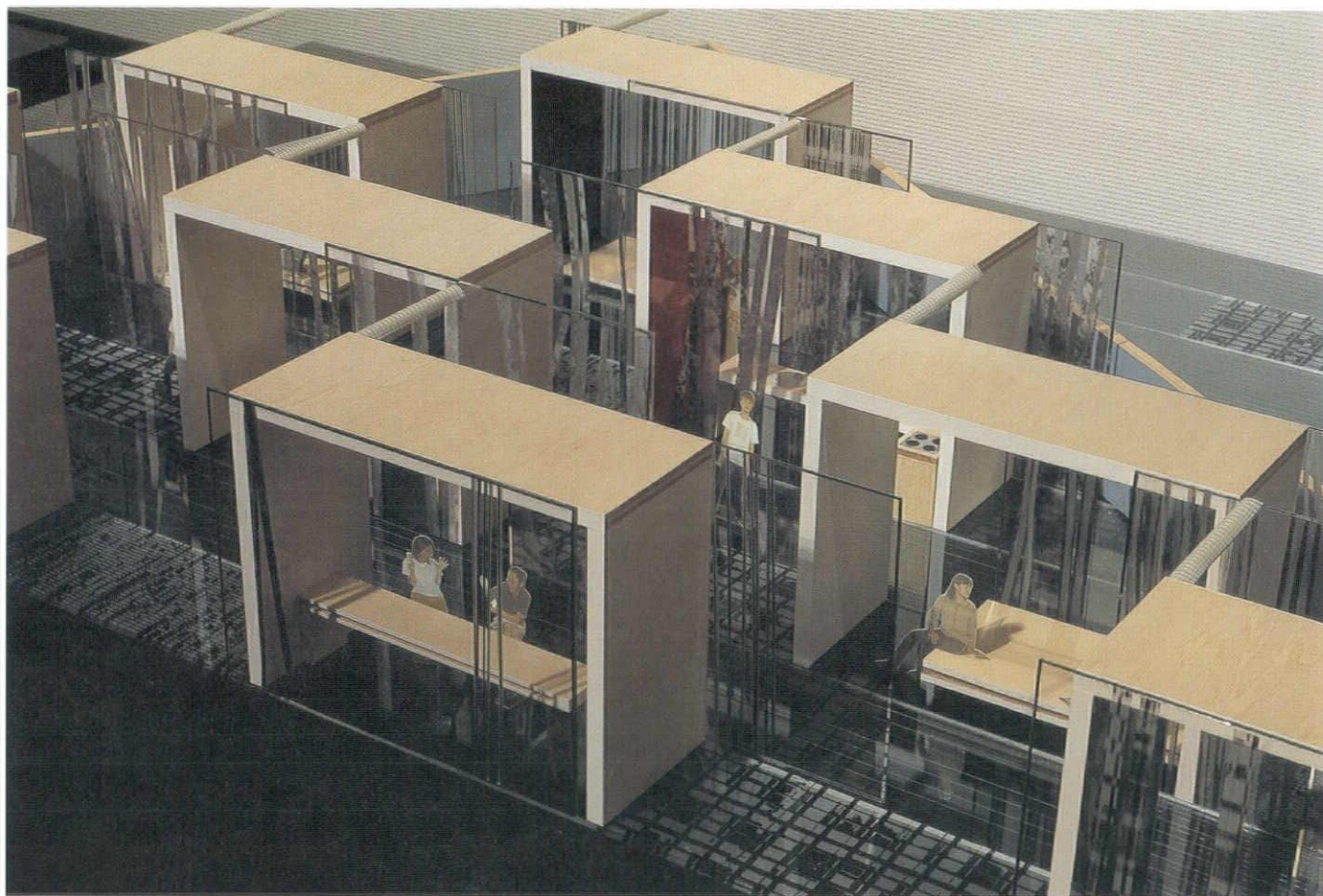
[庭に住む一札幌]→027



◎鹿島賞

石田壽一

[flop/フロップ]→024



◎朝倉賞

山口 隆

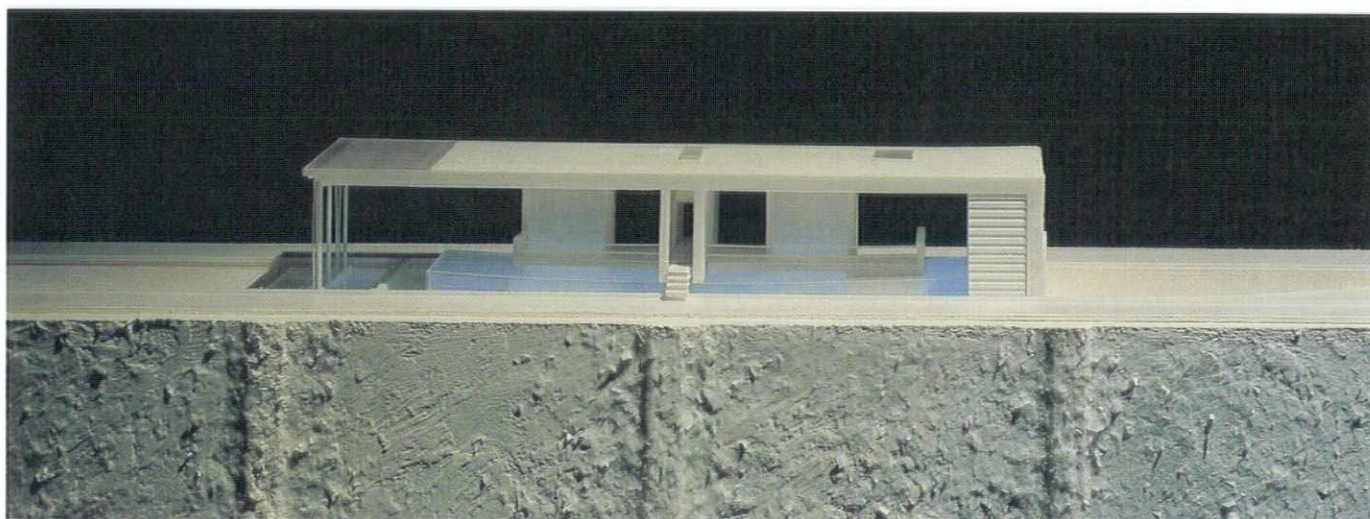
[水上の慰霊空間]→050



○SD賞

金井謙介+小池聡子

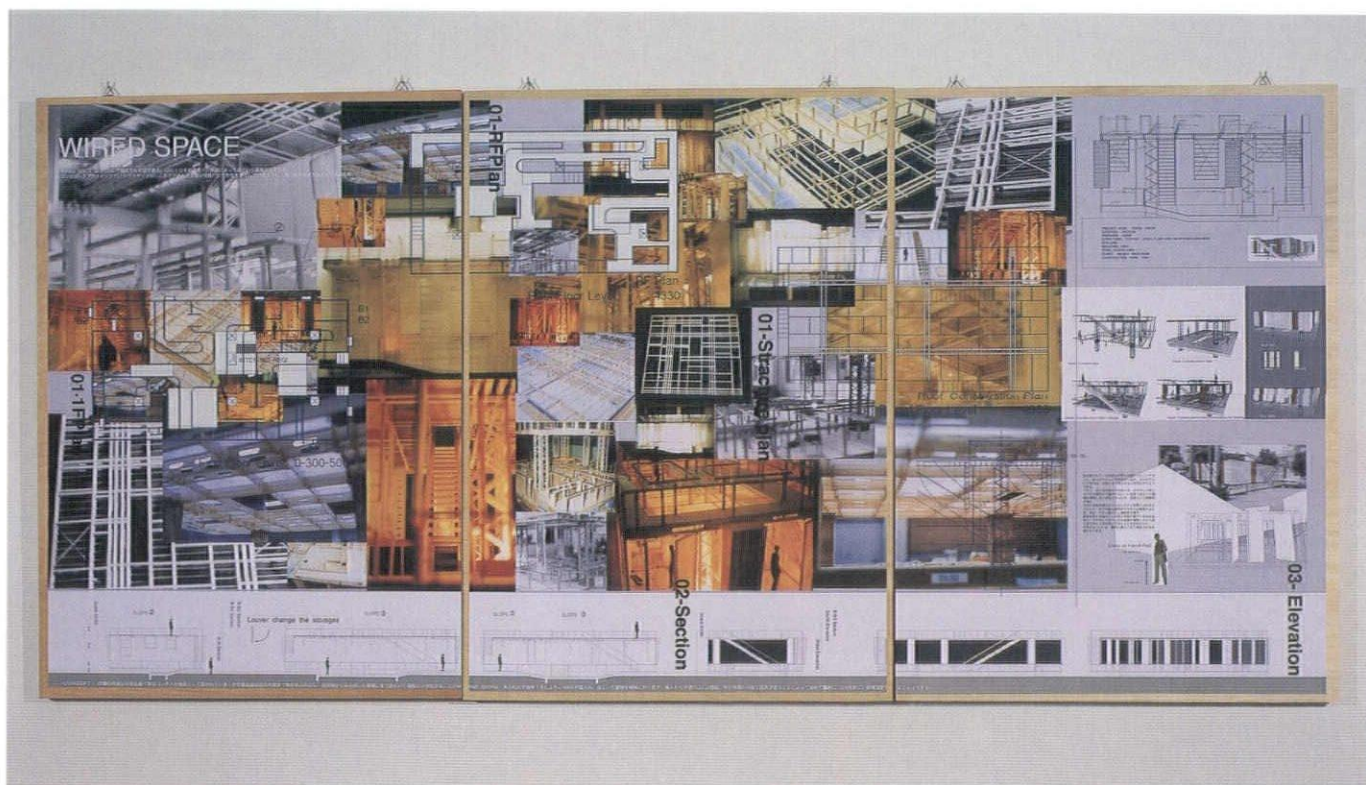
[農村の家]→032

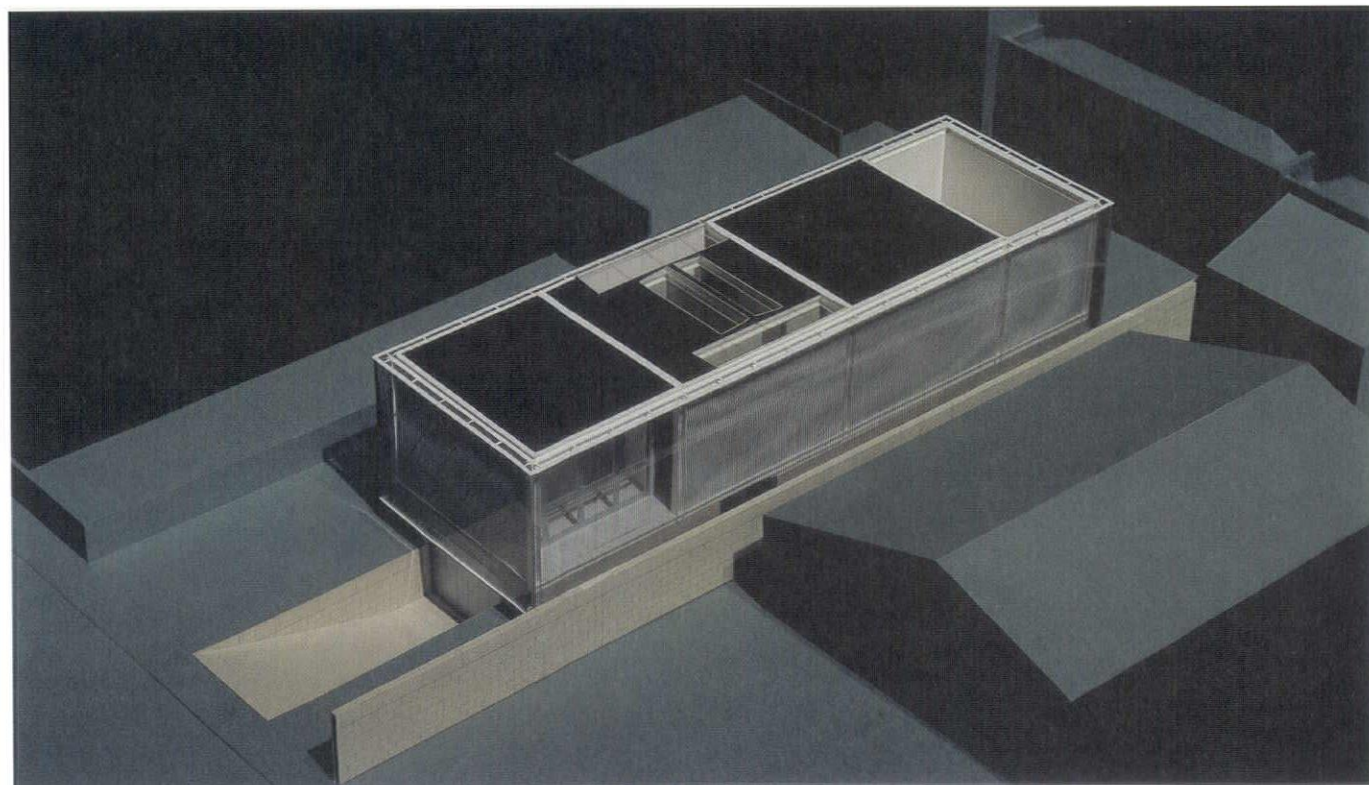
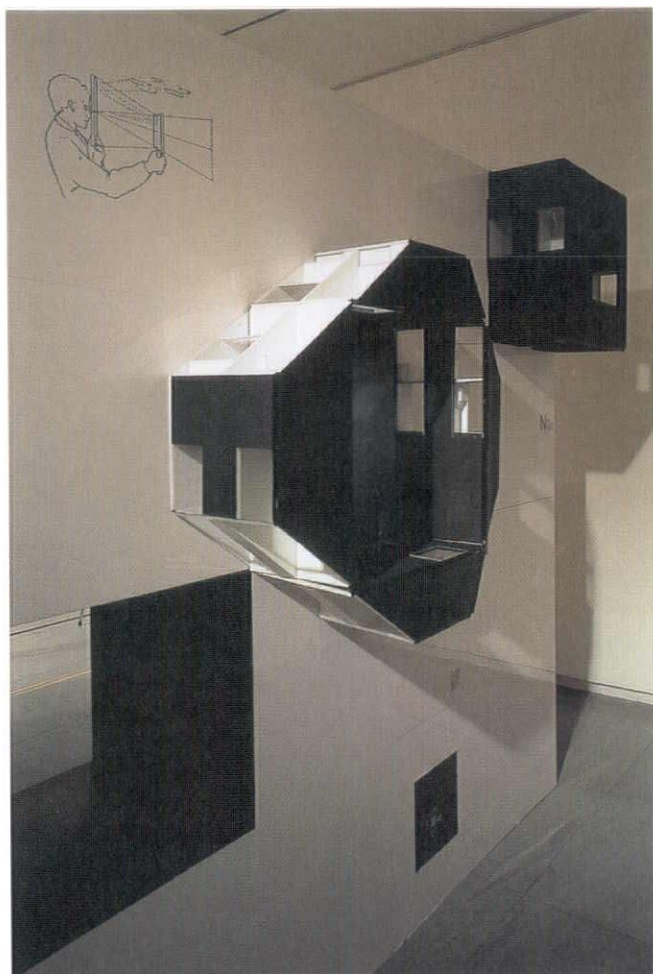


○新人賞

平沼かおり

[WIRED SPACE]→040

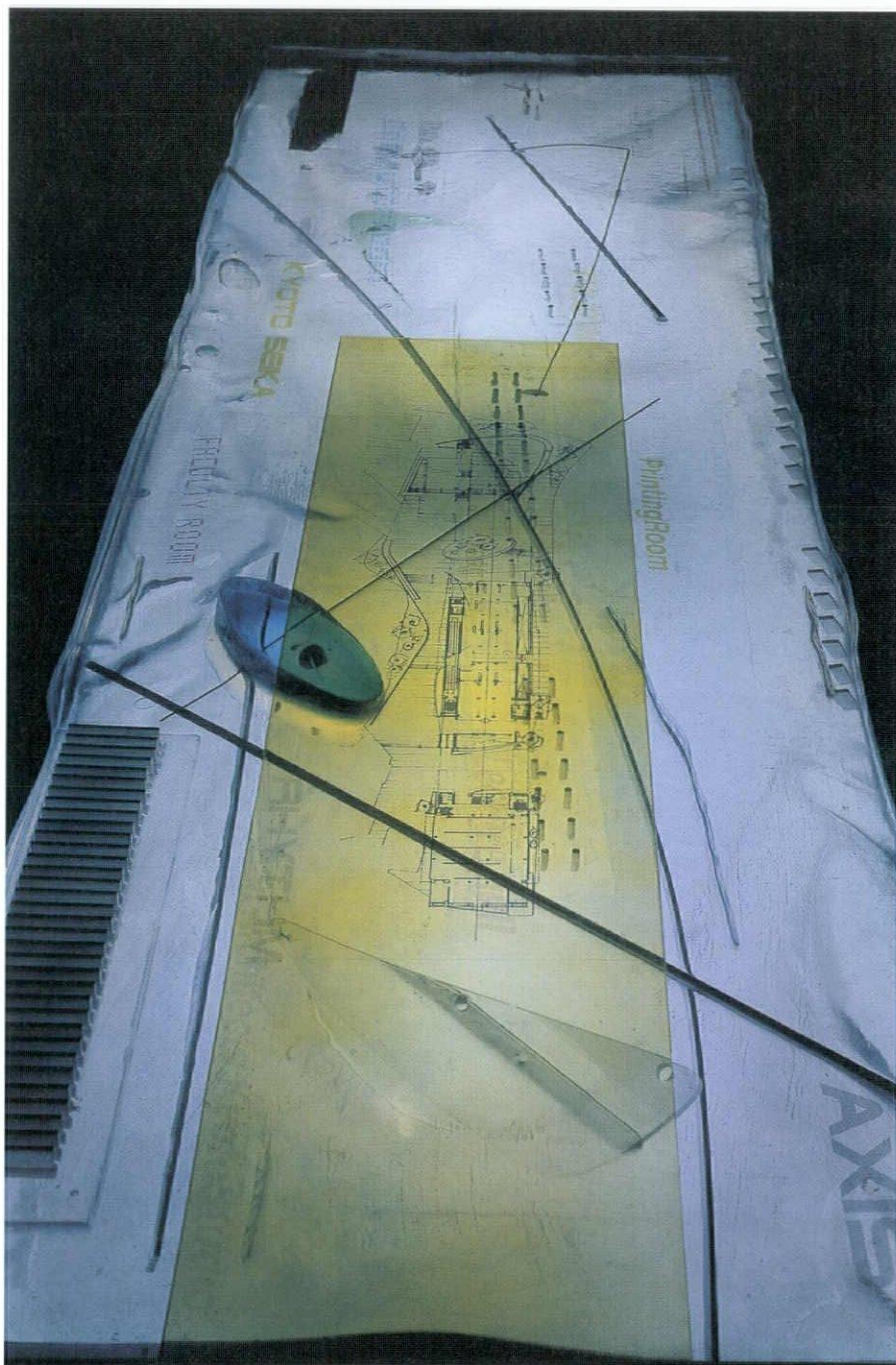




新井清一/ARAI・ARCHITECTS

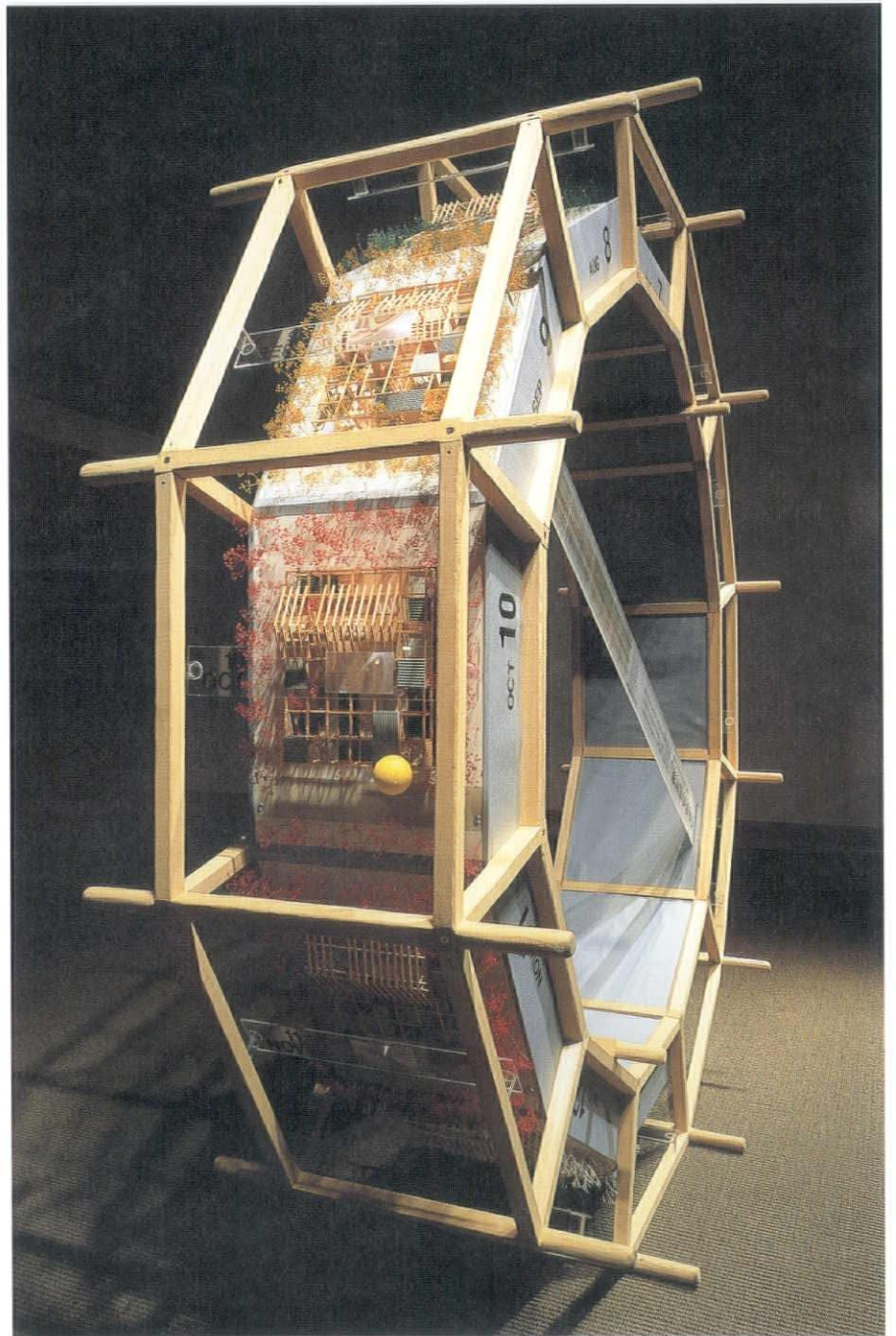
KyotoStudio + 京都精華大学新井研究室

[(仮称) 京都精華大学実習棟建替計画]→020



駒井貞治／駒井貞治の事務所

[今月の吉村家]→034



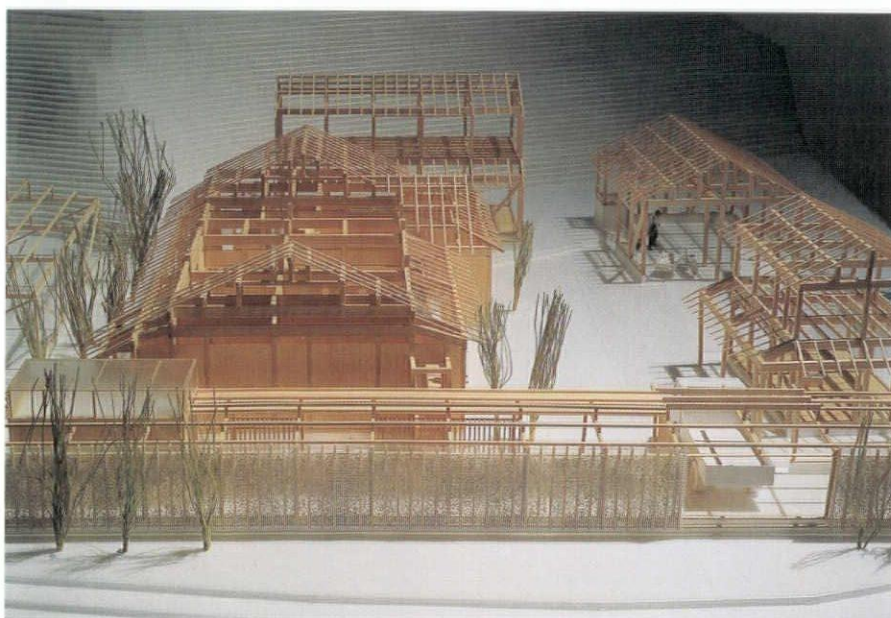
清水祐効

[PLATFORM IN THE CASE]→036



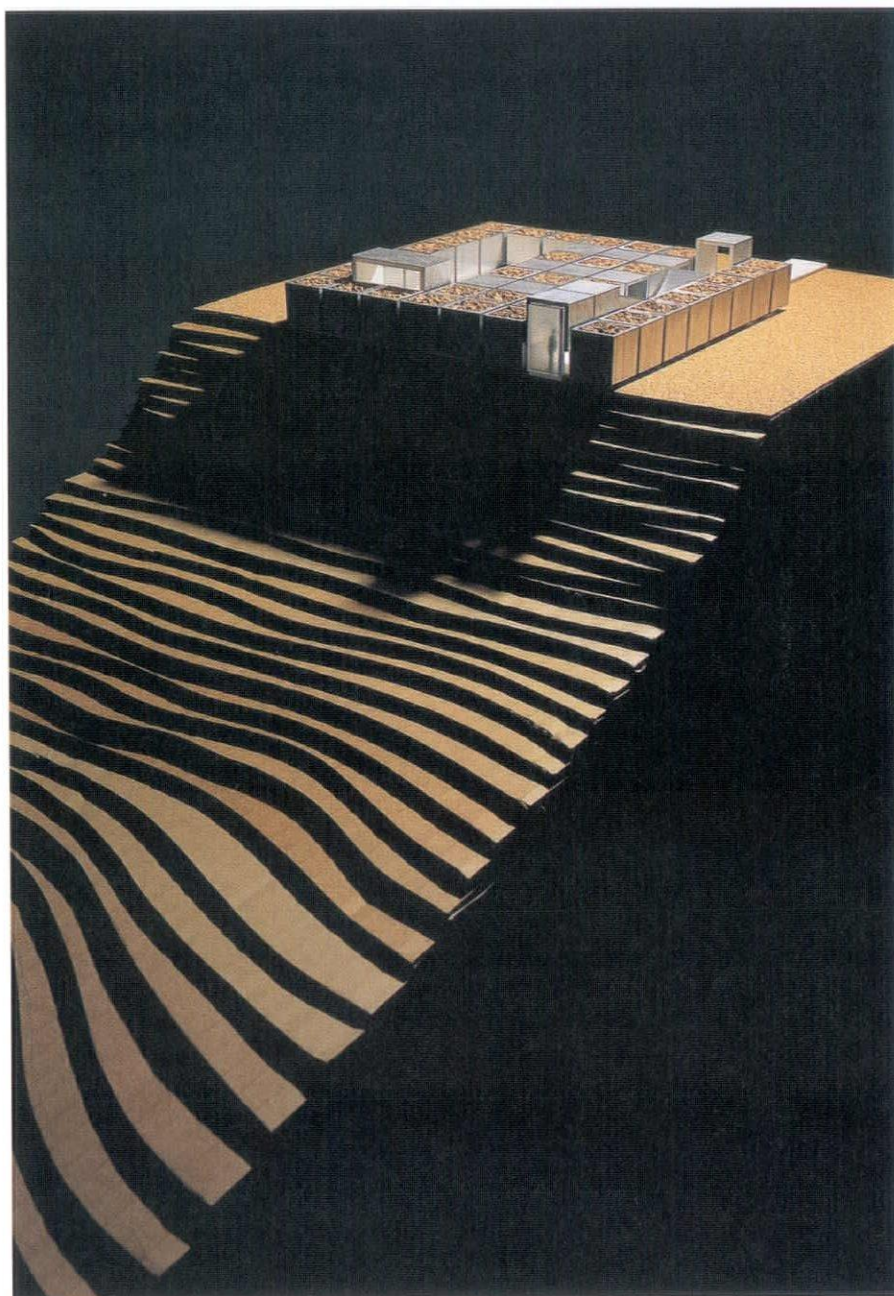
安田博道

[静岡の家]→046



寺岡豊博

[ダモイの砦]→038



更田邦彦+岩岡竜夫+岩下泰三

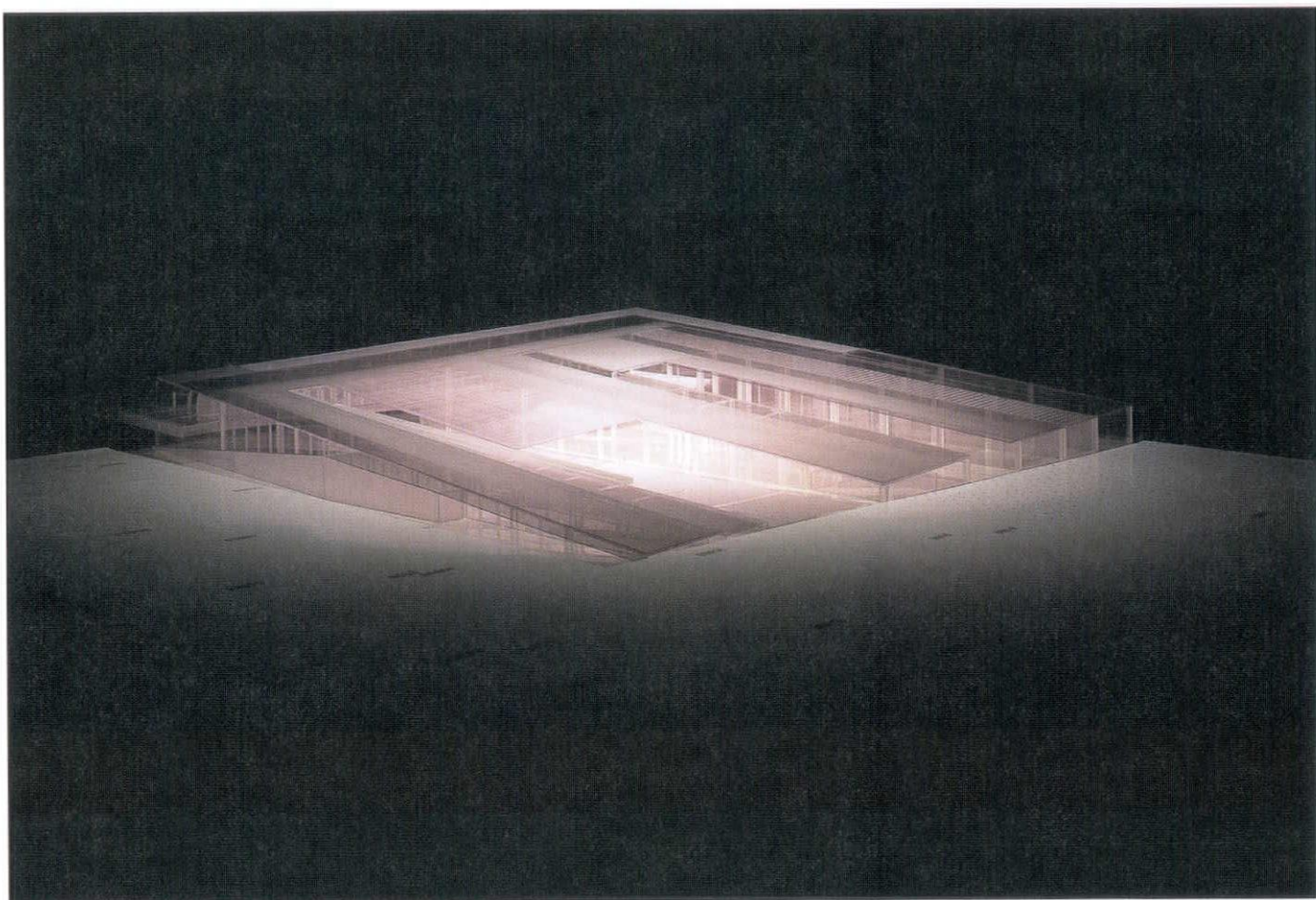
[アビタ戸祭]→042



馬淵富夫+北岡 治+徳野博子／

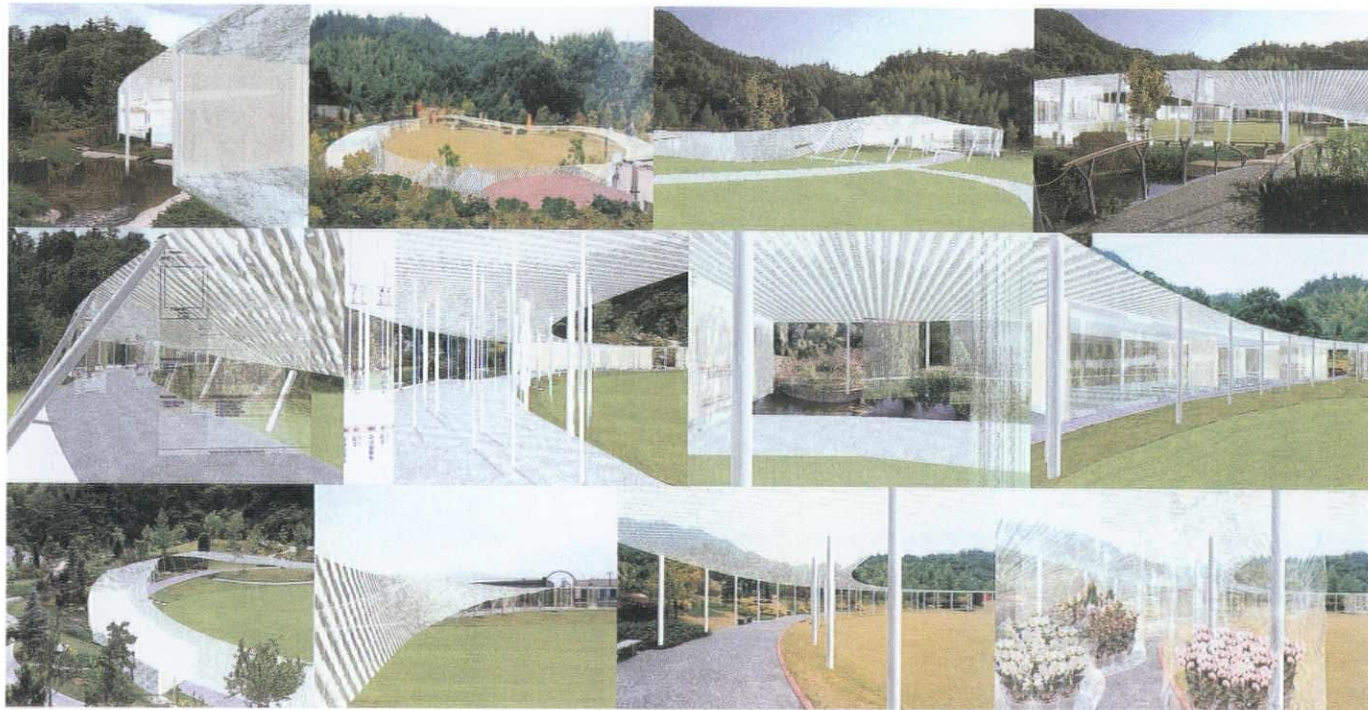
大成建設設計本部

[PLATEaux]→044



岡河 貢+ PARADISUS ARCHITECTS

[向島洋ランセンター増築計画]→030



山田 良

[鹿北町「道の駅」周辺施設]→048



幡 繁

SDレビューの審査を担当して2年目、今年は余裕を持って審査に当たろう、と思っていた。ところが応募は300を越しているという。1作品を見る時間を1分として、5時間余が必要だ。2年目で慣れたとはいえ、人間の頭脳の集中は2時間が限度である。とすると、目を通す時間は1作品30～40秒しかない。審査員とはカッコイイと思われているふしもあるが、逆に審査されているような気がしてプレッシャーのかかる仕事だ。特に構造が専門の私には、他の審査員の動向も気になる。

全ての作品に目を通した後に、各審査員が推薦した作品を評価する第一次審査が始まる。

1999年度の応募案は、建築界の不況を反映して若いゼネレーションの小規模な作品が多く見られた。SDレビュー

は建築家をめざす若い人たちの登竜門として位置付けられ、これまでも現在活躍している建築家がこの登竜門をくぐってきた。不況でクライアントが減少し、暇になったから応募数が増加したのか、年に5～6万の建築系の学生が卒業して建築設計界が飽和状態だからなのか。いずれにせよ、第一次審査を通る作品は約5%の狭き門である。だから、ヒルサイド・フォーラムに展示された人たちは大いに自信を持っていたかと思う。

ところで、私自身は去年の経験をもとに「見通し」(なりゆきを確実につかむこと)という尺度で審査に当たる事にした。2000年という歴史的な節目を迎えて、社会が求めているのは、「見通しのきく」建築家(作品)だと思う。このことはSDレビューの主旨にも合致している。勿論、作品の現実性に対する「見通し」もあるが、そのプロジェクトの波及

効果、新しいコンセプトの展開に対する将来性、その建築の使われ方など、自分なりの経験と想像力をもとに作品を見定めることになる。そういった視点で応募作品と向かい合うと、世紀末の今日、若い人たちが社会やクライアントに新しいアイデアを提案しようと模索しているのが見えてくるような気がしてくる。

1999年度のSDレビューは、時代を反映してか作品のテーマも都会から農村(地方)へ移行し展示のインスタレーションも工夫された楽しい展覧会であったと思う。

今、思い起こすと苦勞の多い審査だったが、他の審査員の考え方を知る機会に恵まれ、楽しい場でもあった。

来年は審査される側になってみたいような気分でもある。(ばん・しげる／構造物家)

芦原太郎

早いもので、もう15年前になるが、私が独立して事務所をかまえた当時、スタートしたてのSDレビューを熱い眼差しで見ていることが思い出される。明解なコンセプトやダイナミックな空間構成をひっさげて、仲間達が一人二人入選し颯爽とデビューを飾っていく、自分もいつの日か応募しようと思ってはいたものの実現しないまま、ふと気付くと今日に至ってしまった。

SDレビューの18回の歴史を振り返ってみるとそこには時代の流れを感じることが出来る。初期の頃は、俗に言う有名建築家の作品も見られたが、バブル経済の進行と共に、若手に仕事のチャンスがまわってきて、元気のいい新しいプロジェクトが、このSDレビューでいち早く紹介されていた。そして、バブルの宴も終わりを告げると共に形態から建築家の関心が、関係性やプログラムへと移ってきている。SDレビューは、実現を前提としたプロジェクトを建物の完成前に評

価するユニークなコンペである。それ故、現実と構想の狭間で、建築家が何を考え、何をしようとしているのか、建築家が建築に魂を吹き込むその瞬間を垣間見ることが出来る。

今回のSDレビューの審査にあたっては、その作品に現れた建築家の思考を読みとることを心がけ、その思考の普遍性や社会的価値を評価したつもりである。現実の建築を総合的に評価するわけではないし、実現された時どれだけすばらしい建築になるかを予想するわけでもないと考えた。

今年の応募作品の中では、現実と構想との狭間に、建築家が格闘し、新しいリアリティを感じさせてくれる作品に好感を覚えた。現状を踏襲した、あまりにリアルな建築や、逆にあまりリアリティのない建築家の構想には魅力を感じられなかった。

幾つか見られた農村のプロジェクトからは、最近の建築家が、都市から農村にその活動領域を広げ、具体的な地域との

関係を手がかりにプログラムを作り、新しいリアリティを持った施設を提案しようとしている姿が伺えた。都市・農村といった対立項ではなく、農村にモダンなボキャブラリーを持ち込み、その地域にポジティブにコミットしている作品に、新しいリアリティを感じた。

また、既成のビルディングタイプや制度に挑戦し、新しいプログラムを提示している作品も幾つか見られた。プログラムに対しては建築が宿命的な制度として、その運用のルールを規定することになる。その運用ルールをどこまでオープンとし、クローズとするかを考えることがその建築を構想することである。クローズにしていけば、ある状況に対してはリアリティを持ちやすい。しかし、できるだけオープンで、多様な展開を許容できる空間を提示し、新しい空間感覚を獲得することが、新たなライフスタイルに向けた、新しいリアリティへの道であろう。(あしはら・たろう／建築家)

用途：専用住宅

所在地：神戸市灘区本山北町

主体構造：RC造

主要仕上材：

外部 屋根：SUS鋼板シーメス工法 外壁：焼付塗装鋼板、焼付ステンレス鋼板

内部 床：大理石、木質フローリング 壁：焼付塗装鋼板、焼付ステンレス鋼板、PB+EP 天井：リノリウム、PB+EP

敷地面積：374.57m²

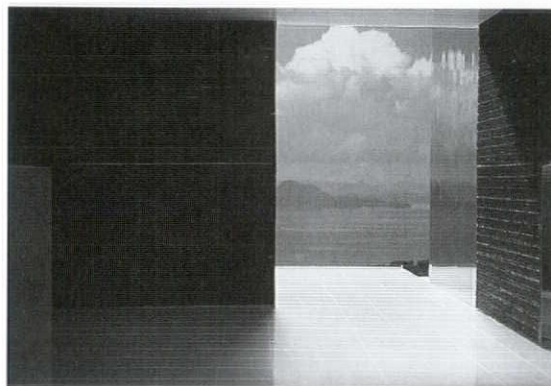
建築面積：169.58m²

延床面積：297.50m²

工事予定期間：2000年1月～6月

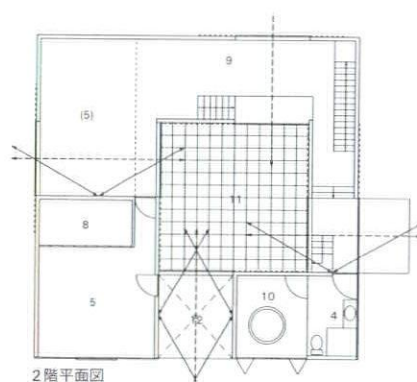
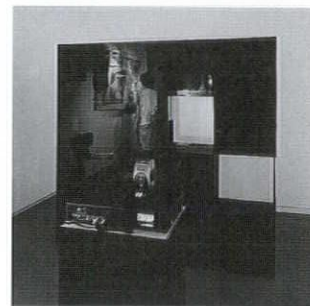
共同設計：田口雅一／Tac-D（構造）

協力：小谷祥巳、杉本幸恵、土佐美由紀、浜中雄大、福島理恵、吉田昌代

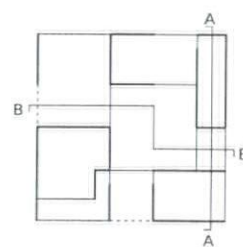


※

(*は入選者提供)



2階平面図



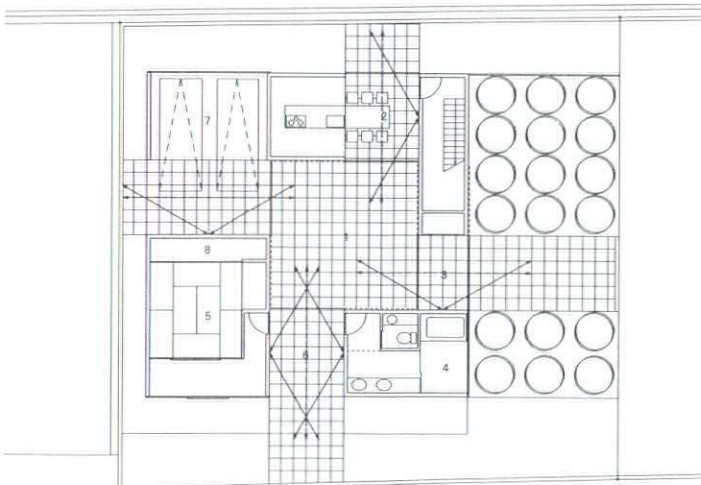
フィリップ・ブルネルスキが開発した透視画法は、後年広く普及しわれわれの知るところとなる透視画法とは、その出発点においてまったく異なる意図をもっていた。彼が考えた透視画法とは、建物を書かれた板の裏側から、その板にけられた穴（消失点）を通して、向かい側に立てられた鏡に映る表側の建物の鏡像を覗くという仕掛けだった。背景の空などは描かれず箱が貼られていたから、実際の空がそこには映ることになっていた。

つまり、そこには現実空間を絵画と写し取ろうとする遠近法の問題意識はなく、絵画に描いた光景と現実の光景、そこに存在する区別が消去される条件を彼は問題にしていた。

このプロジェクトは、神戸湾を一望することのできる、六甲山の斜面地に宅地造成した敷地に計画された住宅である。

この住宅には、N氏とO氏の妻と子供が生活する。彼らは、近代以降住宅を制度的に支えてきた「家族」という単位や、「血縁」という関係性も持たない者同士である。

それぞれの生活形式の類似と差異をどの範囲のキョリとで見るのかがここでは問題となる。この距離は計測可能なもののあいだだけではなく、計ることのできないキョリのことでもある。それはちょうどクライアントがこの場所を選んだのは、「眺望」が最大の理由であることが類推させるキョリでもある。



1階平面図 S=1:300

- 1 居間
- 2 ダイニング
- 3 エントランス
- 4 浴室
- 5 寝室
- 6 テラス
- 7 駐車場
- 8 収納
- 9 ロビー
- 10 ジャグジー
- 11 ルーフテラス
- 12 吹抜



→ Reflective
→ Direct

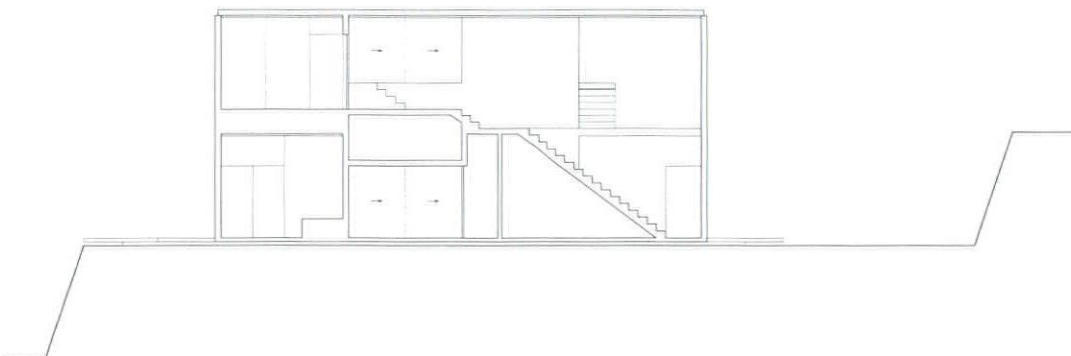


長田直之 Naoyuki Nagata
 1968年/名古屋市生まれ
 1990年/福井大学工学部建築学科卒業
 1990年/安藤忠雄建築研究所入所
 1994年/安藤忠雄建築研究所退所
 1994年/一級建築士事務所 I.C.U.設立
 1995, 96年/SDレビュー入選
 1998年/JCDデザイン賞優秀賞受賞
 1999年/大阪芸術大学建築学科非常勤講師

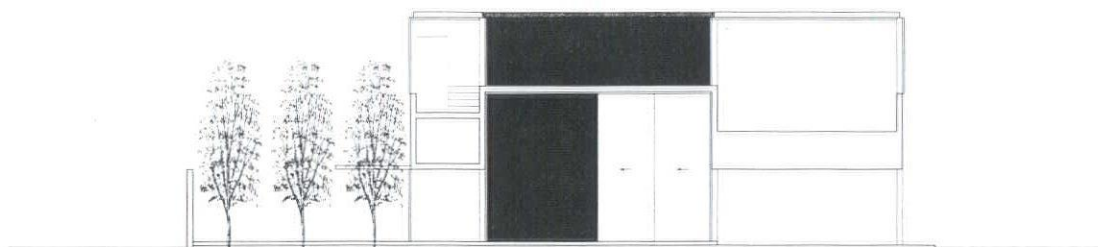
藤田泰代 Yasuyo Fujita
 1967年/香川県生まれ
 1986年/平安女学院短期大学卒業
 1998年/中央実務専門学校卒業
 1998年/一級建築士事務所 I.C.U.

「異なる空間に属するものが、同一の基底面に現れるための条件」これが、この住宅／展示をとおして問題としてきた事柄である。同時には見ることのできないものを「像」として再構成する経験をとおして、その条件を探したいと考えた。ポジとネガの二つの模型はそれぞれ、外側から内側、あるいは内側から外側への視線を可能にするため等価に作られている。相互に「像」を交換しながら、この住宅において展開される光景を想起すること。あるいは、遠く隔たっている空や、眺望によって住宅の内側に取り込まれる風景が視覚により内部化される経験をこの住宅／展示において示すことができればと思っていた。

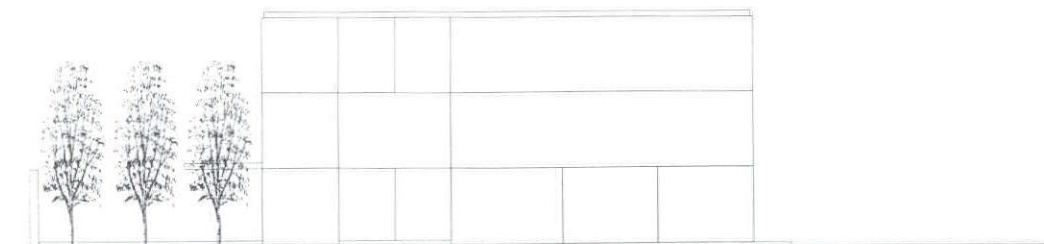
この住宅／展示については、様々な問題点を発見し再考する機会を与えられたように思う。十分に当初の問題設定が共有できたとはいいいがたい、またしても



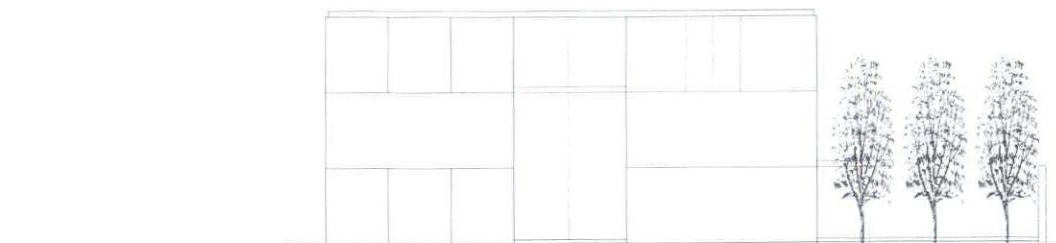
A-A断面図



B-B断面図 S=1:200



北立面図



南立面図 S=1:200

新井清一/ARAI・ARCHITECTS
KyotoStudio +
京都精華大学新井研究室
〔(仮称) 京都精華大学実習棟建替計画〕

用途：大学施設（実習室、実験室、講義室、研究室、事務室、美術館、劇場、カフェテリア、など）
所在地：京都市左京区
主体構造：鉄骨造（一部RC造）、シェル構造
主要仕上材：押出成形セメント板、アルミスパンドル、カーテンウォール、RC化粧打放、アルミルーバー、等
工事予定期間：1999年春～
敷地面積：144,775.33m²
建築面積：合計4,734.04m²
延床面積：合計15,160.48m²
工事予定期間：1999年春～

共同設計：今村壽博（京都精華大学非常勤講師）（計画・実施）
保田正人（実施・監理）
平井純（実施）
協力：中島成人、松山崇、山口正義、鈴木雅明、関貴久子、上平和慶、榎本拓也、難波道雄、石川美智子、樋口美樹、中川千佳、松原知之、平峯光代、東田達也、福本祐樹、吉儀路也

はじめに

本計画は京都精華大学における新学科設立にあたり現在の老朽化した校舎の一部建て替えを行うものである。本学は岩倉の山々に囲まれた溪谷に位置し、既存の校舎も山々に沿って位置している。今回の計画は、敷地のほぼ中央に位置し、景観との調和が計られて計画されなければならない。

配置計画

基本的には旧校舎跡地に、設置面積をほぼ同じとみて計画される。溪谷に対して自然な流れがあり、方向性が重要な基準となる。将来計画もこの流れに沿う形態で計画される。この流れは、既存の池に集約されていく。

歩車分離

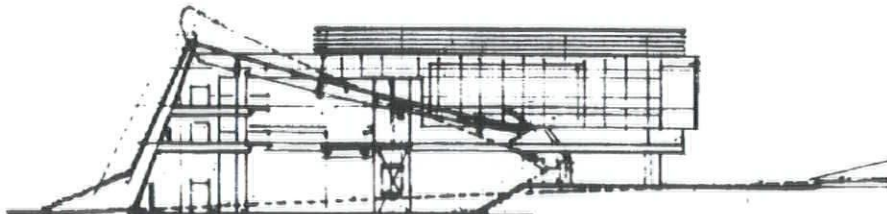
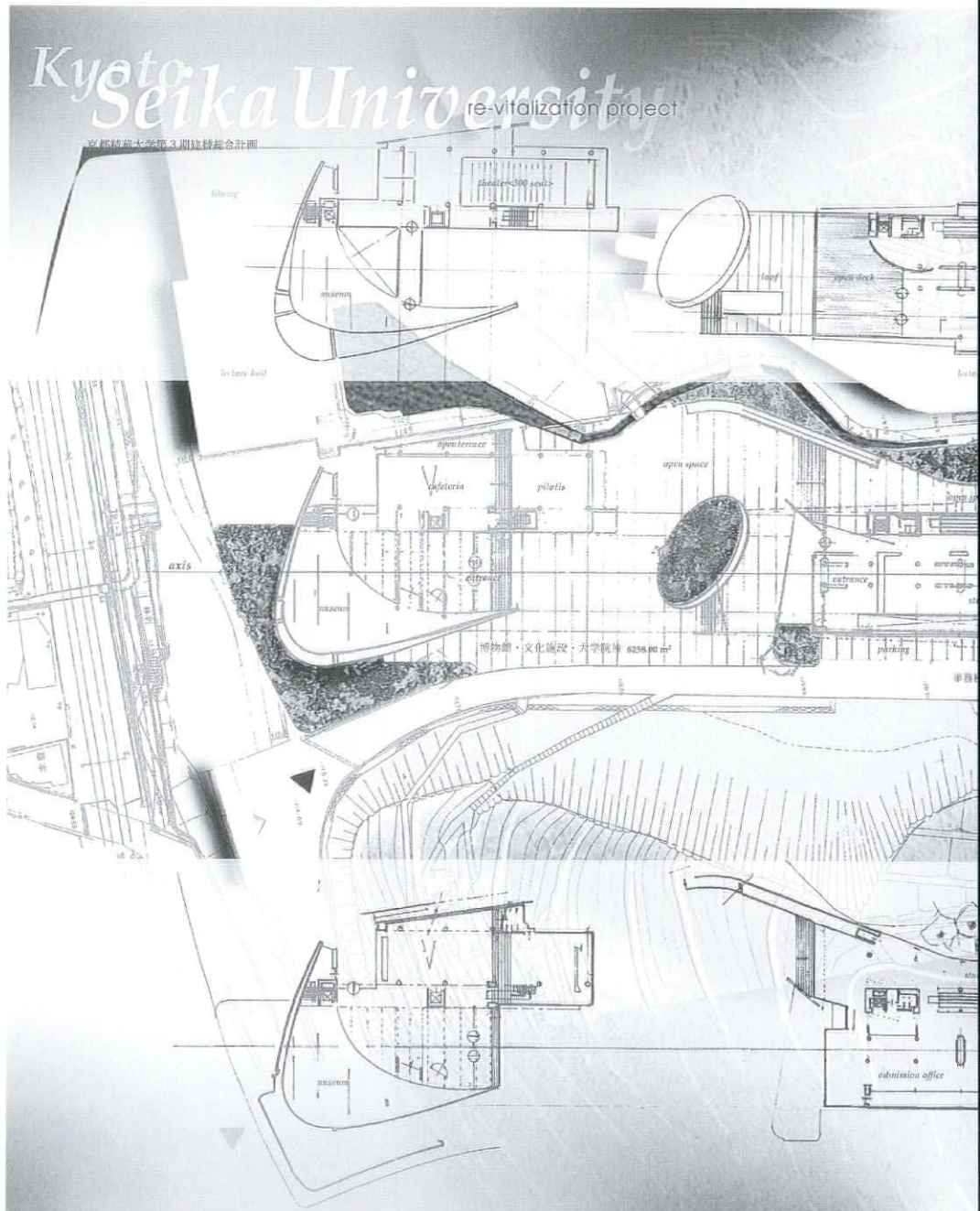
将来計画では、駐車スペースの確保とともに歩車分離を行う。

石庭

全体計画のイメージを、段々と降りてくる一連の石庭としてみなす。建築は浮いている印象があり、地盤面は内外の一体化を計るため、あたかも威圧的な建築がないように感じるように計画。所々にあるオブジェは、空間の中で石庭を思わせる効果を生み出す。

借景

入口からのシーンは背景にある山々と連続するようになだらかなラインでまとめあげられる。屋根の形状が角度を微妙にコントロールするディバイスとなる。固体となる切妻屋根よりも、威圧感のないフラットルーフを一部に採用。



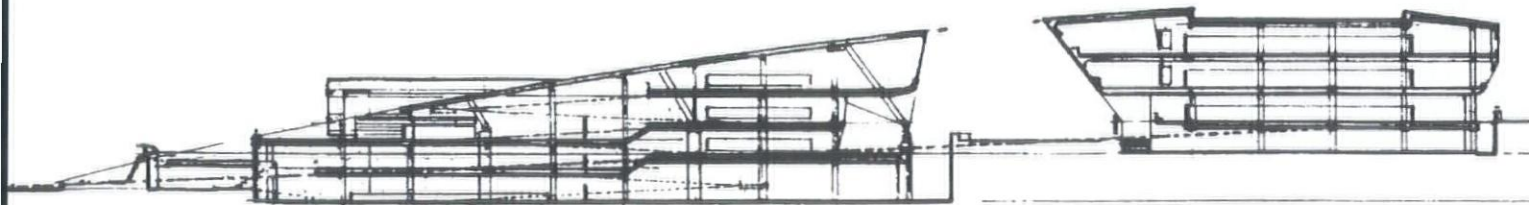
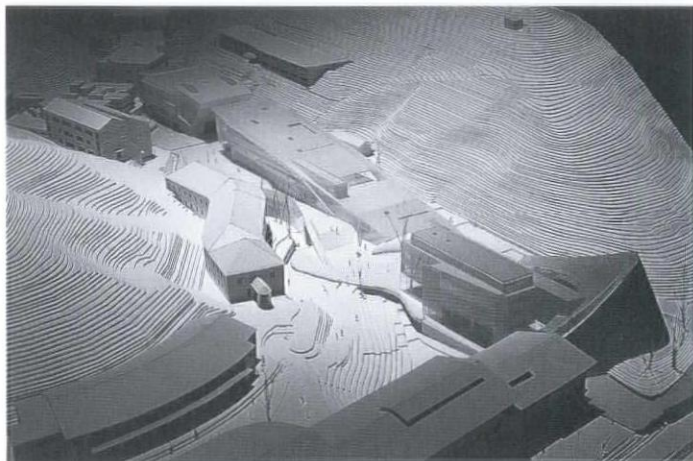
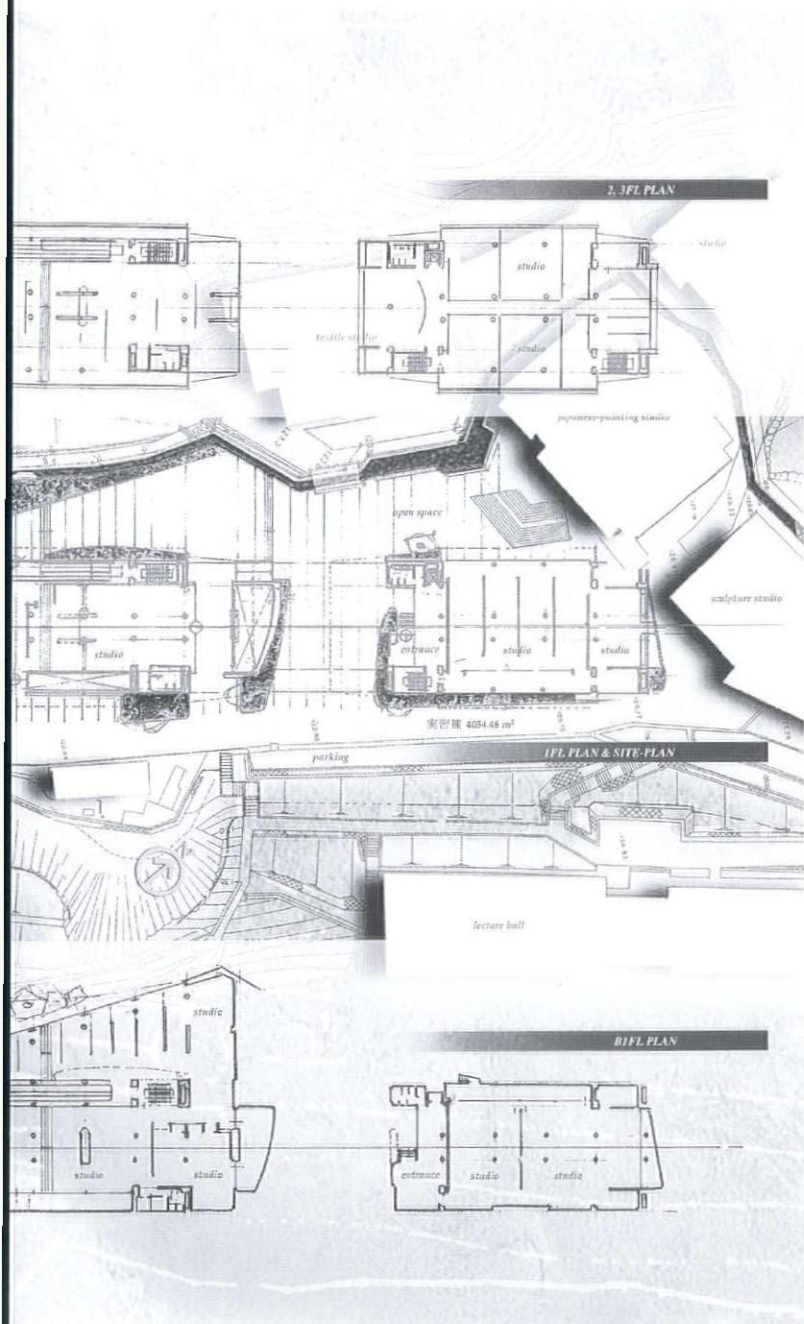


新井清一 Kiyokazu Arai
 1950年／横浜生まれ
 1983年／SCI-ARC（南カルフォルニア建築大学）修士課程修了
 1981-91年／MORPHOSIS
 1985-91年／SCI-ARC インストラクター
 1991年／ARAI-ARCHITECTS 設立
 1998年／京都精華大学美術学部教授

SDレビュー入選は今回で4回目となります。

私の中でのこのSDレビューは、PA賞（Progressive Architecture）のコンクールと同じ目的を内包した発表及び制作の場と考えています。新人の登竜門としての通過点であると共に、既に経験を積んだ建築家達の試練の場でもあると、勝手に解釈しています。

この賞は歴史的に見ても、その時代の背景・建築家達の次世代に向けた提案は、少なからずその後のムーブメントに影響を与え、かつ刺激的な要素を多分に含んでいることも事実です。それは何よりも空想の中のお絵描きでなく、実際にクライアント（施主）が居て建築が内包する多くの問題（例えばコストコントロール、法規、機能のスタディー）及び、それらの統合的な取りまとめ役としての技量を集約した成果として競う点にあります。そこがポイントです。



アンドリュー・バーリー＋ ミヌストリー

[(s)linear]

用途：個人住宅、事務所、倉庫

所在地：リービン、ニュージーランド

主体構造：コンクリートブロック造＋鉄骨造

主要仕上材：コンクリートブロック、プラスターボード、鉄製
波板

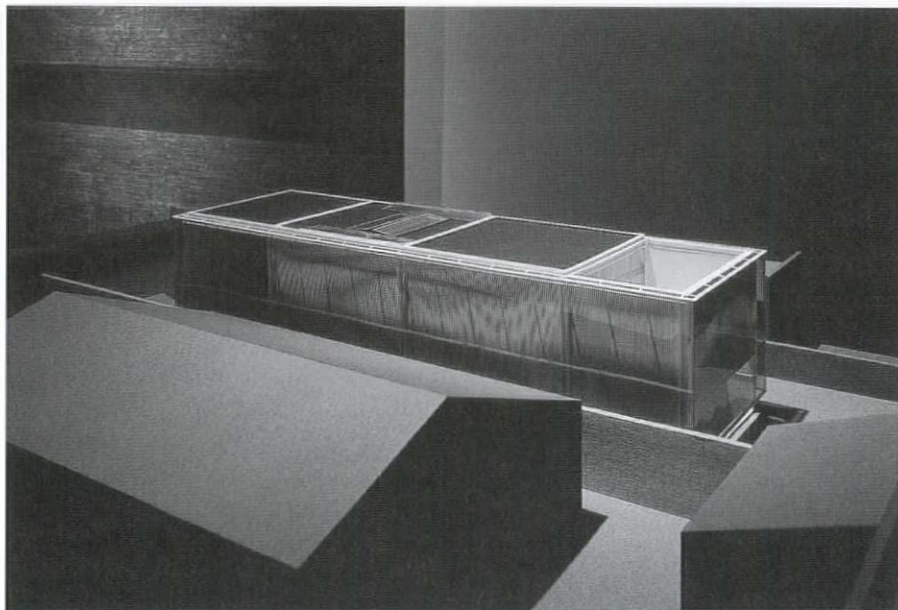
敷地面積：225m²

建築面積：90m²

延床面積：185m²

工事予定期間：2001年6月～2001年12月

協力：Sean McMahon, Clare Barrie



小都市の中心に建てられたこの建物は薬剤師の別宅である。彼女の経営する薬局が同じ町のメインストリートにあるのだが、彼女が住んでいるのはそこから車で1時間ほど行ったところにある。そこを毎日行き来するのは不便であり、仕事場から近い便利な所に寝泊まりできるところをつくることになった。そこに自分用のオフィスと倉庫も併設した。

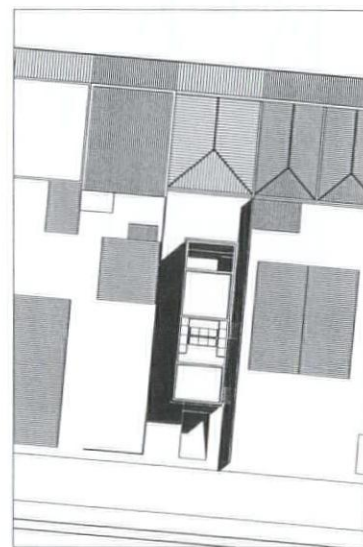
敷地は商店やオフィスが連なるメインストリートの裏にあって、彼女の職場からは近くではあるが魅力に欠ける場所である。周囲は古倉庫、工房や店主らの駐車場などとなっており、細い私道を通して線路が垣間見える。

この建物を醜い周辺環境から強く浮き出させて見せるために、建物周囲を垂直方向に編まれたワイヤーでできたスクリーンで囲った。このワイヤーは建物外皮に施された垂直線と対応して様々な視覚的効果を生み出す。この視覚的効果は観る者の動きや、ワイヤーを振動させる風、ワイヤーの陰を壁に落とす太陽光などによって起こる。

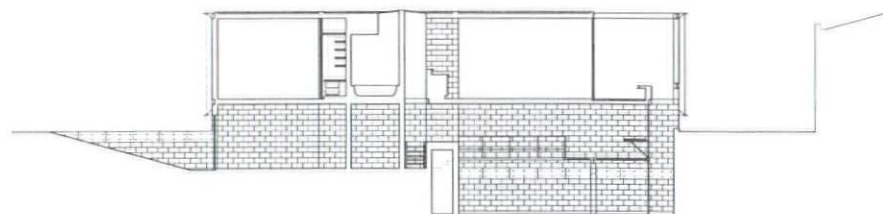
内部へは通りから、あるいは倉庫から、またあるいは店舗から、壁に隠れて見えなくなった半地下のエントリーウェイを通して入ることができる。エントリースペースは建物内の全ての空間へと通じている。店舗裏が見渡せる小オフィス空間へ、下方の倉庫空間やアトリエへ、最上部の居住部へと。室内空間は極めて単純で、空間的配置は自然光の操作のみに注がれ、暗い空間になりにくいこれらの空間へ囲いと安心感をもたらす光を導き落としている。



a-a 断面図



配置図



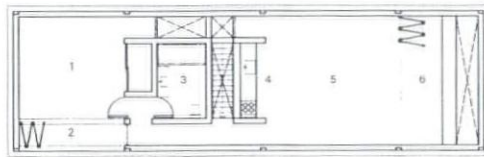
b-b 断面図 S=1:300



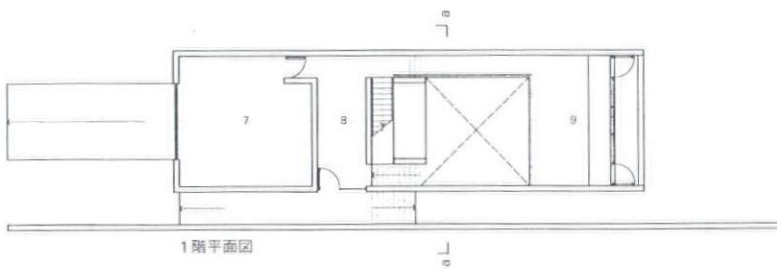
アンドリュー・バーリー Andrew Barrie
 1968年/ニュージーランド生まれ
 1991年/オークランド大学建築学部卒業
 1993-95年/AAAデザイン・アワード
 1995-96年/CHHアーキテクチュラル・アワード
 1997年/オークランド大学建築学部修士卒業
 1998年/SDレビュー1998入選
 1999年/東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程

建築をどのように理解しているのかは、建築をどのように表現しているかをみればわかる。表現方法は念入りに検討され、デザインした建築の特定の一面が強調されたり、ぼかされたりする。ほとんどの建築図面や模型は、エッジや境界や境目を強調し、素材や部材が切替る部分や、密実な物体から何も無い空間へ切替る、その変り目の輪郭を描いている。

しかし、私がつくろうとしているのは、まさに、こうした変り目が裏返っていたり、なめらかに連続してしまうような建築なのだ。となると、従来の表現方法では無理がある。そこで私は、建築を表現するコードそれ自体を見直して、新しいコードを開発することをめざした。境界線を描かず、ソリッドとヴォイドを区別せず、モノ自体よりもその見え方を強調する、そういうコードである。境界の密度や透明度、多孔度などを表現しうる新しいコードが開発されたならば、それは建築の新しい理解の仕方をもたらし、ひいては建築の新しい作り方を生み出すであろう。



2階平面図



1階平面図

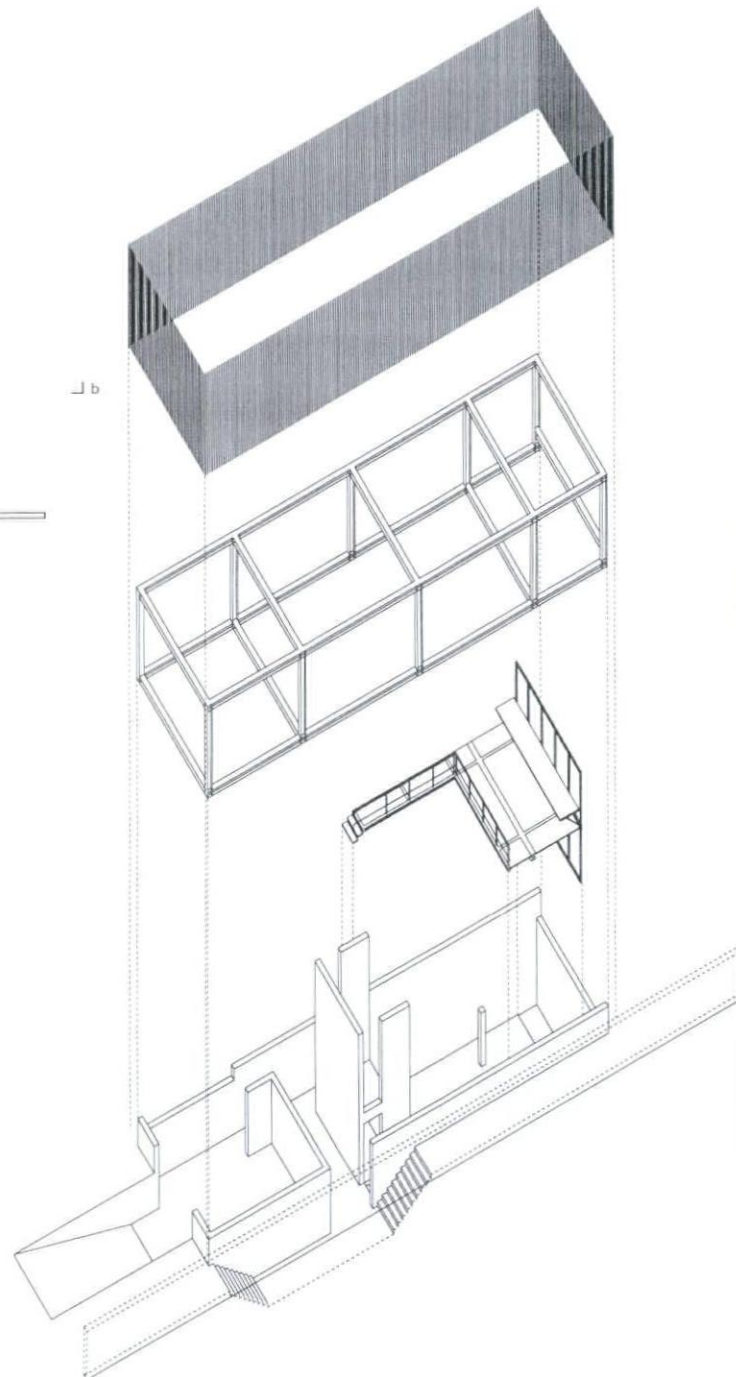
- 2階
- 1 寝室
 - 2 バルコニー
 - 3 浴室
 - 4 台所
 - 5 リビングスペース
 - 6 コート

- 1階
- 7 駐車場
 - 8 エントランス
 - 9 事務所

- 地下1階
- 10 浴室
 - 11 アトリエ
 - 12 倉庫



地下1階平面図 S=1:300



石田壽一

[flop/フロップ]

用途：専用住宅

所在地：神奈川県中郡大磯町

主体構造：木造軸組構造

敷地面積：358.69m²

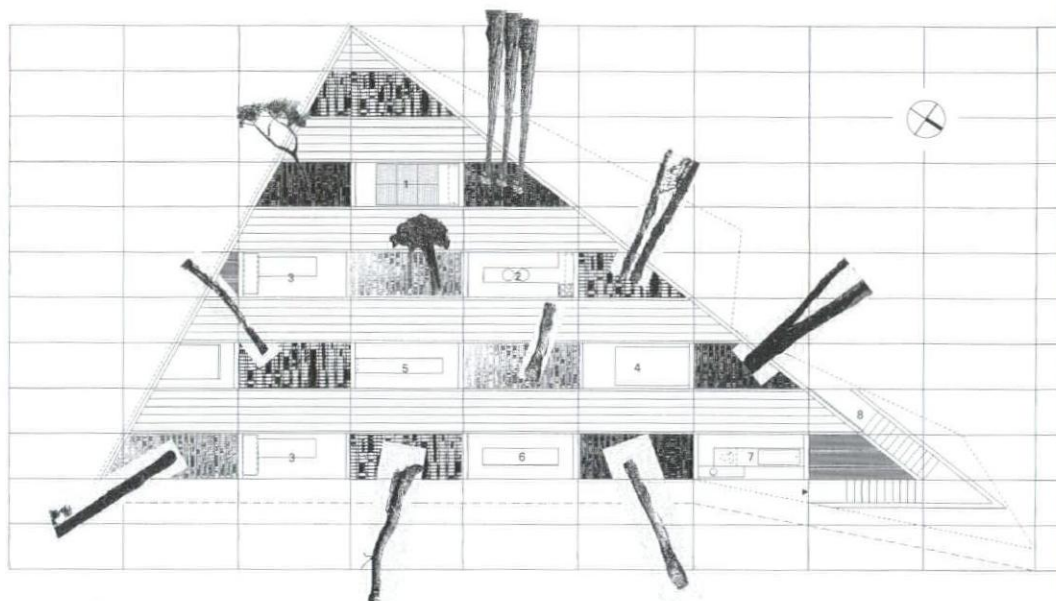
建築面積：69.66m²

延床面積：98.05m²

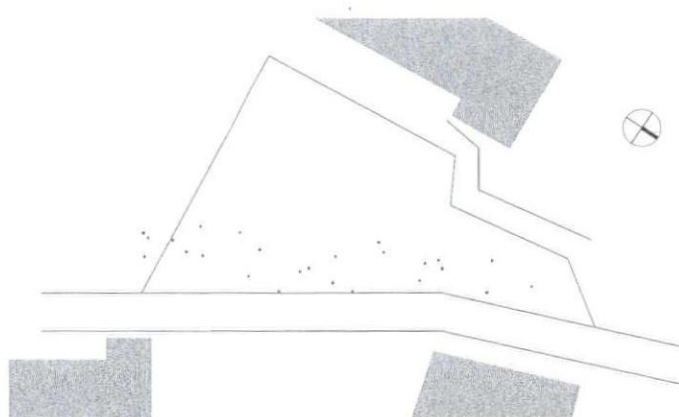
工事予定期間：1999年11月～2000年7月

共同設計者：Diana Juranovic de Ishida

協力：九州芸術工科大学環境設計学科石田研究室（三角領子、根本修平、野崎誠、佐藤誠、大平洋三、寺師一浩、他）



平面図 S=1:300



配置図 S=1:500

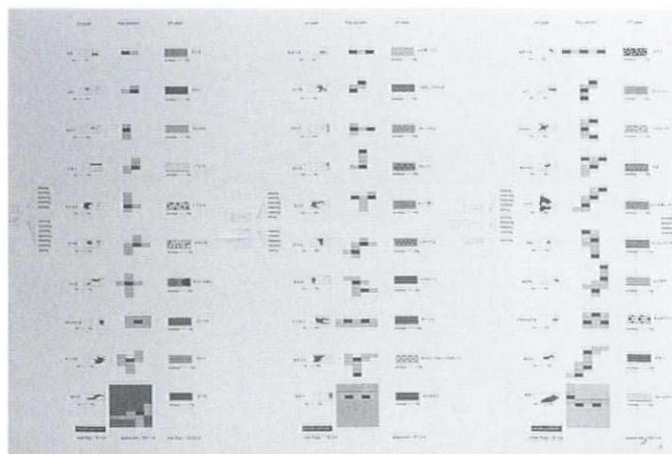
- 1 tatami flop
- 2 cooking flop
- 3 sleeping flop
- 4 meeting flop
- 5 studying flop
- 6 dining flop
- 7 bathing flop
- 8 entry

9フロップ/空間ヒエラルキーの水平化と非媒介性

敷地は都心から車で1時間ほどの大磯町にあり、相模湾を一望する眺めの良い南東斜面にある。周囲は桐、樺、松、檜等が密集する雑木林に囲まれている。

9フロップのフロップ (flop) とは、デスクトップメディアの小容量記録媒体であるフロッピーディスク (floppy disk) のフロップと、アメリカでしばしばホームレスの寝床を意味するスラングとして用いられるフロップの語意からの転用である。計画では歴史的な機能に対応する簡易な容器としてのフロップの集約性と、機能・場所性とは無媒介に、人間の行為欲求の直観的な表出として形作られるホームレスのフロップの持つ即物的な居住環境イメージがオーバーレイされている。

計画では前者をアクティビティ・ピークフロップ、後者をオフピークフロップと分け、オン・オフが明快な就寝・飲食・入浴・排便等の目的型のピーク地勢と、それ以外の副次的なグレイ地勢のマトリクスとしてフロッププログラムを捉えている。とりわけオフピークの状態にあって、ピーク機能を横断的に読み換えながら、無数のグレイ地勢を誘発する最小限容器のネットワークデザインが主眼である。これはちょうどホームレスがフロップを探す時の「あたたかくて、気にとめられず、飯にありつきやすく、わりあい安全な寝床＝地下コンコース」といった、行為欲求と場所性の無媒介なリンクに近い。単一目的化された機能分化を垂直的な空間ヒエラルキーと捉えれば、フロップは、既存の住居イメージに付与された固定的な機能的枠組を水平化し、無媒介な行為・場所リンクを誘発し続けるネットワーク型の空間ヒエラルキー生成装置と解される。

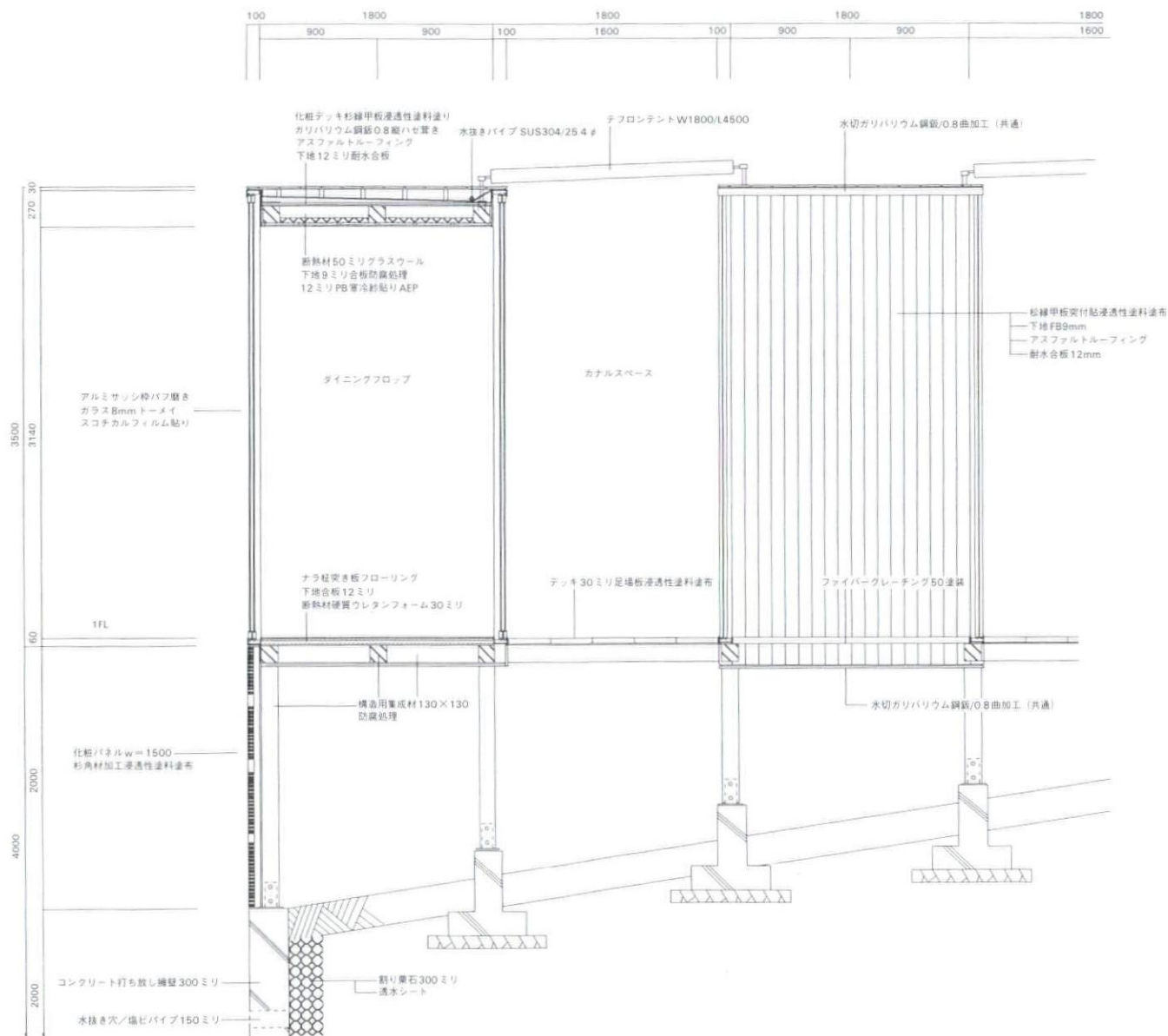




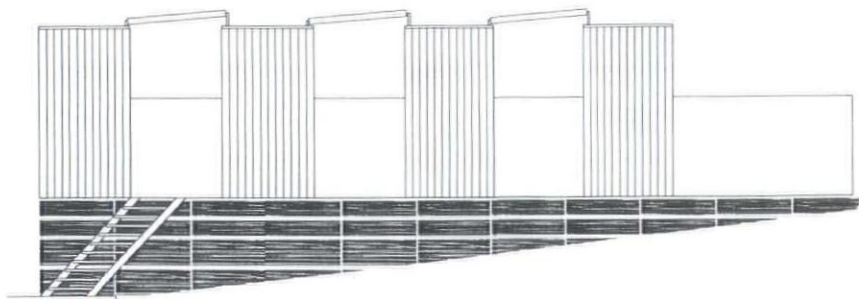
石田 壽一 Toshikazu Isida
 1958年／東京生まれ
 東京大学工学系研究科博士課程修了
 1988年／新建築国際住宅設計競技一等入選
 (Diana Juranovic de Ishidaと共同)
 1988年／SDレビュー入選(共同設計)
 1992-96年／テフト工科大学客員研究員
 1996年／九州芸術工科大学環境設計学科助教授

今回出展したフロップは、特定の敷地に対する具体的な住居提案ですが、意図はむしろnLDKに要約される従来型の居住空間構成とは別種の構造を持った住居モデルを考えるプロセスに向けられています。つまり「居住空間」と便宜的に総称される人間のアクティビティ総体の受容、生成に関わる容器の特性を、機能に要約される直線的な還元図式としてではなく、ピーク、オフピークといった継続的な変化を伴う多義的なベクトルの反射として捉えてみようということです。一般に機能主義では、行為の密度、ボリュームに応じた適正なサイジングが帰納的に求められますが、今回提案しているフロップでは、それとは反対に、行為密度に無関係に、同一の最小限空間に還元された容器の組織的複合によって行為が反射的に捉えられる場が提案されています。

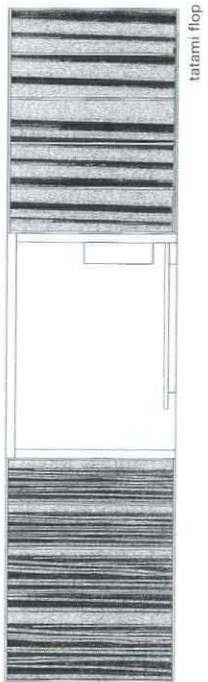
レビュー会場にはこのような意図から、個別の住居デザインのほかに、フロップのプロトタイプ性を顕在化するための集合住居提案の一例を併設しましたが、垂直／水平方向に発展系を潜在させるこのモデルについては、これからいろいろな機会にその有効性を検証していきたいと考えています。



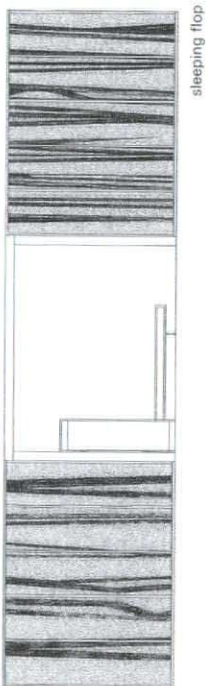
断面詳細図 S=1:50



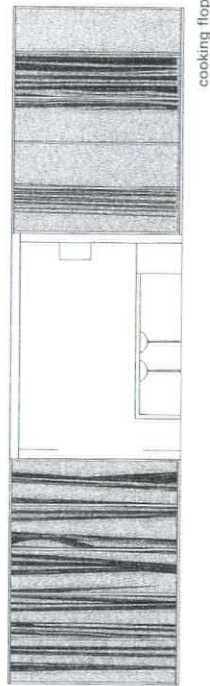
立面図 S=1:150



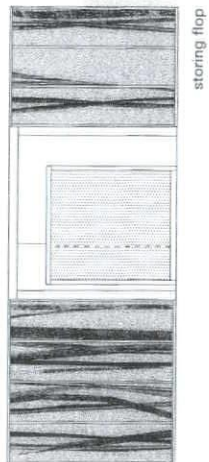
tatami flop



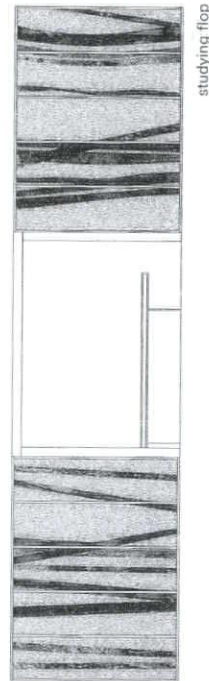
sleeping flop



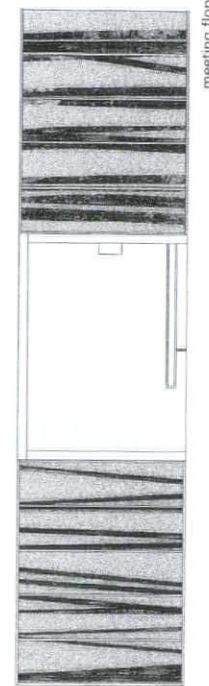
cooking flop



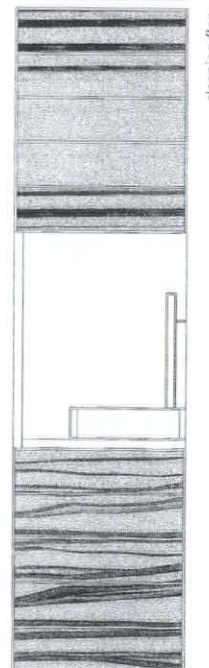
storing flop



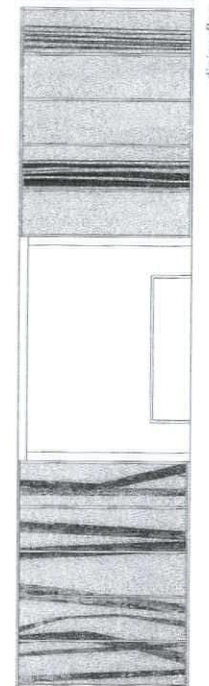
studying flop



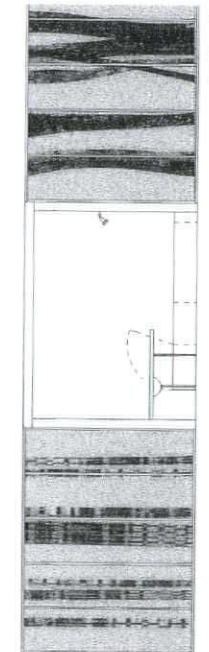
meeting flop



sleeping flop



dining flop



bathing flop

川人洋志

〔庭に住む一札幌〕

用途：個人住宅

所在地：北海道札幌市

主体構造：RC造、一部S造

主要仕上材：

外部 エントリーウェイ：コンクリート外断熱工法の上テクスチャー付コンクリート平板貼

外壁：コンクリート打放の上発水材塗布

植栽：白樺 開口部：透明フロートガラス入り（複層）スチールサッシュ

内部 床：カーペットタイル（床暖房）

壁および天井：PBの上ビニールクロス貼

その他：融雪槽

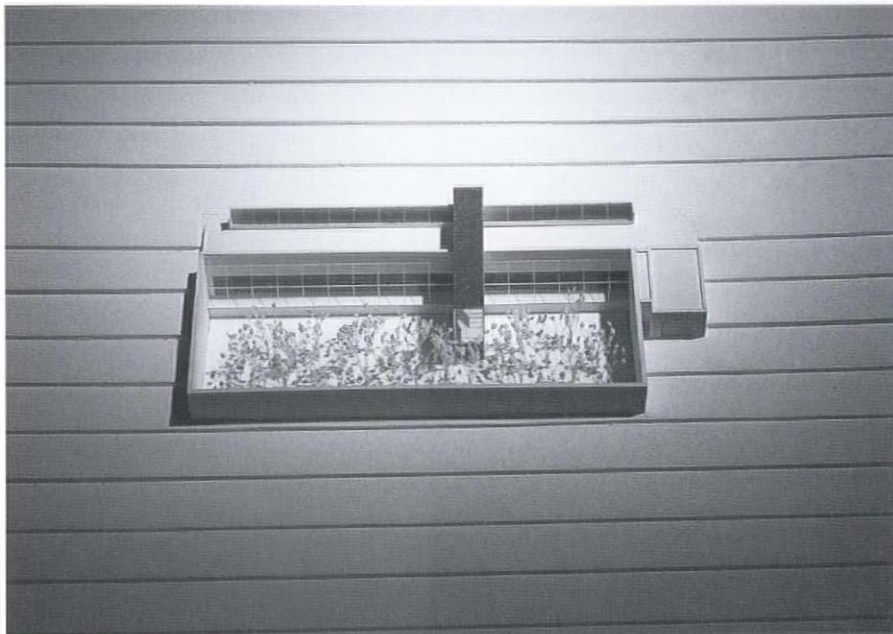
敷地面積：552m²

建築面積：221m²

延床面積：238m²

工事予定期間：2000年6月より5.5ヶ月

協力：塚本篤士、岩本康治、中村雄一郎



この住宅は、北海道札幌市のアーバンフリンジに計画される。計画は、つぎの3つの主旨をもととして構想されている。

1. 全ての居室が、庭の恵みを享受できる住宅であること
2. 敷地の特性である斜面を有効に活かした住居であること
3. 従来の北の住まいにはない新たな形式と様相を備えた住居であること

ふたつの庭

住居形式を、敷地がもつ南向きの傾斜を利用し、住居外周の大部分を大地で囲みながら太陽の恵みを享受しうる南面を外気に開くものとする。

この形式は、北の地の気候風土に適応するものでありながら先述の3つの主旨を最も効果的に具現するものとして選択された。

結果、ふたつの庭が現われる

ふたつの庭には、それぞれ特色ある機能と表情が与えられている。上の庭は、住居の「エントリーウェイ」として住居の上部に、下の庭は、「白樺の森」として住居に面して設けられる。

ふたつの庭は、エントランスホール、階段を内蔵するガラスの箱によって連結される。ガラスの箱下部には、冬季の除雪を考慮し融雪槽が設けられている。

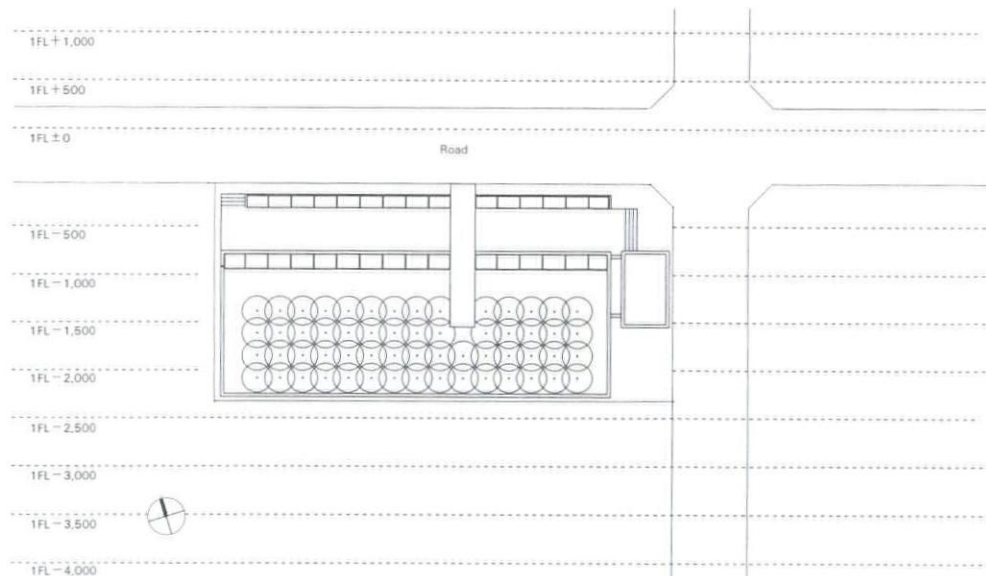
庭の恵み

ふたつの庭から住居への開口が、効果的に設けられる。

上の庭からの開口は住居の通路部分に間接的な採光をもたらす。下の庭からのそれは、全ての居室に四季折々の風景を伴った直接的な採光をもたらす。

特にそこにしつらえた二重のサッシュは、冬において庭と居室の境にサンルームを創り出す。

また夏においては、全ての居室を庭にむかって大きく開け放ちながら、上の庭からの開口と連携して住居に良好な通風をもたらす。



配置図 S=1:600

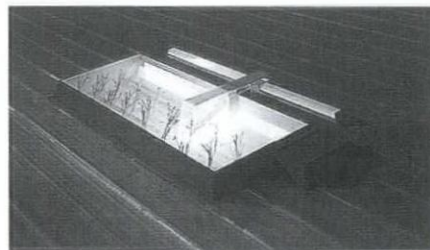
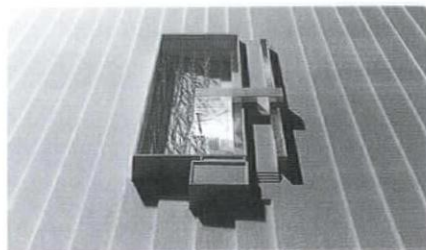
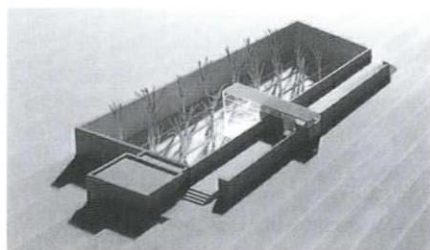
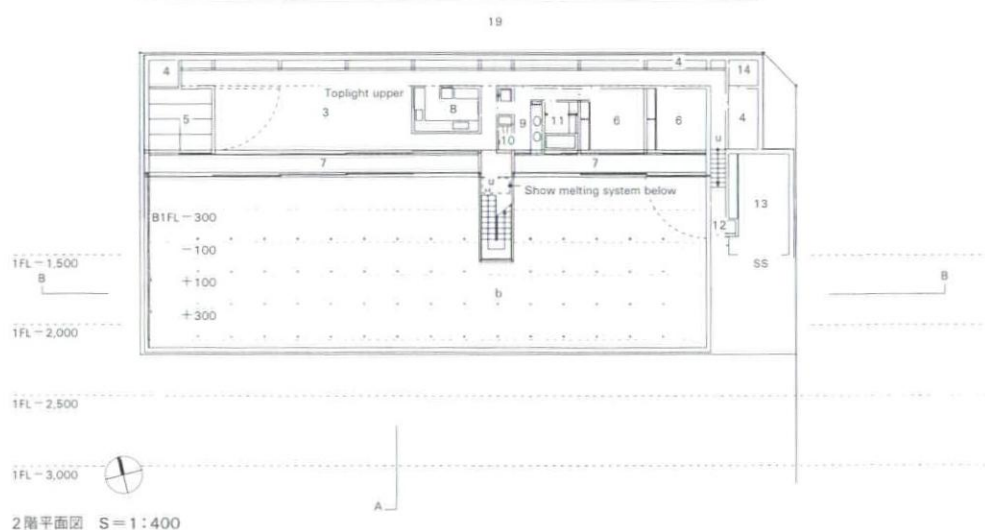
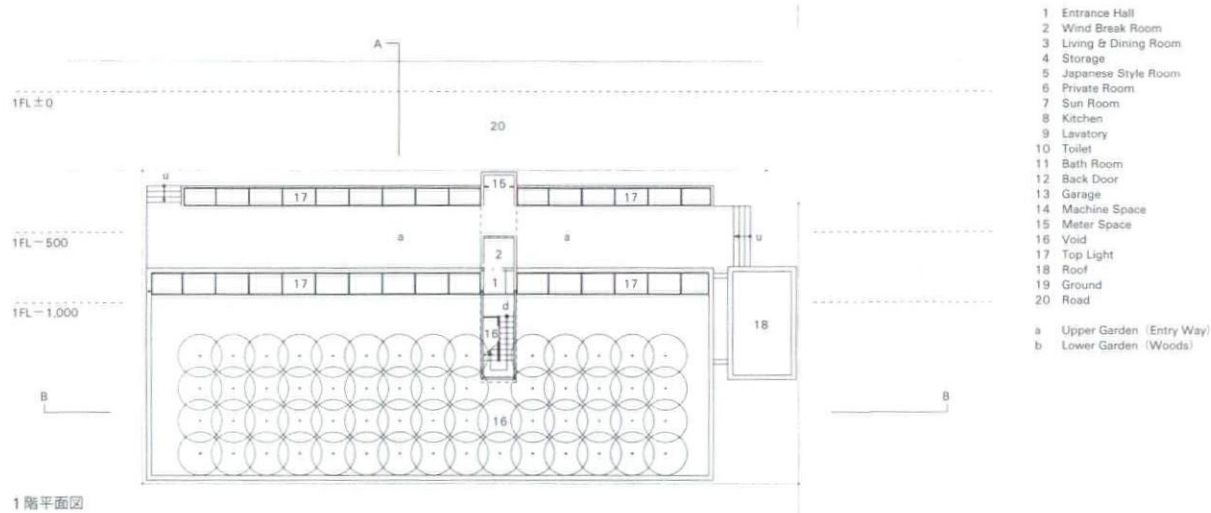


川人洋志 Hiroshi Kawahito

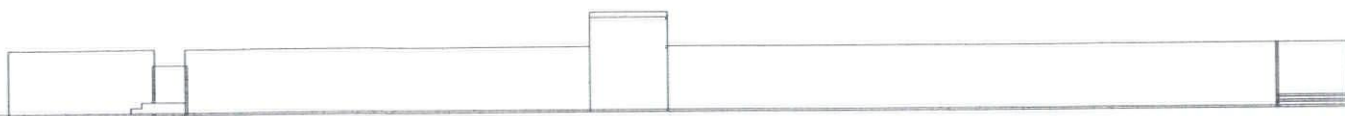
1986年／京都大学工学部建築学科大学院修了
 1986年／清水建設株式会社入社設計本部配属
 1988年／坂本龍馬記念館設計コンペにおいて
 上位50作品
 1990年／新建築住宅設計競技二等入選
 1993年／新潟市民ホール設計競技において入選
 (清水建設 大山尚男と協同)
 1995年／新建築住宅設計競技二等入選
 1997年／SDレビュー1997において朝食賞受賞
 1998年／新建築住宅設計競技佳作
 1999年／札幌市立高等専門学校建築デザイン
 系講師

素朴に表現することを心がけています。

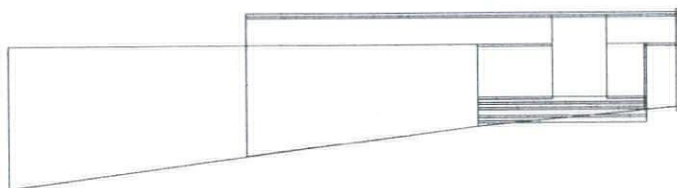
素晴らしい発表の場を与えていただいたことに深く感謝しております。



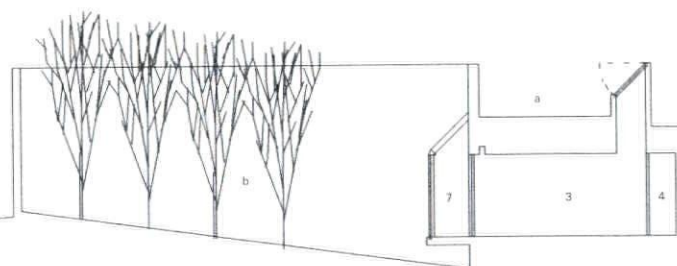
北立面图



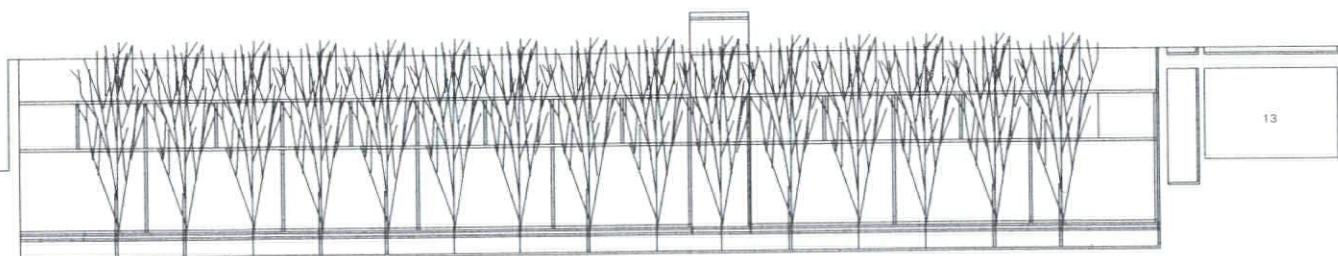
東立面图



A-A断面图



B-B断面图 S=1:200



岡河 貢十 PARADISUS ARCHITECTS

[向島洋ランセンター増築計画]

用途：展示施設

所在地：広島県御調郡向島町

主体構造：S造

主要仕上材：ポリカーボネイト、ガラス、ビニール

敷地面積：33,265m²

建築面積：594.84m²

延床面積：594.84m²

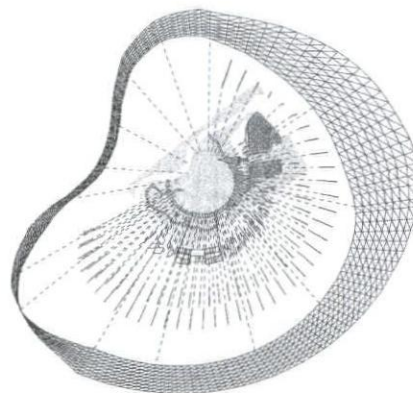
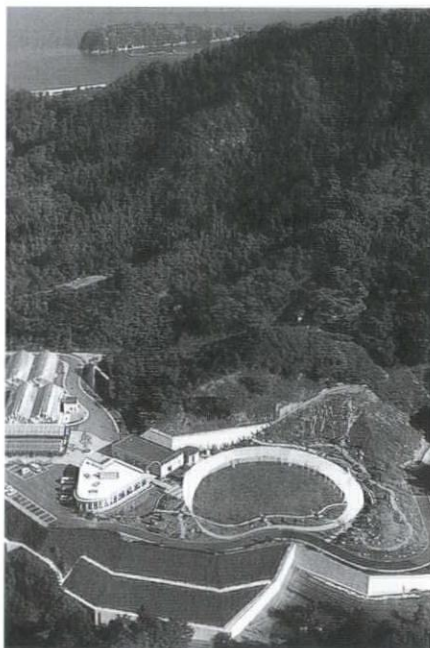
工事予定期間：未定



敷地の条件により現在庭園として使用されている場所で洋ランの展示空間を構想することになる。庭園としての機能を失わせることなく、新たなランドスケープとして洋ランの展示空間を既存の庭園に加えることがこの計画の主題である。

新たに洋ランの展示のための庭園として再構成されることになるこの場所は、広場としての機能と遊歩道としての機能を成立させる歪んだ円環状のプロムナード（遊歩道）としての展示空間により作り上げられる。

プロムナードは円環状のエンドレスな平面がポリカーボネイト折半を用いたねじれ面によって構成されるメビウス状の屋根によって覆われることになる。屋根の下は展示空間の床は既存の庭園がそのまま切り取られて用いられる。展示のための場所はこの屋根の下に自由にガラスやビニールを用いて仕切られることによって作られる。メビウス状の屋根はねじれて垂直になり庭園の場としても機能する。パイオ実験展示室はミースのバルセロナパヴィリオンがねじられて作られている。メビウス状にねじれた屋根は周りの山並みの借景との空間的対比によって人工と自然の境界のランドスケープとしてこの場所を再定義することとなる。





岡河 貢 Mitugu Okagawa

1979年／東京工業大学工学部建築学科卒業
1981年／東京工業大学大学院建築学修了
1986年／東京工業大学大学院博士課程修了
1998年／広島大学工学部第4類建築学科建築設計学助教授

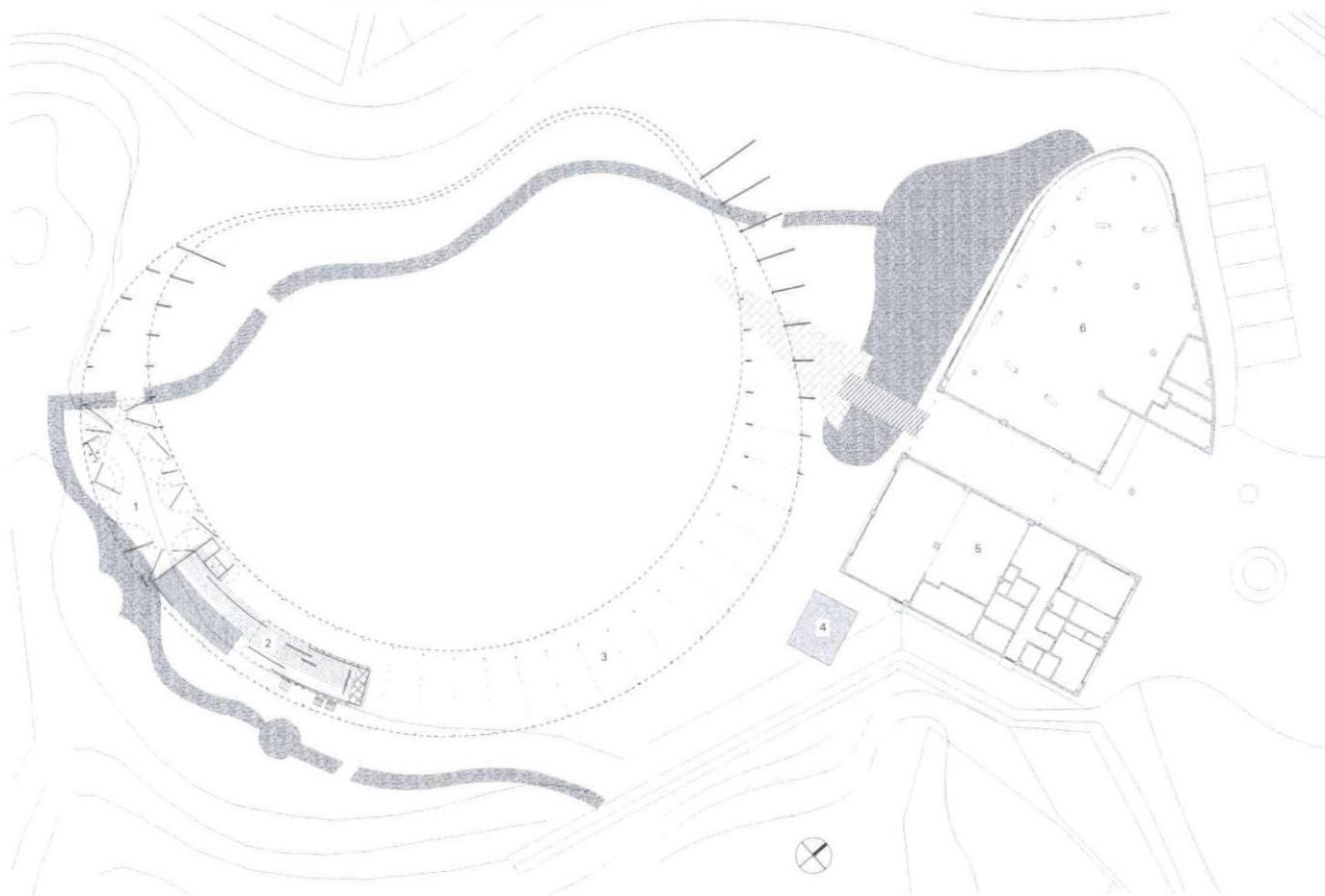
栢森 聡夫 Norio Kayamori

1996年／近畿大学工学部建築学科卒業
1997年／PARADISUS ARCHITECTS
1998年／東京工業大学工学部付属工業高等学校専攻科非常勤講師

牛田 真男 Masao Ushida

1997年／東洋大学工学部建築学科卒業
1999年／東洋大学工学研究科建築学博士課程前期修了
1999年／PARADISUS ARCHITECTS

SDレビューは実現するという条件をもとにした建築において、その時代の感性が最も早く空間化された作品に出会える場と認識しています。今回初めての応募で参加することになりました。この応募案は私と20才代の若いスタッフらの共同作業ですが、建築とランドスケープの境界について問題にした作品です。展示は建築的であるというよりそのことを目標にしたプレゼンテーションを意識しました。境界を問うというのはここ数年建築を思考するためのキーワードとしている言葉です。屋根と壁の境界を問うという作業が中心的な主題なのですが、ここではそのことと平行して建物と風景の境界が建築の内外という境界や、庭園と建築の境界などが平行して問われています。ここ数年建築とアートの境界を問う作品が多かったように思いますが、今年は環境と建築の境界を問うという試みの作品にいくつか興味深いものがありました。



平面図 S=1:600

- 1 研修所
- 2 研究室
- 3 エキジビジョンスペース
- 4 既存屋外便所
- 5 既存管理棟
- 6 既存展示棟

北立面図

東立面図

南立面図

西立面図 S=1:600

用途：サービスエリア、収蔵庫、簡易住宅

所在地：長野県諏訪郡富士見町洗坂

主体構造：RC造、一部S造

主要仕上材：屋根 コンクリート打ち放し 発水剤塗布 ポリカーボネイト複層板

床 珪藻土金ゴテ仕上げ、コンクリートサンド

ブラスト仕上、豆砂利洗い出し

外壁 コンクリート打ち放し（杉板本実型枠）

発水剤塗布

開口 高透過ガラス、フロストガラス、飛散防止

フィルム、ポリカーボネイト複層板

内壁 ポリカーボネイト製可動間仕切り、木製引戸 OSCL コンクリート打ち放し

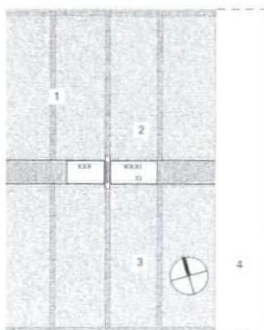
敷地面積：2,700m²

建築面積：約160m²

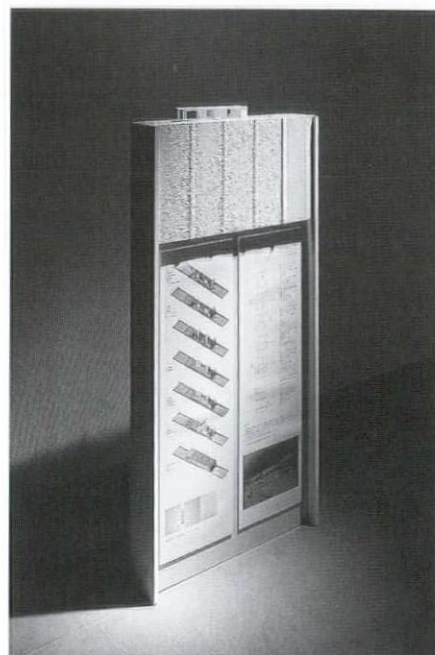
延床面積：約130m²

工事予定期間：2000年9月～2001年3月

協力：佐藤 大



- 1 観賞用草花畑
- 2 自給用野菜畑
- 3 あぜみち
- 4 既存車道



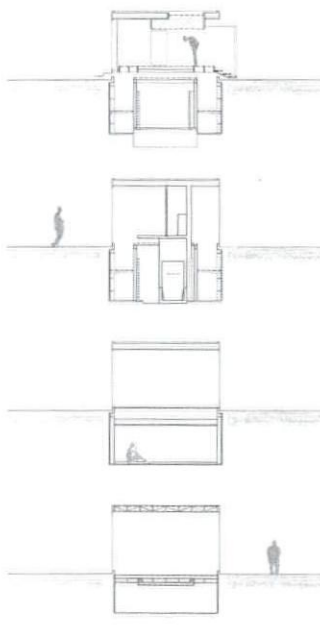
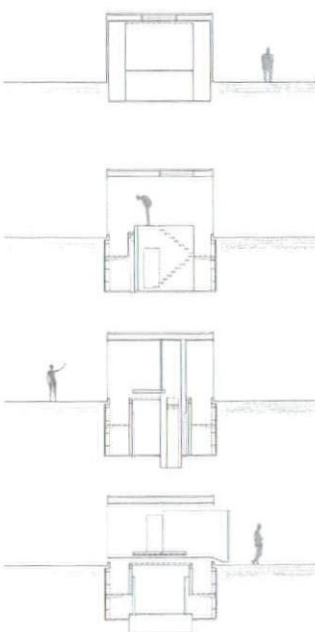
1.敷地内で異なる使用用途を持つ農地（自給用野菜、観賞用草花）を区分し、同時に連結させること。

2.農耕作業時のサービスエリアとしての機能（作業休憩スペースの確保、収蔵物の運搬・収蔵）を有すること。

3.収蔵物の収納棚は個人収納スペースと無人販売スペースとに分けること。無人販売スペースは貸し出しによる地域共同体の使用が予定されている。

4.2・3と同時に、管理のための簡易生活機能を合わせ持つこと。

上記機能を限られた建築面積内で併存させるための一つの解答。



断面図 S=1:400



金井 謙介 Kensuke Kanai
 1973年／東京都生まれ
 1996年／早稲田大学卒業
 1997年／SDレビュー1997入選
 1998年／早稲田大学大学院古谷研究室修了
 1998年／竹中工務店東京本店設計部

小池 聡子 Satoko Koike
 1974年／東京都生まれ
 1996年／武蔵工業大学卒業
 1998年／早稲田大学大学院古谷研究室修了
 1998年／日本設計

これをやりながら、その過程で僕らが触発されてきた

チームの一部を補足的に書いておこうと思います。

- 1・ビルディングタイプとしての「住宅」について
- 2・フィクションとしての「農村」／「都市」について
- 3・シクロフスキー的な「異化」について
- 4・ロベルト・マンガベイラ・アンガーの提示した「実践としての建築」について
- 5・いわゆる「決定性/決定不能性」に関して

会場でのプレゼンテーションに対しては、「かわいい」「ほのぼのしている」という声をよく聞いたように思います。

とまれ、ヴァレリーのいうように、「説明すること」とは作る一つの方法を述べることであり、ものでもなく、僕らがとったプレゼンテーションは、僕ら自身がこのプロジェクトの現在の過程を、「思考によって作り直す」契機を与えてくれることになったと思っています。

- 1 車路
 - 2 住居部分土間
 - 3 住居部分外周土間
 - 4 住居内部庭
 - 5 収蔵庫
- (上部共同使用・下部私用)

- 6 外部回廊
- 7 庭上部トップライト
- 8 構造用ケーブル
- 19 バス・トイレエリア
- 20 キッチン・搬入エリア

- 9 コア

- 10 外部回廊
- 11 住居専用階段

- 10 外部回廊
- 11 住居専用階段

- 12 作業土間
- 21 洗い作業エリア
- 22 住居内部搬入エリア
リヤカー置き場

- 13 連絡通路
- 14 通路用トップライト

- 15 作業土間用大屋根
- 16 光庭
- 17 通路用トップライト
- 18 メインエントランス

用途：住宅

所在地：滋賀県高島郡

主体構造：木造

主要仕上材：木

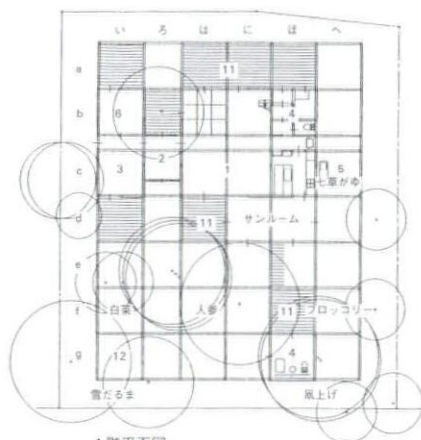
敷地面積：575.87m²

建築面積：91.50m²

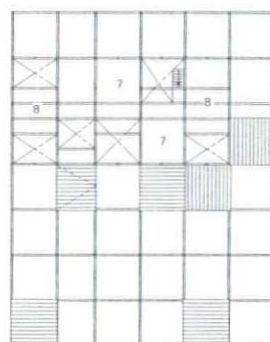
延床面積：130.50m²

工事予定期間：1999年7月～12月

協力：荒井圭一郎、井上正子、今津修平、太田光昭、窪田啓二、近藤好史、西郷俊彦、茂森大輔、杉山圭一、田村大、中村祐哉、中野明恵、中村慎司、中村芳知、樋口章、HIBINO NATSU、馬淵吉信、MIKA OHTA、山本晴久、熊倉建匠

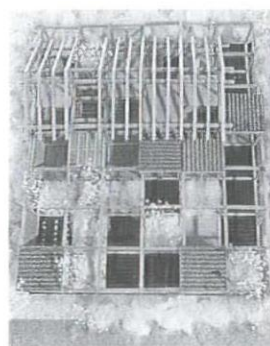


1階平面図



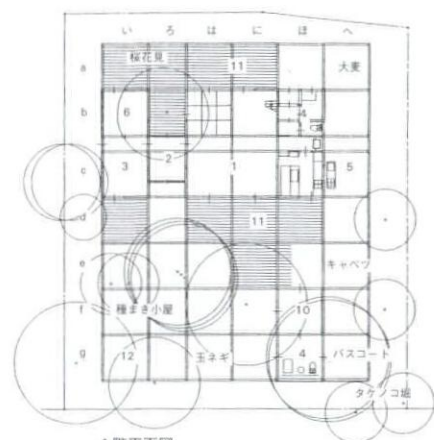
2階平面図

- | | |
|---------|--------|
| 1 居間・食堂 | 7 寝室 |
| 2 玄関 | 8 屋根裏 |
| 3 アトリエ | 9 フリッジ |
| 4 浴室 | 10 客間 |
| 5 土間 | 11 デッキ |
| 6 納戸 | 12 駐車場 |

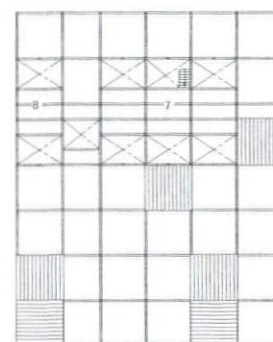


JANUARY

1



1階平面図



2階平面図



APRIL

4

敷地全体に42個のフレームを設定し、各フレームに季節に応じて様々な作物を植えて収穫された作物により、暮らしを営む。

そして残ったフレームを使って、その季節がもっとも気持ち良く感じられる場を求めて家を作り続けていく。

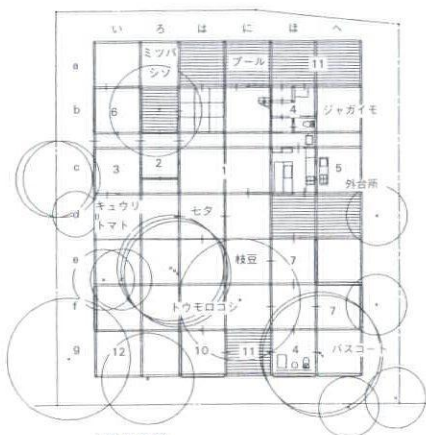
季節ごとに様々な表情を見せる木々草花に囲まれ、変化する家で、自然との深い対話に基づいた生活がはじまる。



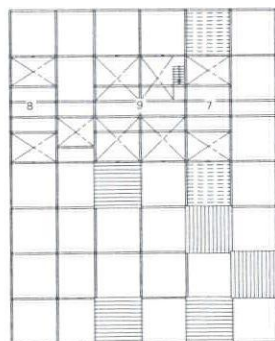
駒井貞治 Sadaharu Komai
 1968年／大阪府生まれ
 1990年／京都府立大学住居学科卒業
 1990年／建築環境研究所
 1997年／駒井貞治の事務所設立

昨年の自分達の生活ぶりである、「借家生活」に続き、今年は施主のいる家を設計し出展しましたが、皆さん展覧会場では模型を回して見ていただけたでしょうか。「何か、おもしろい家にしたい」という要求に「形ではないおもしろさ」を考え続けて畑も家も生活も耕し続ける家になりました。展示方法は、施主をはじめ前回同様たくさんの人に手伝ってもらうことに刺激され、楽しすぎて伝えたい事からはずれない様にするのが大変でした。展覧会は終わりましたが、現場の方は施工後もつくり続ける家になりそうです。

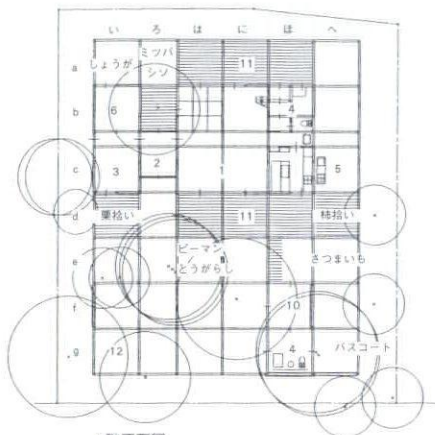
フレームの一部に僕たち家族の夏の家（借家生活番外編）をつくりたいと思っていますので自分も、と思う人はどんどん現場を手伝って自分の居場所を作りに来てください。またこれからもSDレビューに出展し続けられる様、応募も含めて、共に楽しみたい施主の方の連絡もおまちしております。



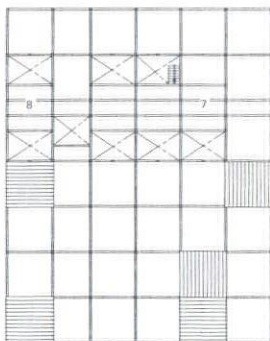
1階平面図



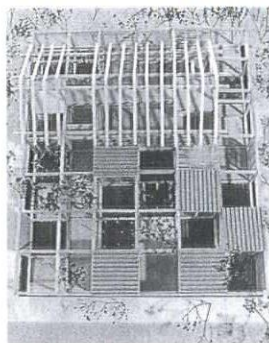
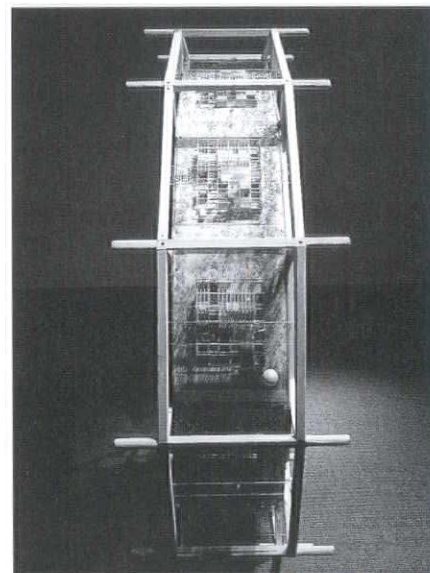
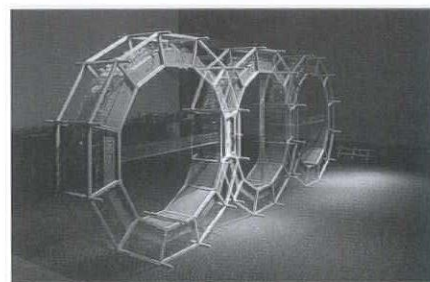
2階平面図



1階平面図

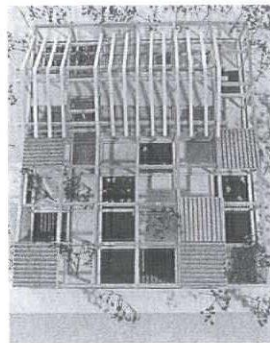


2階平面図 S=1:500



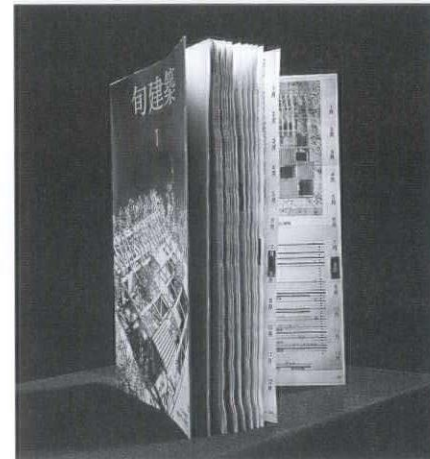
JULY

7



OCTOBER

10



清水祐効

[PLATFORM IN THE CASE]

用途：事務所

所在地：千葉市緑区大野台2丁目

主体構造：RC造

主要仕上材：外装 RC打ち放し

1F床 アスファルト舗装

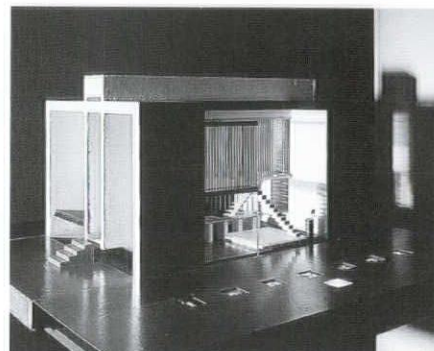
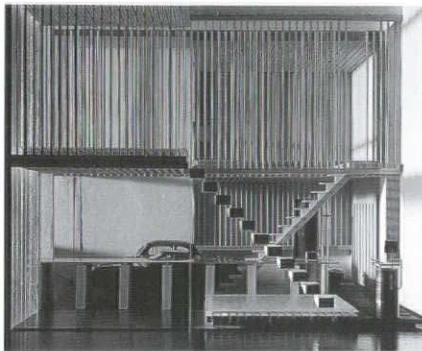
架台 鉄骨下地の上アルミニウム t=30

敷地面積：345m²

建築面積：110m²

延床面積：122m²

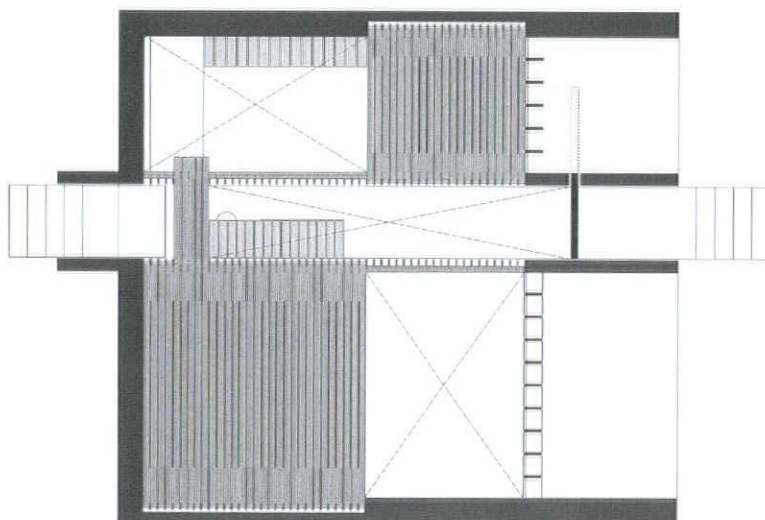
工事予定期間：2000年8月～2001年6月



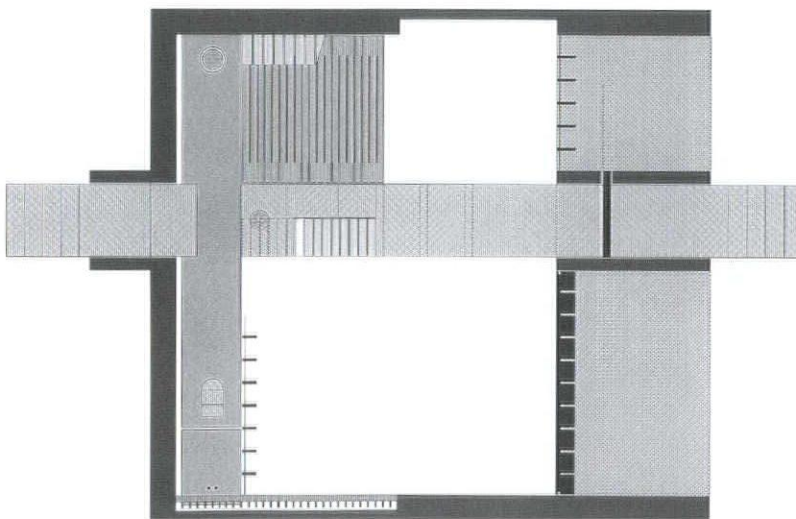
この建物は甲虫の外殻のように壁三方と屋根が分厚いコンクリートでつくられ、地震力を受けている。玄関には地面が彫り込まれていて、内と外を明確に区切るきっかけになっている。中に入ると、この躯体を貫くように架台が横たわる。見上げると、普段は家の柱として使われる木の棒を、横倒しにずらりと並べた2階の床組がある。そして、やっぱり普段は真柱として使われる木の平たい棒が、1階に横たわっている架台と廻りの躯体をかわすように天上から吊るされ、2階の床組を宙に浮かせている。

ところで、ここでは架台が建物の中での絶対的主導権を握っている。普通は、ちゃぶ台であるとか、ワーキングデスクだとか、使い勝手や目的に合った高さの台を使い分けるものである。しかし、この空間の真ん中にでんと構えている架台が台としての唯一無二の存在であり、その天板の高さは変わらない。逆に床の高さを変えることで、立ち仕事の工作台や、椅子に座って使うパソコン、ミーティングテーブル、食卓、キッチン、コーヒーカップ、読みかけの本、それに玄関を出入りする人、2階に上がる人までもがこの架台の上では同次元に溶け込み、モノと行為は同化していく。

もしもこの架台を自在に使いこなせたならば、それは多分、べたりと地べたに座りこみ、ワンカップ片手に花見なんかで賑わっている舗道の風情に似ているのかも知れない。



2階平面図



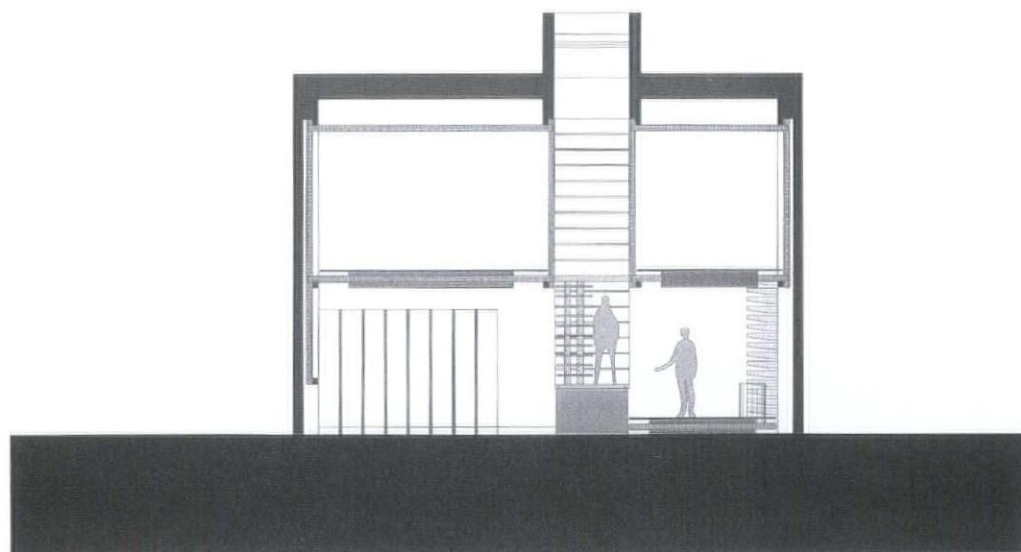
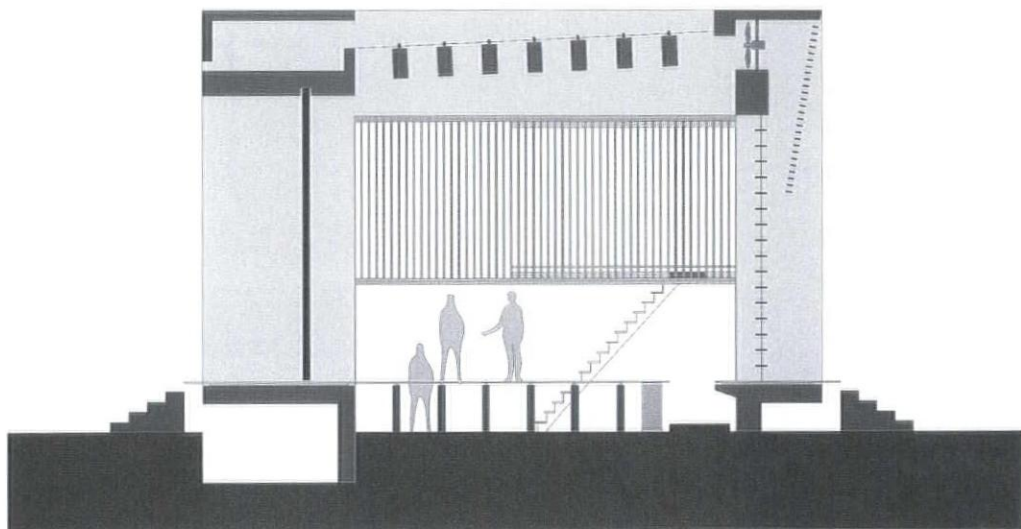
1階平面図 S=1:150



清水祐効 Shimizu Yukoh
 1965年/東京都生まれ
 1987年/東京工科大学建築科卒業
 1987年/園・青島建築設計事務所
 1994年/園紀彦建築設計事務所
 1998年/東京工科大学建築科非常勤講師

今回、個人での初めての応募になる。普段所属の組織とは全く別に、ひとりで考え、悩んだモノが世間にどこまで通用するのか、前から興味もあり、恐ろしくもあった。幸い設計の進み具合と応募の時期が重なり、しかも入選という結果もついてきた。ここで出展の機会を与えて頂いた審査員の方々に多大なる感謝の意を表したい。有り難うございました。

ある日、自宅に帰ると入選の通知が届いていた。嬉しさの反面、通るとも思っていなかったもので、模型は出来ていたものの、先の展開は何にも考えていない。SDレビュー会場の様子は事務所のボス達の数回の入選で見ている。その大層な雰囲気は蘇り、半月程頭の中が白くなる。「他の入選者は恐らく人海戦術で凄いモノを出して来るだろう。でも自分は1人だし人徳も無いしねえ」。これまでまた1ヶ月進展無し。時間切れ寸前の結論が、およそ模型とドローイング展にそぐわないマンガドローイングである。反則すれすれの変化球だろうが、自分ではコンセプトを割とうまく示せたかな、と思っている。果たして世間に通用するのかどうか、興味あるところではある。



断面図 S=1:150



寺岡豊博

[ダモイの砦]

用途：慰霊碑および展望施設

所在地：島根県隠岐郡西ノ島町国賀海岸

主体構造：Pca コンクリート造

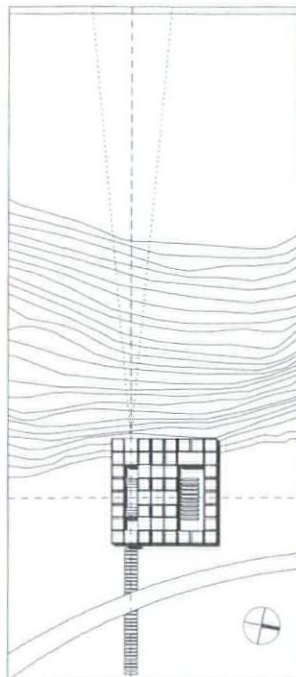
主要仕上材：発水剤塗布

敷地面積：約1,000m²

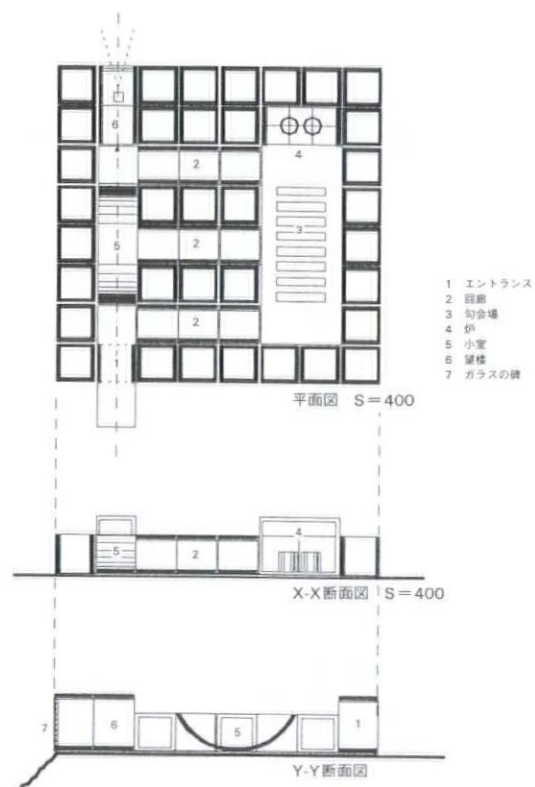
建築面積：278.89m²

延床面積：48.24m²

工事予定期間：2000年8月1日～10日



配置図

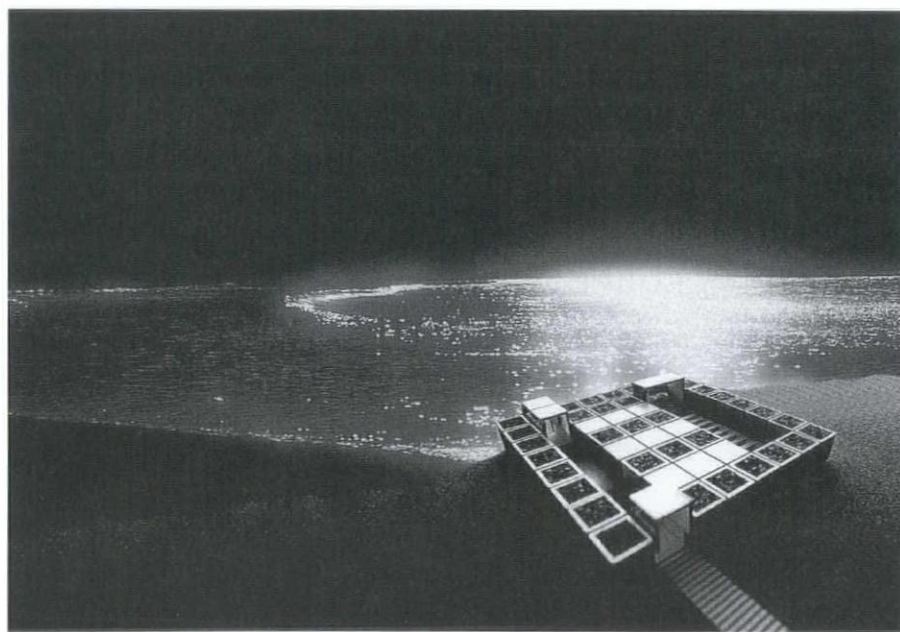


昭和32年初冬、ある男の遺書が数名のシベリア帰還兵により遺族に手渡される。10年にも及ぶ抑留生活の末、不運にも帰還への思い半ばで倒れたその男は生前、強制収容所の厳しい日常の中で数々の詩を通して常に周囲に生きる希望を与え続けてきた強きリーダーであった。そして彼を敬慕する仲間たちによりその遺書は全文暗記という驚異的手段で文書類の持ち出しを一切禁じる旧ソ連監視網をかい潜り本土にて復元される。

以上は辺見じゅん氏の記録小説『ラーゲリーから来た遺書』の粗筋であるが、これは主人公である詩人、山本蟠男氏の鎮魂と顕彰の場として氏の故郷に計画したものである。

この語り継ぐべき物語のために、それが単に眺められるだけのモニュメントではなく、来訪者が空間体験を通して氏の魂を偲ぶことができるよう、抑留中に心の拠り所であった句会の場を再現し、さらに故郷の海を最も象徴的に遠望させることを目的とした。つまり、回廊で繋がれた句会所、小室、望楼はパラストを充填した隔壁で外部と隔絶され、最後に辿り着く望楼からのみ海への眺望が碑文を刻み込んだガラスプレートを通して展開する。また、低廉なコスト条件と周囲の極めて厳しい環境条件を克服するため、全てを2m立方の既製ボックスカルバートで構成している。

なお、このタイトルにある「ダモイ」とは氏の心の礎であり仲間たちとの会い言葉でもあった「帰還」を意味する。そして「砦」とは現在の日本人が忘れつつあるような氏の不屈の精神と人間性を保護し継承するためのシェルターとしてあえて名付けたものである。



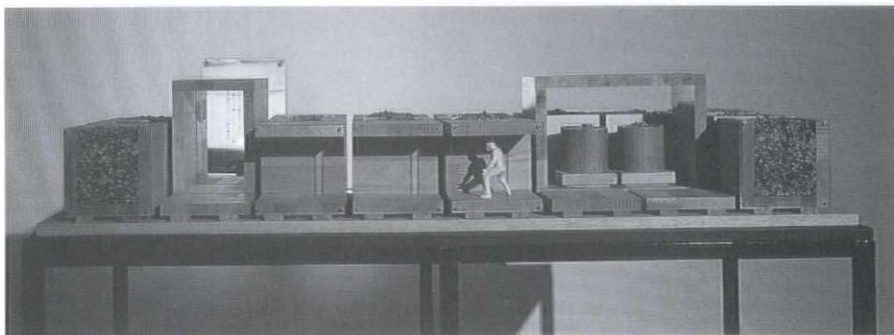
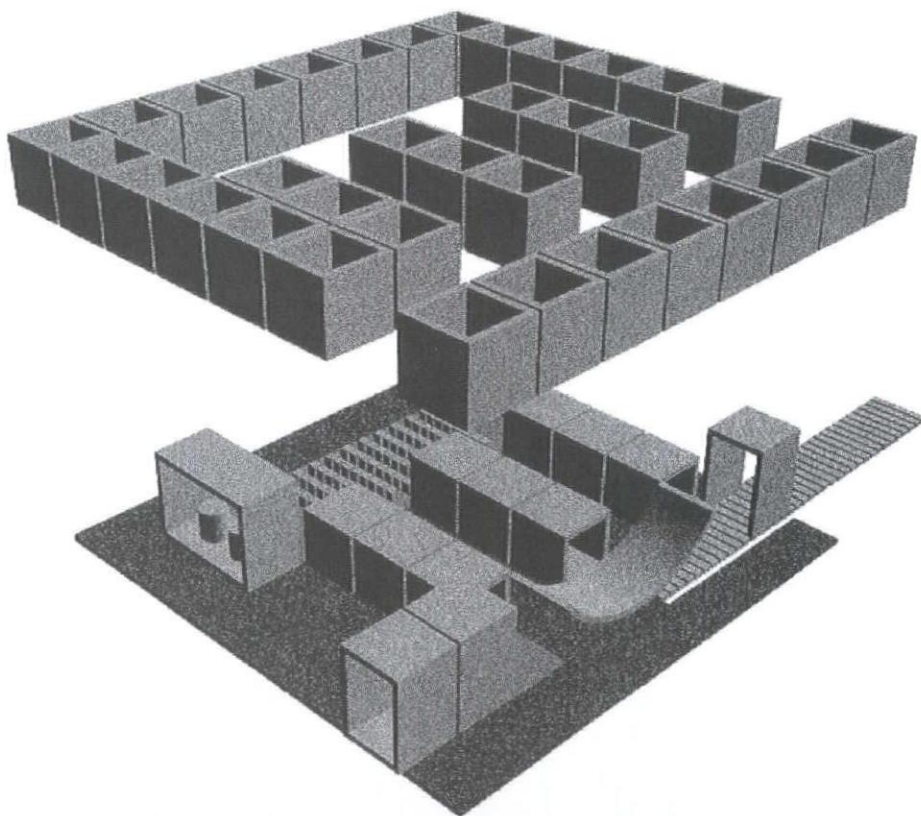
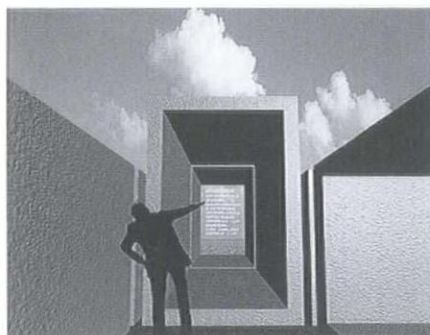
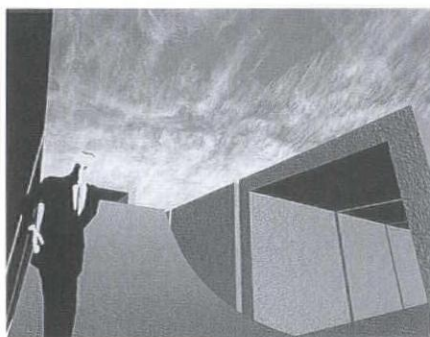
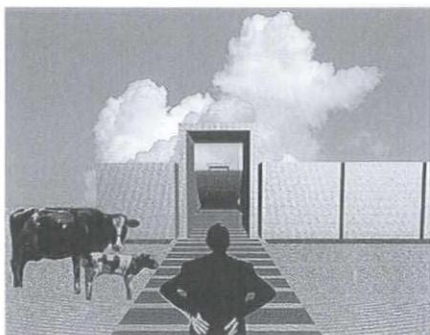


寺岡豊博 Toyohiro Teraoka
 1962年/京都市生まれ
 1986年/関西大学工学部建築学科卒業
 1986年/菊竹清訓建築設計事務所
 1991年/関西文化学術研究都市「モニュメントを含む広場」国際設計競技 上位41選
 1993年/「大河原公園及び周辺整備」公開設計競技 特別奨励賞
 1995年/さいたま新都心「さいたまひろば」企画提案競技 佳作

日輪はいま連脈の頂に没したり
 万象すべて間に沈む韃靼の野に
 嗚呼裸木ひとり 大空を撫する

これは山本幡男氏の辞世の末尾であり「裸木」は言うまでもなく彼自身の比喻です。計画にあたってはこうした心象風景の再生に始終し、来訪者各々が「大空を撫する」ことを望みました。実際に私は彼の遠戚にあたりますが、彼に関する知識は一編の小説から得たものに過ぎません。また戦争という事象は常に私達世代の想像力を凌ぐため、この独断に満ちたオマージュはその底流をなす概念（絶望と希望の相克）のリアリティーも多少未熟であったのかも知れません。しかし図らずも展示会場にまで御足労下さった御遺族からの感謝の言葉にこの解答へ理解を感じ大いなる励みとなった次第です。

そして、SDレビューという建築界の青春ドラマに彼の名をクレジット出来た事も何よりのはなむけとなりました。関係者の皆様、数々の御協力ありがとうございました。



平沼かおり

[WIRED SPACE]

用途：店舗

所在地：埼玉県

主体構造：S造+SRC造

主要仕上材：鉄骨 OP仕上、床 モルタル全ゴテ仕上

敷地面積：255m²

建築面積：182m²

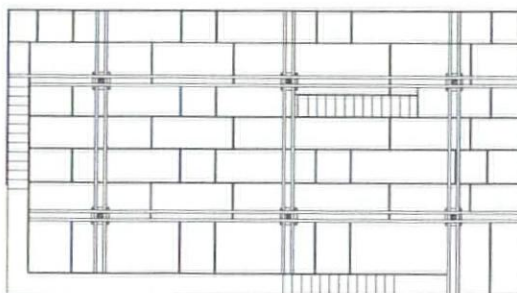
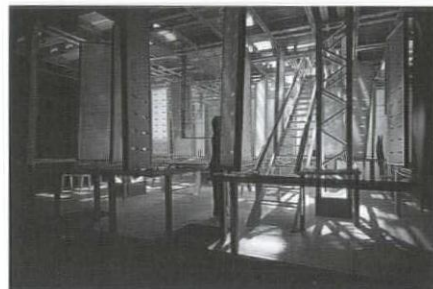
延床面積：182m²

工事予定期間：2000年

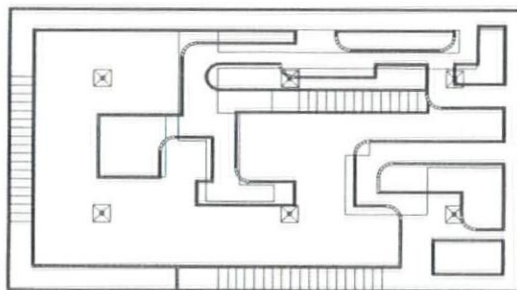
共同設計：谷垣吉行（意匠）

協力：池本賢治、島中ゆき（設計）

高柳学、朝古陽介、佐藤美保子（模型）



屋根伏図



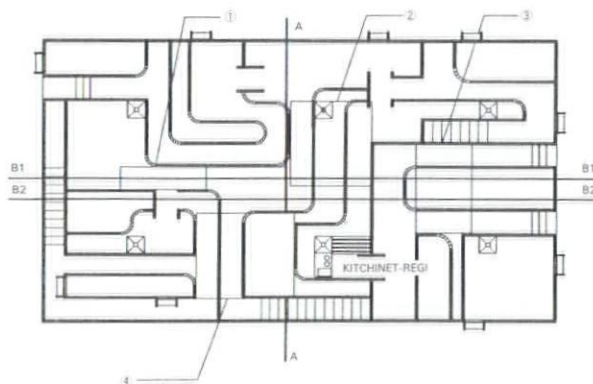
2階平面図

WIRED SPACEはLINEで構成される店である。LINEとは手摺であり、手摺によって店という領域が生まれる。

コンピュータグラフィックスというワイヤーフレーム表示が点と点を結ぶ情報だけで形態を表示しているように、最小限の表現方法として手摺を用いた。

店舗の用途は骨董品屋で、現在コンテナが物置として置かれている多くの骨董品屋は店の外部まで物があふれだし、建築物からはみ出した領域にまで店という機能だけが広がる。

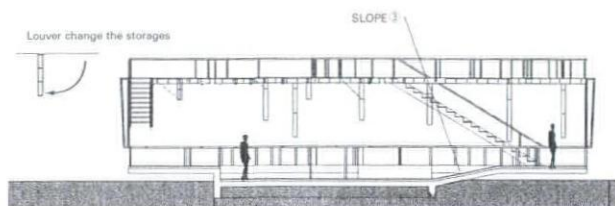
このWIRED SHOPは、あふれだす物をくむようにWIREが張られ、店という領域を曖昧に作り出す。張られた手摺の上には、回転、並行移動の可能な建具が走ることによって、初めて面的に（2次的に）領域指定することができる。一方で、店に来る客はその多くが、ひやかしてあり、なかなか購買まで繋がらない。いままで店という領域は物置に近い存在であったが、倉庫という雰囲気を残しながら骨董市場のようなシステムを取り入れることにした。建物全体を半屋外とし、内部と外部の繋がりを高める。また、ひやかして歩くための動線を制限して、より長く店の中に人間を残しておくことを目的とした。



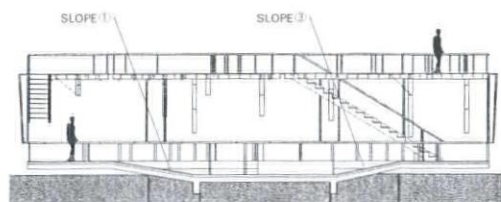
1階平面図 S=1:200



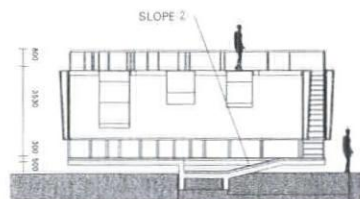
平沼かおり Kaori Hiranuma
 1972年／生まれる
 1995年／東洋大学工学部建築学科卒業
 1995年／類設計室
 1996年／フリー
 1998年／東京テクニカルカレッジ講師



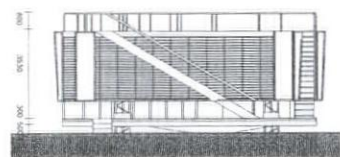
B1-B1 断面図



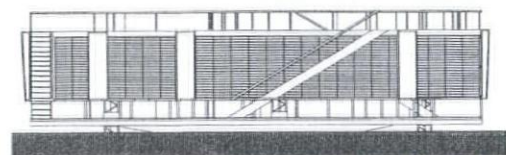
B2-B2 断面図



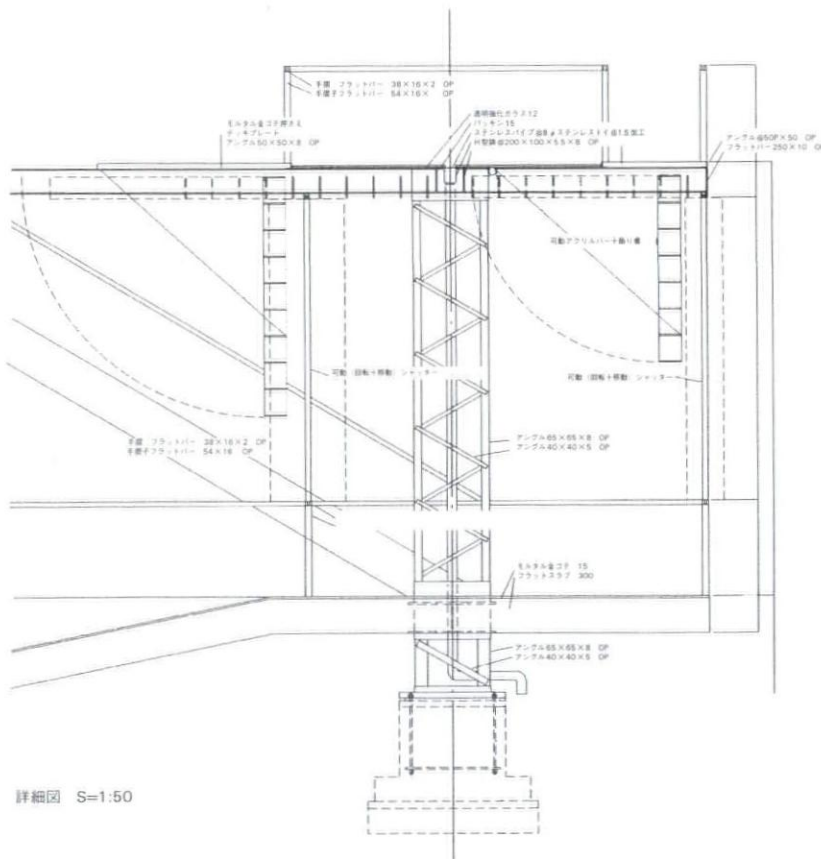
A-A 断面図



西立面図



南立面図 S=1:300



詳細図 S=1:50

INTERACTIVE MODEL

作られた空間に、人間という媒体が起こす不確定な現象を展示すること。

模型には必ずディメンションの変換が求められ、そこには小さく切り取られた時間が凝結している。不確定な現象とは閉じ込められた時間の一部を解放することによって、建築物の表層で実際起こる出来事であり、また展示に訪れた人、ひとり一人によって作られる結果の連続であったと思う。そしてそれらがサンプリングされた建築が変化していく事でもあるだろう。INTERACTIVE MODELは、「触る」というその行為が模型の「動き」となって返ってくるような、「動き」は実際の状況を出るだけ正確に再現出来るような機構を持ち、そして、解放された時間が擬似的に建築物を消費するような展示用ではなくエスキス模型として作ろうと考えていた。

展示の表層でサンプリングされた出来事に、「壊れる」という事があった。模型は、最初INTERACTIVE MODELとしてなかなかうまく機能することができず、壊れていないのにうまく動かすことができなかったり、こちらの意図に反した動かし方をしたり何度も壊れて何度も直すこととなった。その最大の要因は説明書きの表現の仕方にあったようだが、一方で模型作りに係った人はたとえ一度しか触ったことがないにしてもうまく動かしていた。4年ほど前に、同じ様な現象にあったことがある。コンピューターを初めて触ったときのことである。説明書きをもとに、ハンドルと戸というインターフェイスに触れて動かす。動かすために触る位置を探す。クリックするべきボタンを探す。ハンドルを回して戻す。元の画面に戻る。どちらも慣れてしまえばとても簡潔で何の支障もないことである。

そして、本当にサンプリングされた事は、生まれてからずっと1:1の建物に住んでいて、そのことに何の疑問を感じないで、窓や戸を開く私たちにとって建物がいかに強力なインターフェイスを築いているかということであったように思う。

更田邦彦＋岩岡竜夫＋岩下泰三 [アビタ戸祭]

用途：戸建賃貸住宅4棟（将来分譲可）

所在地：栃木県宇都宮市戸祭

主体構造：1階S造 2階木造

主要仕上材：ガルバリウム鋼板（2階妻壁及び屋根）、網入りガラス（2階平壁）、ALC板（1階外壁）、コルクタイル（内装床）、解体廃材（2階ベランダ手摺及び駐車スペース床）、廃材瓦（犬走り）他

敷地面積：999.47m²（位置指定道路を含む）

建築面積：384.08m²（4棟合計）1戸あたり約96m²

延床面積：563.91m²（4棟合計）1戸あたり約141m²

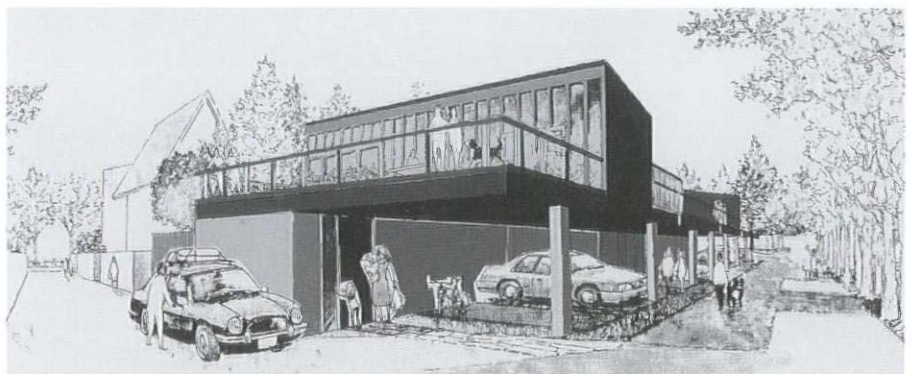
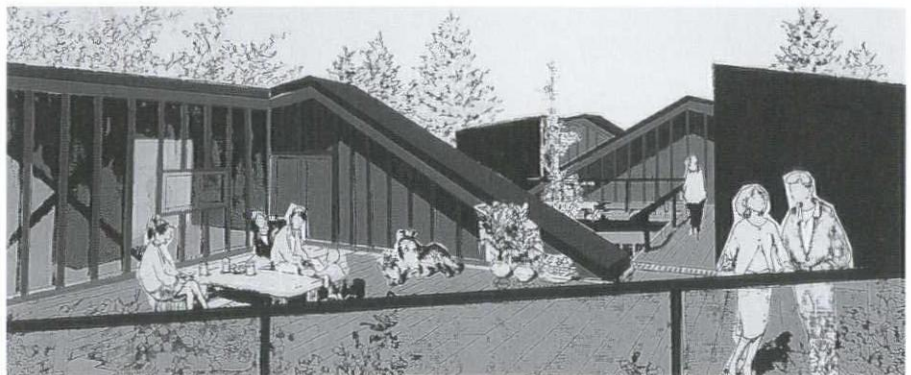
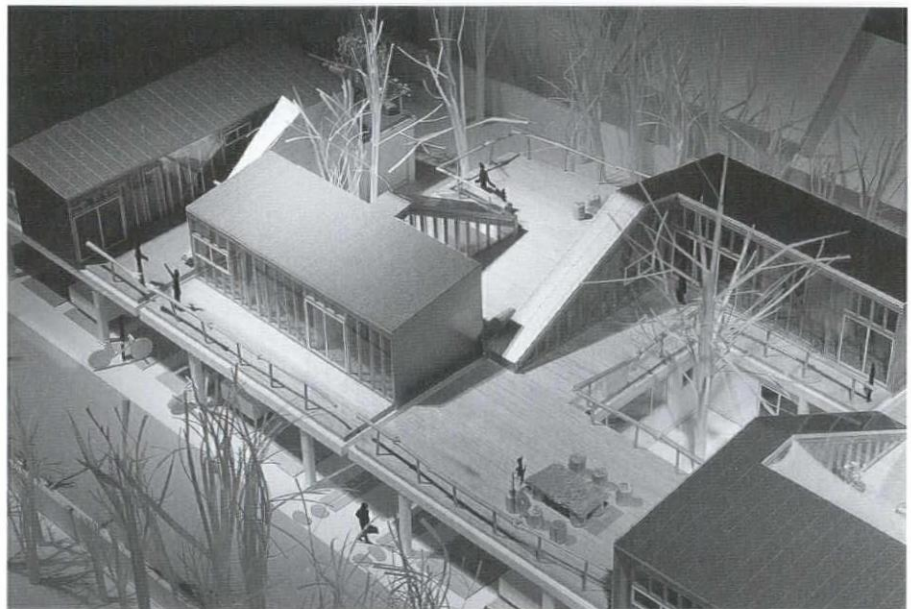
工事予定期間：1999年8月～2000年2月

共同設計：長谷川久美、一條典（構造）

小野寺康（造園）

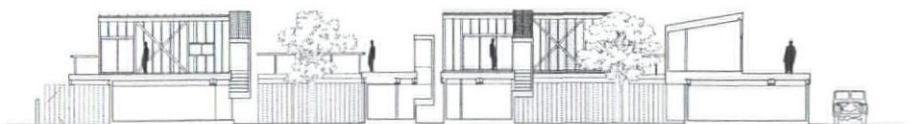
協力：齋藤洋介、中村晶子、黒江由美、稲生七重、

田島孝通、岡本隆史、花田茂、磯崎修一



ひとつの敷地にひとつの建物、それが平面的に脈絡なく繰り返される戸建住宅地の風景は、多種多様な家族が集約的かつ自律的に住み出すための「それなりによくできた」システムを映し出している。本計画は、都市環境をタテに分割するこうした戸建形式の上に、ヨコに展開する空間形式を挿入させることで、関係性の中で獲得される豊かな住環境への新たなシステムを提案するものである。

場所は宇都宮市中心街の西方にひろがる低層住宅地の真ん中に位置している。既存樹木が散在する約1000m²の敷地に、4つの独立専用住宅を建設する。まず、地面から約2.7mの高さに、1枚の人工地盤すなわちプラットフォームを、既存の樹木をできるだけ残しながら敷地全体にわたって設置する。さらにこのプラットフォームの上に、4つの小さな建物（構造上1階の部分と分離した木造建物）を互いに距離をあけながら配置する。これらの建物によって区切られた屋外エリアは、それぞれ各住戸専用のオープンテラスに対応している。1階は、各住戸すべて北側プラットフォーム下に玄関と2台以上の駐車スペースがあり、さらに階段に沿って2つのパティオがある。2階オープンテラスと1階パティオは、各住戸のプライバシーを保つための機能をもつとともに、コモンエリアとしての共有化が可能なように、空間的・動線的に住戸相互に連続性をもたせている。



断面図 S=1:250



更田邦彦 Kunihiko Hukeda	岩岡竜夫 Tatsuo Iwaoka	岩下泰三 Taizo Iwashita
1983年	1983年	1982年
武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業	武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業	武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
1983-88年	1985年	1984年
椎名政夫建築設計事務所勤務	武蔵野美術大学大学院修士課程修了	武蔵野美術大学大学院修士課程修了
1989年	1990年	1984-86年
更田邦彦建築研究所設立	東京工業大学大学院博士課程修了	新妻欣美建築研究所勤務
1995年-	1992年	1987年
東海大学非常勤講師	東海大学工学部建築学科専任講師	一般建築士事務所スペースラボ・ゆう設計設立
	1993年-	1988年-
	東京工業大学非常勤講師	東京テクニカルカレッジ非常勤講師
	1995年-	1988年
	東海大学第二工学部助教授	有限会社スペースラボ設立
		1995年-
		武蔵野美術大学非常勤講師

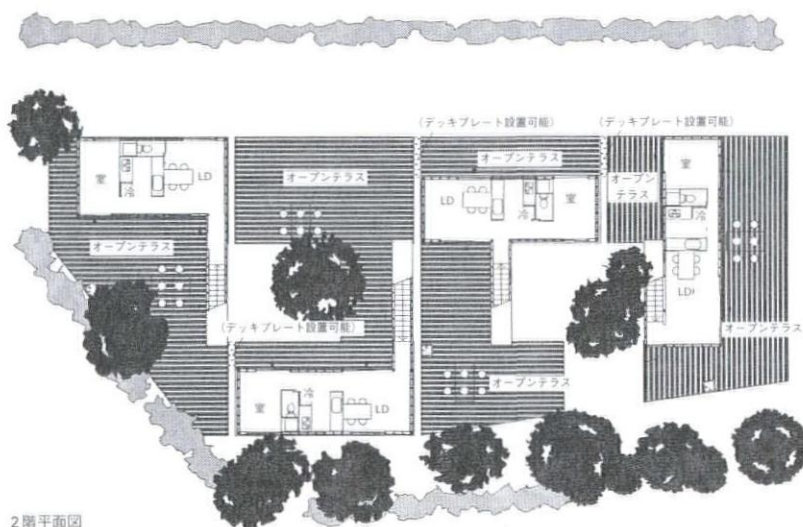
この計画はレビュー応募時に基本設計が終了し、展覧会出展の時期にはすでに現場の基礎工事が始まっていた。

12月にデッキ部分のプラットフォームが立ち上がり、2000年2月には竣工する予定である。現場での肉体労働も含めて実務的な設計作業が連続進行していた理由からではないが、我々のプレゼンテーション表現は他の作品群と比較しきわめて具象的、実体的だったような気がする。特に1/50スケールで広く周辺民家まで含めた模型表現や、建物内外の視線を追うように製作されたCGアニメに関して、そこまで先を見せなくてもいいのではという批判もあった。

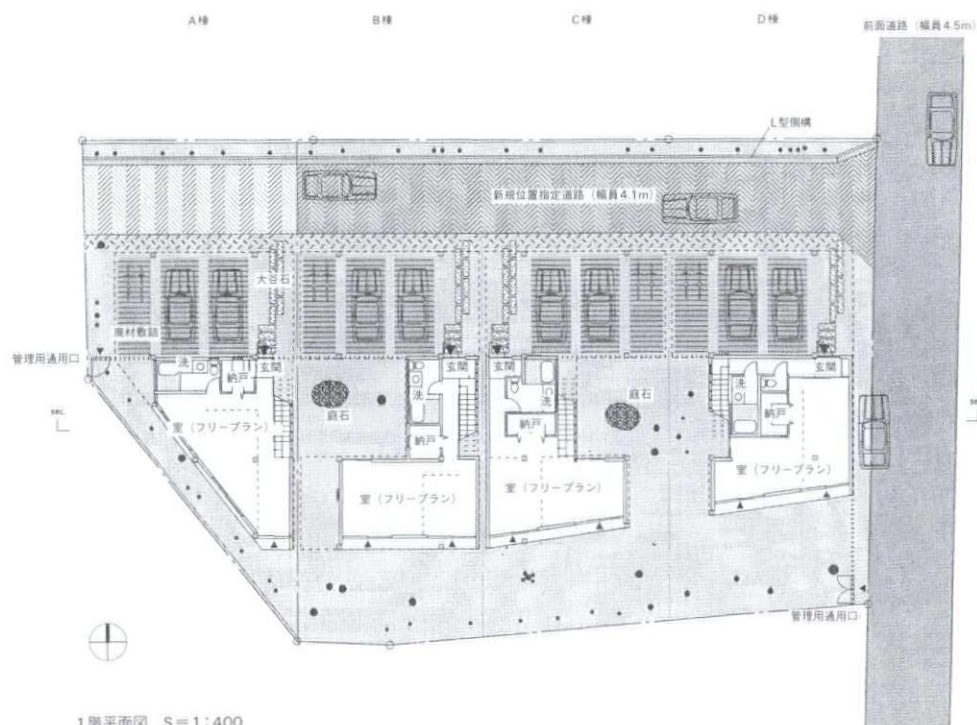
しかしながらこのプロジェクトの中心は、敷地現況や周辺環境という前提条件、および樹木の育ち方や借り主の住みなし方などの将来設定といった、いわば「建物の前後左右」にある事柄への具体的な対応を手がかりにしてデザインを進めていくことにあり、結果として生まれる建築空間の新鮮さ、豊かさが表現として伝わればと思った。(岩岡)



配置図



2階平面図



1階平面図 S=1:400

馬淵富夫＋北岡 治＋徳野博子
／大成建設設計本部
[PLATEaux]

用途：学校

所在地：施主の要望により非公開

主体構造：S造＋RC造

主要仕上材：

屋根：ゴムチップ、グレーチング、強化合わせガラス、ほか

外壁：フロントガラス、スティールサッシュ、ほか

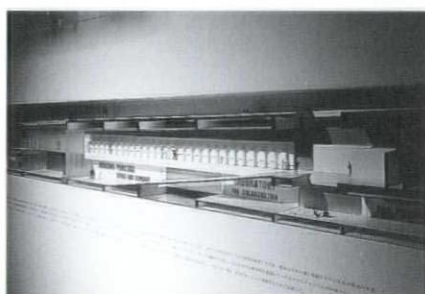
敷地面積：19,970m²

建築面積：8,930m²

延床面積：11,520m²

工事予定期間：2001年～

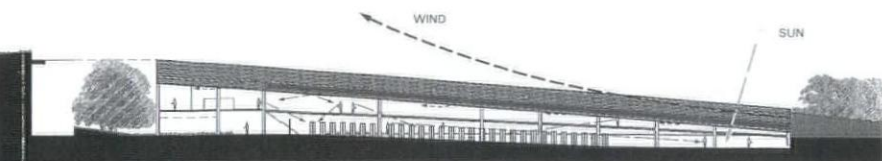
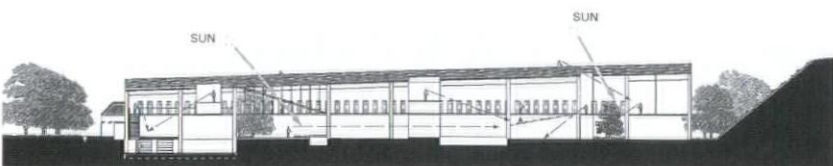
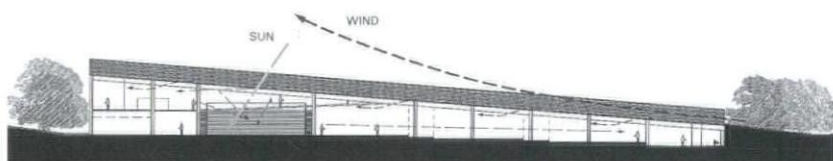
協力：国保潤（展示）



本計画は福祉系の学校のキャンパス計画である。福祉関係の問題は現在教育のみならず、新しい提案を必要としており、キャンパス計画においても外に開かれたプログラムも含めたソフトとハードの両面を考えていかなければならないと思われる。敷地は自然の残された林の中に位置し、歴史的に沢を形成してきた敷地形状をしており、現在も下流の湖に供給されている水が敷地内を貫いている。

全体の構成としてはヴォリュームを水系が形成してきた広域の地形形成運動とシンクロさせたものとし、極力環境から突出させない形状（水平面から4°勾配）とした。平面的には現状の水系（1°勾配）をキャンパス内に取り込みつつ、人の流れを引き込む（3°勾配）ようなレイヤー状の空間構成を目指し、1階レベルでは敷地内を通過していく人々からキャンパス内の様々なレベルの風景が重層して見えるようなものを、2階レベルではそれと垂直にレイヤーし屋外に展開していくグラデーションの構成を目指した。

上記のヴォリュームと平面を満たし、統合していくものとしてのGL面から連続した傾斜床／屋根面「PLATEaux」に交通部分を負担させるだけでなく構造、設備的要素を集約し、浮遊する一枚の「PLATE」として現象するものに計画した。



断面図 S=1:1200



馬淵富夫 Tomio Mabuchi

1971年／滋賀県生まれ

1995年／早稲田大学理工学部建築学科卒業

1996-97年／東京テクニカルカレッジ講師A-LAB.

1997年／早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了

1997年／大成建設設計本部

北岡 治 Osamu Kitaoka

1967年／東京都生まれ

1990年／日本大学経済学部卒業

1997年／早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了

1997-99年／大成建設設計本部

1999年／大成建設名古屋支店設計部

徳野博子 Hiroko Tokuno

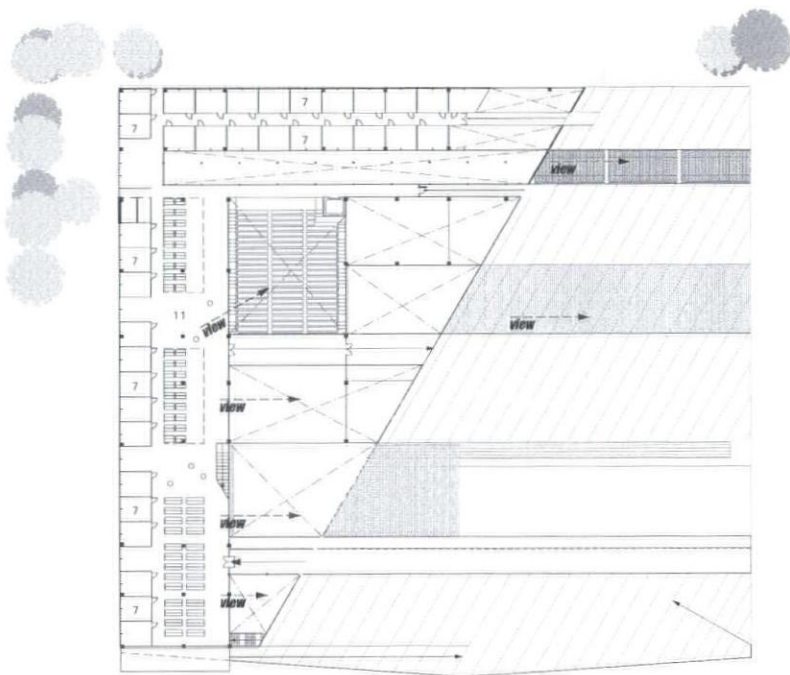
1973年／山口県生まれ

1997年／武蔵工業大学工学部建築学科卒業

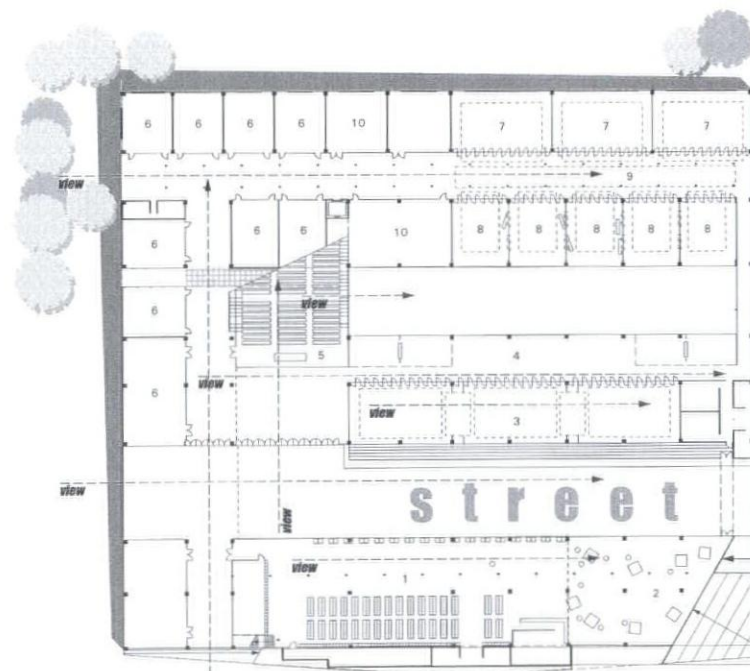
1997年／大成建設設計本部

プロジェクト自体は環境の微小な現象を拾い上げて空間化しようと考えていました。そしてそれとシンクロするかたちで展示空間も展開できればと考えました。プロジェクトの特質上すべての情報を公開できない難しさの中有りうべき展示の可能性を模索したつもりです。

プランにも採用されている正方形というプロポーションを手掛りに規定のサイズ、縮尺、スチールパイプのモジュール、普通に搬入できる寸法、コストを考慮しながら、展示空間の模型やパネルにも適用して、シンプルで緩やかな統一感を目指しました。



2階平面図



- 1 図書館
- 2 ラウンジ
- 3 実習室
- 4 セミナースペース
- 5 ホール
- 6 講義室
- 7 研究室
- 8 共同研究室
- 9 コラボレーションスペース
- 10 事務室
- 11 インフォメーションスペース

1階平面図 S=1:1200

安田博道

【静岡の家】

用途：住宅

所在地：静岡県湖西市

主体構造：木造

主要仕上材：屋根：瓦、ポリカ波板 壁：杉板、ステンレスメッシュ

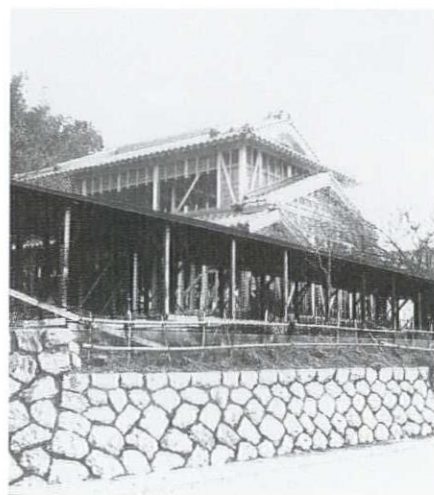
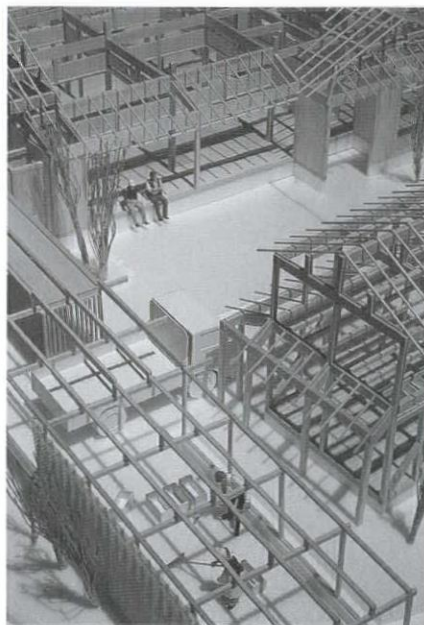
敷地面積：1,172.94m²（既存含む）

建築面積：237.81m²（既存含む）

延床面積：353.41m²

工事予定期間：1999年2月～10月

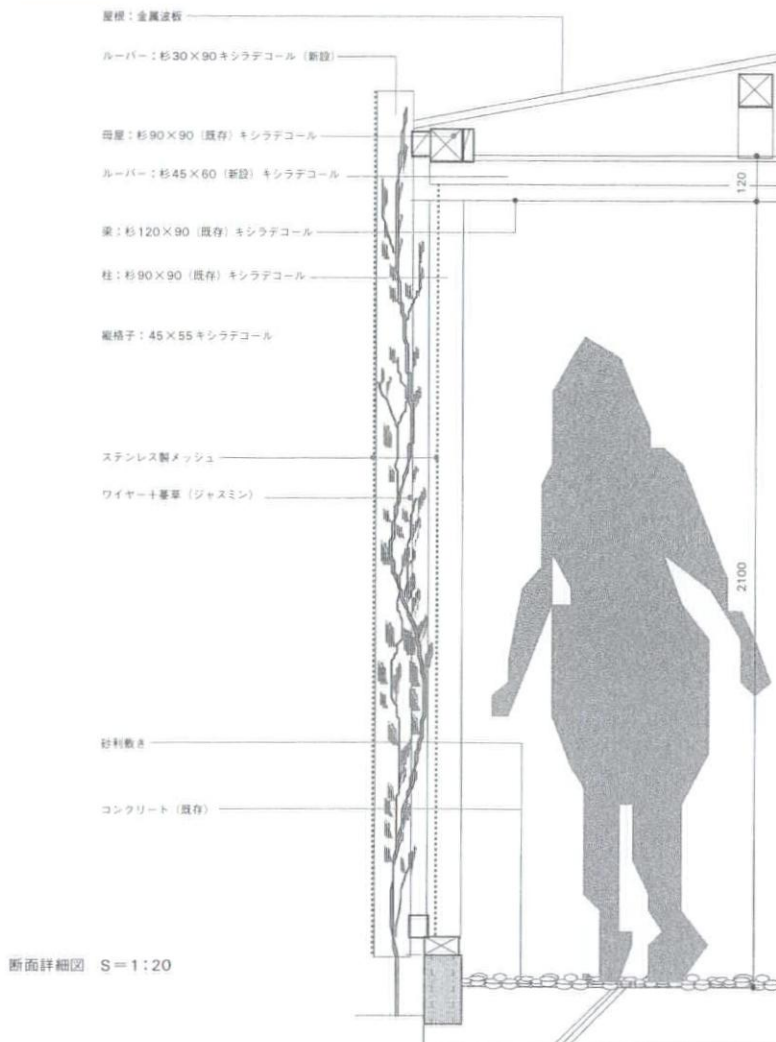
協力：古賀仁



これは農家屋敷の改築計画です。

周辺部は石垣、植による生け垣、その奥に母屋、離れ屋と農村部の屋敷としては典型的な風景が見られますが、その一角にこの計画が開始されました。この家系は十数代続く農家ですが、主人は30代はじめに、自らの屋敷内で、養鶏業を始めました。生産と居住が一体化された屋敷は、いわば前近代的な姿と言えますが、屋敷内に不思議な活性化を生んでいました。現在、主人は60代半ばにさしかかり、屋敷内の鶏小屋だけでなく郊外に移転した鶏小屋を含めて規模の縮小を開始し、老後を静かに迎えようとしています。今回の計画は、主人の夢であった入母屋住居を新築することに始まりましたが、敷地内に残された旧鶏小屋を含め、屋敷全体の環境を柔らかく変換していくことを意図しています。

具体的には、道路側から見たファサードは、隣接する屋敷の街並みに連続性をもたせるよう、道路側南北に伸びた旧鶏小屋の西面を基草で覆い、それに金属メッシュを被せ、隣家の生け垣と連続させています。春には花が咲くことでしょう。旧鶏小屋内部は、郊外に残った鶏の集卵作業場、駐車場、回廊、浴室、キウイフルーツ畑などを含み込んだ機能をもたせ、農家独特の生産と生活が一体となった場所が、植栽で覆われた自然豊かな環境の中で行われるように考えています。また、母屋は、回廊形式により、中庭、裏庭、旧鶏小屋、と連続させ、将来の増築を含め、屋敷全体のアクティビティが増すように計画されています。



断面詳細図 S=1:20



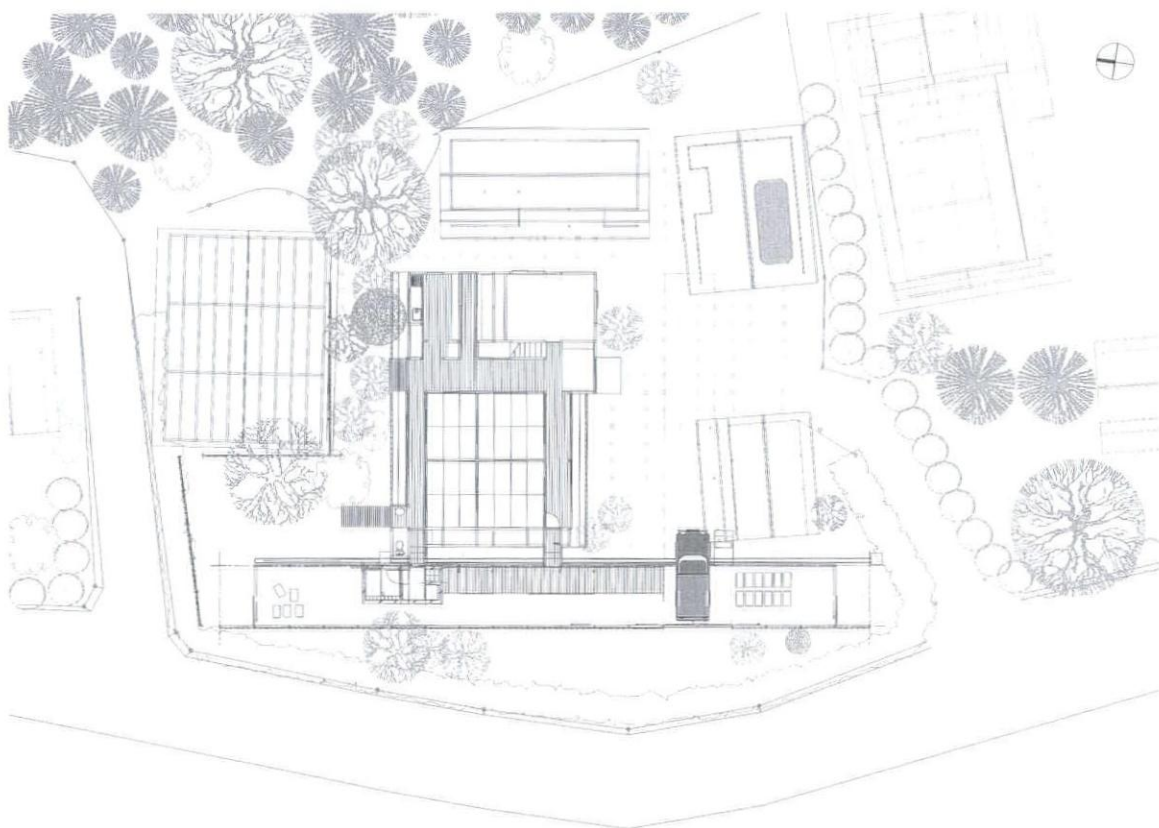
安田博道 Hiromichi Yasuda
 1965年／静岡県生まれ
 1988年／横浜国立大学建築学科卒業
 1990年／横浜国立大学大学院修士課程修了
 1990-91年／アトリエ第5建築界
 1992-98年／ワークステーション
 1998年／環境デザイン・アトリエ設立

このたび、SDレビュー展に参加できたことを、とても嬉しく思います。

今回の展示では、敷地の地理的、歴史的状況が伝わるように心がけました。しかも、ドローイングと模型という限られた素材でどれだけ伝えられるか、それが展示テーマの一つでした。

このプロジェクトを成立させているものが敷地の空間的・時間的コンテキストに多くを負っているため、敷地環境が伝達できればプロジェクトの内容も理解されるのではないかと考えました。端的に言えば、周辺状況が理解できれば、展示目的の半分は達成できたのではないかとさえ思っています。ドローイングでは、周辺環境の写真と文章を中心にして、模型では、敷地内（屋敷内）の建物配置関係とその暮らしぶりを中心にして、農家屋敷の雰囲気が少しでも伝達できたのではないかと考えています。

最後になりましたが、展示に際して、助言をしてくれた方々、手伝いをしてくれた方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。



平面図 S=1:400



立面図 S=1:400

山田 良

【鹿北町「道の駅」周辺施設】

用途：屋外小劇場、ギャラリー、休憩所、売店、など

所在地：熊本県鹿北町

主体構造：木造

主要仕上材：スギ間伐材

敷地面積：約20,000m²

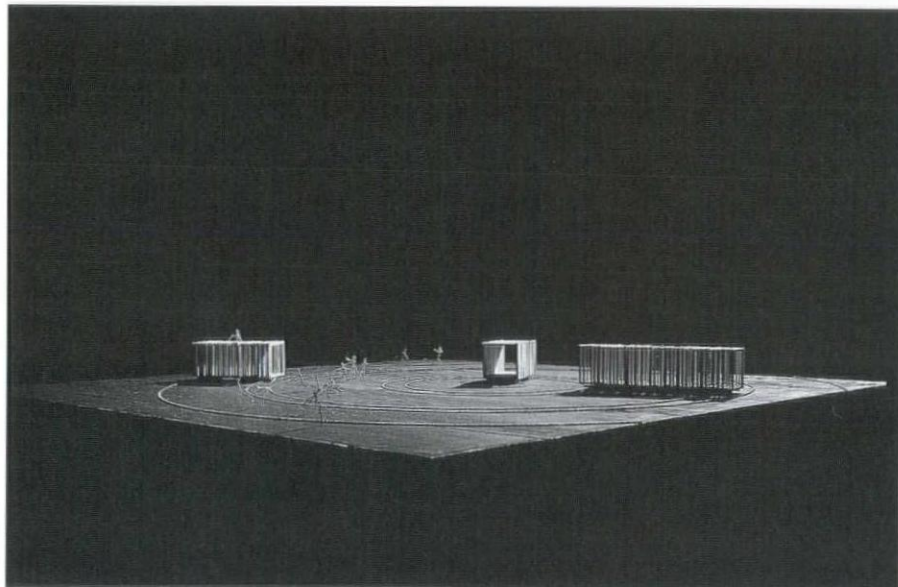
建築面積：326m²+281m²

延床面積：375m²+281m²

工事予定期間：2000年5月～2001年2月

共同設計：山田綾子

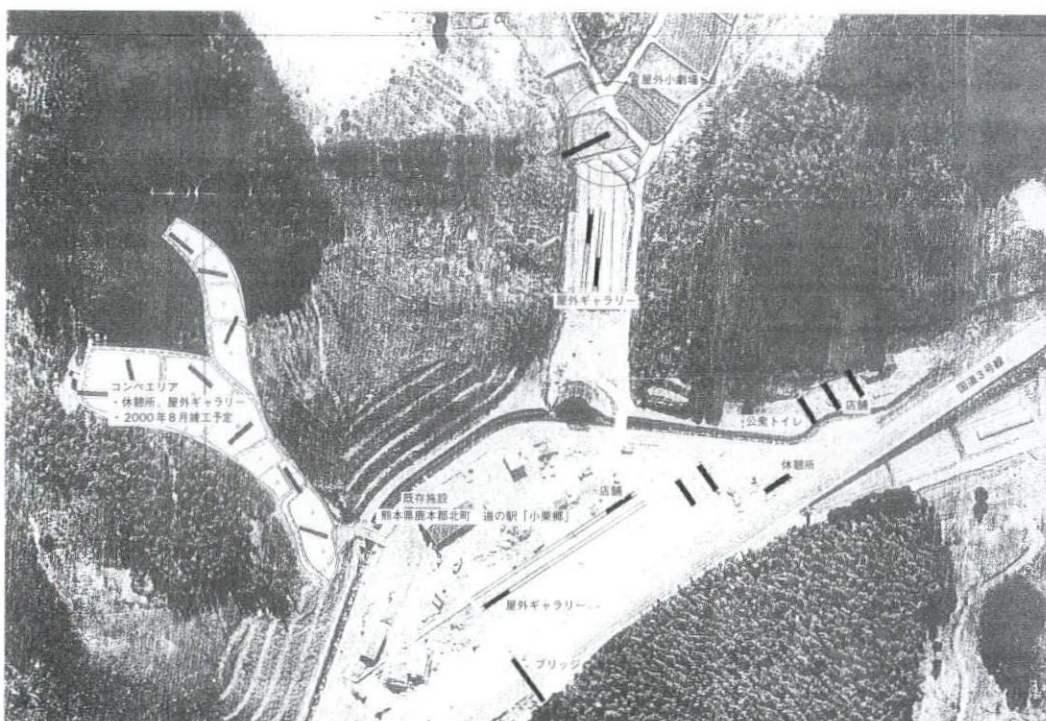
協力：ドローイング：渡辺敦児（STUDIO AZZURRO）



本計画は、「アートプロジェクト」とし、アート、ランドアート、パブリックアートといった計画を事業主から求められた。

「ネガポジ反転の提案」とした。敷地周辺の自然が、すでに我々の目を和ませていること、そのことに気づくようなしかけでいいのではないかという考えが受け入れられた。

しかけは敷地環境の資源を利用した 間伐材でつくられる。



配置図 S=1:3000

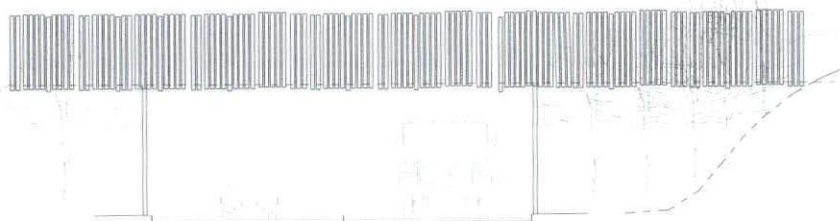


山田 良 Ryo Yamada
 1968年／東京都生まれ
 1991年／神奈川大学工学部建築学科卒業
 1993年／芝浦工業大学大学院工学研究科修士課程修了
 1993-1995年／KAJIMA DESIGN 建築設計部
 1995-97年／鹿島出版会 SD編集部
 1997年-／KAJIMA DESIGN 建築設計部

SD Reviewに入選・出展できて嬉しく思います。建築を勉強しはじめたころから意識してきた展覧会です。

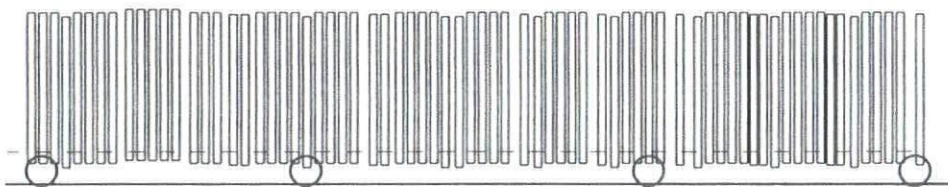
計画を特徴づけているのは、同じヴォリュームのオブジェが様々な角度で点在するところです。プレゼンテーションでは「視点を変えることにより生ずる、場のダイナミズム」だけを表現しようと考えました。うまく表現できたかどうかは未だわかりませんが、見る人に何かを伝えることはやはり難しいことだと感じました。

展覧会出展により様々なご意見を伺えたこと、自分にとって大変励みになりました。



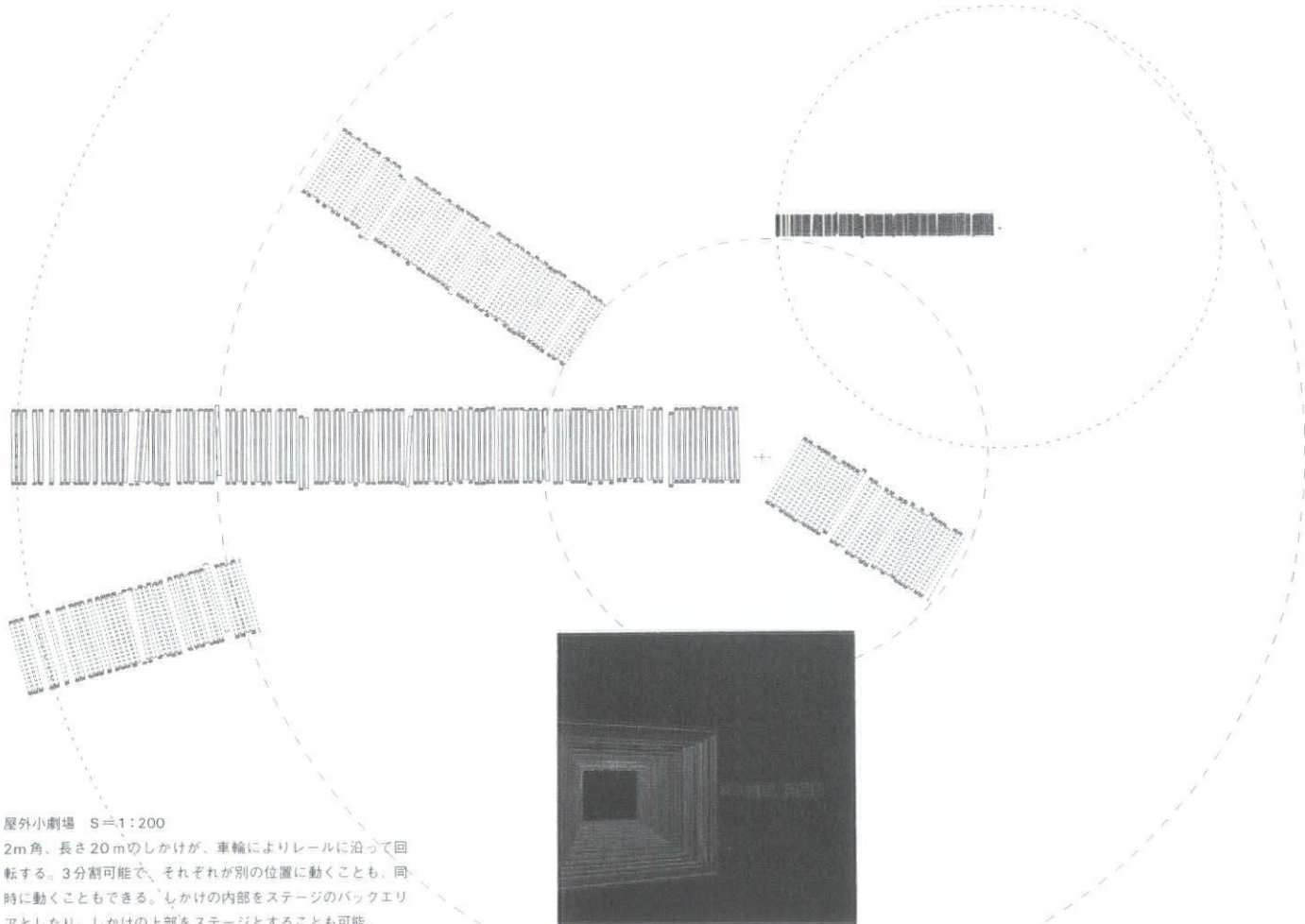
ブリッジ S=1:200

2m角、長さ20mのしかけが、国道を横断する歩行者路となっている。



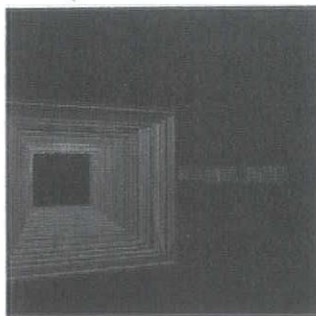
売店・屋外ギャラリー S=1:100

2m角、長さ12mのしかけが、レールに沿って水平移動する。
 必要に応じてジョイント、分割使用可能。



屋外小劇場 S=1:200

2m角、長さ20mのしかけが、車輪によりレールに沿って回転する。3分割可能で、それぞれが別の位置に動くことも、同時に動くこともできる。しかけの内部をステージのバックエリアとしたり、しかけの上部をステージとすることも可能。



用途：宗教施設（納骨堂）

所在地：京都府船井郡園部町

主体構造：S造

主要仕上材：スリガラス（タペストリー加工、 $t=12$ ）、

白大理石

敷地面積：4,900 m^2

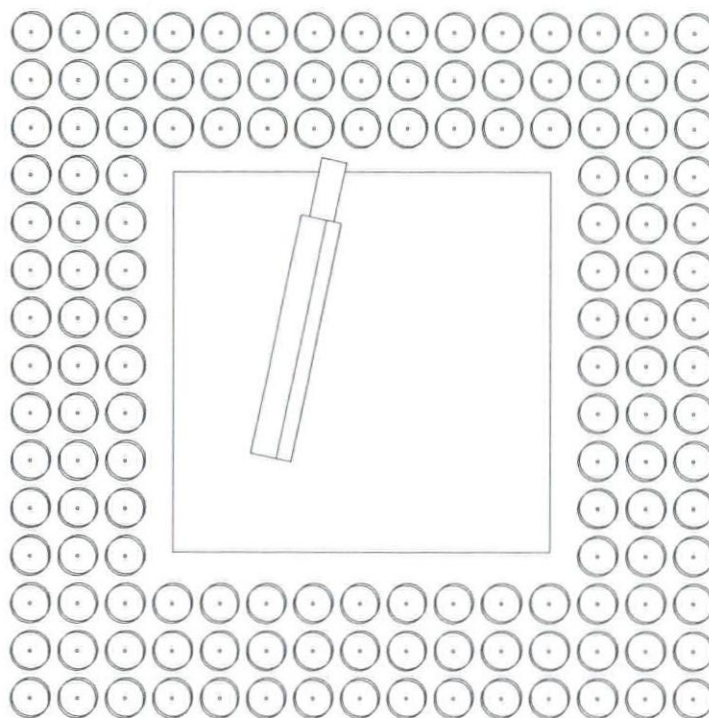
建築面積：240 m^2

延床面積：240 m^2

工事予定期間：2001年1月～8月

共同設計：前原大樹／エス・ディ・ルーム（構造）

協力：加藤正浩、村田純、伊奈尚、今井俊裕／山口隆建築研究所



配置図 S=1:1500

一辺6mの正方形断面をした48mのスリガラスの筒が、30度傾いて水面上に配置されている。

内部に御霊を祀る白いボリュームがおかれ、20cm立方の穴が穿たれている。

さらにスリガラスの箱が、挿入されている。

夜になると、それぞれに灯りがとまり1,000体の御霊を慰める。

建物は外部に開放されており、自然と一体化した慰霊空間を形成している。

立面図

平面図

断面図

立面図 S=1:600



山口 隆 Takasi Yamaguchi

1953年／京都市に生まれる

1983年／京都大学工学部建築学科卒業

1983年／安藤忠雄建築研究所入所

1988年／ARCHITEXTURE (ARX) をニューヨーク、ジュネーブ、リスボンを結んだネットワーク上で結成

1992年／ベルリン シュプレーボーゲン都市開発国際コンペ入賞。

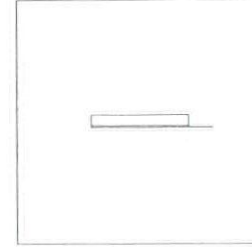
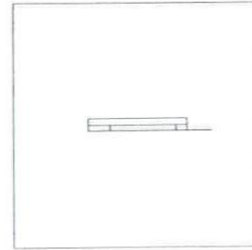
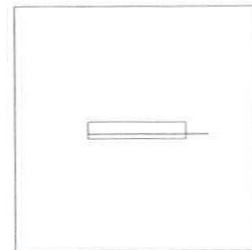
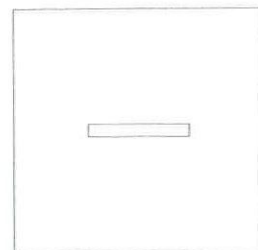
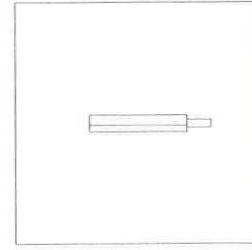
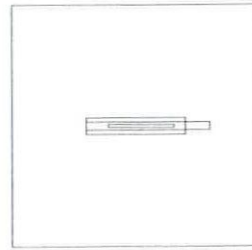
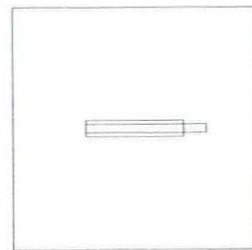
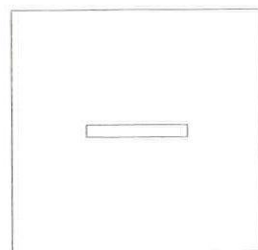
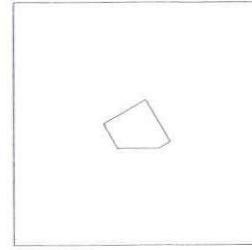
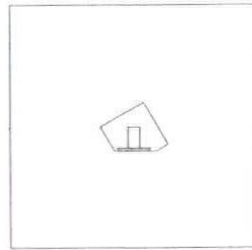
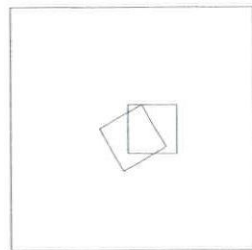
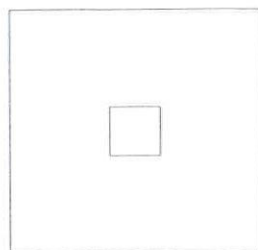
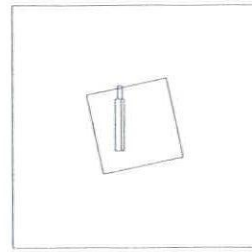
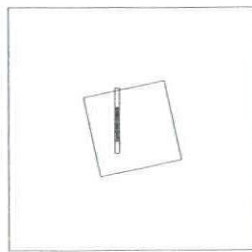
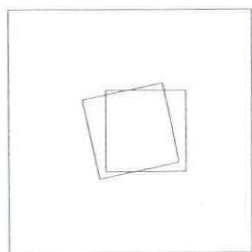
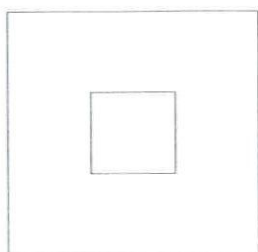
1996年／山口隆建築研究所設立

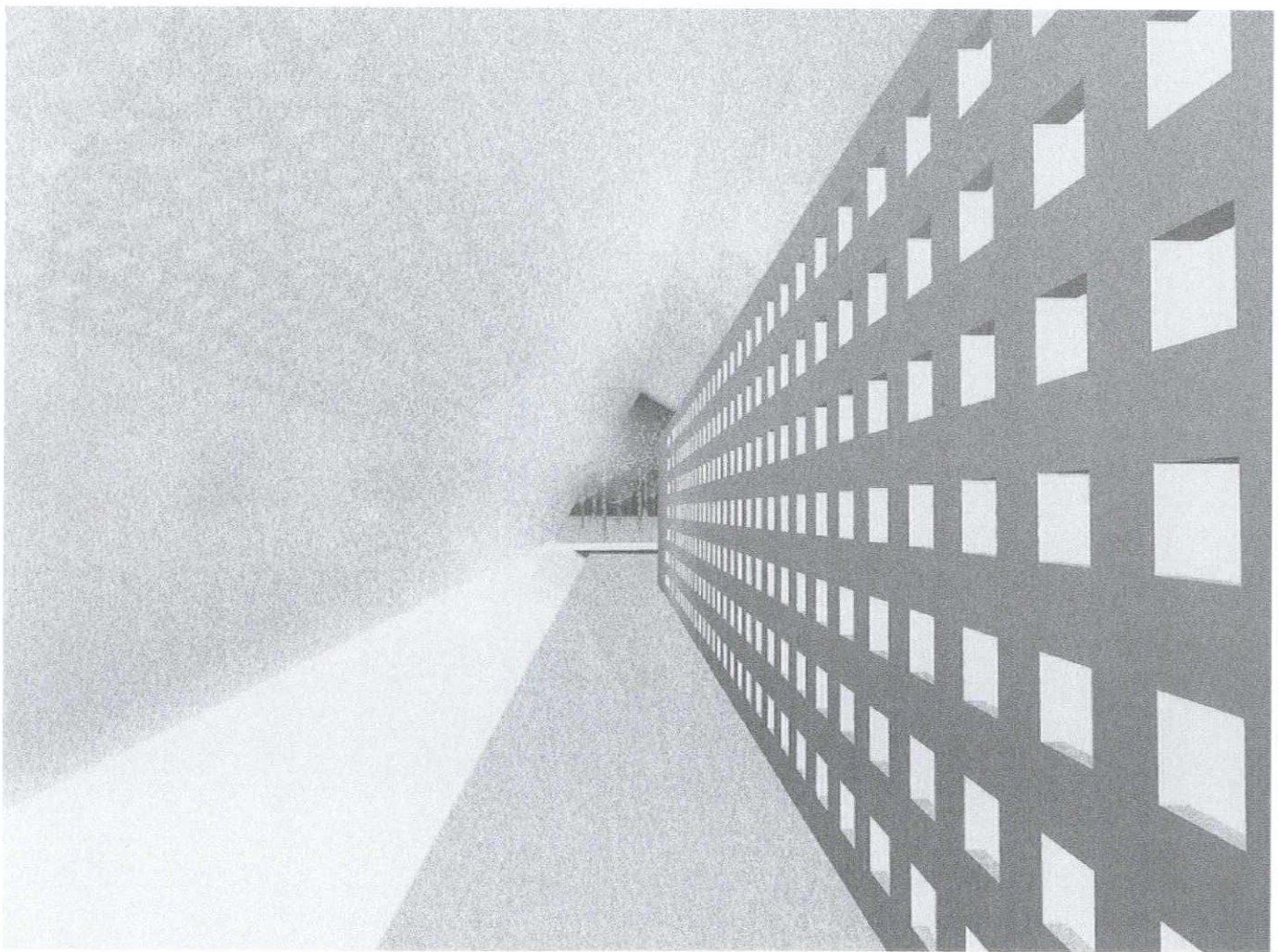
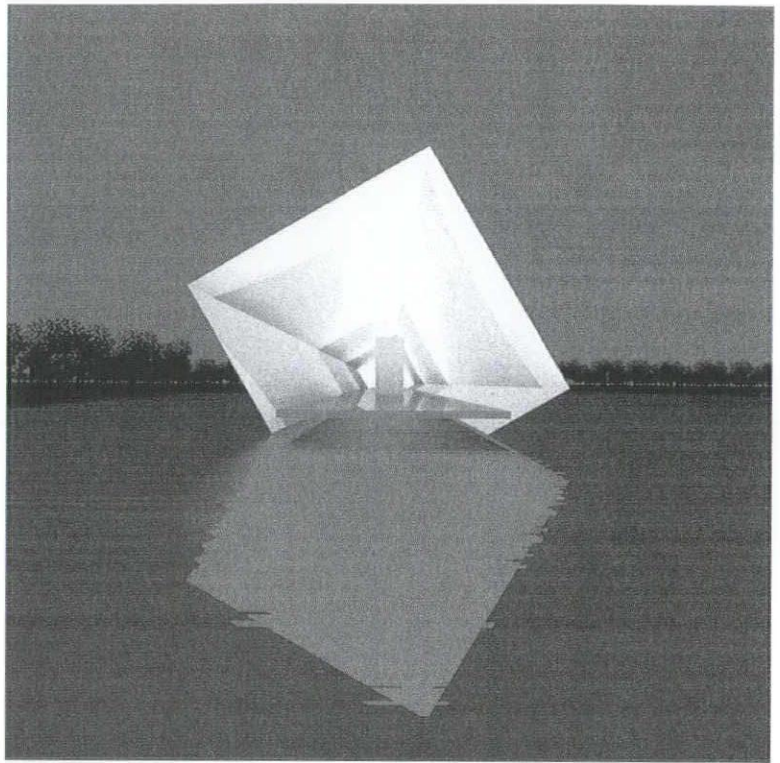
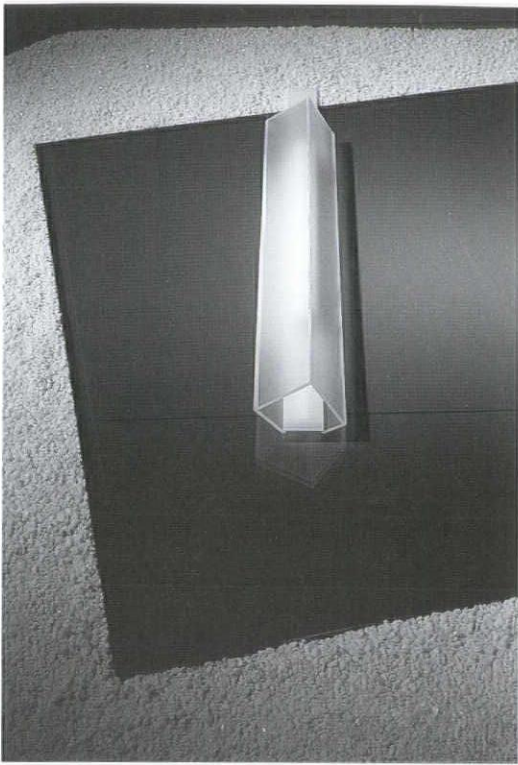
慰霊空間、この死後の空間を、どのように考えるか。いったい、われわれは死者の魂とどのように向きあえばいいのだろうか。死や生というものをどうとらえるべきなのか、自問自答しなければならなかった。

地中に埋葬されてきた御霊を光に充ちた地上に安置した。死者の魂を、自然に抱かせ、生きているわれわれと同一の視線に置きたいと思った。なぜなら死は隠蔽されるべきではなく、生きているわれわれと共にあり、生と死は分つものではないと考えたからだ。

建物はガラスだけで構成し、水で浄化させた場所に置いた。天空光や水面に揺らぐ光は、建物の隅々まで深く浸入し、死者の魂を慰める。われわれはこの光に充ちた場で死者の魂と向かい合う。

SDレビューでは、制作過程の切断面の提示が求められる。イメージや思考を凝縮し、未だ実体化されていないものを表現しなければならない。また読み手側にも相当な力量が必要とされる。今回、こうした緊張感のある展覧会に出品できたことは本当に光栄なことと思っている。





林 昌二

播 繁

芦原太郎

小川晋一

林 視く模型ですね。装置がいまひとつよくわからなかった。

芦原 建築家が何を構想し、考え、表現しているかという点で作品を見ると、この作品はそれを表現し切れていないように思う。実現したら素敵な家になるかもしれないけれど、いかにこの場で表現され、人に感動を与えるかが大事だと思うんですがそれが伝わってこない。好意的にみればなかなか良さそうですが…。

小川 計画案自体は非常に魅力あるものだと思うんですが、プレゼンテーションで失敗しているのでは…。

播 どういう表現なのか難解でした。応募案にあった写真はとてもわかり易い。実際は端正できれいにできるのではないのでしょうか。平面計画はわかり易いが設計主旨と合っていない。わざわざ難しくした感じがしますね。

芦原 展示されたものの関係がバラバラに思える。本人の中では繋がっているのだろうけど、そこを解らせてほしかった。

林 少し考えすぎなのではないでしょうか。コンペにせよ実現案にせよ審査員やクライアントにわかり易く説明する能力は大切ですよ。

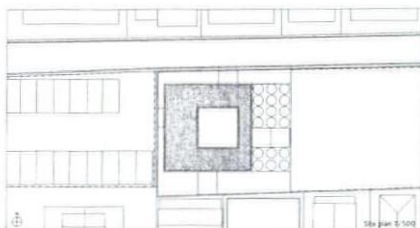
芦原 力作ですね。制度がちがう新旧のキャンパス計画というものを、こうしたダイナミックな建築として実現にこぎつけたのはとても敬服したいと思います。かなりの制度的な内容をクリアし、既存の制度に沿った建物も周囲に存在しているその中で、新井さんのパワーでそれを覆すべく戦っている訳だけでも、それで終わってしまった感がある。違うやり方があったのではないかな。既存のものも取り込むような建築的手法があったのではないかとも思う。全体の形をパワーで整えたという感じがしなくもないんです。

林 在来校舎がなければおもしろかった。歴史のあるキャンパスの中で新たな部分を作り、これからまた成長してゆく事を考えると既存校舎との関係があまりよくないと思う。既存建物との接し方や屋根の傾斜が実際に良くなるのでしょうか。大学は歴史的な連続体であるわけですから。

播 シェルを使うと書いてあるが何処に使われているのか、また「浮く」というのは何処がどのように浮いているのかこの表現からはよくわからないですね。

小川 形態、造形に偏りすぎたように思う。機能過多な分、難しいとは思いますが、キャンパス計画ということではもう少し違ったアプローチの仕方もあったのではないかと思います。

林 入選作の中にも何点かあるように最近斜めの屋根というのがよくある。斜面屋根の良さが、上と下が水平である場合より生きていないと意味がないと思えますが。



芦原 工芸的なものが端正にできているという印象を持ちました。

小川 この作品の魅力は外壁のデザインにあると思いますが、内部との関係などでもう少し工夫があってもよかったのではないのでしょうか。

播 ワイヤーが特徴的だというのであれば、そのワイヤーの役割でもう少し何か出来たのではないのでしょうか。例えば斜めにしてプレースの効果を狙うとか。

芦原 美しいジュエリーボックスをつくってはいるが、そこまでという感があります。

林 まあ良くできましたというところでしょう。しかし、これはアイデアコンペではないので、実現を考えると隣家の住人に好感を持って迎えられるかどうか、また集中豪雨でも大丈夫な土地柄なのかどうか、いろいろ気になります。

小川 1次審査から期待はしていましたが、やはりなかなか良かったと思います。

芦原 最初に話をしたように今回は実際出来上がったものというより、今この段階で建築家が何を構想し、何を考えたかという視点で僕は各作品を見ていますが、その点ではこれが一番良かった。建築家が構想したことが明快にでているし、在来の住まい方とは全く違う新たな展開をしている。建築家が場と装置を作り、住まい手がそこに入りそのゲーム版の上で住まい手なりの生活をする。実際は9つのマスかもしれないが、今回のプレゼンテーションのようなプロトタイプの見せ方は建築家が何を考えたかを見せるSDレビューの表現として非常にうまいプレゼンテーションです。新しい住宅のあり方をシンプルに解りやすく見せている。

小川 1次審査で解らなかった事が会場でもうまく表現されている。いろいろなバリエーションが考えられ、住む人が自主的に住居をつくってゆく可能性を感じる計画ですね。

林 スケルトンとインフィルという考え方の現代における新たな展開のひとつとしてこのような解答もあり得る。現代の家族のスタイルの新しい住居の提案になっています。実際に出来たら問題も多いでしょうが、案外上手く住めるのかもしれませんが。

播 住まい手の心構え次第でしょう。ちゃんと建築家の考えを理解した上で住む人がどう住むかですね。

林 解りやすいのがいいね。

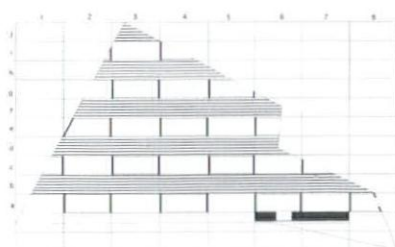
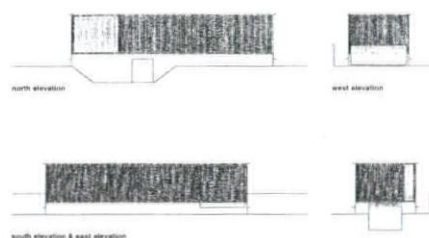
小川 図面はとても魅力的だったのですが、模型でもうひとつ工夫があってもよかったと思います。

播 模型ではやっと建っている感じ。構造的にジオメトリーが難しいように思えましたが。

小川 図面をみると柱なども3次元にいろいろあるのかと思ったが、模型をみると期待していたほどのダイナミックさが感じ取れなかったんですが。

芦原 メビウスのインパクトに対して実際にはポリカーボネイトの屋根がサラッとしたディテールでついているだけになっている。もう少し空間構成やものとしての迫力がほしかった。

林 図面はおもしろく、ハッとさせられるのだが図形としてのおもしろさしかないのが残念。芦原さんも言うておられるが、カタチからの発想がモノやチカラの秩序によって裏付けられ、本当のおもしろさになってほしいものです。



芦原 農村の中にモダンなボキャブラリーで建築が出来ている。環境と共に地域の問題、農村の問題に建築家の関心や活動の領域が広がってきているということ。民芸に走らずクールに農村を見ていると思う。今まであればよいと思っていたものを農村が変わりつつある中で、新しい機能や施設のプロگرامとして考えることは意味があることでしょうか。都市と農村との二項対立ではなく、クールにこの地域に何が必要なのかを考えアプローチする姿がいい。デザインは端正にサラッとこなした上で、プログラムもきちんと出来ていると思えました。

播 確かに今の日常でもこのような施設はあると良いでしょうね。農村というテーマだけにこだわらず、どうプログラムをつくるかです。農村計画と都市計画とを区別せずにひとつのシステムとして考えるのが必要でしょう。

芦原 なぜこのような施設が今までなかったのでしょうか。

林 今、新しい農村の時代が来ているのかもしれない。今後どのような位置付けになるのか楽しみです。良い提案だが外界との関係つまり、収穫物や肥料運搬のための車などの対応も考慮した方がよいと思えますが。

小川 建築の内容はわかるが敷地との関係が不明瞭。また、断面は応募案と多少異なっているようで、わかりづらい。

播 大きな模型がほしかった。RCということだが、組石造のように出来るとおもしろいでしょう。

林 本当に上手く農作業に貢献できるかどうか。農作業を知らない私たちには大きな事は言えませんが。

林 まず、広大であろう敷地の中、どうしてもこの範囲だけを囲うのかと問いたいんですが。

芦原 あえて囲い、自分の領域をつくることで、自然との関係がより密接になる。自然をより身近に感じられるのではないのでしょうか。

小川 この庭と住宅内部は繋がっていないのでしょうか。建築的には上手いづくり方だと思う。平面計画では住宅の形式に捕らわれ過ぎている面もあります。もっと自由な関係をつくると良いと感じましたが。

林 庭が緩く北向きに傾斜している意味が分からない。傾斜するならもっと積極的に使い、壁の圧迫感を減らしても良いのではないのでしょうか。

奥行きと高さの関係で、囲われた壁が高すぎる感があります。

芦原 ある程度閉鎖感を持たせたかったのでしょうか。竜安寺の石庭を思い出しますが限定された領域での景色がより広大なものを感じさせてくれることもありますよね。

小川 庭をサンルームで仕切るのではなくもっと積極的に内部空間と繋げるとか。これからだんだん設計を進めてゆくとまた変わってゆくでしょう。完成が楽しみです。

播 広大な景色は外で楽しむとして、プライベートな庭を持ちたいという気持が表れている。特に冬は暖かい部屋と白い庭、贅沢ですが理想的ですね。それに北海道では雪おろしを考えるとこういう住まい方が良いのかもしれない。端正なデザインでまとまっていると思います。

林 元気のある意欲作ですね。建築慣れしていないように思えて、その素人っぽさにむしろ良さがあると思えますが。私の知る建築ボキャブラリーとちょっと違う。建築家が一般の人とコミュニケーションをとる上では親しみ易くわかり易いですね。わかり易い言語を使い、施主に自分の生活なのだという認識を与えられるでしょう。

芦原 一般の人に対してわかり易く魅力的だと思います。しかし実際には恣意的に区画され、閉鎖された空間になる。本当に子供のゲーム版のようなこの場所で生活するのでしょうか。

林 しかし今の都会人の農業はゲームなのかもしれないですね。

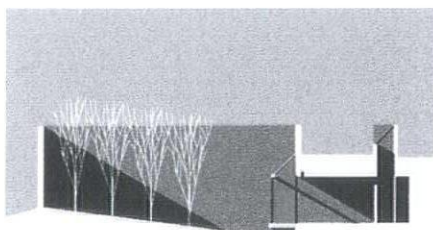
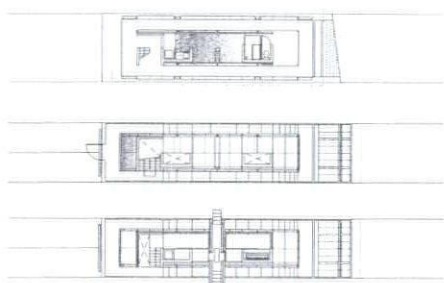
芦原 農業のある暮らしの解答がこれであるとすると直截すぎないかしら。

林 住まいの部分ももっと季節によって変わり、伸び縮みして変わってくると良かった。

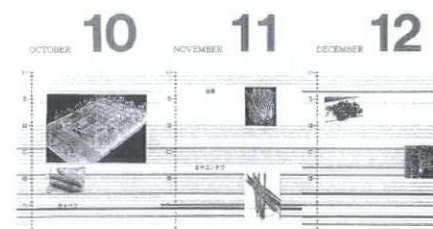
芦原 昔からの日本の家屋がしてきた暮らし方をグリットに押し込んだようにも思えます。そうしたことを変えることが大切なのではないのでしょうか。

播 思想をわかり易くするためにやったのでしょうか。

小川 家庭菜園の模式図だけでなく内部空間など建築にも手を着けてほしかったと思いますね。



Winter



林 事務所の計画にしては考えが少し大きいですね。完成は楽しみです。

小川 巧みな設計だとは思いますがどうしてこうする必要があるのか解らない。ガレージは可動にまでしてクローズする必要があるのでしょうか。

芦原 今までのボキャブラリーや常識から出ようとする熱意とエネルギーは感じるが、居心地の良い事務所をつくるには大きすぎている。建築家の恣意的な部分を感じてしまうんですが。

林 家の中に1枚の大きな台があり、これを元に周囲のいろいろな生活が展開され、床の高さの方でこれに対応するという所までは良いが、その後が大きさだったり無理があったりする。

播 装置として過剰な感はある。分厚いコンクリート床は本当に必要なかしら。極端な話、倉庫のような空間を作りその中で自由に使う形でも良いのではないかな。まあ自分のオフィスなら好きにつくっていいかもしれないけれども。

播 建築空間としてどうとらえてよいのか解りずらかった。

林 ボックスカルパートは安く手に入りやすく土木屋さんしてみれば日常的な材料です。これと石だけで歴史的な戦時下のソ連抑留の記念建造物をつくるのはなかなか鮮やかでおもしろいと思えました。戦争を知らない人たちがボックスカルパートの中を通して何を感じるかですよね。日本では記念建造物で成功した例が今までないのではないのでしょうか。

芦原 ボックスカルパートの使い方に、具体的な空間や手法としてもう少し工夫がほしかったと思うんです。

林 これだとただ置いてあるだけになってしまふかもしれないですね。

小川 慰霊空間としてのカルパートの使い方空間としての工夫がほしい。これだと慰霊空間になっておらず、子供の迷路になってしまう可能性もなきにしもあらずですよ。

芦原 空間が閉鎖し完結してしまっていてもっと展開する姿がほしかった。例えば市民からの寄付でどんどん増えて広がるとかいうように。

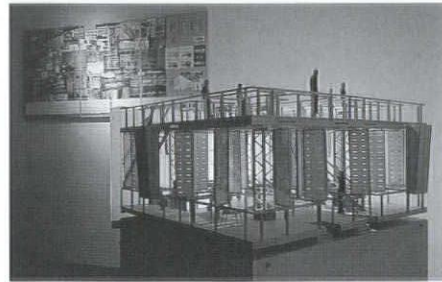
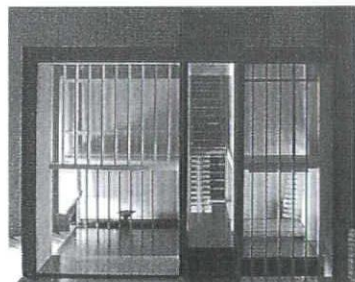
小川 今までの店舗の作り方ではない別の、エレメントが違う物で空間を構成するその不思議さがあると思いました。実際に上手くいくかは解りません。模型でも扉が壊れていたんで実際にも壊れることもあるかもしれない。

播 建築的でなく装置的ですよ。客のひやかしを制限するとあるが逆にひやかし客が増え、お客が増えて更に繁盛するのではないのでしょうか。ノスタルジックな雰囲気を感じるのも、鉄骨の部材や接合にも無骨な雰囲気を残した方がよいと思いますが。

芦原 お客との関係の中で機能する装置ですが、装置が過多になっているためその関係がよくわからなかったんです。

林 設計者の言う骨董屋のイメージはのみの市のようなものなのか、その辺りもあまりよく解読できない。この空間の最終的なものがどのような雰囲気を持ったものになるのか、ちょっとイメージしにくいんです。

芦原 模型を見ると設計者の持つ元気が伝わってくる気がします。こうした若い人の新しい物をつくろうとする熱意とパワーに期待したいと思いますね。



芦原 非常に素直で開放的で、むしろあっけらかんとも言えるくらい気がするね。この人工地盤の上に居心地の良い、素敵なデッキの生活が本当に見られるものでしょうか。実際には周辺は普通の住宅地なわけですね。欧米の高級住宅地のような、外の人に見せる暮らしがここで同じように展開されるのでしょうか。

林 このような住宅の作り方は当然あってよい例だと思うんです。なのに現状として存在していない。もっと大規模に出来ると良いのではないのでしょうか。

小川 1階と2階それぞれの庭との関係等でもっとプライベートとパブリックを上手く分けられるのではないかな。現状はその辺が均一的になってしまっています。周辺の植栽なども上手く利用すると良いと思います。

播 テラスと階段の作り方などちょっとおもしろいし、実際気持ち良さそうですね。

林 完成すればまた別のメディアでも新たな住宅の有り方として取り上げられる作品でしょう。完成を楽しみにしましょう。

芦原 今回唯一のゼネコン設計部の計画ですね。ゼネコンの中でこれを設計したパワーは評価します。

林 新井さんの案でも話題に出たように斜めの屋根の意味がわからないんです。建築設計上なにか利点があるようには見えないけれども。周辺の環境から来る要因であれば、その周辺の環境との関係をわかり易く表現してほしい。コンタを見る限りもっと急なのではないのでしょうか。

芦原 斜面の屋根の上の環境がわからないんです。設計者の意図するような機能や状況を生み出せるのかどうか、この情報だけではイメージできない。

小川 やはり斜面の意味付け、それにともなう内部空間への反映が弱いような気がします。表現されていない。

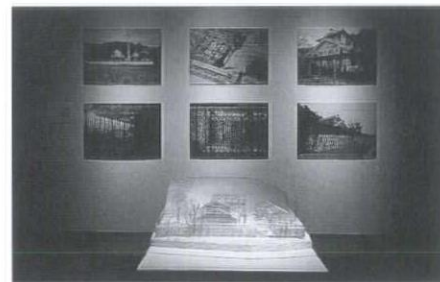
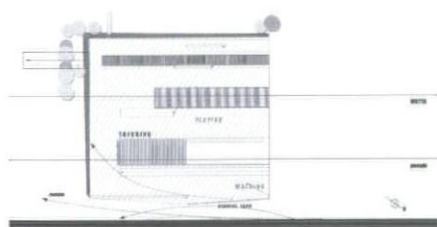
播 傾斜した床（屋根）は交通のためだけの機能なんですかね。浮遊する「PLATE」であれば、構造的にも何かそのイメージが欲しいと思います。

林 これは母屋も新築なののでしょうか。いくら施主の夢だからといっても、そのままつくるのはあんまりでしょう。

芦原 そう、僕もその点はやはり工夫がほしいと思いますね。鶏小屋などの使い方はおもしろいと思いますが。

林 ファサードで隣家と町並みを連続させるというのがよくわからないんです。道路路面からは視覚的な効果は無いのではないのでしょうか。石垣によって完全に視線は蹴られてしまっていると思うんですが。

播 大きな農家には敷地内には昔から納屋や作業場があります。それを前面に押し出してファサード的に取扱っているのは、新しい考え方だと思います。



芦原 きれいに端正に仕上がってはいますね。

小川 納骨堂のあり方としては良い解答だと思います。慰霊空間になっている。

林 訪れた人の事を考えると、行きと帰りの動線が違うと、より良いのではないのでしょうか。というよりも、行きどまりで、先端がスパッと終わっているのが、思い切りは良いとして、何となく不安な気持ち。それとも、あの世の果てもそんなものということでしょうか。

芦原 陽の光の入る水の上に置かれた静かな納骨堂。これからの納骨堂の考え方として従来の暗い納骨堂ではない、このような空間もありえるんじゃないでしょうか。

播 構造的にも大変興味深い。よく検討して構造でも工夫してほしいですね。ガラスの構造体として出来るのではないのでしょうか。内部にも鉄骨を見せずに出来ると良いし、それに挑戦してみしてほしい。DPG工法でなく、新たな挑戦を試みてほしい。ガラスを用いる表現の魅力を失わないようにがんばってほしいですね。

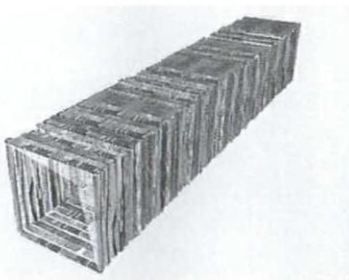
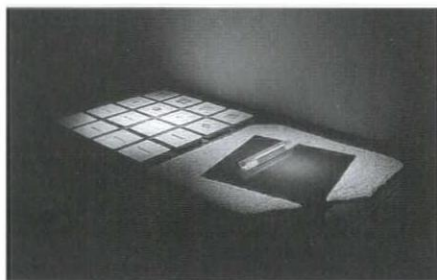
林 機能的な内容が示されておらず、展開がよく見えない。今回はどこまでの提案なのかよくわからないところがあるんです。それと、こうした広大な公共空間のスケールとして、2m角というのは小さ過ぎるではありませんか。イヤな人や、超美人と行き交う時を想像すると…。

芦原 住民との関係や地域との関係が説明されていないのがちょっと弱かったのか。間伐材を使って計画するだけではあるが、そこにこの提案の本来の意味があるのではないだろうか。造形的な面は1次審査でわかっていましたから。

播 人間との関わりがポイントのはずなのでしょう。その辺をもっと表現してほしいですね。

小川 まだイメージの段階なののでしょうか。建築的な機能の説明が、平面図などを見ても不足しているかなと思いました。

芦原 滑車で回転する舞台装置としてのボックスの考え方はおもしろい。この部分だけの提案にした方が良かったのかもしれないですね。



遠藤秀平

SD レビューの大阪展が開催されている頃、エコロジー問題に関わる事があった。日常の建築行為と共に意識してはいることだが、改めてエコロジーを考えさせられた。建築関連でもエコロジーを主題として流布する情報は多くあるが、手段や表面的な資材の選択問題に留まるものが多いことに驚いた。これらを眺めながらわずかの間の試みを通して、自らにとってのエコロジーとは循環する系のはころびをつむぎながら、持続性を確保することではないかという思いに至った。この連続性が断ち切られるところに人間社会のエコロジー問題があるように思える。まして、建築の分野においてのエコロジカルとは土や石・木を使用することやソーラーパネルを設置することだけではないはずである。

自然破壊を象徴するエネルギー消費、社会におけるリサイクル問題、情報の循環としての精神的持続性のあり方など、連続性に視点を置くことによるエコロジーを考えてみた。建築行為の原点は極めて反エコロジカルであるが故にあえて循環の系の上に置いてみる。それは自らの日常そのものに突き付けられた問題であると常々感じていたからであるが、やはり気持ちの良い結果を得られず、明らかに解消できない課題として残ったものの方が多かった。しかし、収穫として奇妙な肥大化した外部性が我々を取り囲んでいる状態を認識できた。外部性とは妥当性をよりどころとする集団の外部の介在による、個人的内部の希薄化とでも言うようなものか。この外部性に様々な表情が吸収され、沈黙が被ってしまっている。そこには、分かりやすさと正しさの前に硬直し沈黙する自らの姿が浮かび上がった。

エコロジーの提起する範囲は環境問題に代表される安全性やランドスケープを取り込む、植物／大地を想起させる生物的なものなど幅広い。建築行為の開放を静かに促し自己閉鎖する問題点を意識させてくれる。しかし、これらの生態学的環境問題が示す説得力は新たな価値基準を設定できる程の守備範囲があり、無条件降伏を余儀無くされるほどの強度を有している。

さて話題を展示に移してみたいが、会場

での第一印象は熱気を期待して訪れたにも関わらず、なぜか静けさを感じた事の驚きだった。自ら2回の出展経験の過剰な思い入れが熱気を期待したのではないことは、それまでに訪れた何度ものSDレビュー展での記憶が証明してくれる。この未体験の静けさは展示会場に足を踏み入れた途端に感じたものではなく、一巡し興味あるものを再び見始めた頃から不思議と強くなる。その不思議な感覚を確かめるように見ていくと、建築単体でのプレゼンテーションではなく外部環境や自然の状態を取込みながらの表現が多い事に気づいた。このある広がりやイメージさせる背景が様々な雑音を吸収し静けさを感じさせるものか、偉大な自然の前では声を失ってしまいがちである。その様なことを考えながら会場を後にする頃、冒頭の自らのエコロジー問題に関わった体験での沈黙とが重なって感じられた。この個人的な感覚とは無関係に、プレゼンテーションされている16組のプロジェクトは刺激ある可能性を示しており、実現後には是非体験したいものばかりである。しかし、会場全体に通低音のように響き静けさを感じさせる外部性が気になり、個々の出展の評価や作者の意図とは当然無関係であろうが、もうすこし具体的に見てみたい。

まずI.C.Uの「Nox」のモデルに設定されたプロジェクターの状態が良くなかったが、美しいであろう雲が映しだされる展示となっていた。確かに眺望の良い神戸の山手敷地からは良く見えるであろう青空に、美しい雲がゆるやかな静寂さを印象づけていた。石田壽一の「flop/フロップ」における平面に配されたブロック状の外部空間。これがなければなどと言うつもりはないが、フロップとその間隙は内部空間と共に等価な位置づけであることが外部の印象を強くさせている。川人洋志の「庭に住む一札幌」の大きな中庭とそれを取り巻く広々とした外部を意識させるロケーションを示すモデル。札幌郊外の雄大な風景を連想させ外部に目が行き、切り取られた塀の中の庭とを連続させてしまう。駒井貞治の「今月の吉村家」の生活感溢れる庭。建築行為の外部である季節への視線がテーマであり、

42の均質なフレームのプログラムは気にかかるが楽しい限りである。建築行為は建物ではないとする、作者の外部への畏敬が表明されている。更田邦彦+岩岡竜夫+岩下泰三の「アビタ戸祭」での屋上プラットフォームの豊かな外部空間の連続が興味深い。多くの人の賑わいを見せてくれる楽しい外部空間である。馬淵富夫+北岡治+徳野博子の「PLATEaux」で選択された外部環境から突出しない4°の屋根。伸びやかな敷地環境が沢から屋根の上をしずかに吹く風を想像させる。安田博道の「静岡の家」に示される外部環境と共にある農家。やはり街並への連続や植物に被われる豊かさには確かなものがある。山田良の「鹿北町「道の駅」周辺施設」においてもやはり拡散できるだけの広さをもつ敷地、つまり外部が気にかかる。しかし、動きを持ちなお貫通する視線を確保するオブジェは刺激的だ。山口隆の「水上の慰霊空間」はまさに大きくとり囲む水庭である。抽象的でかつ生々しい水を扱うには大きな力量が必要であろうが力強く制御されている慰霊空間である。

以上作者の意図とは無関係に或いは意図どおりにか、プログラムの順を追って目についた外部性をあげてみた。外部はどこにでもあり、かつ必然で必要なものではあるが、その重心の所在が気になる。外部性の静寂のなかに建築が飲み込まれ沈黙だけが残っていくのだろうか、建築行為に妥当性がなければ不誠実なのだろうか、やはり建築行為では表情を持ちコミュニケーションすることも重要なことだと思いたい。多少強引な感想になってしまったが、あくまで外部性への重心移行が気にかかる事をあえて付け加えたい。しかし、SDレビューが今後も多くの可能性を喚起し、多様なざわめきを聞かせてくれることを願いたい。(えんどう・しゅうへい／建築家)

1999.05 公募開始

SD9905号にて応募要項を発表し、作品募集開始。

ポスター製作は山口信博/山口デザイン事務所

応募要項は以下の通り

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品は対象外とする。応募作品点数は原則として1人1点に限る。

[応募者の資格]

特になし。

[提出物]

プレゼンテーション:

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。
表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査に当たっての主要な評価の対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上り材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計趣旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者(=設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先、共同設計者名、設計者略歴。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

1999.06.30 作品受付締切

応募総数306点(昨年269点)

1999.07.07 審査

例年通り、鹿島出版会会議室にて行われた。

4人の審査員による審査の結果、入選16点が選ばれる。

1999.07.08 展覧会出展依頼

各入選者に入選通知と展覧会の出展依頼をする。出展依頼は以下の通り。

・模型

1つでも、分割されていてもよいが、全体で以下の制限以内とする。

大きさ:幅×奥行×高さ=5m以内

重さ:20kg以内

素材:自由

素材:自由

・ドローイング

枚数:自由。但し、合計の面積が2m²以内。

素材:自由(こわれにくく、なるべく軽量なもの)

・図面

作品の内容を具体的に説明するために必要な、平面図、立面図、断面図、詳細図等。

大きさ:A3判

枚数:6枚以内

1999.09.13、14 東京展搬入

昨年と同様代官山のヒルサイドフォーラムの3フロアーを使用して展示。

東京都立大学の学生のアルバイトと共に搬入および展示作品設置。

例年と同じく、会場構成はスタジオ建築計画。照明計画は角館政英氏/L.F.A.

1999.09.15 東京展開催(～09.26)

会場:ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム

東京都渋谷区猿楽町18-8

ポスター製作は山口信博/山口デザイン事務所

1999.09.21 審査員座談会

展覧会場での作品展覧後、審査員の座談会を行う。座談会では各出展作品の講評と共に鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞の4賞が選定された。4賞の入選者は以下の通り。

鹿島賞:石田壽一[flop/フロップ]

朝倉賞:山口 隆[水上の彫造空間]

SD賞:金井謙介+小池聡子[農村の家]

新人賞:平沼かおり[WIRED SPACE]

1999.09.21 展覧会レセプション・パーティー

午後6時30分より審査員、出展者を交えてのパーティーが行われた。審査員の総評もあり、盛況の内に終了。

1999.09.26 東京展終了

来場者数1,932人を記録(一日平均161人)。

1999.09.28、29 大阪展搬入

大阪芸術大学の学生により搬入および展示作品設置。

1999.09.30 大阪展開催(～10.11)

大阪芸術大学主催により、大阪展が開催される。

会場:大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

大阪府南河内郡河内町東山

1999.10.02 大阪展レセプションパーティー

9組の入選者をはじめ、高橋誠一氏(元審査員)、大阪展関係者、在阪建築家が多数出席され、盛況なものとなった。

1999.10.11 大阪展終了

1999.11 4賞入賞者に入賞を通知

1999.11.25 SD12月号発売

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[大阪展共催]

大阪芸術大学

[後援]

朝倉不動産株式会社

[協賛]

ノールインターナショナルジャパン

[審査員]

林 昌二(建築家)

播 繁(構造家)

芦原太郎(建築家)

小川晋一(建築家、近畿大学工学部助教授)

[東京展会場構成]

元倉眞琴+スタジオ建築計画(担当:伊藤麻里)

[東京展照明計画]

角館政英/L.F.A.(ライト・フィールドアーキテクト)

[大阪展会場構成]

大阪芸術大学建築学科

[作品写真撮影]

堀内広治

金子昌弘

(新写真工房)

本特集で出展者提供以外の写真は全て堀内広治氏撮影

[東京展]

会期:1999年9月15日(水)～9月26日(日)

12:00-19:00

会場:東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟 ヒルサイドフォーラム

[大阪展]

会期:1999年9月30日(木)～10月11日(月)

10:00-16:00

会場:大阪府南河内郡河内町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール



東京展会場風景

SD9912



大阪展会場風景



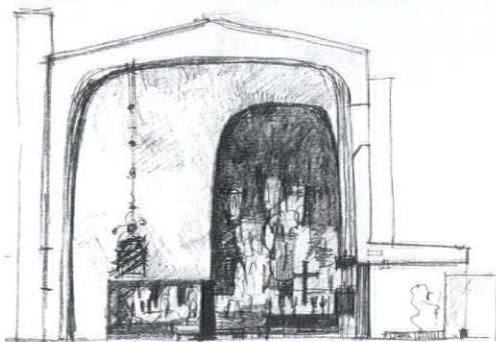
ERIK BRYGGMAN

北欧モダンの恒星： エリック・ブリュッグマンの建築

北の夜空に輝く恒星のように、エリック・ブリュッグマンの建築には特殊なオーラがある。作品は控えめで教養にあふれ、文化と社会への深いまなざしを感じられる。表面的な効果を追求し、楽観主義と自己陶醉を表現する現代の中で、ひとつの理想像として輝いているのだ。



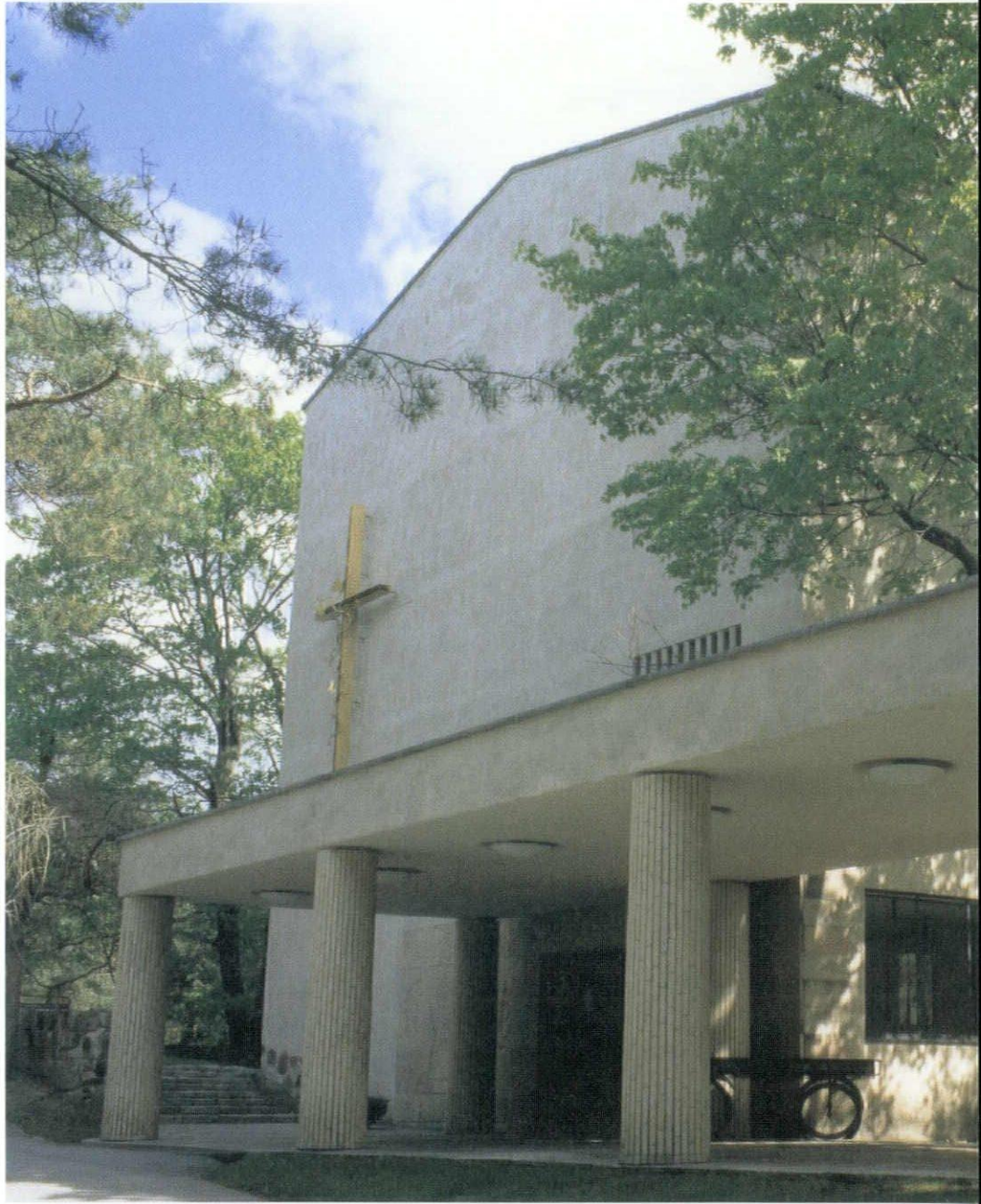
1. 雲安室へアクセスするスロープに施された鍛鉄製手すり



2. 礼拝堂断面のスケッチ

トゥルクの復活礼拝堂
The Chapel of the Resurrection, Turku

トゥルク／1939～41年（1938年コンペ1等入選）



3. 礼拝堂正面の切り妻とエントランスポーチ

トゥルク郊外にある共同墓地に建てられた葬儀のための礼拝堂。建物は1938年の設計コンペを経て、冬戦争のために建設が一時中断するものの1941年に完成した。設計者であるエリック・ブリュグマンは、1920年代後半から30年代初頭にかけてフィンランド近代建築の旗手として名をはせたが、その後徐々にインターナショナルな建築様式から、より彼自身の感性に基づいたロマン的な作風に転換していく。そしてトゥルクの礼拝堂はブリュグマンの最高傑作といわれるだけでなく、1940年代頃から現れ始める北欧ロマンティシズム建築のひとつの頂点として評価されている。

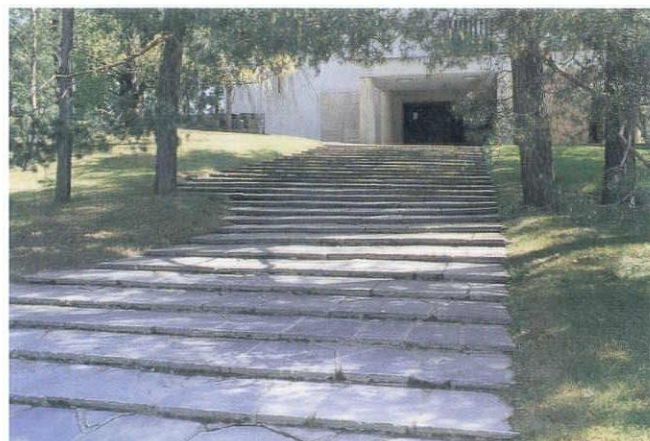
ところでスカンジナビアでは、墓地を建設するにあたって森を切り倒して整地する方法に替わって、1918年ごろから次第

に、森林を切り倒さずに森をできる限り残しながら墓地を建設するようになる。トゥルクの共同墓地もこの手法が用いられ、森が墓地全体に広がっている。礼拝堂はこの森の中にある緩やかな丘の上に計画された。建物は主に、礼拝堂、事務室、さらに仮堂安室の3つの部分で構成され、礼拝堂と雲安室は事務室を挟んで軸をずらしながら向かい合っている。このため参列者のアクセスと棺が運ばれるアクセスは、丘の上の礼拝堂を中心にそれぞれ別の方向から設けられ、動線が交わらないように考えられている。礼拝堂は天井の高い半ヴォールト状の身廊と低く抑えられた天井の側廊からなる。また、身廊は閉じた殻状の空間であるのに対し、側廊は大きなガラス面によって大きく森に開放された明るい空間である。ぼんやりとした薄明かりの

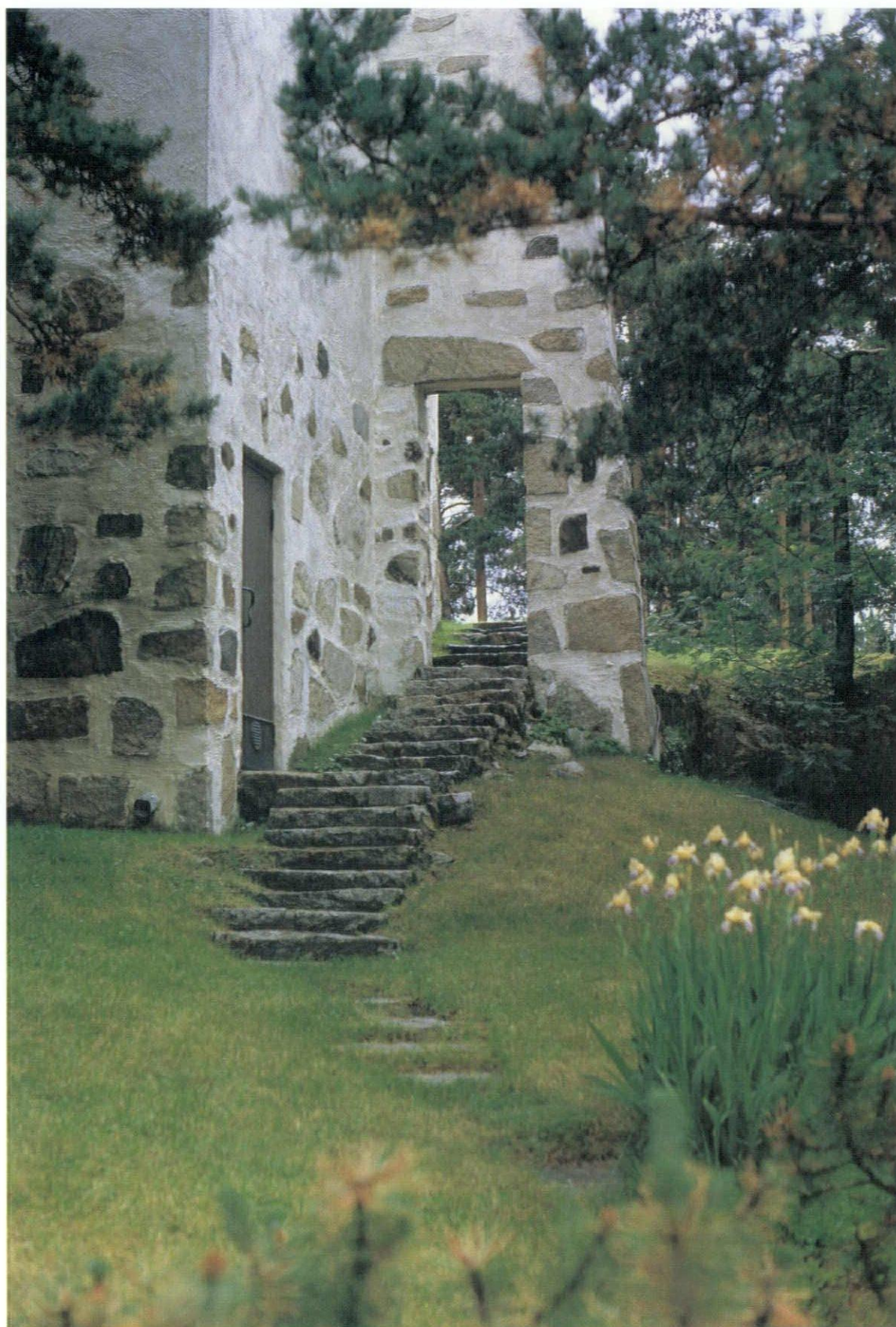
身廊空間と、ガラス面によって明るい歸差な側廊空間は、ヴォリュームの対比や光のバランスが穏やかな緊張をともなって調和し、繊細な美しさをつくりだしている。祭壇の後壁には、その脇の南面にとられた縦長の開口部から明るい光が射し込まれ、葬儀の象徴性と相まって精神性の高い空間を印象づける。祭壇に近い側廊のガラス壁には、レリーフの施された石貼りの出口があり、礼拝堂での儀式的の後、棺はこの出口を通して聖なる森に運ばれる。



4. 礼拝堂北東部の立面。手前の事務室、背後の礼拝堂。そして礼拝堂と雲安室を分けるように、エジプト風の門型をしたトンネルが貫通している。トンネルへは小道から緩やかなスロープによって導かれる



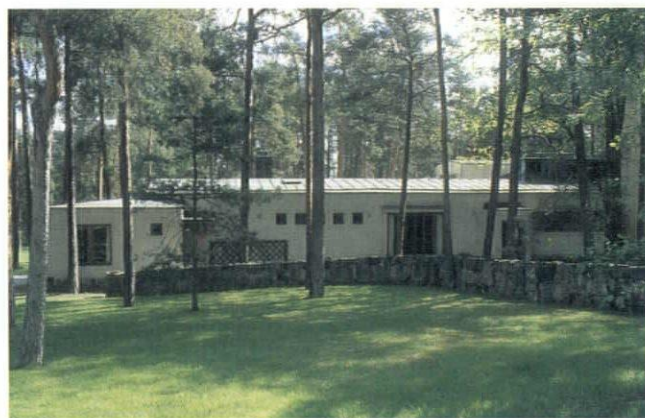
5. エントランスポーチへ続く緩やかな石段。階段はポーチに向かって若干狭まり、エントランスに向かって穏やかに誘う。階段踏面の石は不揃いな角度をもって短冊状に貼られている。階段途中にあった樹木はそのまま残され自然と人工の繊細な調和を感じさせる



6. 鐘楼足下まわり。敷地から採取されたグラニットを原石のまま貼り込んでいる



7. 雲安室東側表面



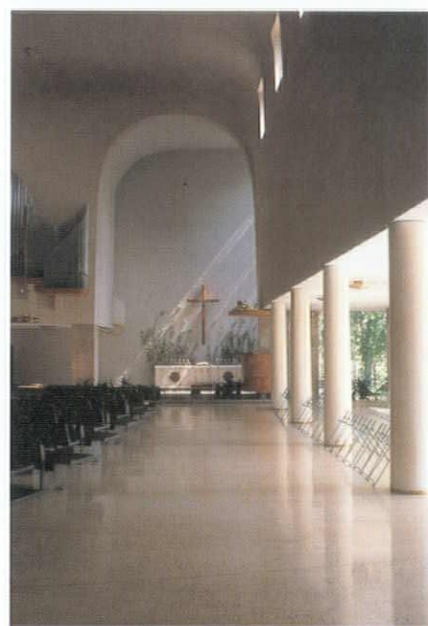
8. 森の中に見える事務室のウイング。背の低い石垣が緩やかに建物を囲む



9. 正面に礼拝堂の祭壇、右手に説教壇を見る。説教壇のキャノピーには太陽、星、雲が切り板状に飾られ、説教壇は合板の象嵌によって「生命の木」が表現されている。



10. 祭壇脇北側から南面の開口部を見る



11. 身廊内観



12. 側廊部から建物外部に広がる森を見る



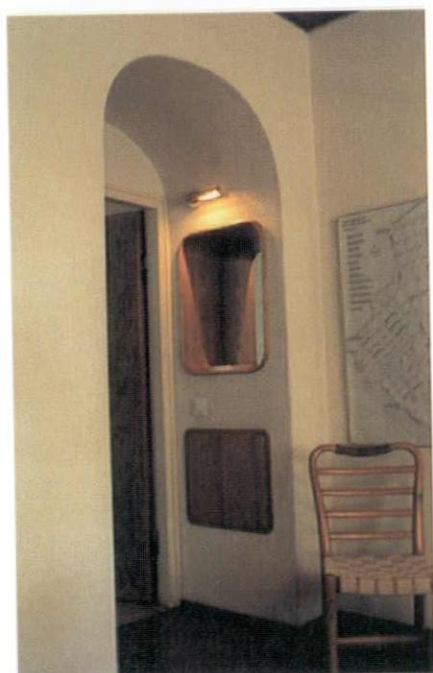
13. 側廊部の床。床のテラゾーに象嵌された真鍮目地と空調の吹き出し孔を見る



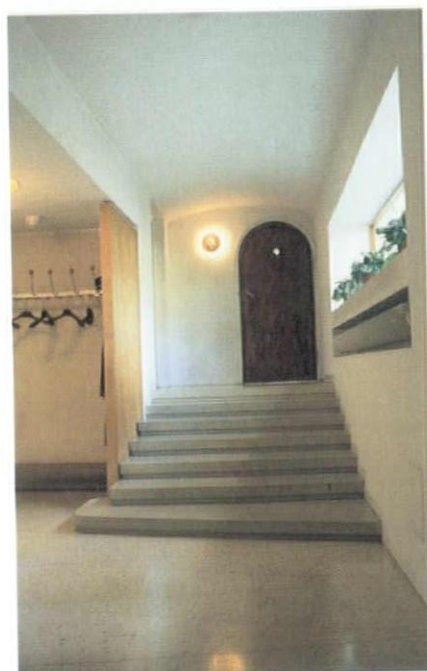
14. 礼拝堂のペンダント型照明器具



15. 礼拝堂から事務室へ通じる出入り口付近から控室を見る



16. 執務室出入り口
SD9912



17. 事務室通路から礼拝堂の入り口を見る。左手にクロークのアルコーブが見える



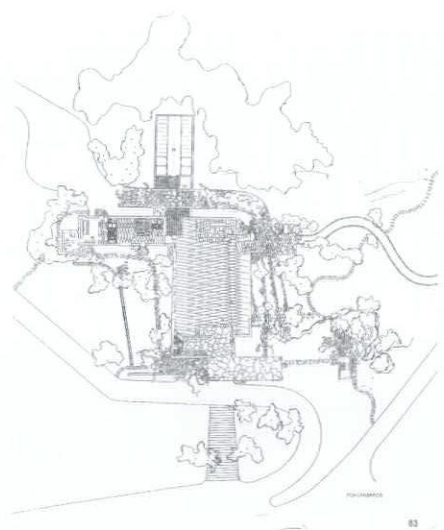
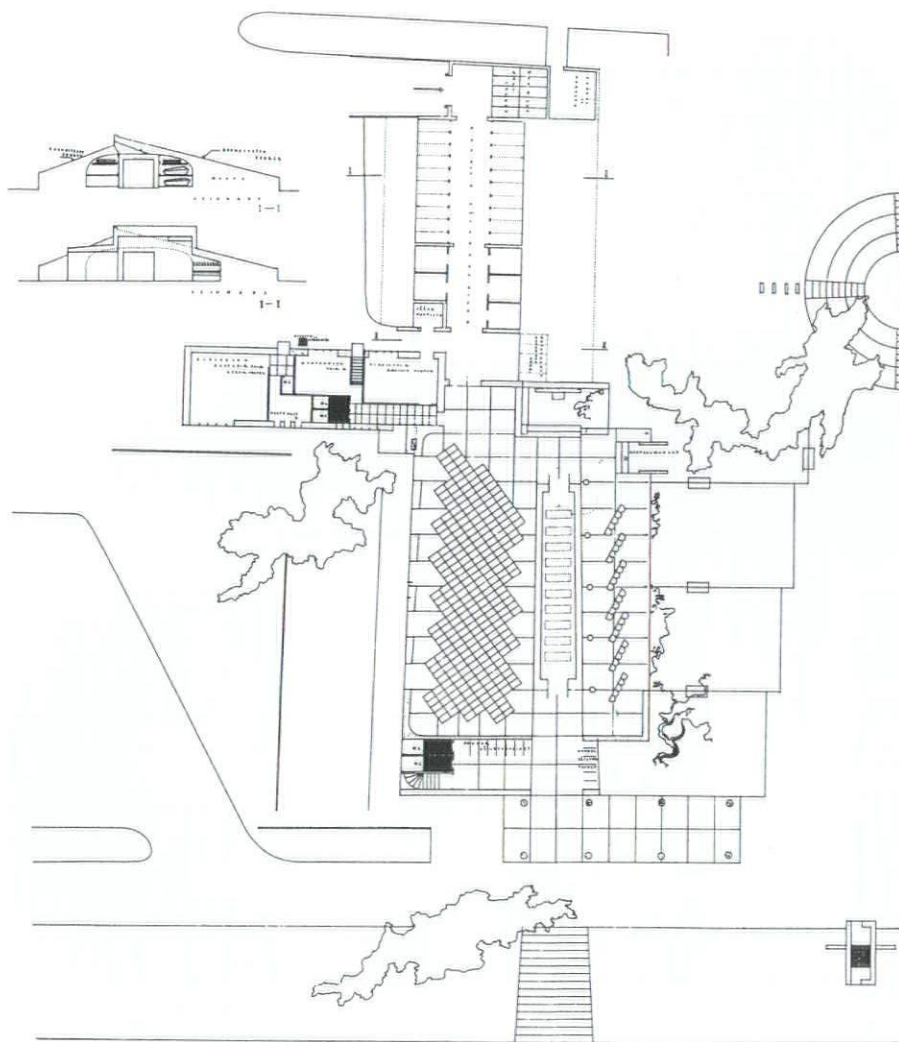
18. 控室内観。窓台の上にブリュッグマンの頭像が置かれている



19. 礼拝堂前室。左手に礼拝堂への鉄製飾りが施されたガラス戸。右手にはポーチから前室への鉄製扉が見える



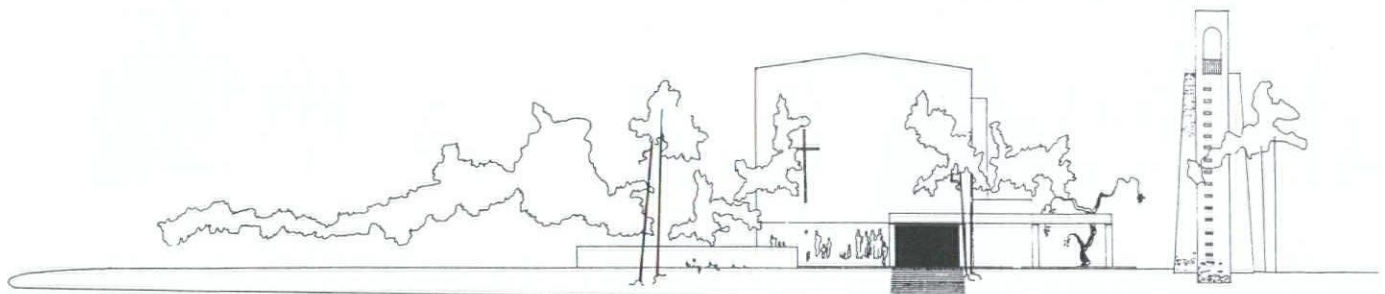
20. 礼拝前室から礼拝室へ



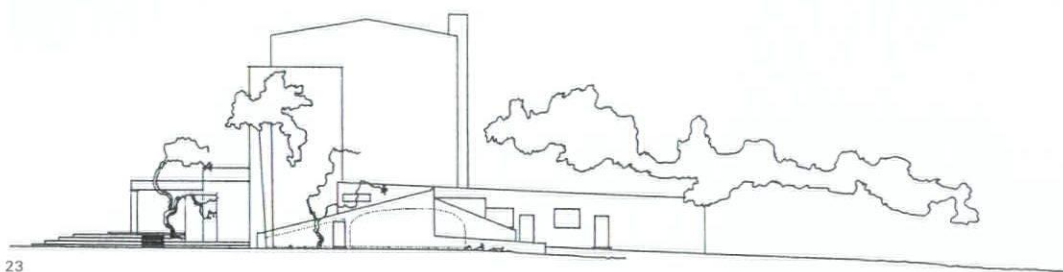
25. 実施段階の平面図。コンペでは雲安室の東端に棺を運び入れる入り口があるが、実施段階になって、現在のように事務室ウイングと雲安室の間にトンネル状のスペースを設け、そこに運び込まれるように変更された

21

21～24. 1938年に実施されたコンペではブリュッマンを含み3案が同点の優秀案となり、再度3案によるコンペが行われブリュッマンの家が最優秀となった。ドローイングは最優秀案を獲得したときのもの



22



23



24

北欧モダンの恒星： 建築家エリック・ブリュッグマン

田中雅美

知られざる建築家

今から20年ほど前のことになるが、〈トゥルク共同墓地の礼拝堂〉をはじめ訪れた日の感動は、いまだに忘れることはできない。その当時エリック・ブリュッグマンという建築家は知っていたもののトゥルクを訪れたのは、アルヴァ・アアルトの〈パイミオのサナトリウム〉や〈トゥルク新聞社〉などを見ることが目的で、トゥルクの礼拝堂はその道すがらちょっと立ち寄ろうという軽い気持ちだったと思う。

幹線道路のバス停を降りて森の中の共同墓地をしばらく歩いていくと、一直線に樹木の並んだ小道の正面に、少しくすんだ灰色の小さな建物が見えてくる。さらに進んでいくと黄褐色の平石を敷いた緩やかな階段（5：pp.065-083の写真に対応、以下同様）につながり、その先が礼拝堂のポーチになっている。そこから、まるで人が入るのを拒絶しているかのように重厚な鉄扉（19）を開けて中に入ると、薄暗い天井の低い礼拝堂前室がある。この空間は重く沈んでいる。床はごつごつしたグラニットの乱貼りでポーチからつながっている。前室から礼拝堂内部に入る扉は、透明なガラスだが全面に有機的なつる性植物をモチーフにした鉄製飾り（19、20）がつけられており、それを通して礼拝堂内部の光が漏れてくる。前室から一步中にはいると、これまでとは一転して明るい光に包まれる。実際にどの程度に明るいのかは定かでないが、前室の閉ざされた空間からこの明るく開放的な空間への変化は効果的だ。少し落ち着いてくると半ヴォールト状の身廊上部の薄明さ、壁面上部の四角い窓からのぼんやりした光、正面祭壇後壁に南側から射し込む光、側廊の森に大きく開放されたガラス面の明るさなど、さまざまな光のハーモニーが感じられてくる。床は磨かれたテラゾーで、そこに真鍮目地が角度をもって象嵌され（13）、輝いている。床のテラゾーも、壁のスタッコもアイボリーで、光の感じと調和し

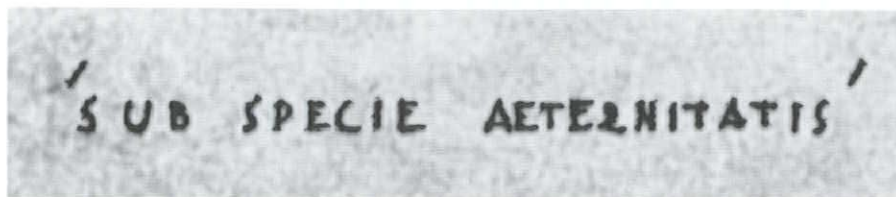
て上品である。しばらく空間の中にたたずんでいると心の中からじわじわと情感がにじんできて、単なる空間の印象を突き抜けて平和で優しい心が満たされていくような感動にふるえてしまう。建築空間のフォルムやディテールといったところに目が向く前に、空間を満たすエアや光のデリケートな感触に心が奪われ、母性的な暖かさや柔らかさに抱擁されているようだ。この種の空間は他に会ったことがあるだろうか？ ル・コルビュジエの〈ラ・トゥーレット修道院〉や〈ロンシャンの教会〉のような力強さ、人の感性を魅了する彫塑的なダイナミズムとも、アアルトの〈ヴィラ・マイレア〉に見られる濃密な空間の連鎖による演出効果とも全く異なった種類のものである。アアルトの空間や光はもっと現実的だ。スウェーデンのG. アスプルンドに近いであろうか。確かに〈ストックホルム市立図書館〉や、〈イエーテボリ裁判所〉のホールなどが近似的であるが、同じ用途である〈ストックホルム共同墓地の礼拝堂〉の幽玄的なものとは趣を異にしている。

個人差はあるにしても、名建築に接した際、人の記憶や知識そして感性の琴線に触れる感動があるとすれば、このトゥルク共同墓地の礼拝堂はまぎれもなく名建築であると思う。アアルトの建物はよく知られているが、ブリュッグマンについての情報はこれまであまりにも限られていた。人の認知を超えて、空間のかもしれない情感が人にダイレクトに伝わってくるのだ。エリック・ブリュッグマンとはどんな建築家なのだろう。そして何を考えていたのだろうか。

機能主義の旗手

建築家エリック・ブリュッグマンは、1891年、スウェーデン語系フィンランド人として、南西フィンランドの沿岸都市トゥルクに生まれた。工科大学を卒業し建築家になった1916年はフィンランドが旧ソ連から独立を宣言する一年前の

ことである。フィンランド人の独立への熱気は、その精神のよりどころとして自国の歴史や民族文化などへの傾倒から、建築においてはナショナル・ロマンティシズムと呼ばれる建築様式に表現された。ブリュッグマンのディプロマ（年譜①：pp.088-091の年譜に対応、以下同様）はこの様式が色濃く反映している。ブリュッグマンが建築界に頭角を現すのは、出身地であるトゥルクに戻り事務所を開設し、本格的な近代建築をフィンランドに興そうとした時点からである。トゥルクは、これまでのスウェーデンとの歴史的背景からスウェーデン語を日常語とする人々が多く住む都市で、また地理的にもストックホルムに近い。近代建築という新しい思潮がトゥルクを前線基地としてフィンランドに入ってきたのはごく自然なことであった。大学を卒業して10年の実務経験を積み実力をつけたブリュッグマンは、もてる才気の下に、いち早くスウェーデンからの新風を受け、フィンランド近代建築の旗手になっていく。気鋭の建築家として世に出るのは、1929年、トゥルク博覧会（年譜⑥、⑦）の会場施設の設計を担当してからである。この博覧会ではアアルトと役割を2分したが、7才年上のブリュッグマンが指導的立場にあった。博覧会建築のもつ仮設性は大胆な近代建築の実現を容易にし、そのセンセーショナルな思想とデザインの斬新性は大きな話題となった。ここでの自信はブリュッグマンに次への飛躍をもたらした。実際1929年からの数年間は、この博覧会の他にも、〈アントワープ万国博フィンランド館〉（年譜⑨）、〈ヴィエルマキの体育学校〉（年譜⑩）などのプロジェクトが並行して実現していき、機能主義と呼ばれるフィンランド近代建築を開花させた。特にアントワープ万国博では、会場に並び立った近代建築の中でもブリュッグマンのフィンランド館はひときわ注目を浴び、建築グランプリを獲得した。このように新しい近代建築の息吹は、1939年の冬戦



26

争と呼ばれる旧ソ連とフィンランドとの領土を巡る戦争に突入するまでの、民主的で比較的明るい世相の中で育まれた。

古典主義とパライネンの礼拝堂

トゥルク博やアントワープ万国博でのパヴィリオンなどの斬新な機能主義建築をデザインしているさなか、小規模ながら他のプロジェクトとは異質な作品が同じ時期にできあがった。トゥルク郊外パライネンの共同墓地に建てられた礼拝堂である。この小品は近代建築の現実的で論理的な空間構成に古典的な衣装をまとったような作品である。話が少しさかのぼるが、1917年にフィンランドが独立を果たした後、自国のアイデンティティに対する熱気はクールダウンし、それともなってナショナル・ロマンティズムへのこだわりも次第に衰えていった。それに替わって、建築の原点に立ち戻り、再び古典建築へ回帰しようとする動きが建築界に広がっていく。このネオクラシズムの動きは近代建築が台頭をはじめた1930年頃まで続く。この間ブリュッグマンは1920年、27年の2度にわたりイタリアを旅行している。イタリアでは特に、都市部の建物ではなく田舎のヴァナキュラーな建築に惹きつけられた。古典的な建築とともに日々の暮らしを営む人々の生活の中に、適切なヒューマンスケールや建築と人間の穏やかなハーモニーを見出した。またブリュッグマンは、この時期から生涯を通じて、中世石造教会の修復の仕事にも携わっている。過去の建築に対する歴史的な興味やそのミニマリズムが備える穏やかな緊張感や美意識に終生深い共感を持続けた。この経験は、礼拝堂という人間の最後の儀式を司る建築のデザインに活かされることになった。この〈パライネンの礼拝堂〉で今ひとつ明記すべきは、人が死を迎えてから、時空間を移動するプロセスと領域の設定について、建築上の論理的な構想（p.079解説参照）を示したことである。ここでの経験はすべて10年後

のトゥルクの礼拝堂の設計に活かされ、その高みに到達する原点を成したのである。

機能主義建築からロマンティズムへ

20世紀前半のヨーロッパの歴史を考えると、2度にわたる大きな戦争があり社会変動の激しい時代であったといえる。ブリュッグマンの祖国フィンランドではヨーロッパ全体のうねりに加え、国家の独立という自国民にとってはさらに重要な歴史上の特異点が打たれた。これに絡んだ複雑で不安定な情勢は、国内戦争¹、旧ソ連との冬戦争²、領土の割譲³、カレリア地方からの移民⁴など次々に社会の屋台骨を揺るがす事件を勃発させたのである。この中で平和、希望、悲しみ、自由などの精神はねじれ合い、揺れ動かされてきたと言える。これは不可視ながら建築の歴史に影響を与えた。この間比較的情勢が安定し明るい世相であった1920年代は、機能主義と呼ばれる近代建築が一時期開花するが、その背後では社会の不気味なうねりも予感されていた。そして徐々にではあるが、後に北方ロマンティズムといわれる建築の動きが現れてくる。この動きは明快な原理で規定できるようなものではないが、より人間的で、あまり幾何学的な規則性を強調せず、個々の地域や個人の感性により忠実に、ということを特徴に備えている。ユハニ・パッラスマーの指摘によれば、フィンランドの近代建築は戦争の前から緩やかに、機能主義からロマンティズムへの方向転換が明らかに見られたという。これには技術上の問題と、精神上的の問題とがあり、たとえばフラットルーフは北方の気候風土にあっては雨漏りの原因をもたらし、戦争に先立つ全体主義は人の精神を窮屈なものにした。したがって機能主義からロマンティズムへの移行は、一般に近代建築の持っていたテーゼや形態理論の枠組みから脱しようとする動きであると考えられる。そしてこのロマンティズムのひとつの頂点として評価さ

れているのが、ブリュッグマンの〈トゥルク共同墓地の礼拝堂〉なのだ。パッラスマーの解説は他の誰よりも繊細なデザインをするブリュッグマンの感受性を想像すると、至極納得のいくものである。だが一方で進取の気性で近代建築を設計していたときですら、ヴァナキュラーな古典建築や中世の石造教会を研究していたブリュッグマンであるから、機能主義からロマンティズムへの移行は、個人の知性や感性の中でつくり上げられたものとして理解するほうがより妥当であろう。ブリュッグマンは幾多の建築上の経験や社会経験の中から、建築形態やテクノロジーは絶えず変化するものであって、そこに建築の本質が宿ることはなく、調和、バランス、自然、光、スケールなどで構成される空間こそ重要であると考えていたようだ。ロマンティズムへの移行はブリュッグマンにとって時空を超えた建築への希求であった。

永遠の相の下に

〈トゥルク共同墓地の礼拝堂〉のコンペは1938年に実施された。ブリュッグマンが提出したドローイングの下端に「sub specie aeternitatis」というコンペ案のニックネームが記されている（26）⁵。ルネサンス期の哲学者スピノーザ（Spinoza、1636～77年）の言葉で、「生起するのはすべて、神の見るところによれば永遠の無時間的な世界の一部であり、神にとって日付は無縁である。賢人は人間の有限性の許す限り、神の見るままの世界を永遠の相の下に（sub specie oeternitatis）見ようと努力する」⁶という意味をもつ。ブリュッグマンが決意を胸に秘めて臨んだにちがいないコンペのドローイングにこの言葉を記したことを知ったとき、礼拝堂を訪れた際に受けた感動を一瞬のうちに理解できたような気がした。そして同時に礼拝堂の空間がかもし出す雰囲気は、単なる建築デザインの結果というよりは、建築家の決意をもって信ずる人生観に発した、エスキスの集

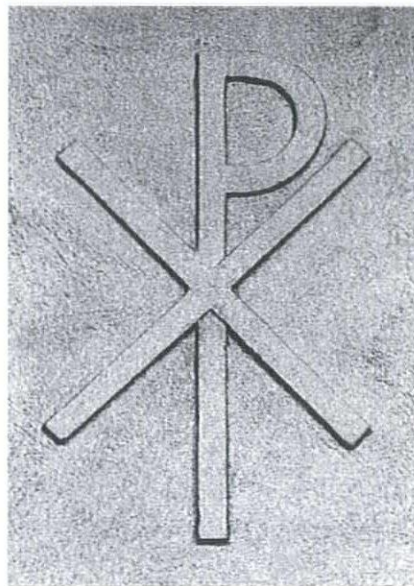
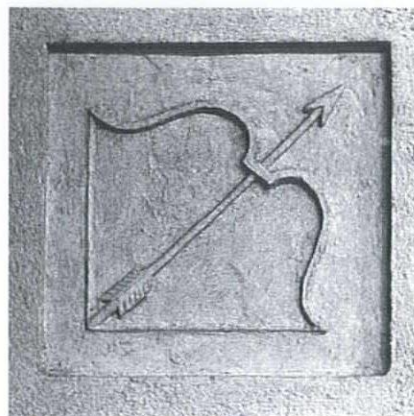
田中雅美 (たなか・まさみ)
 1954年 東京生まれ
 1981-86年 カルロ・レッパネン建築事務所
 1989年 シサビハ建築事務所設立
 1993年- 日本大学、東京工芸大学非常勤講師
 1998年 田中雅美建築設計事務所に改称
 訳書に『白い机—若い時』、『白い机—モダンタイムス』、『白い机—円熟期』(1988、92、98年、鹿島出版会)。第34回日本翻訳出版文化賞受賞
 作品に上祖師谷の家、太田市立休泊小学校大規模改修など

積の結果として生み出されたものであることが理解できた。

トゥルクの礼拝堂について残されたスケッチやドローイングを見ると、このプロジェクトの推敲の跡をたどることができる。平面形については当初パンテオンのような円形プランからスタートした。四角形平面が現世を表すとすれば、円形は聖なる世界の象徴であり、既に完成を見ていたアスブルンドの森の礼拝堂などもこの形を使っている。しかし円形プランは、聖棺やそれを取りまく椅子の配置などにフレキシビリティを欠き、次第に軸線をもつ案へと変化していく。またこの過程で身廊と対比するような低い天井の側廊が発展していき、その結果として外部に広がる森との関係が生まれる。これまでも、自然と建築の関係の中に美的価値やハーモニーをつくり上げてきたブリュッグマンだが、このプロジェクトでは礼拝堂の内部を側廊を通して森に開放することによって、礼拝堂周囲に広がる森に永遠、宇宙、来世といった象徴性を付与している。エントランスから祭壇への東西軸(主軸)に対して、北側の壁と身廊—側廊を分ける列柱軸は、祭壇の方向にわずかな角度ふられ(21)、空間の流れをつくりだしている。また、北側壁と列柱上部の壁は、わずかに内側に傾斜しアールを描きながら天井に連続的につながり、殻状の内部空間をつくっている。この両壁は柱ごとに若干のジグザグの襷(11)を刻んでいる。これに対し側廊の南面は床から天井までのガラス面で、主軸と平行である。この軸の取り方によって、ガラス面による森への開放性は一層に効果を増している。側廊の床には直径20mm程度の空調吹き出し孔がパンチングメタルの丸孔(13)のようにあり、ペリメーターゾーンとなっている。儀式に集まる列席者の椅子は、祭壇、聖棺、森に対して曖昧な角度で向き合い、儀式の間列席者には常に、祭壇、聖棺、森が同時に視界へ入るように配列されている。

このように礼拝堂の内部空間は、身廊と側廊の簡潔な構成であるものの、軸線の取り方、壁の傾きや襷、アール状の天井、ガラス面による森への開放などによって、建築形態の印象は薄まり、逆に建築空間の印象が強く残るのだ。

礼拝堂の外を一周すると、曖昧でありながらも不思議な情感の深さを感じる。正面から見ると一見クラシカルでありながらも、聖十字架のシンボル、玄関ポーチやアプローチ軸の取り方、背の低い石垣(8)、鐘楼などが微妙なバランスの中でそれぞれの位置を占め、古典建築特有の割り切れたデザインを避けている。より分散的で柔らかな調和が求められているのだ。外壁の下部には、施工の際に敷地内で採取されたグラニットの原石を荒削りのまま乱貼りし(6、7)、中世石造教会建築のメタファーとなっている。お棺の運ばれてくる東側にまわり建物に続く小道をのぼっていくと、エジプト風の門型デザイン(4)を見ることができる。エジプト風の意匠は、永遠の魂の象徴として北方4ヶ国の建築にしばしば登場する。このなかでも、アスブルンドの〈ストックホルム市立図書館〉などは有名である。また、建物の壁や床には数多くのシンボルがそれとなく刻印されている(27)。おのおののシンボルは、アニミズム的、宗教的、民族的など様々な意味をもつが、いずれも古くから人々が使用してきたものである。ブリュッグマンは建築の構成要素として、壁は壁、床は床としての表現上の意味を、シンボルを刻み込むことによって逆に曖昧とし、建築形態のもつ形式や、時代性的意味をぼんやりと背後に押しやっている。そしてシンボルが発するメッセージが総体となって、時間を超えた空間の独自性や永遠性の意味をより強固なものとしているのだ。(たなか・まさみ/建築家)



27

注

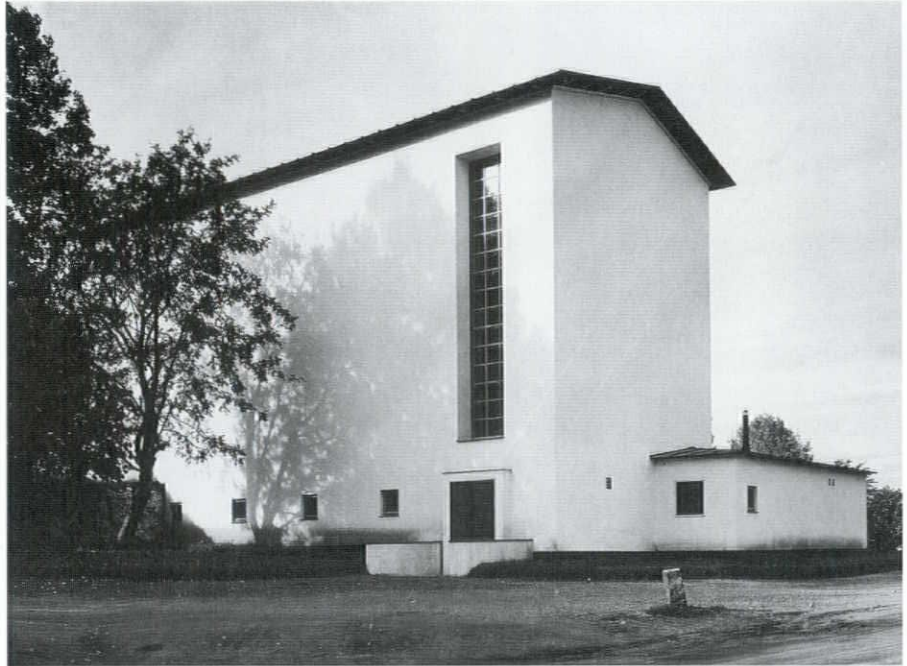
1. 政府軍とロシア・ボルシェビキの援軍を受けた赤軍との内戦。1918年1月クーデター勃発、同年5月政府軍の勝利で終結
2. 旧ソ連との領有権を巡って戦争(1939~40年)。戦いではソ連の圧倒的な軍事力の前に屈することを余儀なくされるが、困難な状況下で勇敢に戦ったフィンランドは国際的な注目を集めた
3. フィンランド南東部カレリア地方を中心に国土の10分の1を旧ソ連に割譲
4. カレリア地方からは40万人(人口の10分の1強)にのぼる避難民がフィンランド各地に移民した
5. フィンランドにおける建築コンペの慣例で、参加者はドローイングにコンペ案のニックネームを記入する
6. パートランド・ラッセル著、市井三郎訳、『西洋哲学史』より引用

参考文献

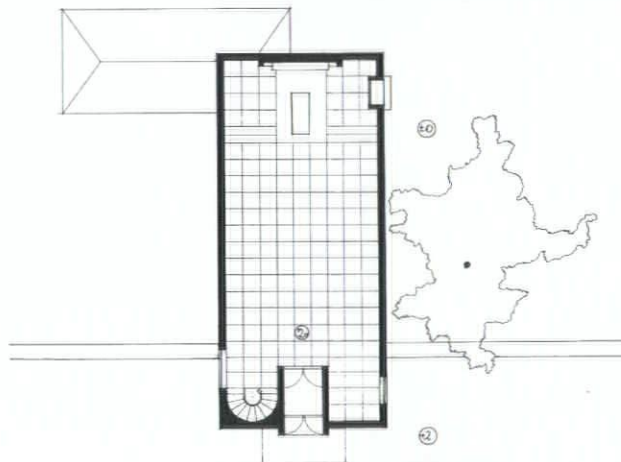
ERIK BRYGGMANN 1891-1955, Museum of Finnish Architecture

パライネンの礼拝堂 Burial Chapel at Parainen

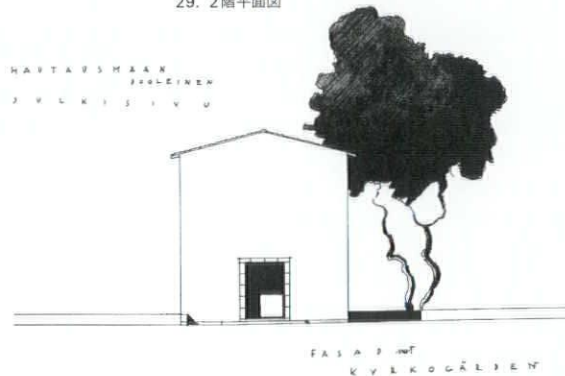
パライネン（トゥルク郊外）／1929～30年



28. パライネンの共同墓地の外周道路からの外観。左手に共同墓地の境界を示す擁壁が見える



29. 2階平面図



30. 共同墓地側からの立面図



31. 礼拝堂内観

トゥルク近郊バライネンの教会（オールドチャーチ）の墓地に建つ礼拝堂。クラシシズムの均整のとれたプロポーションと近代建築の合理的で簡潔な空間を併せ持つ。この礼拝堂は、クラシシズムから近代建築を経て1940年代のロマン的な建築へと連なる、ブリュッマンの建築思想の出発点を示している。

建物は上下2層、長方形平面（1階のみ母屋と直行方向に付室を持つ）、切妻屋根で、街区よりほぼ1階分高いレベルにあり、教会墓地との境界を成す石垣をまたぐように配置されている。亡くなった方の遺体は、街区ストリートのレベルから遺体仮安置所である1階に入り、リフトによって2階レベルの礼拝堂霊柩台に持ち上げられる。お別れの式に出席する遺族は、墓地レベルから礼拝堂に入り、式の後に棺を神聖な墓地に運び出

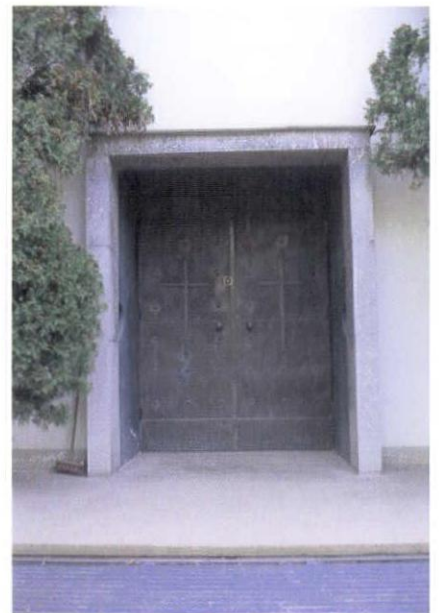
す。建物は生から死へのプロセスを適切に行えるように計画されている。礼拝堂祭壇脇の南面には細長い窓が、ほぼ床から天井までとられ、祭壇背後の壁に光が射し込む。漆喰の白い壁面、正方形にカットされたグラニットの石貼りの床、木の小屋組によって構成される簡潔なインテリアは、光の演出との相互作用によって荘厳で神聖な非日常空間を生み出し、一連の儀式のプロセスとともに精神性の高い世界をつくり出している。



32. 共同墓地側からの外観



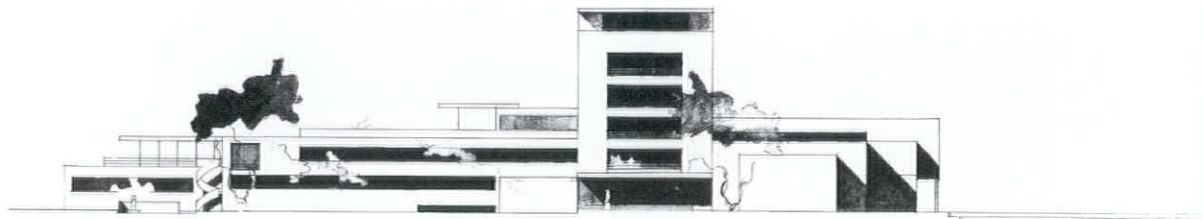
33. 礼拝堂内観2階からの見下ろし



34. 礼拝堂出入口の扉

ヴィエルマキの体育学校 Vierumäki Sports Institute

ヴィエルマキ／1931～36年（1930年コンペ1等入選）



35. コンペ（1等入選）時に提案された立面図。フラットルーフ、水平連続窓など近代建築の形態原語がみずみずしく表現された（次頁解説参照）



36. インテリアはスチール家具によって明るく開放的にデザインされた



37. 近代建築の直載なフォルムの中にも古典建築の穏やかなバランスが感じられる



38. 階段室にとられた大開口

1929年、ブリュグマンはアルヴァ・アアルトとの協同作業によって、フィンランド近代建築の原点となったトゥルク博覧会（年譜③⑦、pp.088-091に対応）のデザインを担当する。そしてその1年後、今度は〈アントワープ万国博フィンランド館〉（年譜④）の指名コンペで機能主義建築を提案、見事1等案となった。両博覧会での建築とともに、仮設、ローコスト、規格工業製品の使用（特に合板）などの条件を、機能主義という新しいテーゼのメリットとして十分に引き出し、フィンランド建築界に大きな影響を与えた。とりわけ〈アントワープ万国博フィンランド館〉では、外壁にニス塗りの白樺合板を使用し、木地模様とクリア塗装のつくるゆめくような表現は、直載で簡潔なフォルムのデザインと

相まって、博覧会の中でもひととき注目を集めグランプリを受賞した。

この時期、フィンランドではスポーツ熱の高まりの中、スポーツ振興の拠点となる体育学校をヴィエルマキに建設する計画が発表となった。計画は公開コンペとなり、ブリュグマンがアアルトをはじめとする新進の建築家たちを押しつけ、アントワープ万国博に続き再び1等を勝ち取った。

敷地は海拔163mの尾根の平地で、森と湖が遙かまで遠望できる。ブリュグマンはこの敷地の中でもあえて尾根の先端に建物を配置し、周辺の景観や自然に対してダイナミックな緊張感と穏やかな調和との絶妙なバランスをつくりだした。建物は設計当初、最新技術であるRCのラーメン構造で

あったが、施工段階になって従来工法への転換を余儀なくされ、柱のみがコンクリートで、壁は煉瓦の組積によってつくられた。この結果、水平連続窓のデザインは長方形の窓となり、設計当初考えられていた機能主義のデザインは不完全なものとなってしまった。もしこれが当初のデザインのままに完成したならば、アアルトを中心に展開してゆくその後のフィンランド近現代建築史の様相は変わっていたかもしれない。しかしこの建築には、合理性や機能的な平面計画、簡潔で明快なフォルム、地形の起伏に反応する繊細な配置など、ブリュグマンの建築家としての資質や特徴が十全に表現されていることに変わりはない。



39. 正面外観



40. 主要階段部



41. 森の中に伸びる低層のウィング



42. 体育館外観。左に見える大きな開口部から柔らかな光が射し込む

ÅBO AKADEMIN

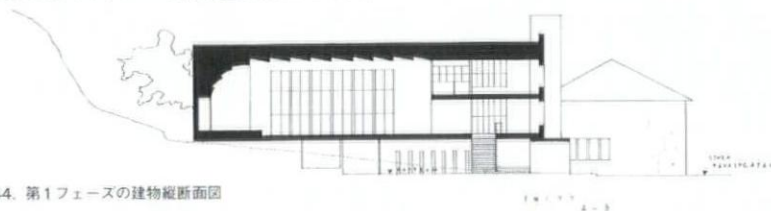
YLIOPPILASKUNNAN TARO "KÅREN", TURKU

オーボ・アカデミーの学生会館
The "Kåren" buiding for the students'
union of Åbo Akademi, Turku

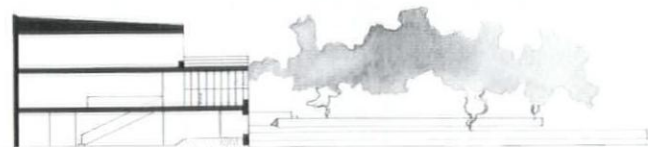
トゥルク／1935～50年



43. 外観。ポケットパーク状に計画されたエントランス



44. 第1フェースの建物縦断面図



45. 第2フェースの建物横断面図



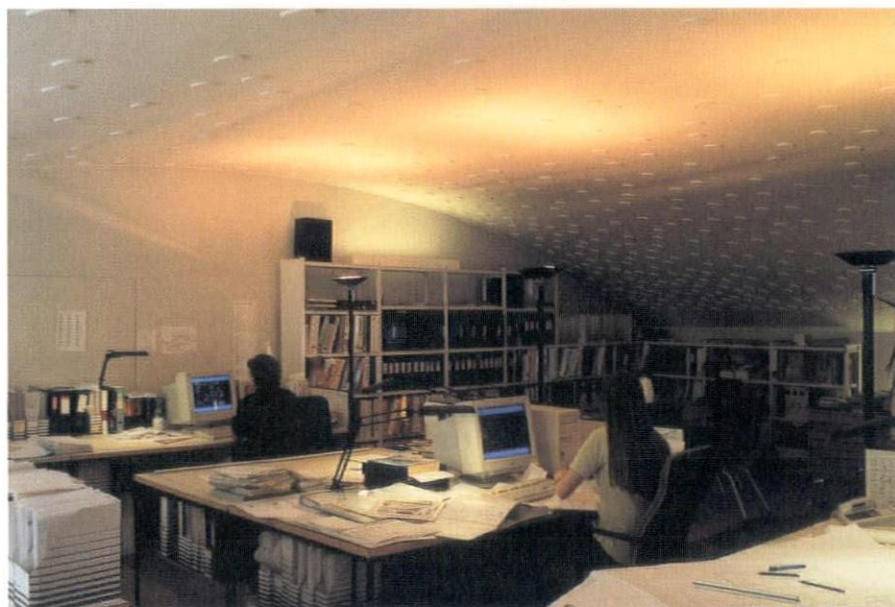
46. 第2フェースの建物横断面図



47. 緑の斜面から第1フェーズの建物を見る



48. 第2フェーズの建物の階段室



49. 第2フェーズの建物の最上階アトリエ。ブリュッグマンは一時期このアトリエを事務所として使用した。
現在も別の建築事務所が使用している



50. アトリエ内部の暖炉

〈オーボ・アカデミーの学生会館〉は、ブリュッグマンの設計によってふたつのフェーズに分けられて建設された。敷地はハメーンカトゥ通りに面した北側境界から南側境界へ登っていく斜面地で、この斜面は樹木と芝生による緑のシークエンスを形成している。この環境が建築家に設計の出発点をあたえた。第1フェーズ（1935～36年）の建物は、多目的ホール、図書館、オフィスなどの用途を有し、ほぼ矩形の平面構成である。建物は将来の増築を想定したうえで、通り側の壁面の幅に合わせてセットバックし、斜面に直行する形で敷地東端に配置された。これによって建物西面は斜面の自然環境に十分開放することができている。第2フェーズは戦争のために着工が遅れ、1950年に完成した。建物は北側の通りに沿って、先にセット

バックした東北の角をオープンスペースとして通りに開放するように計画された。オープンスペースは樹木と自然石のペープメントでポケットパーク状にしつらえ、建物への心地よいアクセスを確保している。第2フェーズの完成により緑の斜面は、建物によってL字型に抱き込まれた庭となり、通りの喧噪から隔絶したピクチャレスクな別世界となった。第2フェーズの建物は5階建て、ドミトリー、レストランなどを有している。2階にあるレストランは、床から天井までのガラス窓を通して南の斜面に開放され、樹木や芝の緑が建物内部に入り込み、緑の空気に染められている。第1フェーズの建物は白い機能主義的な形態を示し、第2フェーズの建物はブリュッグマン晩年のロマン的な傾向が表現され、より柔らかに穏やかな形態と色調で

自然環境や周辺建物と調和している。ブリュッグマンは、その建築事務所を自らの住まいと同じ場所に据えたが、学生会館完成後の数年間、この建物最上階西側のスタジオを事務所として使用した。

謙譲の美德

ユハニ・パッラスマー

訳＝櫻井義夫

エリック・ブリュッグマンの個性と作品には特殊なオーラが感じられる。控えめで教養にあふれた個性のうえに、文化と社会に対する責任感が重なることによって、表面的な効果を追求し楽観主義と自己陶醉を表現する現代には、典型的な理想となっているのである。

ブリュッグマンの成熟した個性は、アルヴァ・アアルトとのトゥルクでの1920年から10年間におよぶ共同作業にあっては、アアルトの熱狂に均衡を与える力を発揮したのであった。

ブリュッグマンは生涯を通じて古都トゥルクで仕事をしたが、この街はフィンランドが近代へ突入するきっかけとなった場所であり、歴史の存在が最も強烈な都市でありながら近代建築が興隆したという意味ある場所である。現代性と無時間性との融合、見識と伝統との融合を果たすことによって、文化的かつ情動的な要素を基盤に持つ特殊な感覚をブリュッグマンの仕事に与えている。その作品は近代のアイコンであると同時に、近代主義の規範をすでに超えている。北欧近代主義の開拓者たちと同様に、ブリュッグマンは1920年代の北欧古典主義を洗練することから作品をつくりはじめている。20年から30年にかけて、彼は機能主義的なイデオロギーや美学へと移行する道を選ぶが、その数年後には有機主義、地域主義、ロマン的総合表現へと進路を変えたのである。

〈ホスピッツ・ベテル・ホテル〉(1927～29年)では、古典主義と近代主義との間の転換点に立っているが、それは同時にアアルトにとっても〈南西フィンランド農業協同組合ビル〉において同じ立場にあった。〈ソリン邸〉(1927～29年)はブリュッグマンが微妙な様式の変化を表現した魅力あふれる例となっている。1929年のトゥルク博覧会では、ふたりのパートナーが共同デザインによって互いの感性を完全な近代主義にまで到達させたのであり、建築の考え方をグラフィックや広告デザインにまで敷衍することとなったのであった。

ブリュッグマンとアアルトの建築における経歴は驚くほど似通っている。特に30年代に正統的な近代主義から、素材感や触覚を強調する自由で個人的な様式へ一気に転換したことはふたりに共通する点である。箱型の形態から複雑な幾何学の応用へと向かう発展や、既存の建築技術が理想とする考え方から彫塑的に成形された空間への転換などは、顕著に共通する方向性であり、バルト海の対岸、スウェーデンではエリック・グンナー・アスプルンドも同じ方向性を進んでいた。

ブリュッグマンはフィンランドにおいてスウェーデン語を話す少数派に属する。建築における文

脈、機能、精神性などの次元を総合することによって醸し出された人間的で控えめな態度は、ブリュッグマンの時代からこうしたフィンランドにおける文化的少数派の建築を特徴づける要素となっている。彼の作品は優しく語りかけるが寡黙であり、思慮深く丁寧である。何か女性的な雰囲気は、確固たる建築思想を包み隠しており、近代建築の革新的な外観は、深く積層し重なり合って連関する思想やモチーフの層に置き換えられているのである。

ブリュッグマンの最も重要な作品は間違いなく〈トゥルクの復活礼拝堂〉(1938年コンペ、1939～41年)であり、近代主義のもつ総合する力技によって地域の文化的土壌や景観にしっかり根をおろした作品としてみると、アアルトの〈ヴィラ・マイレア〉(1938～39年)と同等である。どちらの場合も単一の視覚的イメージをかぶせようとする欲求が、機能性、象徴性、心理性が複合した要望によって安息感をもたらす、多様な感性の複合体へと変換するような成熟した技能で置き換えられているのである。アアルトの作品が地域性を唱い上げる詩である一方で、ブリュッグマンの礼拝堂は苦悩と安息を包み込む部屋である。この礼拝堂は明快な理論や計算、自己表現などのない、優しい存在感と出すぎない性格を持っている。装飾と形態、そして象徴性といった要素が溶融し、建築としての独自性を見せ、感情移入、弔意、希望などの感覚を発生させている。この建築の雰囲気や言葉に置き換えることはできないが、生と死、双方の永遠性と尊厳を表現している。そしてまさに彼はスピノーザの概念「永遠なる亜種(Sub Specie Aeternitatis)」を設計競技参加時の作品名としていたのである。

第二次大戦のころには、エジプトとローマのデザイン要素を組み合わせ、中世フィンランド教会建築に由来する主題を加えること、北欧デザインの特徴である植物装飾による近代主義的な雰囲気などによって、ブリュッグマンは時代を超えて本質を語ることで作品を創出したのである。ほとんど隠蔽された象徴的な表現は、知的な読解によって象徴的な記号が見出されるというよりは、合理的な分析の範を超えて生きた実態あるメタファーへと変換しており、それは深く感じとれるものなのである。これは偉大な建築の神秘といえよう。イメージが具体的な感動となり、建築が生命を語る、さらに正確にいえば、建築におかれた人間がそこに存在することによって得られる体験を語る。建築は自己を知り、理解するための枠組みとなるのである。損失、陰鬱、一時性などの経験は、回復、喜び、永遠性などのイメージに癒さ

ユハニ・パッラスマー (Juhani Pallasmaa)

1936年 フィンランド生まれ

1966年 ヘルシンキ工科大学で建築修士号取得、建築・デザインの教鞭をとる

1968～74年 フィンランド建築博物館、ヘルシンキデザイン学院ディレクター、ハイレ・セラシエ大学助教授

1991年 ヘルシンキ工科大学にて教鞭をとるかたわら、設計・デザイン活動、批評・執筆活動を意欲的にやっている。

れるように融合する。アアルトの〈バイミオのサナトリウム〉が物理的な回復の装置であれば、ブリュッグマンの〈トゥルクの礼拝堂〉は精神的な癒しの装置なのである。

今日の建築は、その意図や抱負をししばしばあまりに明快に表現し過ぎるきらいがある。ヨーゼフ・ブロドスキーは著作『Watermark』¹⁾において、エズラ・パウンドのカントスは美を求めようとする傾向があると批判している。純粋な美とはブロドスキーによると、別のものの副産物であり、そのほとんどは非常に普通の作業なのである。ブリュッグマンは、建築が存続するために必要な質という、時機を得た教えを我々に与えているが、それは理想化、希望、感情移入、同情、思想の研ぎ澄まし、手の熟練などの地平から浮かび上がるものである。「美とは建物に投げつけられた神秘のヴェールではなく、すべてのものが正しい場所にあるという論理的な結果である」²⁾とブリュッグマンは述べている。

ブリュッグマンの感動的な死亡広告も、その例外的な立場を美しく要約したアウリス・プロムシュテットによる文章であった。「真に偉大な建築の才能とは、ごく稀に生み出される自然の奇形物である。……しかしながらエリック・ブリュッグマンにはその天賦の才のあることを我々は知っている。彼の触れるものはすべて生命を与えられ、全く取るに足らない建物の仕事でも、単純な材料が彼の手にによって言葉では表せないような結晶化した人間性へと変化する。隠されていた建築の花は咲き乱れるように満開となる。建築の大家はこの世を去ったが、我々には彼の命の作品が放つ、生き生きとした驚きが残されているのだ」³⁾。

フィンランドの建築思想のなかでも機能主義・合理主義の路線を持つ識者からのこうした言葉は、合理主義とロマン主義、技術と職人仕事、近代性と歴史性、革新と伝統などの対極の間にあって、ブリュッグマンがこうした対立を調停し合成する役割を担っていたことを物語っているのである。(Juhani Pallasmaa／建築家、ヘルシンキ工科大学教授)

注

1. Joseph Brodsky, Watermark. Penguin Books, London 1992, p. 70.

2. Erik Bryggman, Västra Finland 29.3.1923. Reproduced in Riitta Nikula, 'On Erik Bryggman and His Architecture', Erik Bryggman 1891-1955. Monographs by the Museum of Finnish Architecture, Helsinki 1991, p. 279.

3. Arkkitehti 1955, p. 190. Reproduced in Erik Bryggman 1891-1955, p. 70.

The Virtue of Humility

Juhani Pallasmaa

The personality and work of Erik Bryggman reflect a special aura. His humble and cultivated character, combined with a strong sense of cultural and social responsibility, provides an exemplary ideal in our age of external effect, opportunism and narcissism. Bryggman's mature personality even provided a balancing counterpoint to Alvar Aalto's zealotry during their short collaboration in Turku at the turn of the decade 1920-30.

Bryggman worked all his life in Turku, the old capital, which was the city of modernist breakthrough in Finland. It is significant that modern architecture arose in the city where the presence of history was strongest. The fusion of contemporaneity and timelessness, vision and tradition gives Bryggman's work its exceptional sense of cultural and emotional enrootedness. His works are icons of modernity but at the same time they are already beyond the canon of modernity. Like all the Nordic pioneers of modernism, Bryggman began his career in the refined style of Nordic Classicism of the 1920s. At the turn of the decade 1920-30 he made a determined shift to the Functionalist ideology and aesthetics, but after only a few years he moved forward to an organicist, regionalist and romantic synthesis.

Bryggman's Hospitz Betel (1927-29) project stands at the crossroad between classicist and modernist aspirations in the same way as Aalto's contemporaneous Southwestern Finland Agricultural Cooperative Building. The development of Villa Solin (1927-29) provides another fascinating example of Bryggman's subtle stylistic transition. The two partners made their mutual initiation into full modernity in their collaborative design for the Turku Fair of 1929 which extended from the architectural concept down to graphic and advertising design.

The architectural careers of Bryggman and Aalto are surprisingly parallel, in particular their abrupt transition in the mid-30s away from orthodox modernism into a liberated and personal style of strengthened tactility and materiality. Their development from rectangularity towards the use of more complex geometries and from the prevailing tectonic ideals towards plastically molded spaces is also remarkably parallel. On the opposite side of the Baltic Sea Erik Gunnar Asplund followed the same course.

Bryggman represents the Swedish speaking minority in Finland. A humane and humble attitude, aspiring for a synthesis of the contextual, functional and mental dimensions of the architectural task has characterized the architecture of this cultural minority in Finland since the days of Bryggman. His works are soft spoken and quiet, considerate and courteous. The somewhat feminine air of his architecture conceals determined architectural thought. Modernist radicality of

appearance is replaced by a dense layering of associations, thoughts and motifs.

Bryggman's most important work is undoubtedly the Resurrection Chapel in Turku (1938-41) which is his equivalent to Aalto's Villa Mairea (1938-39) as a tour-de-force of modernist synthesis which takes firm ground in the local cultural soil and landscape. In both cases, the desire to impose through a singular visual image has been replaced by a mature skill of accommodating the multiplicity of functional, symbolic and mental requirements into a relaxed multi-sensory ensemble. Whereas Aalto's work is an ode to domesticity, Bryggman's chapel is a chamber work for mourning and consolation. The chapel has a tenderly existential and effortless character without an overt theory, calculation or self-expression. The ornamental, figurative and symbolic ingredients are fused into an architectural singularity which radiates empathy, condolence and hope. This architectural atmosphere, untranslatable into words, expresses the magnificence and eternity of both life and death. Appropriately, the architect chose Spinoza's notion 'Sub Specie Aeternitatis' as the code name of his competition entry.

Combining Egyptian and Roman motives with themes deriving from Medieval Finnish church architecture and a modernist air with plant ornamentation characteristic of Nordic design around the war years, Bryggman creates an architecture which speaks of the timeless essence of architecture. The symbolic representations are understated, almost hidden; instead of being read intellectually as symbolic signs, they turn into embodied and lived metaphors which are beyond rational analyses, yet deeply felt. This is the mystery of great architecture: images turn into embodied sensations and architecture speaks of life, or more precisely, of one's experience of his/her own existential condition. Architecture becomes a frame for acknowledging and understanding the Self. The experiences of loss, melancholy and temporality are healingly fused with images of recovery, joy and eternity. Whereas Aalto's Paimio Sanatorium is an instrument of physical recovery, Bryggman's Resurrection Chapel is an instrument of spiritual healing.

In today's architecture intentions and aspirations are often too explicitly expressed. In his book *Watermark*,¹ Joseph Brodsky ventures to criticize Ezra Pound's Cantos for a tendency of questing after beauty. Genuine beauty, in Brodsky's view, is always a by-product of other, often very ordinary pursuits. Bryggman gives us a timely lesson in the essence of lasting architectural quality; it arises from a horizon of idealization and hope, empathy and compassion, precision of thought and the skill of the hand. 'We should understand that beauty is not a mysterious veil thrown over a building but a logical result of having everything in the right place,' Bryggman writes.²

Bryggman's touching necrology by Aulis Blomstedt condenses beautifully his exceptional status: 'A really great architectural talent is a very rare freak of nature. [...] Nevertheless, we know that Erik Bryggman had this gift. Everything he touched became alive. The most trivial building task, the simplest material changed under his hand into a kind of crystallized humanity, which cannot be described in words. The hidden flower of architecture had burst into full blossom. A master of architecture has passed away, after having left us the living wonder of his life's work'.³

These words by the mentor of the rationalist-functionalist line of Finnish architectural thought underscore Erik Bryggman's mediating and synthesizing role between the polarities of rationalism and romanticism, technology and craft, modernity and historicism, radicality and tradition.

(Juhani Pallasmaa / architect, professor)

Notes

1. Joseph Brodsky, *Watermark*. Penguin Books, London 1992, p. 70.
2. Erik Bryggman, *Västra Finland 29.3.1923*. Reproduced in Riitta Nikula, 'On Erik Bryggman and His Architecture', Erik Bryggman 1891-1955. Monographs by the Museum of Finnish Architecture, Helsinki 1991, p. 279.
3. Arkkitehti 1955, p. 190. Reproduced in Erik Bryggman 1891-1955, p. 70.

訳＝田中雅美

出典：ERIK BRYGGMANN 1891-1955, Museum of Finnish Architecture

機能主義

「オーボ・ウンデルエッテルセル (Åbo Underrättelser) 新聞」の見出しに、すでに何か標語のようになっている言葉、すなわち機能主義の建築の傾向について批評が載った。この議論にいくつかのコメントを差し挟むことをお許し願いたい。

一度の新聞記事の中でこのような広範な問題について議論することはできない。したがって私の意図はいくつかの注目点と注釈を示すことにある。この機能主義という標語には、間違いなく思慮を欠いた模倣の危険がある。だが、見せかけの剽窃者が、新しい傾向を傷つけ悪名をもたらしたとしても、建築家が機能主義の基本原則に注視する態度を敵視することはない。

機能主義は新しいものではないし、以前の建築概念といかなる直接的な矛盾もない。

名建築はどの時代にあっても機能主義であった。建築史上もっとすぐれた創作には、今日私たちが機能主義と呼ぶ特性と質がまさに表現されている。この言葉がこれまで使用されなかったのは、今日の建築の中心課題が、実質性や的確性を、以前に比べてより徹底した方法で強調し発展させたい、という願望の結果であるのかもしれない。私たちの職務は、新しい精神と古い形式の解放から発せられるべきなのだ。私たちは新しい形態言語を取り決めているわけではない。コンクリート、ガラス、鉄などの材料の新たな使用法が、予期できない新しいゴールへの方法を表現するとしても、アルミパイプのテーブル、椅子のデザインや水平連続窓か伝統的な窓かといった形態について論じているわけではないのだ。

いかにして私たちは機能主義建築を説明すべきだろうか？ 機能主義的な作品か否かを建物のファサードで判断することは不可能である。正体を見破るには建物の本質とその目的を調べなくてはならない。建物は目的のために最大限機能

し、限られた方法で、すべての不必要な形態を排除しながら経済的に機能すべきだ。建物の外観も、その機能を表現しなくてはならない。

これは水平連続窓などの形態によって、過度にモダンな外観を呈するベルリンの大通りにある建物のことではない。そこに近づいてみると内部には手をつけていない古い建物であることがわかる。1880年代の元のファサードのみが壊され近代的なデザインに置き換えられたのだ。これは近代的な形態言語を使った表層的な芸術表現で、本質的な建築とは何の関係もない。

機能主義とは、何人かの限られた建築家によってもたらされた新しい形式ではない。今日の社会や知的構造、そして材料の変化によってもたらされた必要性から徐々に発展した概念である。この潮流の中心は近代という時代を受け入れようとする真摯な努力や、真剣で謙虚な態度をもって、変貌しつつある仕事にアプローチしていく中に見出せるものである。それは、幅広い目的を持った社会活動の中に位置づけられ、より人間的な住居をつくる職務を担うものだ。現在の市や街で、過去のライフスタイルや習慣の成果では、平和で十分に明るく、制約のないアパートや住居を私たちにもたらすことはもはやできない。この点においてなすべきことはたくさんある。私たちはいまでも都市建築に対して抱いている固定した概念を取り除かなくてはならない。

これは、伝統を拒否することになるのだろうか？ 表面的にはそうであるかもしれない。しかし伝統とは、文化遺産の拡大化と考えるべきで、過去の形態への臆病な執着ではない。

最後に、かつての古典主義的な理想から急進的な機能主義的アプローチへの迅速で明確な移行は、実際に見えるほど突然ではなかったことを強調したいと思う。すでに言及したように、すべての名建築は時代を超えて、つねに機能主義的であった。これは、特に古典期(時代)と呼

ばれるスカンジナビア、中でもスウェーデンの最高の作品に当てはまる。古典主義は近代思考の始まりを意味する。その目的は物事を可能な限り明らかに、かつ正確に表現することであった。事実上忠実であろうとする努力は、経済性や規格化などの実際的な要求に呼应し、儉約や規則性を強調した。

スウェーデン人建築家の仕事には、時代の問題に対する合理的で新鮮な解決を見出そうとする明らかな目的が表現されていたし、巨大なものを制御するユニークな能力をも示していた。事例としてはウーノ・オーレン (Uno Åhren) やエスキル・スンダール (Eskil Sundahl) の店舗の中に見出せるが、これらは明解で豊かな表現手法によって、機能主義という名の下で誇示している多くの建物より、余程その名に値する。現在におけるグンナール・アスブルンドの輝かしいデザインも忘れてはならない。

これらの建築家が新しい時代に向かって第一歩を踏み出したことは偶然の一致ではない。怖がって後ろを振り向くことなしに、私たちは今、前を見なくてはならない。そして過去の問題に対する新しい解決を見出すために、私たちの時代の仕事に向き合うべきである。

デンマーク人建築家、エドワード・ヘルベリ (Edvard Helberg) は現在の状況を以下のように適切な言葉で表現している。

「私たちは休みなく成長し、うねり、燃え上がるような革命の時代、新しい文化の第1段階の渦中にある。今日の形態は明日には無用として退けられ、完全だと思われた考えは、すぐに他のものに置き換えられるであろう。この大海の波をブロンズに鋳造することは意味がない。したがって私たちの義務は、私たちの職務をできうる限り自然に、一貫して成長させ、私たち自身をそれとともに成長させることである」。

(初出：Erik Bryggman, Åbo Underrättelser, 30.10.1928)

田園の建築

現在、過去を問わず、ランドスケープにかかわる人間の決定的な役割について考えた者はあまりいない。ランドスケープの美しさは、単に大いなる自然の贈り物のように見える。しかしランドスケープを眺めると、大きくうねる穀物畑、名もなき道や建物など、人がその役を負った景観に、私たちの意識は惹きつけられる。これらは、大地や水、丘や森などの自然的な特徴以上に重要である。変化に乏しく特徴のないランドスケープに、人はしばしば特徴を与えているということさえできるかもしれない。たとえば、もしオストロボスニアに耕作地がなければなんと平坦で単調であろうか。人が自然と調和しながら自然に働きかけたとき、人はその美しさに惹きつけられる。しかし反対の場合には、人はただランドスケープを傷つけてしまう。人は自然を良くも悪くもしうるのだ。

フィンランドには本来の意味での領主邸文化はなく、ランドスケープにおける建築のイメージは、普通の人の住居によって広くつくられている。不作法な新しい建築の脅威から逃れてきた名もなき建築は、過去の文化が形態に対して示す精錬された感性の記念碑なのだ。これらの建築には地方色がある。ボスニアの人々には、ウーシマーの人々とは異なった建築に対するアプローチがある。さらに同じ地域の中にでさえ、慣習の違いは一般的である。たとえばトゥルクの近郊では、豊かな土地を有する農場や、周囲に庭や畑のある大きな島が見られ、また同様に、ほとんど木もなくむき出しの岩の間にある小さな漁師の小屋も見ることができる。環境や生活手段のために小さな差異はあるものの、これら地域のほとんどの建物は、美的に際立った個性を形成しながら、明らかに同じ特徴を示している。

先達の建築を賞賛しながらも、私はただ歴史物というだけですべての古いもの

を情緒的に褒め称えようとは思わない。古い農家の魅力や価値はその時代性によるものではない。その美しさは真に建築上の価値に基づいている。健全な根本形態、バランスのとれたプロポーション、色調、とりわけ他の建物との配置や関係などである。これらが融合した特徴は自然環境とのユニークな結びつきを生む。優れた建築の伝統は、久しく市内や街の中より田園にもおいて生き続けてきた。だがこれらも前世紀の末あたりから崩壊の兆しを見せはじめた。それ以来、その退化は目に余るものである。過去十数年にわたる建設の疑わしい成果は、フィンランドの田園イメージを壊しつつある。母屋と均整のとれた納屋をもつ、かつての美しい農家の建つ落ち着いた敷地では、現在その間近に外観を飾り立てた雑多なものがあるのだ。(中略)

私たちは過去に戻ることはできない。しかし古い建築を正しく敬うことによって、再び美の法則を理解できるかもしれない。この美しさこそ古い農家の魅力の根本なのだ。美とは建物に投げかけられた不可思議なヴェールではなく、すべてのものを正しく配した論理的な帰結なのだ。それは現代の退化した審美眼による高価で贅沢なものでもなければ、実用や経済上の要求を受け入れないものでもない。そしてただ余裕ある贅沢として、別荘の外観のように悲喜劇的な特性へと向かうものでもないのだ。美学的な視点から納屋は母屋のファサードと同様に大切である。そして大事な要素として道路や樹木も見落とすべきではないだろう。

(以下略)

(初出：Erik Bryggman, Västra Finland, 29.3.1923)

企画協力・文／Editorial cooperation, Text:

田中雅美／Masami Tanaka

図版提供／Photo & Drawing:

田中雅美・十四宮由夏／Masami Tanaka+Yuka Shinomiya
p.065 (1), pp.066-073 (3-20), p.079 (32-34),
p.081 (41-42), p.083 (47-50), p.091 (middle right)
フィンランド建築博物館／Museum of Finnish Architecture
p.065 (2), pp.074-078 (21-31), pp.080-081 (35-40),
p.082 (43-46), pp.088-091 (p.091, Except middle right)

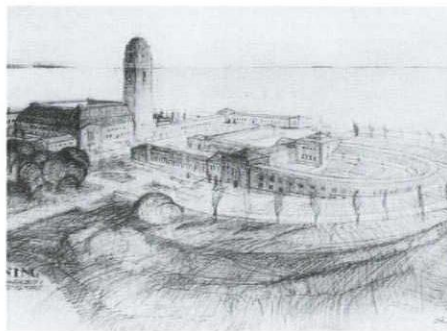
A CHRONOLOGICAL LIST

設計年：建設年

1910's

1916

カイヴォプイストの公園のスバ湯治場（建築学科卒業設計）①



①

1919

ヘルシンキの火葬場コンベ（2等入選、ヘルシンキ）

1920's

1923-24 : 1924

ブラヘン通り9番地の共同住宅（トゥルク）②



②

1924 : -1929

ホルステン氏の農家（ケミオ）

1925 : 1925-26

ハールトゥマン邸（ナーンタリ）



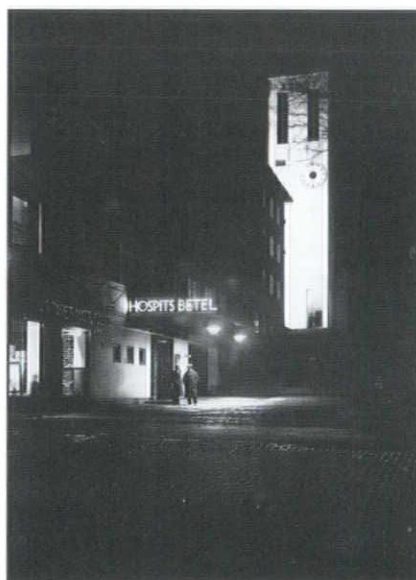
④

1927- : 1928-29

ホスピッツ・ベテル・ホテル（1926年コンベ1等入選、トゥルク）③

作品年譜

A Chronological List

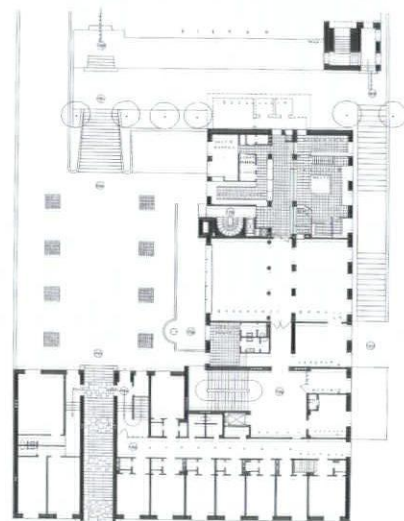
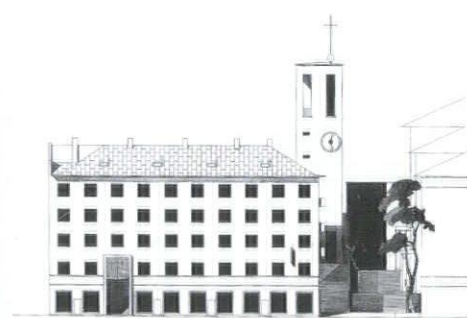


③

1927- : 1928-29

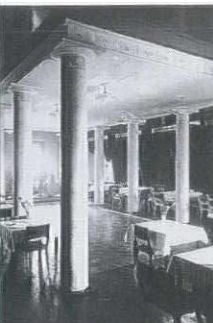
ホスピッツ・ベテル・ホテル（1926年コンベ1等入選、トゥルク）

コンベによって建てられた宣教師教会のホテル。ユリオピストンカトゥ通りに面する敷地には、奥の一角にベテル教会があり、そこへのアクセスを確保することを前提としてホテルは計画された。ホテルのエントランスから教会鐘楼へ続く階段によって古典建築的な親しみある街区環境をつくりだすとともに、クラシシズムから近代建築へ移行する前の、合理的で簡潔な形態が表現されている。写真右側に写る男性はブリュグマン自身。



1927-28 : 1929

ソリン邸 (トゥルク郊外) ④



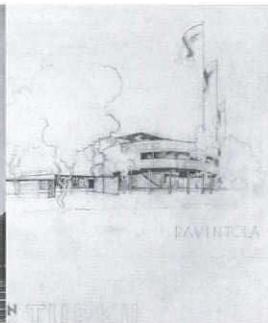
⑤

1927 7-28 : -1928

セウラフオネのレストランインテリア (トゥルク) ⑤



⑥



⑦

1929 : 1929

トゥルク博覧会 (トゥルク)

新聞社ブース ⑥

博覧会レストランスケツチ ⑦



⑧

1929 : 1929-30

パラインの礼拝堂 (パライン、トゥルク郊外) ⑧、pp.078-079

1929 : 1930

アントワープ万国博フィンランド館 (1929年コンペ1等入選、アントワープ/ベルギー) ⑨



⑩



⑪

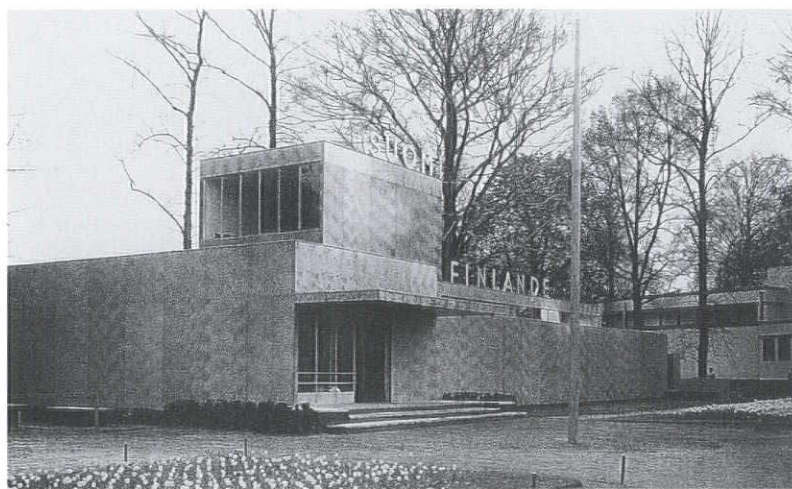
1930's

1931-32 : 1931-36

ヴィエルマキの体育学校 (1930年コンペ1等入選、ヴィエルマキ) ⑩、pp.066-074

1932- : 1933

ヴァレーン邸 (ルイサロ) ⑪



⑨

1929 : 1930

アントワープ万国博フィンランド館 (1929年コンペ1等入選、アントワープ/ベルギー)

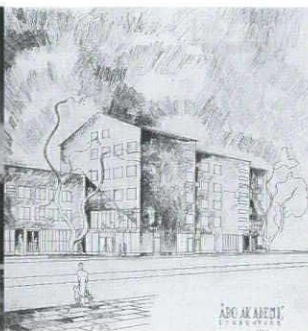
万国博への参加が急遽決まり、わずか5日間という異例の短期間でコンペが実施され、ブリュッマンが選ばれた。フィンランド産業の新しい製品である合板を外壁材として使い話題を呼んだ。この作品は万国博パヴィリオンのグランプリを獲得し、ブリュッマンの名を国際的に広めた。

1934? : 1935
カイン邸 (カクスケルタ) ⑫



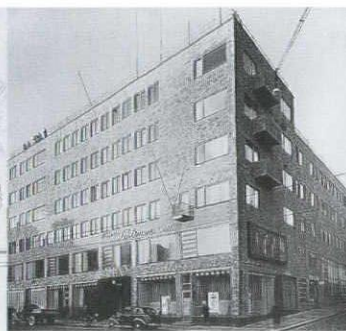
⑫

1935- : 1935-36
オーボ・アカデミーの図書館 (第2期 : ~
1950年、トゥルク) ⑬



⑬

1935- : 1935-36
オーボ・アカデミーの学生会館 (第2期 : ~
1950年、トゥルク) ⑭ pp.082-083



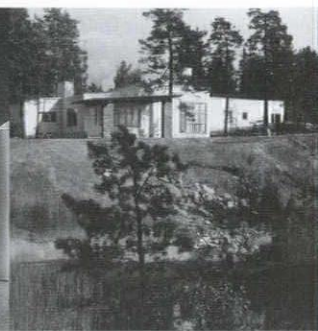
⑭

1936-38 : 1937-38
サンボ保険会社本社屋 (トゥルク) ⑮



⑮

1939- : 1939-41
トゥルクの復活礼拝堂 (1938年コンペ1等入
選、トゥルク) ⑯、pp.080-081



⑯

1939
ヤーティネン邸 (ヴェンツラント) ⑰



⑰



⑰

1947-48 : 1949?

ヌーッティラ邸 (クーシスト)

ブリュグマンは生涯にわたり比較的多くの個人住宅、別荘
を手がけたが、ヌーッティラ邸は、その中でも特に知られた
晩年の作品である。リビングルームの前には敷地を特徴づけ
るケヤキの大木と亀の甲羅のような丸い岩盤が見える。

1939-44 : -1952
クピッター公園 (1939年コンペ1等入選、ト
ウルク) ①

1940's

1945-49 : 1946-48
船舶工業社の住宅地区計画 (トウルク) ⑩

1947-48 : 1949
ヌーティラ部 (ケージスト) ⑪

1948-51 : 1951
ランタカトゥ通り21番地の共同住宅 (トウルク)
⑫ 外観
⑬ プリュグマン自邸

1950's

1950-55 : 1950-56
Finlayson-forssa ab社の住居地区 (1949年
コンペ1等入選、タンベレ) ⑭

1950-51 : 1951-52
リーヒマキの給水塔 (リーヒマキ) ⑮



①



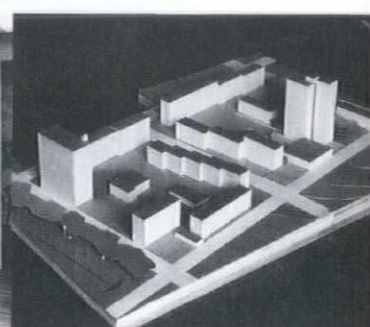
⑩



⑪



⑫



⑭



⑮

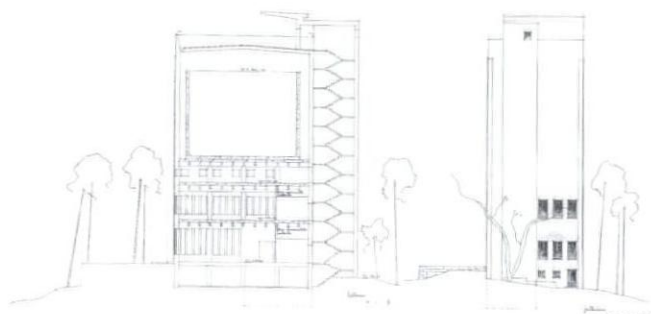


⑮

1950-51 : 1951

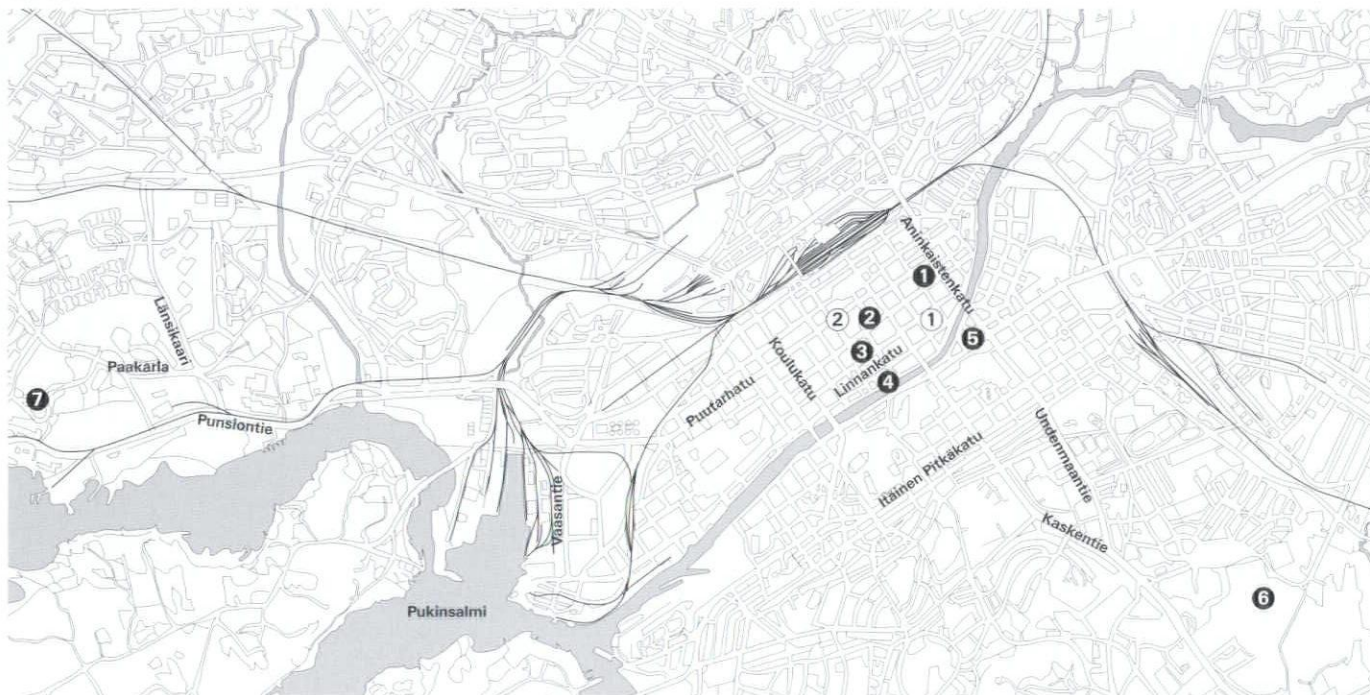
リーヒマキの給水塔 (リーヒマキ)

木材とガラスの生産地として有名なリーヒマキの小高い丘の上に建てられた給水塔。建物は、起伏の乏しい南部フィンランドのランドスケープにあって、街を特徴づけるランドマークになるように意図された。屋上に設けられたカフェテリアからは広大な眺望が得られ、現在でも市民の憩いの場となっている。



作品マップ&リスト Map & List

トウルク Turku



エリア別リスト Architectural Works by Area

Turku トウルク

- ① ブラヘン通り9番地の共同住宅 (1923-24)
Apartment building at Brahenkatu 9
Asunto-osakeyhtiö Brahenkatu 9
- ③ ホスピッツ・ベテル・ホテル (1926年コンペ1等入選、1926-29)
Hospits Betel hotel, Yliopistonkatu 29
Hotelli Hospits Betel, Yliopistonkatu 29
ソリン邸 (1927-29)
Villa for Judge Matti Solin
Varatuomari Matti Solinin huvila
セウラフオネのレストランインテリア (1927-28)
Seurahuone Hotel, restaurant interior
Hotelli Seurahuone, ravintolan sisustus
トウルク博覧会 (1929)
The Turku Fair, exhibition area for the 700-year jubilee of the City of Turku
Turun Messut, Turun 700-vuotis-juhlan näyttelyalue
オーボ・アカデミーの図書館 (1935-50)
Åbo Akademi Library
Åbo Akademin Kirjaston akirjatori
⑤ オーボ・アカデミーの学生会館 (1935-50)
The "Kären" building for the students' union of Åbo Akademi
Åbo Akademin Ylioppilaskunnan taro "Kären"
② サンボ保険会社本社屋 (1936-38)
Main offices of the Sampo Insurance Company
Keskinäinen Vakuutusyhtiö Sammon Keskustoimisto "Sampo-taro"
⑥ トウルクの復活礼拝堂 (1938年コンペ1等入選、1939-41)
The Chapel of the Resurrection, Turku
Ylösnousemuskappeli, Turku

- クピッター公園 (1939年コンペ1等入選、1939-52)
Kupittaa park, Turku
Kupittaaan kansanpuisto, Turku
船舶工業の住宅地区計画 (1945-48)
Residential area for the OY Laivateollisuus Ab ship-building firm
OY Laivateollisuus Ab:s bostadsområde, Åbo
- ④ ランタカトゥ通り21番地の共同住宅 (1948-51)
The Rantakatu 21 apartment building, Turku
Asutokortteli, Läntinen Rantakatu-Eskelinkatu-Linnankatu-Krus-tiinan- at, Turku
- Kaksikerta カクスケルタ**
カイン邸 (1934-35)
Villa Kaino
Kainon huvila
Kemiö ケミオ
ホルステン氏の農家 (1924-29)
Farmhouse for Sven Hollsten
Sven Hollsten maalaistalo
Kuusisto クーシスト
ヌーティラ邸 (1947-49)
Villa Nuuttila
Nuuttilas Villa
Helsinki ヘルシンキ
カイヴォイストの公園のスパ湯治場 (建築学科卒業設計、1916)
Spa Kaivopuisto
Kylpylä, Kaivopuisto
ヘルシンキの火葬場コンペ (2等入選、1919)
Competition for the Helsinki Crematorium
Helsingin krematoriokilpailu
Naantali ナンタリ
ハールトゥマン邸 (1925-26)
Casa Axel Haartman
Intendentti Axel Haartmanin huvila
Parainen パライネン

- パライネンの礼拝堂 (1929-30)
Burial Chapel at Parainen
Siunauskappeli
Riihimäki リーヒマキ
リーヒマキの給水塔 (1950-52)
Riihimäki water tower
Vattenborgen
Ruissalo ルイサロ
ヴァレーン邸 (1932-33)
Villa Warén
Warénin huvila
Tampere タンペレ
⑦ Finlayson-forssa ab社の住居地区 (1949年コンペ1等入選、1950-56)
Oy.Finlayson-Forssa Ab company
Oy.Finlayson-Forssa Ab:Asutokortteli
Vessölandet ヴェッソラント
ヤーティネン邸 (1939)
Villa Jaatinen
Jaatinen huvila
Vierumäki ヴィエルマキ
ヴィエルマキの体育学校 (1930年コンペ1等入選、1931-36)
Vierumäki Sports Institute
Urheiluopisto
Antwerpen / Belgium アントワープ/ベルギー
アントワープ万国博フィンランド館 (コンペ1等入選、1929-30)
The Finnish pavilion for the Antwerp World Fair
Suomen paviljonki maailmannäyttelyssä

付：トウルクのアルヴァ・アアルト建築作品

Alvar Aalto Works in Turku

- ① トウルク・サノマ新聞社 (1928-30)
Turun Sanomat Newspaper Office
- ② トウルクの農業共同組合本部とフィンランド劇場 (1927-29)

HAPPENING 1999/2000

Tokyo Contemporary Design Exhibition



ハプニング 1999/2000・レビュー

原宿、青山、渋谷、代官山エリアの28のブティックやカフェなどの店舗内で行われたインテリア・家具デザイン展のレポート

デザイナー自身による作品発表の場としてスタートしたイベント、HAPPENING。この秋、その2回目がおこなわれた。会期は10月8日から17日までの10日間。出展者は昨年の約2倍の30組。展示エリアも青山、原宿、渋谷から代官山まで拡大され、新たにオランダのFRAME誌による大賞が設置された。会期中にはデザイナーやジャーナリストも多く来日。2年目にしつてすでに、メインイベントのひとつとしての位置づけを確保したかたちだ。

文：岡田栄造

Text: Eizo Okada

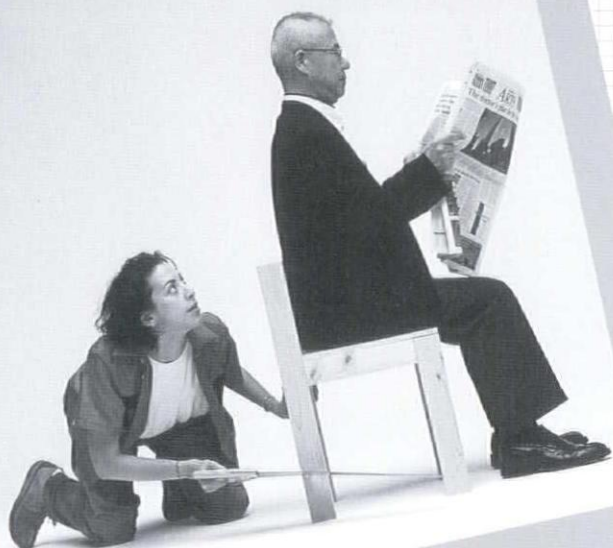


photo: Masayuki Komatsu



36°C / FLASK



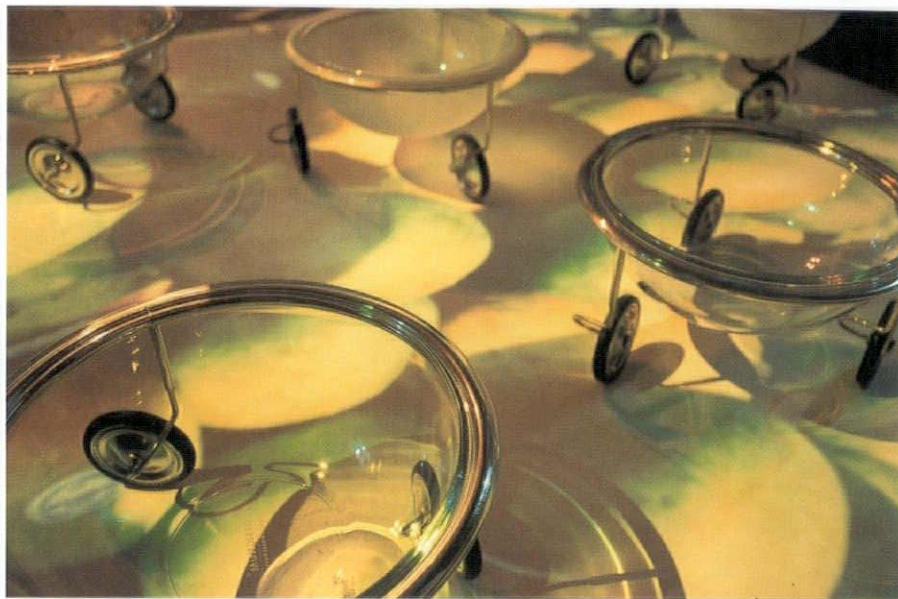
触 / Living Type
photo: 新 良太

title: Dutch View

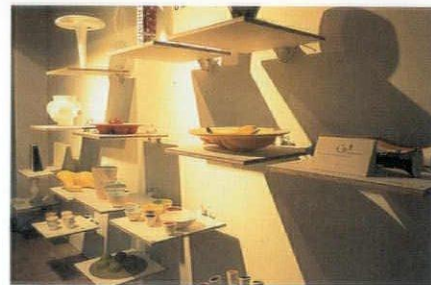
site: trico / design shop

information: tel. 03-3486-1790 (trico)

STALLINGA、COR UNUM、DESIGNUM、DMD。
オランダの4つのデザインレーベルによる展示が、原宿のTRICOを会場におこなわれた。STALLINGAはプロダクトデザイナー、ヘンク・スタリングが主宰するレーベル。展示されたPull Lampも彼のデザインである。何の変哲もない電球だが、それを吊しているコードがスイッチ（引っ張るとつく／消える）を兼ねているという作品。COR UNUMは1953年に創設されたセラミックメーカーで、最近ではオランダの建築家をデザイナーに起用したシリーズで注目を集めている。3つの壺が縦横に交差したような作品3-VAASはNL Architectsによるデザイン。彼らの建築理念が端的に表現されている。DESIGNUMは、グラフィックデザイン事務所 Vormgeversassociatie が起こしたレーベルである。出品されたWall Clock DKは、すりガラスの円盤の奥に針の影だけが黒く見えるという時計。ガラスを引っかけるフックが目盛りを兼ねている。キャスター付きのフルーツボール



Fruits on Wheelも同レーベルの作品である。ドローグデザインの作品を製品化していることで知られるDMDは今回、ドローグの作品数点とともに、自社のブランドTake Itからリチャード・ハッテンのデザインによるフルーツトレイを出品していた。



H Design Associates, Japan

title: H Design Products 1999

site: Kiss Building / ex club

information: tel. 03-5354-5435

url. <http://www.h-design.com>

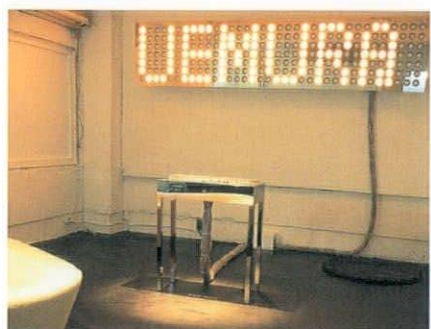
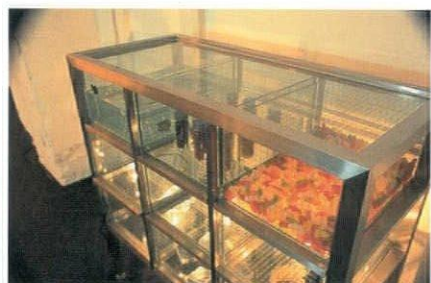
H Design Associatesは青山通り沿いの小さなビル（KISS BLG）全体を使って展示をおこなった。3つの展示フロアのうち、ひとつにはTIME&STYLEで扱われている彼らのブランドFAVORITE Hのシリーズが、残り2フロアには黒川勉、片山正通それぞれの新作が展示された。

黒川勉の新作はテーブルと椅子、照明。テーブルMoxamはちゃぶ台という使い古された機能に新たな生命を与える試み。天板を緑青仕上げにしたダイニングテーブルで、壁に掛けると落書き用のボードとして利用することができる。ハーフミラーを利用した照明Flowは昨年のハブニングで発表されたものの発展形である。シェードを二重にし、内側を歪ませることで、透明かつ複雑な光源を作り上げることに成功している。椅子Polineは、手業のような質感をプラスチック成形で実現しようとした意欲的な試みである。

それに対して、片山正通の新作は3つのジョークといってよい。ファブリックで作られたバスタブ、ガラスの箱の抽斗、245個の電球でできた



ディスプレイシステム。その完成度の高さゆえに、見るものを妄想の世界に引き込むような作品である。特にディスプレイシステムは、電球と同数のスイッチがついたコントロールボックスで操作できるようになっており、来場者の人気を集めた。



title: Mr. Tide's Room

site: abode 1F / furniture shop

information: tel. 03-3486-0100 (abode)

青山のインテリアショップ、アボードの1F全体をつかってインスタレーションをおこなったのは荒木みどり。デザイン誌の編集者あるいはスタイリストとしても知られている彼女は、バーやショップのスペースプランをおこなうクリエイターでもある。今回は、ショップ空間の中に架空の人物MR.TIDEの部屋を作り上げた。来場者は白いペンキ塗りの欄に挟まれた細長いエントランスを進み、小さな赤い扉を開け身をかがめて部屋に入る。そこには用途が変換された4種のレディメイドが配されている。公園でよく見る熊の乗り物には背中に穴が開けられ、ガラスの円盤が乗せられている。カントリー調の木の椅子はなぜか座面だけが透明なアクリルに取りかえられている。自動巻き取り式ホワイトボードにはいくつかのイメージが印刷されてダイニングテーブルに仕立てられており、必要に応じてテーブルトップの絵柄を変えることができる。壁の欄には白い照明が並んでいるが、それは洗剤ボトルを型どりしたもので



ある。この部屋の中で、レディメイドは日常性を奪われることなく別の機能に転換されているために、来場者は見慣れた光景が別の次元に投影されているような奇妙な感覚を覚える。その結果、日用品に対する現実の固定観念が相対化されたとすれば、それが彼女の目論見である。



RADI designers, France

title: Whippet Bench

site: Issey Miyake Pleats Shop

RADIという名前はResearch, Autonomous, Production and Industrial Designの頭文字を並べたもの。パリと東京にオフィスを構えるデザイングループで、メンバーは5人。東京オフィスを設立、運営しているのはIDEEの家具デザインで知られているクラウディオ・コルッチである。家具やショップデザインのほか、フィリップ・スタルクがセブンイレブンのためにデザインした商品のテクニカルサポートをおこなうなど、デザインの多くの領域で活動している。RADI DESIGNERSがデザインする作品、たとえば猫のための遊具や、縁にクッキーが付いたコーヒーカップなどからは、人とモノとの凝り固まった関係をうち破ろうとする姿勢が見て取れる。「オブジェクトに進化を」が彼らのコンセプトだ。今回展示されたWhippet Benchも彼らのそうした態度をあらわしている。犬の頭から背中中のラインを引き延ばし、半円を描くように成型されたFRPのベンチは、人にある種の不安な気持ちを抱かせる。それ



はおそらく、このベンチの形態を根拠づける機能がどこにも見えないことによる。ほとんどのデザインが多かれ少なかれ機能の投影としてかたち(イメージ)を生み出すのとは逆に、彼らはイメージをただ繰り返し、それをベンチと呼ぶのである。

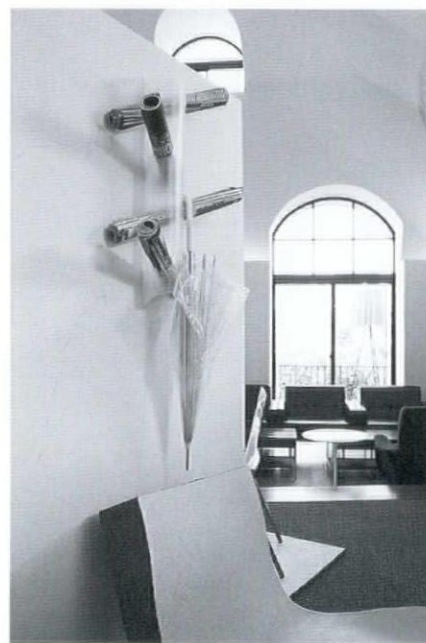


title: Marilyn, I Can See Your Nickers!
 site: Nolita Street Apartment 3F / salon
 information: 03-3486-1790 (trico)

EL ULTIMO GRITOはロンドンに拠点を置くデザインユニットである。ロベルト・フェオ、フランシスコ・サントス、ロザリオ・フルタドの3人で構成されている。HAPPENINGの直前に開催されたロンドンの100% DESIGNでは、なんと3年連続でBlueprint Awardの大賞を受賞した。彼らの展示会場は原宿のNOLITA STREETAPARTMENT。ダイニングバーの中央部分に白いスタンドを置いてそこに作品を展示、その周りにも家具をいくつか配した。今年の注目はなんといってもBlueprint Award受賞作のGOOD MORNING MONEYPENYだろう。プラスチックシートを筒状に丸め、いくつか穴を開けただけの作品だが、これを壁に留め、丸めた雑誌などを穴に差し込むとコートハンガーになる。これ以上ないほどシンプルで、それでいてユーモアに溢れ、かつ機能的な作品。つねに素材を見つめ直し、そこに新たな可能性を見いだそうとする彼らの態度が明快に表現されている。その他、アクリル板を折ることで



背もたれの曲面を作り出した椅子や、医療用のチューブでできたソルトシェイカー、ゴムのたわみを利用したマガジンラック付きテーブルなど、それぞれにデザインアプローチは異なるものの、すべてが彼らのコンセプト“MINIMAL MAXIMUM”を実現しており、見る者を驚かせる。



Case Real, Japan

title: Non Title / 無題
 site: SOSU / shoes boutique
 information: 092-521-3458

二俣公一と浜本一樹、このふたりによるデザインユニットがCASE REALである。ともに建築を学んでいた彼らがユニットを結成したのは1997年、以後福岡に拠点を置いて活動している。ユニット結成の目的は「人とモノとの関係をあらためて問い直す」こと。代表作CONCENTSは、影の存在であったコンセントをインテリアオブジェとして再認識させる作品である。彼らは今回、表参道のブティックSOSUを会場に、CONCENTSを含む5作品を発表した。新作のひとつCHAIR AND CHAIRは、ふたつの椅子を背中合わせにし、背もたれ上部を蝶番で連結したものの。それぞれの椅子は後脚が短いため、通常座面が後ろに傾斜した状態となっているが、背面を金具で留めると後脚が宙に浮き、背もたれが立った状態となる。形態のアンバランスが機能に可能性を与えており、金具留めというあまりにもスムーズでない解決法が、人の過剰な関与を要求する作品。彼らのコンセプトが、以前のどの作品にも増してよく伝わって

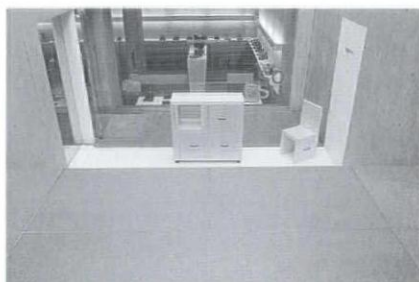
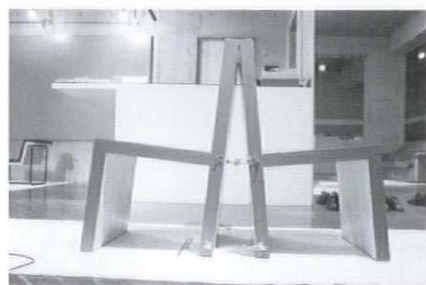
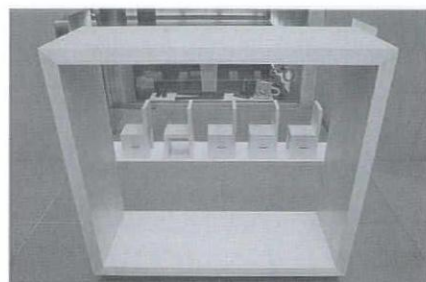


photo (左右): 北村元宏

る。ONEと題された作品は、椅子（フィッティング時に使用する）と靴の展示什器を兼ねたもの。椅子を箱にはめ込むとそのまま什器の一部となる。今回の展示はSOSUのシューズデザイナー三原康裕とのコラボレーションを兼ねていたため、ONEはHAPPENING終了後もショップに残され、実際に使用されている。



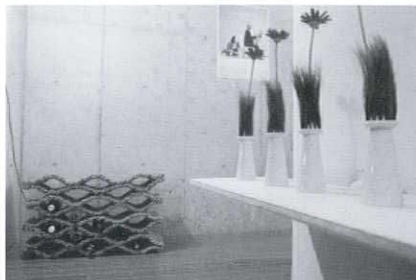
title: Touch and Feel

site: KO1 / art & hair salon

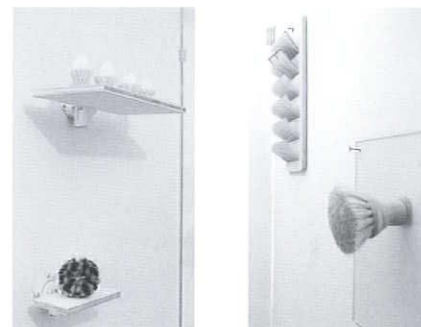
information: 03-3486-1790 (trico)

◎ Happening FRAME Award: 2nd prize

D.I.M (デー・イー・エム) は、DIE IMAGINÄRE MANUFAKTUR の略。「想像力に富んだ製造業」といったところだろうか。ベルリンにある、盲目の人々の労働施設が母体となっているプロジェクトである。120年にわたって活動を続けてきた同施設では、ブラシやバスケットといった日用品が製造されている。デザインユニット、フォークト・アンド・ワイツェネガーはこの施設の活動にインスパイアされ、D.I.M プロジェクトを開始した。彼らは施設内に小さなデザイン事務所を設置、何人かの若手デザイナーとともに、ブラシの製造技術を利用した日用品をデザインした。1998年以降、それらは工場で製造され、販売されている。フェイス・ブラシやマッサージ用のブラシといったブラシ製品から、フラワー・ベース、フルーツボール、ペーパークリップといったものまで製品は30種類以上にわたる。今回、そのほとんどが展示された。会場はさながらブラシの世界。つまり、ブラシの製造技術が社会の中心だったら



こんな日常なのだろうかと思像するほどに、楽しくもあり、かつ現実を相対化してくれる。そして、すべての製品が意外なほどに機能的なのである。デザインと社会との関係という点で、このプロジェクトが革新的なものとなったのは、そのプロセスが何よりも魅力的な結果（製品）に結びついたことによるだろう。



elephant design, Japan

title: 空想家電

site: Gallery Voice / gallery

information: 03-3373-5471

エレファントデザインは1997年に設立された。家電製品のモックアップをCGでつくり、企業に提供している。今年からは、欲しいデザインを自分たちで企画し、メーカーに作ってもらおうという「空想家電」のプロジェクトを立ち上げ、いわゆる「家電のインディーズ」としても活動を開始。ネット上で商品のアイデアを募集している。アイデアはCGで公表され、購入希望者が最小ロットに達した時点で製造、販売される。現在、携帯電話カバー、ファックスなどの製造販売を計画し、着実に購入希望者を増やしている。彼らが提案しているプロダクトには「スイートな（可愛い）」ものと「INSIPID な（味気ない、無味乾燥な）」ものというふたつの系列があり、今回出展した3種類の家電はそのうちの「INSIPID」にあてはまるものである。素材には普段カウンタートップなどに使われている人工大理石（コーリアン）が使われている。深みのあるつやのない白で覆われた四角い炊飯器・電子レンジ・冷蔵庫は、



他のほとんどの家電（丸く、無駄なディテールに満ちた）の対極にあるといってよく、存在するだけで強烈なメッセージとなっている。すべて実際に使用可能。彼らのホームページでは、これらの製品を実際に注文し、購入することができる。価格は注文数に応じて変動、当然ながら多く注文するほど安くなる。

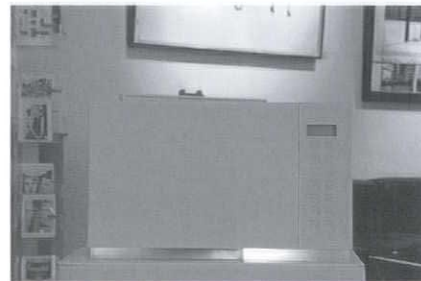
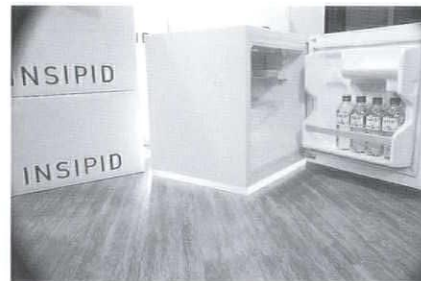


photo (左/下): TS Studio

A.Z.B, Japan

title: 太陽のネガ最終モデル

site: VAL / bar

information: tel. 03-3721-6814

昨年に引き続き参加のA.Z.Bは、彼ら自身がデザインを担当したバーVALで展示をおこなった。「太陽のネガ最終モデル」と題された作品は、天板にギターが埋め込まれたテーブル。



Hidehori Kasagi, Japan

title: OCL=Outdoor Chair for Living

site: X-Large / boutique

information:

tel. 0422-21-1890

笠置秀紀は神宮前のブティックX-LARGEにて展示をおこなった。作品はコンクリートの地面が隆起してできたような椅子。タイトルはOUTDOOR CHAIR FOR LIVING。



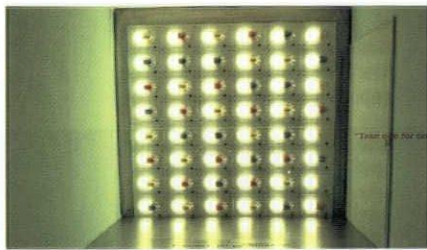
EXIT metal work supply, Japan

title: Take One for One Night [capsule light: Jamo 2000]

site: Va Sara / boutique

information: tel. 03-5227-1860

EXITは彼らにとって初の量産製品となるJamo 2000を壁面いっぱい並べての展示。カプセル状の葉をイメージさせるその照明は製品としての完成度も高く、価格も手ごろだ。(本誌11月号掲載)



Inflate, UK

title: Memo Lounge

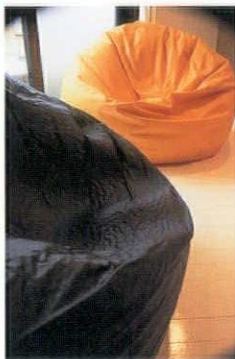
site: Final Home / Kosuke

Tsumura / boutique

information:

tel. 03-3486-1790(trico)

Inflateは今回、ロン・アラッドとのコラボレーションによるMEMOを出品した。坐ったまま、掃除機で空気を抜くと身体にフィットしたソファになるというオブジェ。



FLASK, Japan

title: 36°C

site: Neutral / boutique

information: tel. 03-3486-1790 (trico)

◎Happening FRAME Award: 1st prize

FLASKは内田茂樹、松本直子、佐藤隆一の3人によるデザインユニット。彼らは感温塗料を用いた椅子とテーブルを出品、人とモノとの関係を問い直す試みとして見事FRAME AWARDを受賞した。(本誌11月号掲載)



Intentionallies, Japan

title: ---

site: UA Cafe / boutique

information:

tel. 03-5464-3752

インテンショナルリーズは神宮前のUA CAFEでの展示。作品の椅子とテーブルはカフェ内に設置され、実際に坐って食事をするこもできた。



JAM, UN

title: The Millennium site: Devinette / boutique

information:

tel. 03-5410-3081

(APPTO)

JAMは Jamie Anley、Astrid Zala、Matthieu Palliardによるデザインチーム。彼らは今回、代官山のDEVINETTEで展示をおこなった。作品はウレタン製の照明と簡易住宅。



Kei Tominaga + Takayuki Miyoshi, Japan

title: ...On the floor.

site: Vision Network

information: tel. 03-3331-1577

三好隆之と富永桂のふたりは神宮前のカフェに作品を設置。カフェの椅子、テーブルは彼らの低いテーブルと椅子に置き換えられた。アンバランスに見えて飲み物がこぼれないテーブルが印象的。(本誌11月号掲載)



LivingType, Japan

title: 触

site: Bil Air / boutique

information:

tel. 070-6101-9206

email: mail@lvtp.jp.org

◎@SHIBUYA PPP

Award: 1st prize

LivingTypeはアーティスト中田和也を中心に結成されたユニット。HAPPENINGではフェイクファーの床、オーガンジーのスクリーンによる「試着室」を展示した。(本誌11月号掲載)

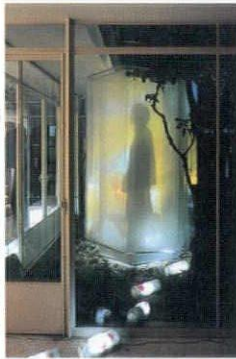


photo: 新 良太

Masayo Ave, Italy

title: Design + Creation

site: Tsumori Chisato / boutique

information:

tel. 03-3486-1790(trico)

阿部雅世はミラノに拠点を置くデザイナー。彼女は今回、麻材のウレタンチップを利用したクッションとフェルトを編んだシートを展示。素材を知り尽くした彼女ならではの作品である。



Michael Sodeau, UK

title: ---

site: Advanced Cique / boutique

information: tel. 03-5411-6520 (Orizzonti)

Michael Sodeauは骨董通りのAdvanced Ciqueにて展示をおこなった。ここ何年か続いている縁による彫刻的なかたちの追求は、今回、瓶のようなかたちの大小の照明として示された。



Nanae Hara, Japan

title: ヒミツキチ Agra

site: XP / cafe restaurant

information: tel. 0166-34-0898(Furniture Design Agra)

フェイクファーによるベッドのような家具が印象的な座なえ。渋谷のレストランXPで展示をおこなった彼女は、今回、バッグのような照明で、ポリプロピレンという新しい素材に挑戦していた。



photo: 宮坂恵都子

Ou Baholyodin, UK

title: Ou Baholyodin
site: abode 2F / furniture shop
information:
tel. 03-3486-0100 (abode)

OU BAHOLYODIN はロンドンに拠点を置くデザイナー。彼はアボードで、花器やソルトシェーカーなどのテーブルウェア、テーブル、椅子など多くの新作を発表した。



Ross McBride, Japan

title: Time Table
site: Hysteric Glamour
information: tel. 03-3470-6526 (Designatorium)

ROSS McBRIDE は今回、渋谷のHYSTERIC GRAMOURにて作品を発表。壁に並べられたグリッドクロックと、巨大なデジタル式時計を天板にしたテーブルが印象的な展示だった。



The Loop Project, Japan

title: The Loop Project, Ou/Ross/Kanae
site: abode 2F / furniture shop
information: tel. 03-3486-0100 (abode)

OU BAHOLYODIN、ROSS McBRIDE、塚本カナエによるプロジェクト。使用済みのウイスキー樽から作られた木材をもとに家具をデザイン。アボードにて発表した。



photo: abode

Yuichi Takeuchi, The Netherlands

title: Ookina Kodomo / 大きな子供
site: Nolita Street Apartment 1F / deli cafe
information: 03-3486-1790 (trico)

オランダ在住のデザイナー竹内友一は今回、通常の2倍のサイズの椅子とテーブルを展示した。来場者は椅子によじ登り、天板を下から見上げることとなる。



parabolart, Japan

title: Reflex
site: Clas Six / boutique
information:
email: info@parabolart.com, url: http://parabolart.com
PARABOLARTは5人のメンバーによって構成されるデザイン集団である。見慣れた素材に新たな可能性を見いだすことを得意とする彼らは今回、反射板をインテリアオブジェに変化させた。



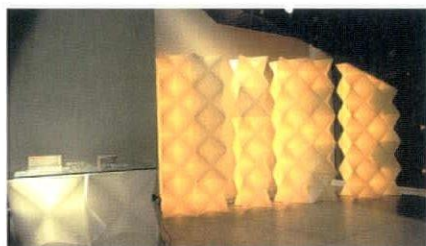
Shin & Tomoko Azumi, UK

title: Wire Frame
site: The Man Aqua Girl Loved / boutique
information: tel. 03-5410-3081 (APPTO)
安積伸、安積朋子はロンドンに拠点を置くデザインユニット。近年はワイヤーフレームによる家具のシリーズで高い評価を受けている。今回はその新作のハイバックチェアを展示した。



Tom Dixon, UK

title: Installation for Happening
site: INDIVI Life Aoyama / houseware shop
information:
tel. 03-5485-8461 (E&Y), email: info@eandy.com (E&Y)
HABITATのデザイン部総責任者としても精力的に活動しているTOM DIXON。自由に積み重ねることができる照明ユニットOCTOを、骨董通りのINDIVI LIFEに展示した。



Ronan Bouroullec, France

title: Installation for Happening
site: Harajuku INDEX / boutique
information:
tel. 03-5485-8461 (E&Y), email: info@eandy.com (E&Y)
フランスの若手デザイナーとして常に高い評価を受けているRONAN BOURULLEC。彼は原宿のブティックINDEXで展示をおこなった。作品はテーブルウェアが数点。



soup design associates, Japan

title: WDH
site: LHP / boutique
information: 03-3720-1470
個々に専門を異にする5人のメンバーにより結成されたSOUP DESIGN ASSOCIATES。彼らは段ボール業者との共同作業の中で、「軽く、折り畳め、運びやすい」段ボールの家具をデザインした。(本誌11月号掲載)



Yoshiyuki Hibino, Japan

title:
Seeing New Balance
site: Christophe Lemaire / boutique
information:
email: hbn222@aol.com
名古屋に拠点を置いて活動している日比野義之。彼は代官山のブティックCHRISTOPHELEMAIREにて展示をおこなった。積層合板と透明アクリルを組み合わせた椅子が印象的。



ハプニング・インフォメーション

Happening Information

会期：1999年10月8日(金)～10月17日(日)

会場：→ site map

主催：Airconditioned インフォメーション：trico (tel. 03-3486-1790) / url. <http://happening.jp.org>

[Awards]

FRAME Award

オランダのインテリア雑誌FRAMEの賞

副賞：FRAME誌の掲載権

選抜方法：7人の審査員による審査会で協議する

審査員：

ロバート・ティーマン (FRAME編集長)

貝島桃代 (建築家)

常盤響 (グラフィックデザイナー)

栗野宏文 (ファッションクリエーティブ)

Airconditioned

審査基準：most innovative design concept

受賞者：

1st Prize / Flask

作品タイトル「36℃」

2nd Prize / D.I.M

作品タイトル「Touch and Feel」

@SHIBUYA PPP Award

雑誌@SHIBUYA PPPの賞

受賞者は@SHIBUYA PPP volume 2 (12月中旬発売号)で紹介される

選抜方法：ハプニングカフェに設置された投票箱に入れられた参加者投票をもとに、当編集部で協議の上決定

審査基準：展示作品と展示場所全体の高度で有機的な結合

受賞者：

LivingType

作品タイトル「触」



[Events]

HAPPENING Cafe ①

インフォメーションセンター、プレスオフィスとして、期間中開場した。

期間：10月8日(金)～17日(日)

HAPPENING Opening Party

期日：10月8日(金)

会場：Sabbath Tokyo

DJs : DJ Comp, Inazuma ★ K, Yoshihiro Sawasaki, Kaoru Inoue [Chari Chari], Yoichiro Ito [Akakage], Tomoji Kurasyo [bonjour record], Mario [Nu Balance Production], Toshio Matsuura [United Future Organization], Atsushi Yanaka [Tokyo Ska Paradise Orchestra]

Live : Yen Calling, Combo Piano

Performer : Quaraga

Vj : Atsushi Tezuka [Magic Bus Productions]

HAPPENING / FRAME Award Party ②

FRAME Award の表彰式・パーティ

期日：10月13日(水)

会場：VUENOS TOKYO

DJs : Yoshinori Sunahara, DJ EY3 [Boredoms], Yukihiro Fukutomi, SASA [Electric Saboo]

Performer : Quaraga

Vj : TRICK#7

HAPPENING Talk Session ③

期日：10月10日(日)

会場：桑沢デザイン研究所

パネラー：

Robert Feo (El Ultimo Grito)

Nick Crosby (Inflate)

Jamie Anley (JAM)

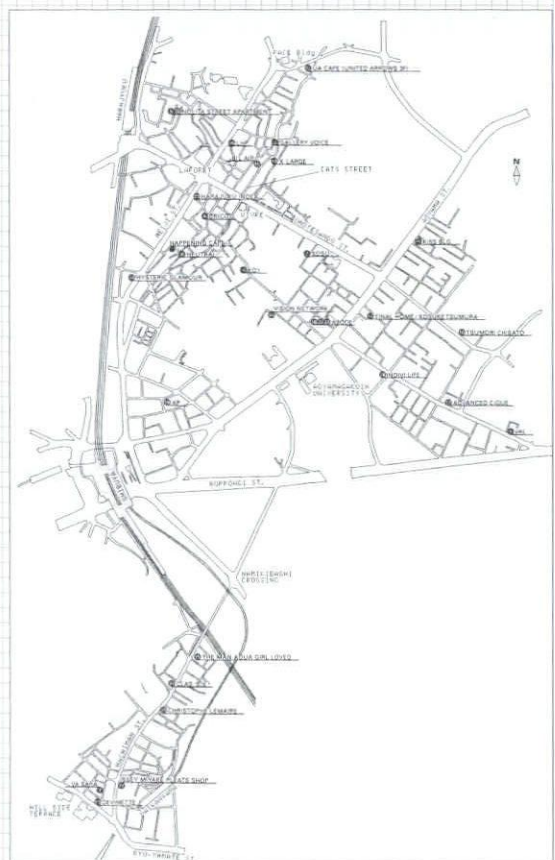
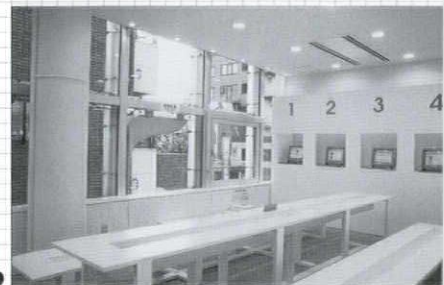
Azumi

Ou Baholyodin

Masayo Ave

フォトクレジット (表記以外)

p93-100: Motohiko Kitamura



site map

安全で快適な社会づくりのために…

MIWAは製品に〈やさしさ〉を加えました。

キーがさし込みやすいスリパチ状の鍵穴と
大型キーヘッド付きリバーシブルキーを
持つ「UR」シリンダー



ロックにも数々の工夫

握りやすく、操作が楽な
樹脂製の大型サムターン



使いやすく、衣服の引っか
かりなどを未然に防ぐ形状
のレバーハンドル

ロックなど戸締りのための機器は、確かな防犯
性能に加え、健常者はもちろん目や身体の不自由
な方にも使いやすく、操作や通過の際に安全
であることが大切です。

MIWAは、この考え方に沿って、エレクトロニクス
や新素材など最新の技術を駆使しながら、独創
的なアイデアで製品の開発を進め、ご家庭の戸締
りから、たとえば福祉関連施設などの総合管理
まで、幅広いニーズに細やかに対応できるバ
リアフリー対応製品をラインナップ。プランニング
から施工、メンテナンスまでの一貫した総合力で、
安全で快適なセキュリティ提案を行っています。



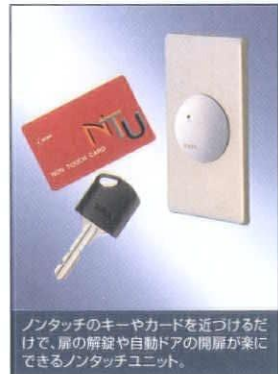
鍵違い数約1億5千万通りの
「UR」シリンダー（標準搭載）

リモコン施錠だから楽で
便利な「楽楽Key」。



電源・制御部・アンテナを一体化した
リモコン錠なので既存の扉への取付け・
取替えも簡単。

かざすだけで解錠。便利な
セキュリティシステムの構築に。



ノンタッチのキーやカードを近づけるだ
けで、扉の解錠や自動ドアの開扉が楽に
できるノンタッチユニット。

力の弱い方にも使いやすい
ワンアクションのドアハンドル。



引く、押すのワンアクションでらくに開扉
できる引用グリップハンドル（左）と
玄関ドア用プッシュプル錠（右）。

特にゆっくりした速度で扉を
閉じるので通過時も安心。



ドアをいっばいに開いた状態から70～
80度あたりまで特にゆっくり扉を閉める
ディレードアクション装置付ドアクローザ。

*ここに紹介した製品は一例ですが、他にも各種高級ロック、各種セキュリティシステムとその機器類、ドアクローザ、建築金具類など豊富に揃えていますのでご相談ください。

アフターメンテ&リフォーム



美和ロックサービス代行店〈SD〉を全国に展開、万全のアフターメンテ体制でお応えしています。

SDとは、美和ロックが専用の施設で専門技術や社会的モラルの大切さなどの研修を行い、厳重な審査を経て認定したロックミス（錠前技術者）です。



完璧な融合果たした アフリカンミュージック

ぼくの音楽的視野を広げたのは、中学生の頃にブルースが好きになったことだ。それから35年後ほど経った今でも、その衝撃の度合いを忘れることは決してない。それに匹敵するもうひとつの衝撃と言え、80年代の半ば辺りにアフリカの音楽を聴くようになったことだが、「衝撃」という言葉が相応しいかどうか……。つまり、初めてブルースを聴いた時の「一気に目からウロコ」というより、気がついたら虜になっていたと言った方が近いだろう。それにしても結果的にはショックの大きさに変わりはない。一度アフリカの音楽が好きになると、それを聴いた時の満足感は何にも勝るものだ。

もちろん一口に「アフリカ」と言っても、その中の様々な音楽文化には大変なヴァリエーションがあるが、大雑把に共通点を挙げるとすれば、ニュアンスに富んだリズム感の洗練度と時間的な余裕というか、テンポとかビートとは無関係のゆったりとした何か、これがぼくにとってアフリカ音楽の最大の魅力かも知れない。

西アフリカのマリの音楽は、一度聴けばブルースとのつながりが誰にでも分かりやすい。そのせいか、ぼくはこのマリの音楽を特に頻りに聴くが、聴けば聴くほどマリの中にも複数の異なった音楽文化があることに気がつく。多くのミュージシャンはそのいずれかひとつのスタイルで活動するものだが、10月に初来日を果たしたアビブ・コワテは珍しくいくつかの

スタイルの要素を混ぜ、さらにヨーロッパの音楽からの影響を取り入れた独自のサウンドを作り上げている。そのサウンドの一番の特徴はアビブ自身のギターだ。これはガット弦を使ったセミ・アコースティック、つまりボディが薄くてアンプを通すことを前提としているが、同時にスパニッシュ・ギターのような柔らかな響きがある楽器だ。これをアビブはややフォークっぽいフィンガー・ピッキングで弾き、時にはアフリカ音楽にない意外なコード進行を使ったり、突然強いアタックでジャズを思わせるフレーズを聴かせたりもする。彼が率いるグループ「バマダ」は、10年以上前から一緒に活動しているだけあって、かなり流動的に見えるアビブの編曲に、とても柔軟について行き、一見普通のように思えるベース、ドラムズ、パーカッション、ギター・ハーモニカの編成で、西洋的な雰囲気漂わせつつも、あくまでアフリカンなグルーブを刻む。また今回のツアーでゲスト参加していたケレティギ・ジャバテはバラフォン（アフリカ風マリンバといった楽器）と電気ヴァイオリンでこのミックスをさらに面白いものにし、曲によって登場したトーキング・ドラム（隣国のセネガルの音楽でよく使われるのに、マリではちょっと珍しい存在）や、低音のバンジョ（という用語があるかな）を思わせるカマレ・ンゴニによる味付けも非常に効果的だった。メロディとリズム、曲の構成と音そのもの、そういった諸々の要素がほぼパーフェクトに組み合わせられたコンサートだった。唯一の不満は、混み合ったオール・スタンディングのCAYで2時間半にも及んだ演奏の途中でこの中年の腰が砕けそうになったこと！

C u l t u r e C a f e

MUSIC

今月の音楽

アビブ・コワテ & バマダ

ピーター・バラカン

びーたー・ばらん／ブロードキャスター

1974年に来日以来、目下25年間東京在住の英国人ブロードキャスター。最近500回目の放送を記念したTBSテレビ「CBSドキュメント」の印象が強いせいか、もともと音楽畑の人間であることを知らない方が多いらしいが、ご本人は毎週土曜日の朝NHK-FMでの「ウィークエンド・サンシャイン」と日曜日の朝インターFMでの「バラカン・ビート」を是非チェックして欲しい、とのこと。

会場：青山CAY

日時：1999年10月9、11日



写真＝きはらもりお



「マ・ヤ」AFPCD-5246



現代の劇場技術を写す ハイブリッド演出

物語は1850年12月、お上に捕えられ、処刑のために大戸の関に護送される国定忠治と護送役人による会話と、その8年前、最後に故郷を追われることになった様々な事件を、短いカットを暗転で繋ぐ劇画のコマ送りのような手法で見せてゆく。時にスピーディな台詞回し、時に無言のスローモーションなど、観客を飽きさせない密度の高い演出で、本来ウェットな義理人情の物語をクールで軽妙なエンターテインメントに仕上げている。

黒一色のセゾン劇場の特色を生かし、背の低いつぎはぎの幕によって四角く区切られた主舞台と、幕より張り出した前舞台が主な演技領域である。幕は歌舞伎の常式幕のようにワイヤーで吊られ、軽妙な音とともに開閉される。前舞台は忠治と役人の会話に、後ろは事件の回想に使われる。回想場面はワゴンや吊り物設備を効果的に利用し素早く転換される。

高いプロセニウムを敢えて下げ、さらに幕で低く区切り、室内セットなども全てその高さに揃えるという徹底した水平指向の舞台構成は美しい。隠れ家やお寺の屋台は幕地と同様に木などを用いた自然派的表現であるが、枠組みは鉄骨フレームを露出させ、照明器具を吊る金属トラスも空間の基本形を切り取るベースの構成要素として存在感を主張させている。舞台美術に合わせるように、照明も、赤や青といった強い色彩は使わず、白熱電球系の黄色系の光と放電管の強く青い光のコントラスト

をコンセプトとしている。

現代演劇は時間軸を細かく制御する照明デザインで成立しているのだが、ここでは精緻な照明テクニックを使いながらも、放電管によって時間制御を意識的に放棄する照明の挑戦に興味を覚えた。放電管はスイッチオンから明るくなるまで時間差がある。その時間差をうまく演出に取り込み、フル点灯まで場面を引っぱり暗転する技術的な遊び心が新鮮であった。

この他にも赤城山のスライドが投影され、ナチュラルな素材による舞台空間との対比を際立たせたり、本物の鶏や生火を使用したりと、様々な形で巧妙に仕組まれた道具立てにより差異の明示を意図とした舞台演出であるのだが、それがまるで違和感のない軽さとして表出する。すなわち、異化された要素の感覚的再同化という現象が、この作品の様々な部分に現れている。建築でも顕著である、重さを回避するデザインと相通ずる時代性と言えるのかもしれない。

さて、セゾン劇場は、この作品のあと、「マレーネ」ひとつを残して、今年で閉館してしまう。1987年に華々しく幕を開け、90年代の中核をなす中劇場として素晴らしい作品と、それを支える舞台技術を生み出してきた劇場だけに、あっけない幕切れは実に残念である。考えてみると90年代の東京の演劇はあまりにも企業支援に頼りすぎていた。その間に観客の育成や社会システムとして舞台芸術創造基盤を構築しようという視座をいささか軽視していたのではないだろうか。今後は何が演劇を支えるのか。今からでも真剣に考えておく必要がありそうだ。

C u l t u r e c a f e

PLAY
今月の演劇

国定忠治

会場：銀座セゾン劇場

日時：1999年9月18日～10月11日

作：村山知義

脚本：山元清多

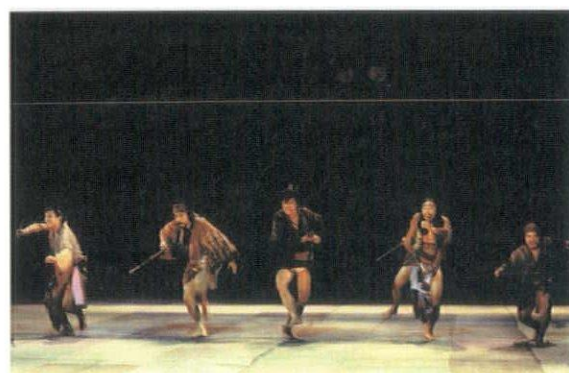
演出：串田和美

主演：市村正親

清水裕之

しみず・ひろゆき／名古屋大学教授

1952年名古屋市生まれ。1974年東京大学建築学科卒業。1978年～80年ハーバー大学留学。愛知芸術文化センター、彩の国さいたま芸術劇場など多くの公共文化施設の構想立案、プロジェクトマネジメントに参加。現在名古屋大学教授。建築家、劇場計画者。



写真＝稲越功一



Book Review

書評

建築の存在論がひらかれるとき

評者 松隈 洋



「時間のなかの建築」
モーゼン・ムスタファヴィー＋
デイヴィッド・レザボロー＝著
黒石いずみ＝訳
B5変型 144頁
鹿島出版会 2800円

たったひとつの言葉からまったく新しい視点をもたらされること。この本は、「風化（ウェザリング）」をキーワードにして、建築を考える従来のフレームをその大本から揺さぶられる鮮やかな印象を残してくれる。そこからは、長い歴史の中におけるモダニズム建築の特性を鋭く描き出しながら、その延長線上に、現代建築への批評性に富んだたくさんの知見が展開されているからだ。

著者たちは、まず、モダニズムの立脚点にあった工業化と大量生産が、建築の何を変えてしまったのか、についての考察から話を始めている。そこでは、どこでも成り立つ建築が目指された結果、型にはまった選択しか許されず設計の不自由度が増したことで、建築が地域独自の環境と無関係となり根無し草になってしまったこと、設計と施工の結びつきが希薄化して建築が抽象化したこと、などが指摘される。そして、バラバラにパーツ化された建築は、時間という試練に耐えられず、朽ちるに任せていることが掲載された写真からも痛いほど伝わってくる。

その一方で、それまでの伝統的な石造建築などの中には、連綿と、風化による汚れは建築をむしろ豊かなものへと仕上げていく重要な要素であるという認識と、それを造形表現にまで煮つめて考案されたディテールの手法が、共有されていた事実も対比的に紹介されている。

さらに彼らは、モダニズムのもつ普遍性への志向とは何だったのか、についても検討を加えていく。中でも、そこで中心的に触れられるル・コルビュジエの建築観の変遷についての詳細な考察は圧巻だ。彼の初期プロジェクトに特徴的な「白さ」の表現へ託されたもの、それは、急激な都市化によってゴミゴミとうす汚れてしまった生活世界の中へ、「健康、美、倫理」という清浄さを幾何学的で純粹無垢な造形として対置してみせることだった。そこには、むしろ風化による少しの汚れも許されず、完成後の建築の姿とは、表現された理想的なアイデアがただ単に壊れていく過程としか理解されていなかった。だからこそ、彼は、執拗なまでに竣工写真の中にそのビュアな状態を写しとどめようとしたのだ、という。

けれども、コルビュジエは、やがて、アルジェリアやインドの仕事にかかわる中から、風土の独自性を建築のデザインに取り込むことの意味に気づいていく。こうして、それまでの外部を遮断してい

た「平滑なファサード」に替わって、厳しい日差しを遮りながら風を通し、外と内をつなげて豊かな表情を外観に与える装置、「ブリーズ・ソレイユ」が生み出される。そして、晩年のインドに至っては、「白いことも白くあり続けることも目指さない立場」へと転じ、むしろ、風化がもたらす汚れをゴツゴツとしたコンクリートの素材感によって活かし、建築に存在感を与える方法をも獲得する。

ここには、かたくなまでの理念重視の姿勢から自由になり、その表現を大きく解放していったコルビュジエの覚醒の瞬間が書き留められている。彼は、建築を、孤立し固定した作品としてではなく、自然環境にさらされながら成熟していく実体として再発見したのである。

この本では、ほかにもカルロ・スカルパやエーロ・サーリネンの作品などが取り上げられている。そこでは、それらがやはり、「風化の事実を創造的に再解釈して建築の生涯を表現」しようとする意識的な風化のデザインであることが明らかにされている。

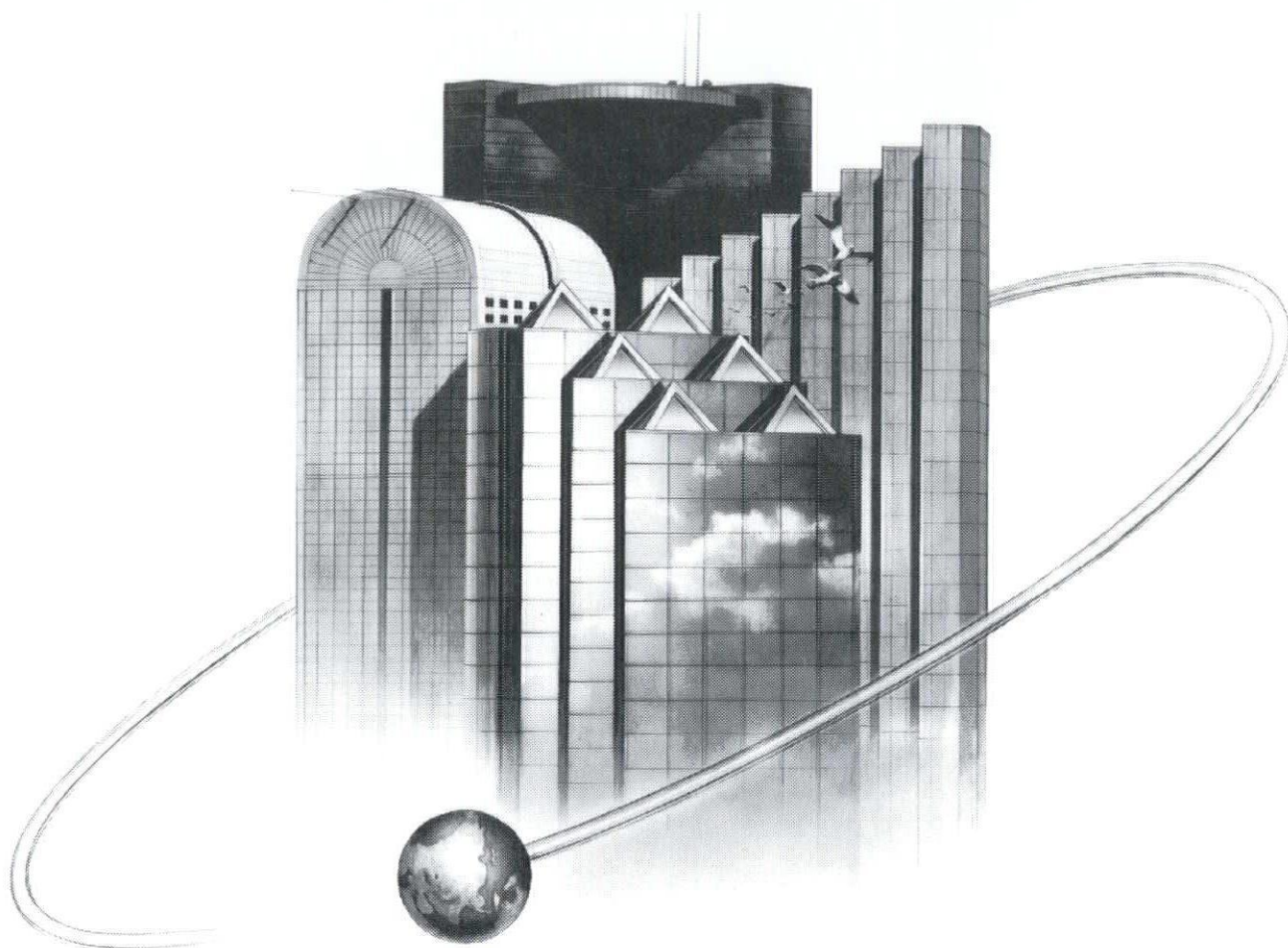
こうして、いつしか、著者たちは、次のような考え方へと誘っていく。

すなわち、風化とは、時間の痕跡が建物に刻まれていくプロセスであり、そのことによって、人はそこに自らの生きてきた時の厚みを感じ取ることができること。だからこそ、建築を環境の中で少しずつ変わり続けるものと理解し、汚れを味方にして、建物が経験する時間そのものをデザインすることが大切であること。むしろ、建築はそのことを通してはじめて建築という独自の存在になりうること。そして、そこには、過去－現在－未来を完結されたものと見なして常に新しくあらうとする進歩史観から、歴史をひと続きのつながりと重なりをもった“生きられた全体”としてとらえ、その連続性にこそ意味があるとする存在論への根本的な視点の変更が果たされている。

この本に流れているのは、“美しく古びゆくこと”の難しい現代建築の抱えるジレンマを自覚しつつ、それでも、建築が目の前にあり続けることのかげがえのなさへの確信なのに違いない。そして、著者たちと親交のあった横文彦氏の明快で美しい序文と、直接教えを受けた訳者の平易な文章からなる本書が、それをもっとも必要としている場所に紹介されたことを、何よりも意義深いと思う。

（まつくま・ひろし／前川建築設計事務所）

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

 **三機工業株式会社**

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL. 03(3502)6111

清らか、
爽やか、
和やかな環境づくり。



■空調設備工事 ■給排水衛生設備工事 ■給湯設備工事 ■その他建築付帯設備工事

ヤナセ設備工業

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

株式会社ヤナセ設備工業
〒105-0023 東京都港区芝浦1-11-4
電話(代表)東京(03)3455-8091

『建築の書物／都市の書物』

五十嵐太郎＝編

B6判 428頁

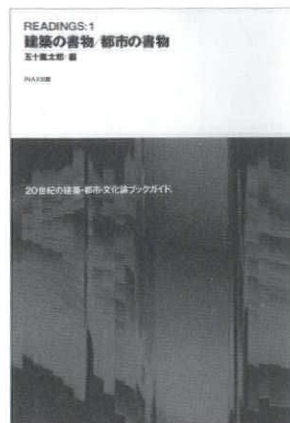
INAX出版 2200円

20世紀建築の展開を描き出すには、デザイン、思想、構造、あるいは作家論など、さまざまな切り口があろう。建築書というメディアの存在も大きな軸として数えられるに違いない。

本書は、今世紀に刊行された建築・都市に関する書物、論文から100点を選んで紹介しながら、批評的にレビューする。もちろん世界が対象だが、日本語で読めるものを基本としており、うれしい。100の書物は、「西洋近代建築」、「西洋現代建築」、「日本近代建築」、「日本現代建築」、「建築史」、「批評」、「都市」、「芸術」、「文学」、「思想」という10のカテゴリーで構成されている。さらに巻末には50のキーワードで1,000点の参考文献を挙げる充実ぶりである。

ル・コルビュジエ『建築をめざして』やS.ギーディオン『空間 時間 建築』といった近代建築の古典、磯崎新『空間へ』やR.コールハース『錯乱のニューヨーク』といった現代建築の里程標、あるいは、I.カルヴィーノ『見えない都市』など、名著・名論が続々と顔を出し、気鋭の評者たちの熱い言葉が各項にびっしりと並ぶ。100の名著のうち、果たして自分がどれだけ読んでいたか、理解しているのかは考えずに、眼にとまった書物から改めてゆくしかあるまい。R.バンハム『第一機械時代の理論とデザイン』において「読み取るべき無数のライン」があることを指摘して、「心して読め」と八束はじめがいうように。

そもそも、ギーディオンやバンハムといった、物つくらぬ評論家がイデオログとして牽引したこと自体が、言語と思想の先行した20世紀建築とメディアとの密接な関係を象徴しているのだ。「論」を論ずる本書こそが、きわめて今世紀的な現象を体現した存在のように思えてならないが。



『都市史図集』

都市史図集編集委員会＝編

B5判 296頁

彰国社 4600円

日本建築学会編『建築史図集』シリーズの姉妹版ともいべき渾身の1冊。都市の世界全史を図版で網羅した圧巻の図集で、解説文も密度が高い。環境共生、まちづくり、災害復興といった今日的課題に対しても本書から得られる示唆は大きい。



『図説 北京——3000年の悠久都市』

村松伸＝著

A5変型 112頁

河出書房新社 1800円

21世紀にもっとも注目される中国、その文化が凝縮された「皇帝の都」を豊富な写真でガイド。紫禁城の壮麗な宮廷文化、都市の形成、毛沢東の近現代を探究する。写真家・浅川敏と著者の抜群のコンビネーションが、北京をリアルに伝える。



『死を見つめる美術史』

小池寿子＝著

B6判 232頁

ポーラ文化研究所 1800円

「死の図像」を研究する著者が、死と哀悼、腐敗、祈り、運命、霊魂のかたちを通して、人類の死へのまなざしを描いた本書。古代、中世の西洋世界において、死とともに生きる「豊かさ」に驚く。終末思想の感じられない今回の千年紀末を問う。



『コモンで街をつくる——宮脇檀の住宅地設計』

宮脇檀建築研究室＝編

A4変型 228頁

丸善ブラネット 3800円

昨年10月に他界した建築家・宮脇檀の住宅地計画・設計を解説。ダンディな風貌と卓越した文才でしられ、住まいづくりに生涯を捧げた宮脇への鎮魂歌でもある。主要作品の設計プロセスから現況を丁寧に追った本書に、その業績を改めて思う。



『住まいにつどう』

佐藤浩司＝編

A5変型 256頁

学芸出版社 2800円

文化としての住まいとその担い手の人間との関係を探る『建築人類学』シリーズ後編。客家の一族300人が住む中国の円型土楼など、アジア11ヶ国のヴァンキュラーな居住文化の事例を紹介する。根源的な住生活は、つねに啓発される存在である。



『東京現代建築ガイドⅡ 2000's』

松葉一清＝著

B6判 256頁

鹿島出版会 2800円

'90年代に登場した東京の現代建築203件を取録。かつてポスト・モダン論を主導した著者の作品解説は、単なるガイドを超え、一つひとつが優れた建築評論となっている。「永遠のブームタウン」東京を本書と歩けば、元気な世紀末が見えてくる。



文化学院 土曜建築スタジオ 榎 文彦 講演会

日時：2000年1月22日(土) 15:00～16:30
会場：文化学院 講堂
東京都千代田区神田駿河台2-5
Tel: 03-3294-7551 Fax: 03-3292-8980
入場料：1,500円(当日会場にて支払いのこと)
定員：300名(先着順)
問い合わせ：MDS建築研究所(担当：宮崎)
Tel: 044-877-4383 Fax: 044-877-4383

研究会 開催

テーマ：プロフェッサー・アーキテクトと語る設計教育とデジタル環境
日時：12月10日(金) 17:30～20:30
会場：建築会館 会議室
東京都港区芝5-26-20 Tel: 03-3456-2051
パネリスト：大野秀敏、城戸崎和佐
コメンテーター：柳田武、五十嵐太郎
定員：80名(申込先着順)
参加費：日本建築学会会員 1,200円、
一般 1,500円、学生 500円(資料代含む)
申込方法：FaxまたはE-mailにて催物名称、氏名、
勤務先(所属まで)、住所、電話番号を明記の上、
下記まで申し込みのこと。
申し込み・問い合わせ：日本建築学会 事務局研
究事業課(担当：大野)
Fax: 03-3456-2058 E-mail: ono@aij.or.jp

公開講座 日本近現代建築史 1999 学の来歴～術の系譜

日本の近代、戦後建築を創造の累積としての「区
分史」から探る、早稲田大学近現代建築史研究室
主催による連続セミナー。
日程：
第3回 「吉阪隆正と建築計画学」(講師：重村力)
12月2日(木) 13:00～14:30
第4回 「都市計画学の境界を探る——その発生
と成立基盤から」(講師：佐藤洋一)
12月9日(木) 13:00～14:30
第5回 「方法の輝き——遺産としての建築と現
代」(講師：岡部憲明)
12月16日(木) 13:00～14:30
会場：早稲田大学大久保キャンパス52号館302
号室 東京都新宿区大久保3-4-1
受講料：各回500円
定員：50名(当日先着順)
問い合わせ：早稲田大学理工学部建築学科建築史
研究室(担当：倉方)
Tel: 03-5286-3275 Fax: 03-3204-5486

エンリック・ミラジェス& ベネデッタ・タグリアヴェ 展覧会

会期：11月13日(土)～12月19日(日)
時間：12:00～18:30 月曜日休館
会場：GAギャラリー
入場料：500円(団体10名以上 400円)
問い合わせ：GAギャラリー(担当：若松)
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14
Tel: 03-3403-1581 Fax: 03-3497-0649

桑沢デザイン塾 特別講座 受講者募集 デザインの21世紀

日時：2000年1月～7月 18:30～20:30
(全12回、各土曜日)
日程：1月29日／オリエンテーション(松岡正
剛+内田繁)、2月12日／養老孟子(解剖学)、2
月26日／田中一光(グラフィックデザイン)、3
月11日／山口昌男(文化人類学)、3月25日／伊
東豊雄(建築)、4月8日／日比野克彦(アート)、
4月22日／村上陽一郎(科学)、5月13日／中川
幸夫(造花)、5月27日／山本耀司(ファッション)、
6月10日／楽吉左衛門(陶芸)、6月24
日／柏木博(デザイン史)、7月8日／まとめ(松
岡正剛+内田繁)
会場：桑沢デザイン研究所(1/29、3/11は別会
場の予定)
受講料：60,000円(学生 36,000円)
申し込み・問い合わせ：桑沢デザイン研究所同窓
会 事務局(担当：石澤)
東京都渋谷区神南1-4-17
Tel: 03-3462-4029 Fax: 03-3462-4090

写真展 村井修の空間——光と形 1955-1995

会期：11月24日(水)～12月22日(月)
時間：10:00～20:00 期間中無休
会場：写大ギャラリー
東京都中野区本町2-9-5 東京工芸大学 中野キャン
パス内 Tel: 03-3372-1321
ギャラリートーク：「村井修・写真を語る」
12月4日(土) 14:00～16:00(先着70名)
入場料：無料
内容：1955年から1995年までの氏の代表作「記
憶の風景」、「写真都市」、「石の都市」、「AZUMA」、
「街かどのハーモニー」等よりモノクローム、カ
ラー約50点が出品される。
問い合わせ：東京工芸大学写真センター(担当：
吉村、栗津)
Tel: 03-5371-2735 Fax: 03-5388-7996

ライブパフォーマンス [cut] 公演

RE[]/Responsive Environment (アール・イー)
がプロデュースする、パーカッショニスト伊勢友
一による音をテーマにしたライブパフォーマンス。
打ち出される音により刻まれる時間。「刻ん
でゆくこと」という手法の重なりによって構築さ
れた新たな「全体性」が、時間と空間を媒体とし
てダイナミックな環境を実現させる。
日時：12月18日(土) 18:30開場 19:00開演
12月19日(日) 14:30開場／15:00開演、
18:30開場／19:00開演、各60分の公演予定
会場：Deluxe
東京都港区麻布十番1-3-3
入場料：2,800円
申込方法：Fax、E-mailまたはハガキに、住所、
郵便番号、氏名、電話番号、希望日時、人数を明
記の上、下記まで申し込みの事。
RE[]/Responsive Environment office
埼玉県志木市館1-1-6-703
Fax: 048-471-2038
E-mail: readmin@cup.com
問い合わせ：RE[]/Responsive Environment
office Tel: 048-471-2950

1999年 アルカシア建築賞 決定

アジア16カ国の建築家協会によって構成される
アジア建築家評議会(アルカシア)フォーラム
10が韓国ソウル市で開催され、A・Iカテゴリー
(住宅部門)で日本人として初めてゴールドメダ
ルを受賞した。この賞は、アジア全般の建築環境
の水準向上に努めアジアで活躍する建築家の模範
となる作品を奨励するために創設されたもので、
今年がその5回目。
受賞者：久保清一
作品：蜜柑花の家

お詫びと訂正

SD9911月号pp.62～63掲載の竹デリアの記事について下記
の通り訂正して、お詫び申し上げます。
誤 → 正
Intentionallies → Intentionallies
「花見月」 → 「花見季」
「アクアテリア」 → 「アクリテリア」
アルミ → アクリル
タイで見つけたフードカバー → 日用雑貨として売られて
いる竹細工の籠
「タイで30円程度で売られているものだが」部分は削除致し
ます。

MITSUBISHI
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター

機械室レスタイプ／乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

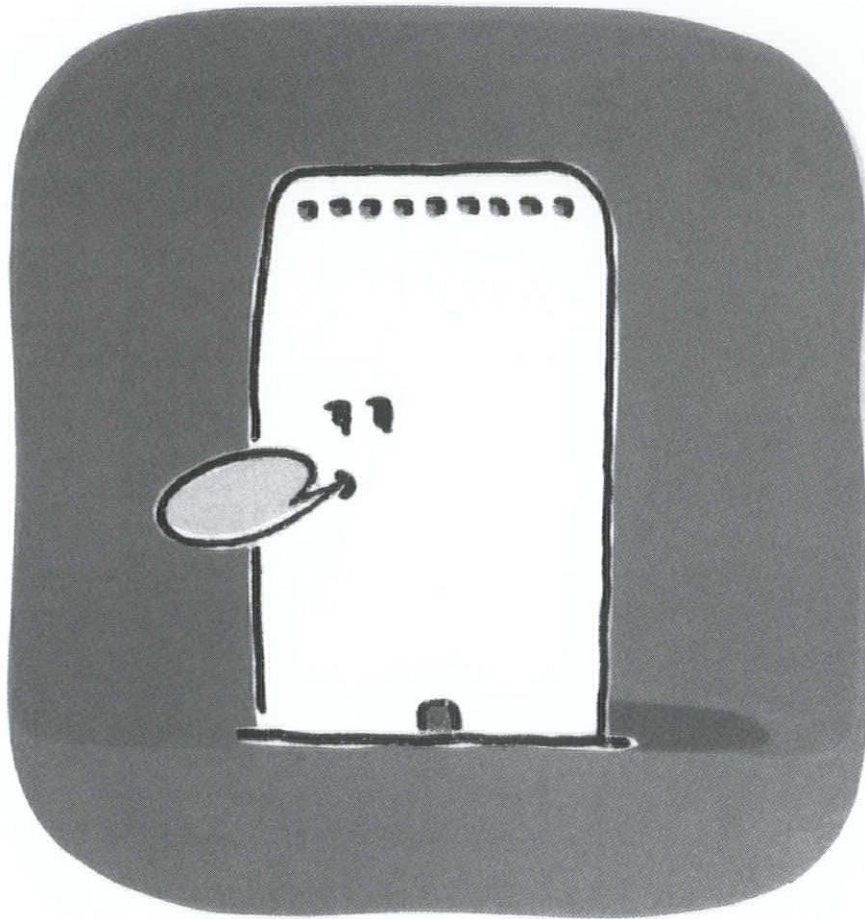
快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)
本社ビル事業部 TEL. (03) 3218-4544

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人をとりまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

9901 特集 環境共生の現在

- 006 環境共生とデザイン 小玉祐一郎
- 007 地球環境の縮図としての都市環境 梅干野晃
- 009 第1章 自然循環系の回復
エムシャー・パーク国際建設展覧会、エムシャー川・エコロジー再生プロジェクト、キリン神戸工場、ウォーターワークスガーデン
- 031 第2章 資源の合理的利用
サイエンス・リサーチ・パーク、コメルツ銀行本社ビル、東京ガス〈アースポート〉、東葛テクノプラザ、テムズ・ヴァレー大学、健康プラザとしま
- 057 第3章 ライフスタイルの提案
PS岩手インフォメーションセンター、鹿島京都山科寮、世田谷区深沢環境共生住宅、バルクビット
- 079 第4章 歴史と風土の保存・回復
デュースブルク・ノルト公園、ジャン＝マリー・チバウ文化センター
- 094 次世代へのビジョン
2005年国際博覧会構想案、東京サイクルグリーンリング
- 108 環境共生を目指した施策の現状 伊香賀俊治
- 112 環境共生へ向けた5つのアクション
建材一体型太陽光発電システム、ヒーリングガーデン、新余暇住宅〈山海寮フィールド〉、ソイルセラミックス、緑化コンクリート
- 133 ボール・アンドルーの最新プロジェクト
海の球体——大阪海洋博物館
- 133 海の球体——大阪海洋博物館 ボール・アンドルー
- 138 大阪海洋博物館について ト蔵正和

9902 特集 ダッチ・モデル 建築・都市・ランドスケープ

- 監修＝吉良森子 キーワード構成・編集＝Keyword Group
- 006 トータル・ランドスケープ——建築・都市計画・ランドスケープ・デザインとしてのダッチ・モデル 吉良森子
- 009 1. インフラストラクチャー
OMA／都市計画「ソンドウ・ニュータウン」、ボルドー近郊の住宅、駐ベルリン・オランダ大使館＋援助の家
クーン・ファン・フェルゼン／ユトレヒト大学付属博物館、オフィス・ビル「ING銀行」
メカノ／都市計画＋集合住宅「プリンセンランド地区」
- 026 ダッチ・モデルについて——21世紀の社会モデルとして 長坂寿久
- 020 2. 制御システム
WEST8／都市計画「ボルネオ・スポールンブルグ」、ランドスケープ・デザイン「カラスコ広場」
カウパー・コンパニオン／都市計画「カッテンブルク」
Max.1／アイトホーフエンの14の住宅、「ユトレヒト近郊の町の30,000住戸の都市計画」
- 044 アムステルダム東部港湾地区再開発——オランダ都市計画のメカニズムの現在 吉良森子
- 046 「協議の国」オランダの都市計画——建築・都市計画、そして社会の密接な関係 笠 真希
- 049 3. 対等性
UNスタジオ ファン・ベルケル&ボス／都市計画「アーネム・セクター」

ヴィール・アレツ／KNSM島のアパートメント・タワー、ボクステルの警察署

ケース・クリスティアーン／都市計画・集合住宅・市営水道局跡(GWL)、都市計画・オフィス・パーク「バイト・シティ」

065 フローの空間——オランダのメディアとインフラストラクチャー
ジョン・サッカラ 訳＝太田佳代子

069 4. 合意形成
ベンテム・クラウエル／スキポール空港ショッピングセンター「スキポールプラザ」、コンサートホール「ポップクラスター」
ノイトリング・リーダイク／「道路・運河」管理ビル、ショッピング・センター「ブラジル」＋「IJタワー／集合住宅」

081 セカンド・モダニティへの建築 パート・ロツマ 訳＝五十嵐太郎

085 5. 合理主義
MVRDV／仮想都市「メタシティ／データタウン」の3Dシミュレーション、オフィス・パーク都市計画「パークレーン」
構成＝大松俊紀

095 オランダ近代建築の地勢——ホリゾンタル・メガストラクチャー・パラダイムの形成と延伸 石田壽一

キーパーソン・インタビュー

レム・コール・ハース、アードリアン・グーズ リック・バック
ー ヴィッツ・パティン クリスティン・ファイライス ヴィニ
ー・マース インタビューアー＝吉良森子、上原雄史

101 オランダ建築旅行ガイドマップ
アムステルダム／ロッテルダム／ユトレヒト／デン・ハーグ

9903 特集 木の空間：木素材による快適建築

- 006 趙海光 台形集成材の家5
- 014 インテンシオナリーズ トイズファクトリー・オフィスインテ
リア CWC Office & Gallery 花見季
- 022 河西立雄／静かな家
- 028 葛西 潔／木箱210
- 036 みかんぐみ／大町の家
- 042 H. DESIGN ASSOCIATES / pas de calais, I & S, FAVORITE H
- 048 ハンス・ペーター・ヴォーンドル／グックルワップ
- 052 ディーター・ティール／スタジオ・バンガート
- 057 マチアス・クロズ／ウガルテの家
- 061 SELL HOUSE：SE工法による次世代木造住宅の可能性と7人の
建築家による木骨住宅展
文＝播 繁 建築家＝押野見邦英、城戸崎和佐、内藤 廣、
難波和彦、平倉直子、古谷誠章、横河 健
- 069 木の家具あれこれ
現代に蘇るマエストロの技：家具職人・相田貞夫の椅子づくり
ウッドユウライクカンパニーの木製家具
無印良品が提案するライフスタイル
いすコレ：リビングデザインチェアコレクション'99 鈴木恵三
- 093 森ビル・都市デザインコンペ'98
座談会：ツールが創造力を活性化する
隈研吾×浜野保樹×廣瀬通孝

9904 特集 ガウディの愛弟子 ジュジョールの夢

解説=丹下敏明 写真=鈴木久雄

グエル公園、カサ・ミラ (ラ・ベドレラ)、カサ・パトリョ、プ
ファルイ邸、カサ・ネグラ、トーラ・ダ・ラ・クレウ、ビスタベ
ーリャの教会、カサ・ブラネイス、モンセラットの礼拝堂、メト
ロポール劇場

006 夢人ジュジョール 丹下敏明

016 ラ・ベドレラの物語 ジュゼップ・マリア・カランディ ベー
ラ・ビーバス 訳=鳥居徳敏 (019、026、077も同訳者)

019 ジョルジュールにおける想像性と創造性 カルロス・フローレス

026 総合芸術家ジュジョール ダニエル・ジラル＝ミラクラ

064 モンフェリーのモンセラットの礼拝堂 ヨス・トムロー
訳=櫻井義夫

077 メトロポール劇場修復 ジュゼップ・ジナス

078 年譜

079 ジュジョール作品 分布地域図

089 ドナルド・ジャッド 空間と認識のコンシステンシー
マーファでのアートピース、空間、建築、そして風景

093 ジャッドの建築論 訳=大島哲蔵

100 作品の場をめぐって 尾崎佐智子

104 アイヒホルターレン、バーゼル東駅のオフィス複合施設

108 建築の客体性、建築の内部性 丸山洋志

110 ジャッドの「リアル」について 長田直之

9905 特集 挑発するマテリアリティ 素材の進化とデザインの可能性

構成十編集協力=太田浩史+丸橋浩+今井公太郎+三好隆之

006 マテリアリティ——デザインの新しい対象性 太田浩史

010 物に論宣言——エアロジェルの想像的読解を契機にして 金森 修

013 マテリアリー・プロダクト54

軽量化 丸橋 浩

単一化 今井公太郎

表面操作 曾我部昌史

意味の変換 三好隆之

ミクロの複雑系 横溝 真

074 マテリアル操作用語集

077 素材地図1999 松田 達

085 素材史年表 太田浩史

089 ポリプロピレンの一生 写真=鈴木豊 文=太田浩史

097 限りなくタブーに挑む 竹原あき子

101 戦後の日本社会とプラスチック 北村行正

105 素材のアプリケーション・デザイン——デザイナーが素材を応用
するためのABC ヤマハ発動機、松下通信工業、NIKE、ソニー、
松下電器産業、BMW、オカモト、住友スリーエム、タッチパネ
ル・システムズ、東レ、日本製鋼所 インタビュアー=西山浩平
126 フローとしてのプロダクト、そして素材のアプリケーション・デ
ザイン 西山浩平

129 マテリアリティの冒険 吉岡徳仁、須藤玲子、黒川雅之、クライ
ン・ダイサム・アーキテクト、津村耕佑 写真=鈴木 豊

9906 特集 小川晋一 Transbody / Super traffic

006 変容する身体/超交通 (第19回ミラノ・トリエンナーレ出展ビ
デオ作品)、ザ・キューブ/グラスゴブプロジェクト

010 Transbody/Super traffic: 変容する身体/超交通——8つのコード
小川晋一

014 豊饒なる寡黙 瀧沢 隆

018 グラスキューブアフター モダニズム 岡河 貢

020 小川晋一の空間とその空虚性に関する考察 アラン・ジョンストン
訳=櫻井義夫

022 インビジブルランゲージ展/ニューヨーク・ロンドン・ミラノ・
香港、変容する身体/超交通 (第19回ミラノ・トリエンナーレ

日本館展示)、モダンアブストラクトの家/キューブ、モダンア
ブストラクトの家/チューブ、ヒロシマモナムール、モダンアブ
ストラクトの家/ガラス、横浜港国際客船ターミナル国際建築設
計競技案、スコットランド建築デザインセンター国際公開コンペ
案、国立国会図書館関西館建築設計競技案、平田町タウンセンタ
ー施設整備公開設計競技案、水俣メモリアル デザインコンペ案、
S社本社屋、O市水道局庁舎、ホワイトレジデンス、ガラスをテ
ーマにした集合住宅の可能性、キュビストの家、ミニマリストの
家、イソベスタジオ&レジデンス、キッドミュージアム/玖珂
町こどもの館、リストアーステーション、ハツタ山口、グラスハ
ウス、ホワイトキューブ、エアーチェアー、アラベスク、徳山歯
科医師会館、ながレディースクリニック、A町総合センター

9907 特集 学校建築 監修=上野 淳+倉斗綾子+力安 拓

006 新しい世紀の新しい学校像を求めて 上野 淳

008 21世紀の学校のための17章

1.「教える学校」から「学ぶ環境としての学校」へ、2.コンピュ
ータ学習環境の充実、3.ラーニングセンターとしての学校、4.生
活環境としての学校、5.子供のスケールと学校空間、6.空間の連
続性 (イギリスの学校1)、7.エコスクール——地球・地域環境と
共生する学校、8.小規模学校の空間構成 (イギリスの学校2)、
9.実習スペースの再編成、10.町の文教センターとしての学校 (イ
ギリスの学校3)、11.学校複合化とコミュニティスクールへの道、
12.高齢者と児童・生徒が共生する学校、13.Schools within a School
(アメリカの学校1)、14.ハウス制の学校 (アメリカの学校2)、
15.教科教室型編成の中学校計画、16.総合化高校の計画、17.ユニ
ットプランの編成 (アメリカの学校3)

041 学校10選 写真構成

岩出山町立岩出山中学校、育英学院サレジオ小・中学校、台東区
立上野小学校、吉備高原小学校、新宿区立落合中学校、つくば市
立東小学校、稲城市立若葉台小学校、東京都立晴海総合高等学校、
浪合村立浪合小・中学校、三春町立桜中学校

105 座談会「学校が変わる、建築が変わる——21世紀の柔軟性のある学
び舎に向けて」司会=上野 淳 瀧昭代×佐藤 学×船越 徹×小島一浩
113 小学校の一日

121 デザイン・マニュアル 学校の単位空間の規模・寸法の求め方

129 デザイン・ヒント集

アプローチ、小さな昇降口、小空間・アルコーブ、テラス・ペラ
ンダ・ウッドデッキ、階段・段差、中庭、吹き抜け、ロフト、水
廻り、図書コーナー、メディア、コンピュータ、教師コーナー

9908 特集 階段 Beyond Function

006 起伏

[新津市美術館] 横山 正+アルセッド建築研究所、[天竜市立秋
野不矩美術館] 藤森照信+内田祥士 (習作舎)、[岐阜県営住宅ハ
イタウン北方南ブロック妹島棟] 妹島和世建築設計事務所+山清
設計、[岐阜の住宅 ホワイトステージ] 宇野 享/C+A、[細見
美術館] 大江 匡/プランテック、[小坂山の懐] 徳井正樹建築研
究室、[東京海上東日本研修センター] KAJIMA DESIGN、[木村
邸] インテンショナルリーズ/大堀 伸

026 移ろい

[F5] 石田敏明建築設計事務所、[東京自転車保険組合会館] 竹中工
務店東京本店設計部、[FOX] 前田紀貞アトリエ、[NSPビル] 宮崎
浩/プランツアソシエイツ、[White Echoes] 米田 明/アーキテクトン

040 軽み

[中野邸] 動物愛護病院ココロ/味岡伸太郎+住工房・鈴木達雄、
[小田急サザンタワー] 小田急Gビル設計室、[水/ガラス] 隈
研吾建築都市設計事務所、[中郷の家] 枘田秀彦建築設計事務所
天空

054

[清涼山霊源寺透静庵] 山口隆建築研究所、[GOO FIELD] 鈴

	木克彦建築研究所、[北楠の家] 坂本 昭・設計工房CASA、[梅ヶ丘の住宅] 佐藤光彦建築設計事務所
069	シネマの中の階段——ドラマの喚起装置 渡辺武信
075	階段をめぐる、カメラ・アイ 下村純一
9909	特集1 ベルリン・トポグラフィ 文=内田佳代子
006	ベルリン誕生から現在まで 杉本俊多
013	グローバル都市ベルリンのポジション 杉本俊多
018	ベルリン・トポグラフィ オラニエンブルグ通り、クロイツベルグ、バリ広場・フリードリヒ通り、ポツダム広場、アレキサンダー広場、シュプレーボゲン、ツォー駅・クーダム
048	ベルリン復活のシナリオ 山下昌彦
053	ベルリンはどこへ行くのか 飯島洋一
054	ベルリンのアクチュアリティ：断片的な視線 ダニエル・リベスキンド、クリスティン・ファイライス、ヨゼフ・クライフス、リチャード・ノイマイヤー インタビュー=花田和幸
059	虚のトボス 花田和幸
061	特集2 個性の彩る集住群 長野市今井ニュータウンの試み 写真=堀内広治/新写真工房
077	A工区：新居千秋都市建築設計+後澤建築設計事務所+竹村建築設計事務所+第一設計、長野サンパウロ計画/新居千秋、B工区：長谷川逸子・建築計画工房+エル設計事務所+誠設計事務所+基設計、住居群をネットワークでつなぐ/長谷川逸子、C工区：内藤廣建築設計事務所+宮本忠長建築設計事務所+団設計+アーキプラン、白い立体格子/内藤 廣、D工区：富永譲+フォルムシステム設計研究所+山口設計事務所+岡澤仁建築設計事務所+関建築+まち研究室、小さな都市の尺度の構想/富永 譲、E工区：近代建築研究所+池田設計事務所+大沢昇建築事務所+橋建築設計事務所、「生活」から「構成形式」へ/松永安光、F工区：スタジオ建築計画+エーシーエ設計+金井設計+植田設計、早回しされた時間の中での試み/元倉眞琴、G工区：遠藤剛生建築設計事務所+アルス設計+新長野設計+北沢建築研究所、組織化された混沌/遠藤剛生
098	今井ニュータウンの風景 渡辺定夫
099	私の選んだショット 植田 実
9910	東京リノベーション 企画協力=粕谷姫中
006	リノベーション・ムーヴメント90's 粕谷姫中
012	EXIT metal work supply、A-net、北山創造研究所、Deluxe、NDCグラフィックス ヨコハマ、オレゴンムーン、ギャラリーef、現代美術製作所、スペース・エッジ、NOPE、コマンドN、TIME & STYLE、Baden Baden、清住蔵
059	仕掛人達の哲学 小池一子、鈴江修至、星指和幸
061	「東京リノベーション」される理由——土地の有効利用原則による建物の「目的」変更 安藤寿珠+稲島みちこ
062	東京リノベーションマップ ギャラリー、ショップ、レストラン
068	東京空き倉庫/工場マップ
073	ガソリンスタンド再生計画——GS Revolution ガソリンスタンド再生計画実行委員会 ケーススタディその1：A activityの場合
077	大阪市築港地区のまちづくり——既存施設の有効利用を通じて
081	隅田川再生とリバーサイドスペース 写真構成=加藤嘉六 再生の進む隅田川、リバーサイド・スカイライン、リバーサイドスペース・ウォッチング
095	魅力を取り戻す隅田川 陣内秀信
096	隅田川の整備 西野真介
101	浮世絵と隅田川 藤澤 紫
104	「隅田川再生とリバーサイドスペース」をめぐる 長尾重武

9911	ジャパニーズ・プロダクツ'99 インディーズなシチュエーション 企画協力・文=川上典子、青山玲、タイトル写真=高山幸三
006	新しいデザイン・クリエーションにのっての日本のシチュエーション インタビュー=中牟田洋一
008	インディーズ・デザインの個別な環境/状況/事情 1. Ambience/三好隆之+富永 桂、富永 桂、スキーマ建築計画、酒井俊彦/松本英明、Living Type、スーパ・デザイン・アソシエイツ 2. Sensoriality/廣田尚子、エグジットメタルワークサプライ、黒田潤三、flask 3. Image Gap/エグジットメタルワークサプライ、グエナエル・ニコラ、中村竜哉、西堀 晋、南雲勝志、小泉 誠、青山 玲 4. RE-Design/parabolart、トリオ・デ・パンチ、西堀 晋、インテンションナリーズ、東海林小百合
067	デザイナーズ・プロデュース 文：川上典子 ロス・ミクプライド、原ななえ
076	ショップが生み出すクリエイションの土壤 E&Y、trico、IDEE、pour annick、Time & Style、BC工房、Franc franc
084	対談：ふたつのデザイナー像 沖 健次×酒井俊彦
086	プロダクツ・ウェブ・セレクション 文=伏見佳子、青山 玲
9912	SDレビュー1999 第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展
017	総評：播 繁、芦原太郎
018	I.C.U [NOx]、新井清一/ARAI・ARCHITECTS KyotoStudio+京都精華大学新井研究室〔(仮称) 京都精華大学実習棟建替計画〕、アンドリュウ・バーリー+ミヌストリー〔<s>linear〕、石田壽一〔flop/フロップ〕、川人洋志〔庭に住む一札幌〕、岡河 貢+PARADISUS ARCHITECTS〔向島洋ランセンター増築計画〕、金井謙介+小池聡子〔農村の家〕、駒井貞治/駒井貞治の事務所〔今月の吉村家〕、清水祐効〔PLATFORM IN THE CASE〕、寺岡豊博〔タモイの磐〕、平沼かおり〔WIRED SPACE〕、更田邦彦+岩岡竜夫+岩下泰三〔アビタ戸祭〕、馬淵富夫+北岡 治+徳野博子/大成建設設計本部〔PLATEaux〕、安田博道〔静岡の家〕、山田 良〔鹿北町「道の駅」周辺施設〕、山口隆〔水上の慰霊空間〕
053	講評：林昌二、播 繁、芦原太郎、小川晋一
059	千年紀末の沈黙/遠藤秀平
060	経過報告
065	北欧モダンの恒星：エリック・ブリュグマンの建築 トゥルクの復活礼拝堂、バライネンの礼拝堂、ヴィエルマキの体育学校、オーボ・アカデミーの学生会館
075	北欧モダンの恒星：建築家エリック・ブリュグマン 田中雅美
084	謙譲の美德 ユハニ・パッラスマー 訳=櫻井義夫
086	E.ブリュグマン論文2題 「機能主義」、「田園の建築」 訳=田中雅美
088	作品年譜
092	作品マップ&リスト
093	ハブニング1999/2000・レビュー 文=岡田榮造
連載 エントロピーの森：都市のインフラストラクチャー 写真=ハイナール・シリグ 文=山形浩生	
01129	1：「まつ。」
02105	2：「年寄りには寝ている。」
03089	3：「On the Road」
04081	4：「自然に。」
05141	5：「片隅で。」
06097	6：「埋め立て地。」
07137	7：「部屋。」
08089	8：「監視。」
09101	9：「底。」
10105	10：「インフラドリーム。」

11093 11:「捨てる。」
12061 12:「出口。」

連載 カルチャーカフェ

05148 今月の映画 「ガメラ3」 浜野保樹
05150 今月の音楽 「永遠。」 オリガ 服部のりこ
06106 今月の舞踊 「NDT1 ワン・オブ・ア・カインド」 尼ヶ崎 彬
06108 今月の映画 「トゥエンティフォー・セブン」 鶴沢 隆
07146 今月の舞踊 英国ロイヤルバレエ団「マノン」 多木浩二
07148 今月の演劇 プレヒト「セツアンの善人」 原 研哉
08094 今月の音楽 「アイリッシュ・アイバース」 ビーター・バラカン
08096 今月の映画 「奇蹟の輝き」 鶴沢 隆
09108 今月の舞踊 「ピナ・バウシュ&ヴッパタール舞踊団」 尼ヶ崎 彬
09110 今月の演劇 「ネネム——おかしなおかしなおばけのはなし」
清水裕之
10110 今月の演劇 「犬を使う女」 原 研哉
10112 今月の音楽 「ブリトニー・スピアーズ」 服部のりこ
11098 今月の舞踊 「アルヴィン・エイリー・アメリカン・ダンス・シアター」 多木浩二
11100 今月の映画 「マトリックス」 浜野保樹
12102 今月の演劇 「国定忠治」 清水裕之
12104 今月の音楽 「アビブ・コワテ」 ビーター・バラカン

海外レポート

01163 「フランクフルト」 建築博物館の獨創性——ヴィルフリード・ヴァンのインタビューを通して 中井邦夫
01165 「シンガポール」 トランジットする文化 アン・ジン・ワー
01167 「バルセロナ」 生=劇として展開する建築——ミース・ファン・デル・ローエの勝者、エンリク・ルイス・ジェリとの会話から 福田 誠
02120 「パリ」 パリ「建築シテ」プロジェクト 山名善之
02121 「ブエノスアイレス」 ブエノスアイレス・ビエンナーレ：テーマを排した建築会議 瀧口範子
02122 「ロッテルダム」 データ・スケープ／社会性のある建築を求めて 大松俊紀
03115 「ニューヨーク」 Pier 40をめぐる 小野暁彦
03116 「チューリッヒ」 山の建築 山口由美子
04121 「シドニー」 「オペラハウス効果」とシドニー都市建築 高田浩一
04122 「モントリオール」 グローホーム——成長を続ける住宅 野口昌良
04123 「ロンドン」 ミレニアム・ドームの穴 小山 光
05160 「ベルリン」 人と都市と構構——ダニエル・リバスキンドのベルリン美術館ユダヤ館増築 上原雄史
05162 「ニューヨーク」 一貫性と多様性——ある都市計画の試みと討議の場について 小野暁彦
06121 「アルメーラ」 アルメーラ——15年目のニュータウン 吉良森子
06122 「バルセロナ」 メタポリストの勤め 福田 誠
06123 「ミラノ」 家具の祭典「ミラノ・サローネ」 三井直彦

ニュース

01144 都市デザインの今後の展開——ヨコハマ都市デザインフォーラムに参加して 鈴木伸治
01146 照明探偵団「2050年Tokyo夜景」展 葛西玲子
01154 北のマニフェスト——KIASMAヘルシンキ現代美術館 新見 隆
04086 博多リバレイン・アートプロジェクト 伊藤公文
07150 アレッシの商品開発セオリー 川上典子
07151 市民参加型デザインの実験
09117 シンポジウム「Design for the World '99 東京」 山内陸平
11102 ビーター・アイゼンマンの「ホロコースト・メモリアル」 岩永和幸

展覧会レポート

01148 堀内広治写真展「ロマネスク——フランス古寺巡礼」
堀越英嗣、松岡拓公雄
01150 「宮脇愛子——彫刻家の軌跡」展 樋口正一郎
01153 「Y.アーネスト・サトウ写真展」 村井 修
02111 「アルヴァー・アールト：20世紀モダニズムの人間主義」展
梅宮弘光
02112 「原 広司：25の譜面台——様相論的都市における記号場」展
松永英伸
03086 川俣正「東京プロジェクトNew housing plan」展
04087 「ニューライフ」展 松井みどり
04088 下村純一写真展「建築空間ポートレート」 片木 篤
05152 「トーマス・シュトゥール」展 ファン・ジェニン
05159 「イ・キョンソン：サラム・サラムそしてサラム」展 椎名政夫
06105 村井修写真展「港まちづくりグラフィックス」 羽原庸郎
08098 「安藤忠雄建築展——20のプロセス」 笠原一人
08100 「横文彦近作展」および特別記念講演会 香川 浩
08102 銘傳大学「End of Year Exhibition」展 ジン・ヨハネス
09114 「ハーバードGSDレビュー」展 榎本弘之
10114 「'99日本クラフト展」 河合俊和

書評

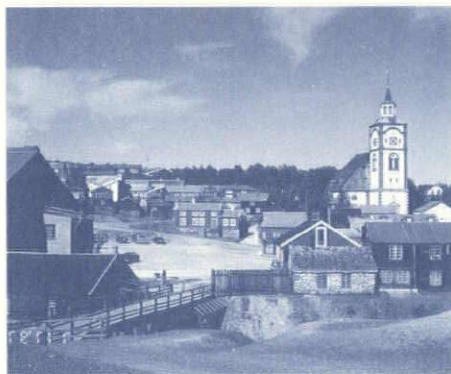
01158 「ランドスケープ・ライティング・デザイン・ブック」
ALS景観デザイン研究所=企画、Callway、角館政英=評
01159 「環境共生住宅A-Z」
建設省住宅局生産課+財団法人住宅・建設省エネルギー機構=監修、
環境共生住宅審議会=編、ビオシティ、葉山成三=評
02114 「男と女の家」
宮脇 檀=著、新潮社、光藤俊夫=評
02115 「20世紀モダニズム批判」
川向正人=著、日刊建設通信新聞社、桂 英昭=評
03113 「戦後モダニズム建築の極北、池田陽試論」
難波和彦=著、彰国社、松畑 強=評
04116 「日本のモダンタイポグラフィックデザイン—1925-1995」
浅葉克己+田中一光+松岡正剛=監修、トランスアート、
原 研哉=評
04117 「エコテック 21世紀の建築」 キャサリン・スレッサー=著、
難波和彦=監修、鹿島出版会、小比賀一史=評
05154 「デザインのエートス」
宇波 彰=著、大村書店、五十嵐太郎=評
05155 「ビット産業社会における情報化と都市の将来」 伊藤 滋=監修、
光多長温+日端康雄=編著、慶應義塾大学出版会、田島則行=評
06114 「スカイライン—舞台としての都市」 ユベール・ダミッシュ=著、
松岡新一郎=訳、青土社、小林康夫=評
07153 「ル・コルビュジエと日本」 高階秀爾+鈴木博之+三宅理一+
太田泰人=編、鹿島出版会、越後島研一=評
08104 「カルヴィーノの文学講義——新たな千年紀のための六つのメモ」
イタロ・カルヴィーノ=著、米川良夫=訳、朝日新聞社
河合俊和=評
09118 「建築を語る」
安藤忠雄=著、東京大学出版会、宇野 求=評
10117 「巨匠たちのディテール Vol. I, Vol. II」 エドワード・R.フォード=著、
八木幸二=監修、丸善、香山壽夫=評
11105 「増田友也著作集」(全5巻)
増田友也=著、ナカニシヤ出版、松畑 強=評
12106 「時間のなかの建築」 モーゼン・ムスタファヴィイ+デイヴィット・
レザボロー=著、黒石いずみ=訳、鹿島出版会、松隈 洋=評

今月の新刊

建築図書の最新刊書と、それに関連した書籍を紹介しております。

当社の新刊すべてをご覧になりたい方は隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



エコミュージアムへの旅

大原一興 著

A5判・184頁 本体2,800円+税(予価)

環境と共生する新しい博物館の姿

地域全体を博物館と見立て、その文化・風土を研究・保全・学習し、地域社会の次代の担い手を育てる博物館活動をエコミュージアムと呼び、まちおこしにつながる活動として注目される。その概要と先進諸国の事例を紹介。

主要目次 エコミュージアム概論／フランスのエコミュージアム／ベルギーのエコミュージアム／北欧のエコミュージアム／カナダのエコミュージアム

●関連図書

21世紀の地域劇場

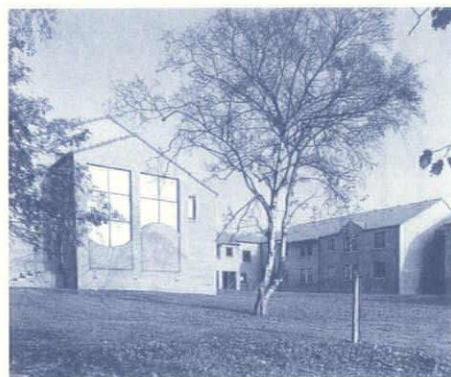
パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之 著

A5判・本体3,700円+税

地域と劇場との新たな関係のあり方を探る

市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。
劇場関係者必読の書。



痴呆を癒す建築

ヨーロッパとオーストラリアの設計事例20選

S.ジャッド、M.マーシャル、P.フィッペン 共著 井上裕・浩子 訳

A5判・248頁 本体3,800円+税(予価)

痴呆の人々の介護施設設計の原則と指針

グループホーム、看護ホーム、ホステルなど、痴呆の人々がグループで生活する多様な介護環境。その設計の原則と指針を先進的な事例を通して解説し、理想の介護環境の姿を探る。

主要目次 痴呆の人々を癒す建物／デザインの問題／建築家のジレンマ／設計事例20選／イギリス／スウェーデン／フィンランド／ノルウェー／オランダ／オーストラリア

●関連図書

安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ

三宅祥介・浅野房世 共著／A5判 本体3,200円+税

「いやし」を求めて人々の集う緑空間を演出

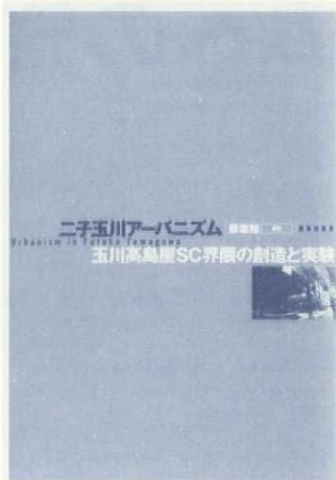
生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合い、さらに介護者や高齢にとって歩いて行ける公園とは何か。初めてのヒーリングランドスケープを、究極の癒し、具体的事例、ガイドライン、ホスピタリティで解説。

好評新刊書

最近刊行した建築図書と、それに関連した書籍を紹介しております。

最近の新刊すべてをご覧になりたい方は、隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



二子玉川アーバニズム

玉川高島屋SC界隈の創造と実験

彦坂裕 編著

B5判・128頁 本体3,100円+税

二子玉川の発展の軌跡——その30年を追う

かつて遊覧の地であった二子玉川は、1969年の玉川高島屋ショッピングセンターの開業以降、商業を軸とする民間ベースの開発が急ピッチでなされ、緑陰濃く、歩行者に優しい独自の環境が創られてきた。その発展の全貌を追う。

【主要目次】 田園都市アーバニズムの100年／二子玉川アーバニズム1969-1999年／SCを核とする街づくり：街の孵化器としてのSC、玉川勝地／商業建築進化の構図：サイト演出論、建築・内装・界隈、イベントによる街づくり／インタビュー（泉真也、鈴木ルミ子、浜野宏宏、梅澤忠雄）／二子玉川エリア関係年譜

●関連図書

新しいガラスアーケード

H.&H.K. ニーダーヴェールマイアー 共著 青木英明 訳／A4変・176頁 本体9,515円+税
ヨーロッパ諸国、とくに西ドイツを中心に32例のケーススタディを紹介した設計実務書。

商業空間とアトリウム 室内歩行者空間のデザイン

マイケル・J. ベドナー 著 古瀬敏 訳／A4変・224頁 本体9,400円+税
欧米5カ国のアーケード、ガレリア、マーケットプレイス、アトリウム、スカイウェイ、等を紹介。

住まいのリフォーム実例集



住まいのリフォーム実例集

社団法人 日本建築家協会 編

A5判・176頁 本体 2,400円+税

建築家による様々な住宅リフォームの実例

家族構成の変化から、住宅設備を新しくするため、あるいは高齢化に対応するためや地震に備えての補強工事など、建築家による様々なタイプの住宅リフォームの実例を紹介する。リフォーム工事を考える人の格好の参考書。

【主要目次】 目的別リフォームのポイントと実例／ライフスタイル変化によるリフォーム／設備性能向上のリフォーム／高断熱・省エネルギー・エコロジカルのリフォーム／バリアフリー・リフォーム／耐震性能向上のリフォーム／時間の経過を表現するリフォーム



アジアの水辺空間

くらし／集落／住居／文化

中村茂樹、畔柳昭雄、石田卓矢 著

四六判・268頁 本体2,800円+税

アジアの水辺空間の魅力を探る

アジアの水辺空間は自然環境と一体化している。自然環境との共生思考によるアジアの水辺空間の魅力をその生活、住居、文化を通して紹介する。

事例は、タイ、ミクロネシア、ベトナム、ホンコン 他

好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著
四六判・256頁 本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204点を紹介。11の特色のある地域別にコースを作成。首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより東京の90年代を様々に旅することができる。最新現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。



時間のなかの建築

M.ムスタファヴィ 他共著 黒石いずみ 訳
B5変判・144頁 本体2,800円+税

建築は竣工した時を「完成した」「理想的な」姿だと思われがちだが、実はその後の時間的経過と環境の作用によって変貌してゆく過程—ウェザリング（風化）を経てますます豊かになるものこそが真の建築のあり方だと論ずるユニークなエッセイ。



風景の調律

景観体験の構築
小林亨 著
四六判・184頁 本体2,500円+税

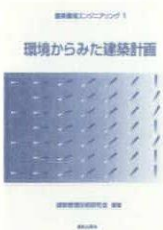
『移ろいの風景論』『雨の景観』に続く新しい試み。風景の解釈力、創造力、構築力のおもしろさや伝統を、「食と風景」「辞世と風景」「景観デザイナーとしての画家」といった斬新かつ大胆な視点で読み解く。



21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案
清水裕之 著
A5判・248頁 本体3,700円+税

本書は21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。



環境からみた建築計画 建築環境エンジニアリング シリーズ①

建築環境技術研究会 編著
A5判・188頁 本体3,400円+税

環境全般についての概説および建築が環境に及ぼす影響、人間が建築のもつ環境から受ける影響等について概説する。建築の環境設計では何が重要な課題なのか、幅広く記述する。



安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ
三宅祥介・浅野房世 共著
A5判・228頁 本体3,200円+税

生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合い、さらに介護者や高齢にとって歩いて行ける公園とは何か。初めてのヒーリングランドスケープを、究極の癒し、具体的事例、ガイドライン、ホスピタリティで解説。



まちづくりの科学

佐藤滋 編著
A5判・384頁 本体3,500円+税

20世紀最後の30年、人々が地域で暮らす生活のあらゆるシーンが「まちづくり」として立ち現れた。今日までの各地での具体的な実践から抽出された、若手中堅の研究者と実務家による学問的まちづくり理論の最高到達点。



建築のイコノグラフィーとエレクトロニクス

ロバート・ヴェンチュリ 著 安山宣之 訳
A5判・296頁 本体4,300円+税

二冊の建築理論書で知られる著者が、80年代から90年代半、建築家とし、その理念の検証と実現に向けてなされたあくなきたかひの全貌が綴られた書。真摯な姿、率直な筆致、読者を深い感動に誘う。



アーキグラム

アーキグラム編 浜田邦裕訳
B5判・148頁 本体3,400円+税

ポップとサイケの60年代、めくるめくドローイングで世界中の建築ヤッピーをとりこにしたアーキグラムグループ。彼らのマニフェスト「アーキグラム」誌を1冊に編集。新鮮な衝撃は少しも減じない。詳しい解説つき。



巨匠 フランク・ロイド・ライト

D.ラーキン、B.ファイファー 編 大木順子 訳
B5変形・240頁 本体3,200円+税

コルビュジエ、ミースとならぶ近代建築の巨匠であり、アメリカン・スピリッツの象徴である建築家フランク・ロイド・ライトの全貌を美しいカラー写真と平易な解説で紹介。没後40年を経た今日でも新鮮な感動を呼び起こす。

99年刊行図書一覧

99年1月より12月までに刊行した建築図書の一覧です。

詳しい内容等につきましては、当社のホームページ上で紹介しておりますのでご覧ください。

SD選書

234 さあ横になって食べよう—忘れられた生活様式
B.ルドフスキー 著 多田道太郎監修 奥野卓司訳／四六判・224頁 本体1,800円+税

235 間(ま) — 日本建築の意匠
神代雄一郎 著／四六判・208頁 本体2,400円+税

建築一般

東京現代建築ガイドⅡ 2000's
松葉一清 著／四六判・256頁 本体2,800円+税

民家のこころ
道塚元嘉 著／四六判・144頁 本体1,600円+税

自然共生建築を求めて
宿谷昌則 著／A5判・192頁 本体2,300円+税

時間のなかの建築
M.ムスタファヴィ、D.レザボロー 共著 黒石いすみ 訳／B5変判・144頁 本体2,800円+税

ル・コルビュジエと日本
高階秀爾、鈴木博之、三宅理一、太田泰人 編／A5判・256頁 本体2,800円+税

巨匠 フランク・ロイド・ライト
D.ラーキン、B.ファイファー 編 大木順子 訳／B5変判・240頁 本体3,200円+税

マリオ・ボッタ | 構想と構築
マリオ・ボッタ 著 古谷誠章 訳／B5変判・168頁 本体2,700円+税

ルドルフ・シンドラー — カリフォルニアのモダンリビング
D.ゲバード 著 末包伸吾 訳／B5変判・192頁 本体3,700円+税

建築のイコノグラフィとエレクトロニクス
ロバート・ヴェンチュリ 著 安山宣之 訳／A5判・296頁 本体4,300円+税

アーキグラム
アーキグラム 編 浜田邦裕 訳／B5判・148頁 本体3,400円+税

21世紀の地域劇場 — パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案
清水裕之 著／A5判・248頁 本体3,700円+税

エコミュージアムへの旅
太原一興 著／A5判・184頁 本体2,800円+税(予価)

エコテック | 21世紀の建築
キャサリン・スレッサー 著 難波和彦 監訳／B4変・192頁 本体7,300円+税

痴呆を癒す建築 — ヨーロッパとオーストラリアの設計事例20選
S.ジャッド 他共著 井上裕、浩子 訳／A5判・248頁 本体3,800円+税(予価)

ガラス建築
SD編集部 編／A4変判 本体3,200円+税

井上武吉作品集 Bukichi Inoue | my sky hole 1997
井上武吉 著／A4判・143頁 本体9,000円+税

建築技術

これだけは知っておきたい **設計監理の知識** — 増補改訂版
西部明郎 著／B6判・184頁 本体1,900円+税

これだけは知っておきたい **塗装工事の知識** — 増補改訂2版
高橋孝治 著／B6判・272頁 本体2,800円+税

これだけは知っておきたい **厨房設計の知識**
平岡雅哉、堀田正治 著／B6判・192頁 本体2,000円+税

これだけは知っておきたい **住宅設備の知識**
知久昭夫 著／B6判・192頁 本体2,000円+税

これだけは知っておきたい **健康住宅の知識**
健康住宅推進協議会 編／B6判・232頁 本体2,400円+税

建築環境エンジニアリング① 環境からみた建築計画
建築環境技術研究会／A5判・188頁 本体3,400円+税

今必見の建築テクノロジー
近畿建築士会協議会 編集 大阪府建築士会編集委員会 執筆／四六判・220頁 本体2,200円+税

新版 給排水衛生設備の設計
清水洋 著／A5判・328頁 本体4,400円+税

都市・環境

風景の調律 景観体験の構築
小林享 著／四六判・184頁 本体2,500円+税

アジアの水辺空間 暮らし / 集落 / 住居 / 文化
中村茂樹 他共著／四六判・268頁 本体2,800円+税

まちづくりの科学
佐藤滋 編著／A5判・384頁 本体3,500円+税

新宿・街づくり物語 — 誕生から新都心まで300年
勝田三良 監修 河村茂 著／菊判・244頁 本体3,300円+税

都市デザインとシミュレーション — その技法とツール
伊藤滋 監修 環境シミュレーションラボ研究会 編著／B5判・144頁 本体4,300円+税

都心 改創の構図 — 東京業務地区再生の論理
依田和夫 編著／A5判・168頁 本体2,800円+税

安らぎと緑の公園づくり — ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ
三宅祥介、浅野房世 共著／A5判・228頁 本体3,200円+税

二子玉川アーバンイズム 玉川高島屋SC界隈の創造と実験
彦坂裕 編著／B5判・128頁 本体3,100円+税

住宅

マンションのリニューアル術100章
小原二郎、阿部一尋 編著／B6判・240頁 本体1,800円+税

新・マンション百科 建築家によるトータルメンテナンス
日本建築家協会編／四六判・344頁 本体2,200円+税

住まいのリフォーム実例集
日本建築家協会 編／A5判・176頁 本体2,400円+税

建築ガイドブック

鹿島の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで
近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。



東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著
四六判・256頁 本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204選

11の特色のある地域別にコースを作成。
首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより
東京の90年代を様々に旅することができる。
最新の現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

【主要目次】A地区—新宿、B地区—渋谷周辺、青山、恵比寿、C地区—皇居周辺、D地区—臨海副都心、E地区—品川、太田、目黒、
F地区—隅田川沿岸、G地区—豊島、足立、板橋、H地区—杉並、世田谷、I地区—多摩、西郊、J地区—横浜、K地区—幕張、
建築家索引、建物索引

●関連図書



東京現代建築ガイド

松葉一清 著
四六・250頁 本体2,800円+税

東京を中心とした首都圏に1980年代以降建てられた現代建築の中から200点を選んで紹介する。地域別に分けられた13のコースの冒頭にはガイドマップがついており、戦後の名建築も所要所て紹介。



ヨコハマ建築案内 1950-1994

吉田鋼市 著
四六・224頁 本体2,700円+税

横浜を中心に神奈川県に建てられた1950年以降の代表的建築を紹介する。神奈川県立近代美術館からランドマークタワーまで、気鋭の建築史家が語る詳細な解説と美しい写真で構成されたガイドブックで、巻末に地図も入る。



近代建築ガイドブック [関東編]

東京建築探偵団 著 村松貞次郎、山口廣 顧問
四六・276頁 本体2,300円+税

官庁街、オフィス街、看板建築群、別荘地、産業遺跡など特徴ある24コースに沿って作品を写真と共に紹介。建築様式、設計者の紹介も盛り込み、首都圏の近代100年の変貌が建物を通して読みとれる。学生、一般向けガイド。



ヨコハマ建築暮情

吉田鋼市 著
四六・232頁 本体2,800円+税

横浜を中心に神奈川県に現存する約90棟の建築に光を当て、エキゾチック・ヨコハマ、公共建築、銀行、教会、ミッションスクール、別荘建築、工場、ホテルなどテーマ別に紹介するもの。巻末にガイドブックを収録。



近代建築ガイドブック [関西編]

石田潤一郎、沢田清、柴田正己、中川理、福田晴彦 他共著
四六・312頁 本体2,800円+税

好評の関東編に続く第2弾。大阪の商業の中心、船場の商業建築にはじまりミナミの歓楽街、橋めぐり、堺の工場群、港町神戸の洋館、兵庫県の産業遺跡、あめりか村、文化の都京都の大学施設等々、24コース600余りの作品。



西洋館漫步 建築スケッチの旅

田中薫 著
四六・248頁 本体1,900円+税

筆者が数年に亘ってスケッチをして歩いた、北海道から台湾に至る西洋館を、印象記と共に紹介するもの。それぞれの土地に息づく建物が、長い年月を経てどのような形で生きつづけているかを生き生きとした文章で語る。

井上武吉作品集

場とそこに宿る精神のために、空間を刻み続けた一人の彫刻家、井上武吉。
彫刻を個人の精神世界の表現として、同時代性のなかへ広く解放し、さらに日本の現代美術界に
常に問題を提起し続けた井上武吉の作品群。



Bukichi Inoue | my sky hole 1997

A4判・143頁 本体9,000円+税

現代彫刻家・井上武吉の最後の作品10余点を収録

1996年に出版された「Bukichi Inoue | my sky hole」の続編として刊行。井上武吉の最後の年に当たる1997年の作品10余点及び室生村「森の回廊」計画の紹介、さらにフランスの美術批評家ピエール・レストानीによる井上武吉論「鳥居のしるしのもとに」を収録している。詳細な年譜・文献目録・展覧会歴も併せて収録。

主要目次

鳥居のしるしのもとに

my sky hole 1997

福井県立音楽堂のための4つのmy sky hole

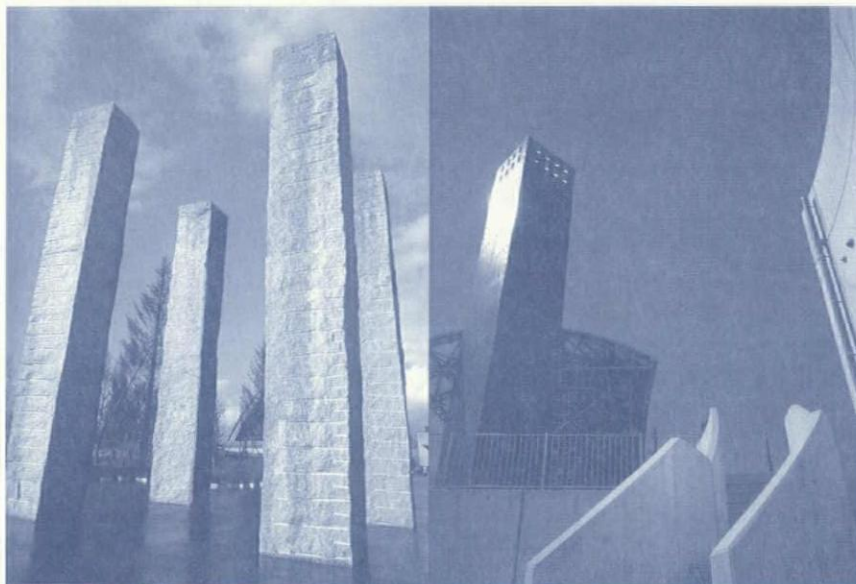
大津港シンボル緑地公園

生駒駅北口広場のための

奈良県宮福社パークのための

愛鷹広域公園スタンド前広場のための

室生村 森の回廊計画



my sky hole 97-3 風の門、福井

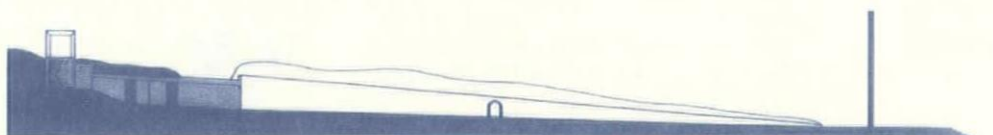
my sky hole 1997 奈良門



Bukichi Inoue | my sky hole

A4判・136頁 本体12,000円+税

my sky holeと題した本書は、1967年に制作した「無名戦士のための記念碑
—慰霊の泉」に始まって、箱根彫刻の森、美ヶ原高原美術館など数多くの
my sky hole シリーズを1冊にまとめた彫刻の写真集。



《現代の建築家》シリーズ

SD編集部編 A4変型判

《現代の建築家》シリーズは、常に建築界に大きな影響力を持ち、その時代の先端を走り続ける建築家たちの珠玉の作品集である。各建築家にとって記念碑的作品の完成を機に、SD編集部独自の視点により継続的に編まれる、他に類をみない画期的総特集である。豊富なカラー写真、図版、ドローイングと論文を盛り込み斬新なレイアウトによる美しい誌面で構成されている。

著名建築家たちの活動を時間軸で知る格好のシリーズといえる。(SD特集部分の上製・保存本)

アルヴァ・アアルト

216頁 本体4,000円＋税

巨匠、A. アアルトの全主要作品を掲載した総特集。「A. アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー」＝武藤章

金壽根

160頁 本体3,000円＋税

韓国の巨匠・金壽根の作品集。馬山聖堂、韓国海外開発公社社屋、徳成女子大学家政館・薬学館 他

楨 文彦 [1]

180頁 本体3,800円＋税

初期から'79年までの全作品集。岩崎美術館、代官山集合住居、立正大学熊谷校舎、大阪臨海スポーツセンター 他

楨 文彦 [2]

196頁 本体4,200円＋税

豊富なカラー写真により楨文彦の'80年代の活動を知る第2作品集。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館 他

楨 文彦 [3] 1987-92

218頁 本体4,400円＋税

'86年の特集に続く第3集。幕張メッセ、東京体育館などの公共建築、慶応大学湘南藤沢キャンパス 他

林 雅子

168頁 本体4,300円＋税

女性建築家として初の建築学会賞を受賞した林雅子の全作品を収録。ルーフトラスをもつ家、傾斜地に建つ家 他

カルロ・スカルパ [1]

214頁 本体3,000円＋税

イタリアのマエストロ、カルロ・スカルパの総特集。「スカルパ特集に寄せて」＝白井晟一、作品・年表・参考文献

カルロ・スカルパ [2]

134頁 本体3,398円＋税

最後の作品であるプリオン家墓地进行を始める、主要作品の大胆かつ緻密なドローイング約150点を収録。

白井晟一

160頁 本体4,000円＋税

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐骨館、ノアビル、聖キアラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵 他

安藤忠雄 [1]

178頁 本体3,500円＋税

'80年代初期までの総特集。詩＋ドローイング＝安藤忠雄。ガラスブロックウォール、帝塚山の家、住吉の長屋 他

安藤忠雄 [2]

196頁 本体4,700円＋税

'80年代の主要作品を、精緻でそして圧倒的な迫力で迫るドローイングと共に網羅した特集第2弾。

安藤忠雄 [3] アンビルト・プロジェクト

148頁 本体3,689円＋税

実体として実を結ばない数々のプロジェクトの膨大な図面、模型、ドローイングから安藤の建築哲学に迫る。

石井和紘

170頁 本体4,175円＋税

独自のキーワードを用い、話題作をつくり続ける石井和紘の初期から'80年代後半までの全主要54作品を収録。

岡田新一

178頁 本体3,000円＋税

論文《抽象と細密》と、充実した作品年表、ドローイングにより、その輝かしい足跡を辿る。最高裁判所庁舎 他

堀口捨己

176頁 本体3,204円＋税

庭の大家としてはもちろん、歌人として、達意の文章家としても知られ、その心はそのまま作品に生き続けている。

ジオ・ポンティ

88頁 本体2,300円＋税

建築、家具、絵画、彫刻など、多岐にわたる作品を娘リサ・ポンティの解説で年代を追って紹介する。ポンティ追悼号。

丹下健三 [1]

108頁 本体4,500円＋税

広島計画、東京都庁舎、東京計画'60年、代々木国立屋内総合競技場、赤坂プリンスホテル 他'80年までの全作品。

丹下健三 [2]

220頁 本体4,000円＋税

赤坂プリンスホテル、広島厚生年金文化会館、サウジアラビア王国国王宮殿・国家宮殿 他'80年以後の作品を網羅。

丹下健三 [3]

212頁 本体4,466円＋税

OUBセンター、ナンヤン工科大学、パリ・イタリア広場、横浜美術館、東京都庁舎 他'80年代の作品を収録。

丹下健三 [4]

202頁 本体4,078円＋税

新都庁舎を中心に、国内外の近作とプロジェクト、及びヨーロッパで展開している21世紀に向けての都市計画。

磯崎 新 [1]

194頁 本体4,000円＋税

初期から'76年までの総作品集。「位置と動き」＝ハンス・ホライン。秀巧社ビル、Y邸、群馬県立近代美術館 他

磯崎 新 [2]

196頁 本体4,800円＋税

衝撃的作品つくばセンタービルを中心に、'76年以後の主要作品を網羅。福岡相互銀行本店増築、MOCA 他

磯崎 新 [3]

170頁 本体4,660円＋税

'85年・'91年の作品集①。水戸芸術館、サンジョルディパレス、東京キリスト教学園チャペル、お茶の水スクエア 他

磯崎 新 [4]

138頁 本体4,369円＋税

'85年・'91年の作品集②。ティームディズニービルディング、ロサンゼルス現代美術館、EXPO'90国際陳列館 他。

黒川紀章 [1]

180頁 本体3,000円＋税

初期から'78年までの作品集。対談＝山崎正和＋黒川紀章、芦原義信＋黒川紀章。国立民俗学博物館 他

象設計集団

180頁 本体3,884円＋税

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出しつづける象設計集団の初めての作品集。名護市庁舎 他

高松 伸

210頁 本体3,689円＋税

'88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、全主要作品を一挙掲載。

早川邦彦

168頁 本体4,175円＋税

プロジェクト・商業施設・都市型複合建築・集合住宅・住宅・コンペ案まで、初期の作品から'88年までの全主要作品。

斎藤 裕

190頁 本体4,078円＋税

既成概念を白紙に戻し、自らの感性で捉え直した作品群、'75年以降の主要21作品。るるるる阿房、屋久島の家 他

原 広司

174頁 本体4,300円＋税

「様相論」を軸として展開してきた建築を収録した作品集。地球外建築、空中都市計画、梅田スカイビル 他

山本理顕

156頁 本体4,200円＋税

建築空間の変容を予見し、通念的な空間論に刺激を与え続ける山本理顕の'90・'95年の主要作品集。

長谷川逸子 [2] 1986-95

164頁 本体4,200円＋税

自立する建築を追求していた時代から、建築の公共性を重視するという姿勢を打ち出した'86・'95年の主要作品集。

磯崎新の本

1960年代以降、磯崎新は日本のリーディング・アーキテクトとして、世界のISOZAKIとして走り続けた。
21世紀のインザキの新たな戦略は、この7冊の本に鑲められている。

●著書



見立ての手法

日本的空間の読解

磯崎新 著
A5・338頁 本体3,400円＋税

めざましい設計活動を展開する国際的建築家・磯崎新の最新建築論集。本巻は、日本人建築家の作家論、あるいは都市論・庭園論をとおり、日本の空間または日本文化を論じたユニークな評論集である。



イメージゲーム

異文化との遭遇

磯崎新 著
A5・306頁 本体3,400円＋税

今この世界が、イメージだけが浮遊する決定不能の場となり、私たちのすべてのデザイン行為が、イメージをもてあそぶゲームの様相を呈しているという状況認識をもつ著者の建築を中心とする、ポストモダンへの眼差。



始源のもどき

ジャパネスキゼーション

磯崎新 著
A5・320頁 本体3,800円＋税

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を解き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローヴァルな日本文化論。



造物主議論

デミウルゴモルフィスム

磯崎新 著
A5・336頁 本体3,800円＋税

「建築」とは何か? という根源的な問いを自ずから投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす「建築論」の一大ページェント。「建築」の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作!!

●対談集



建築の一九三〇年代

系譜と脈絡

磯崎新 対談
A5・250頁 本体2,400円＋税

磯崎新の対談第2集。吉田五十八、生田勉、土浦亀城、吉武泰水、稲垣栄三、高山栄華、河野鷹思の7氏と語り、日本現代建築の「系譜と脈絡」を明らかにした。



空間へ

根源へと遡行する思考

磯崎新 著
A5・522頁 本体4,600円＋税

磯崎新の建築家としての出発点を決定づけた「プロセス・プランニング論」また思想的自伝「見えない都市」など、1960-70年代の空間論・都市論32編を収録する処女論集。四半世紀を経たいまでも新鮮さを失っていない。



建築の解体

一九六八年の建築情況

磯崎新 著
A5・450頁 本体4,200円＋税

1968年の時点で後のポストモダンの到来を予告した衝撃の書。ホライン、アーキグラム、ムーア、プライス、アレグザンダー、ヴェンチュリ、スーパースタジオ、アーキズムを論じる。改めて磯崎の慧眼ぶりに脱帽。



手法が

カウンター・アーキテクチャ

磯崎新 著
A5・336頁 本体3,800円＋税

建築家・磯崎新の「近代建築との絶縁宣言」としてさまざまな手法の駆使によるメディアの生成を論じた「手法論」、情報装置構想からカタログ文明論までを含む「模型論」のほか、「反建築ノート」等1970年代の軌跡の集大成。



ポスト・モダンの時代と建築

磯崎新 対談

A5・280頁 本体2,600円＋税

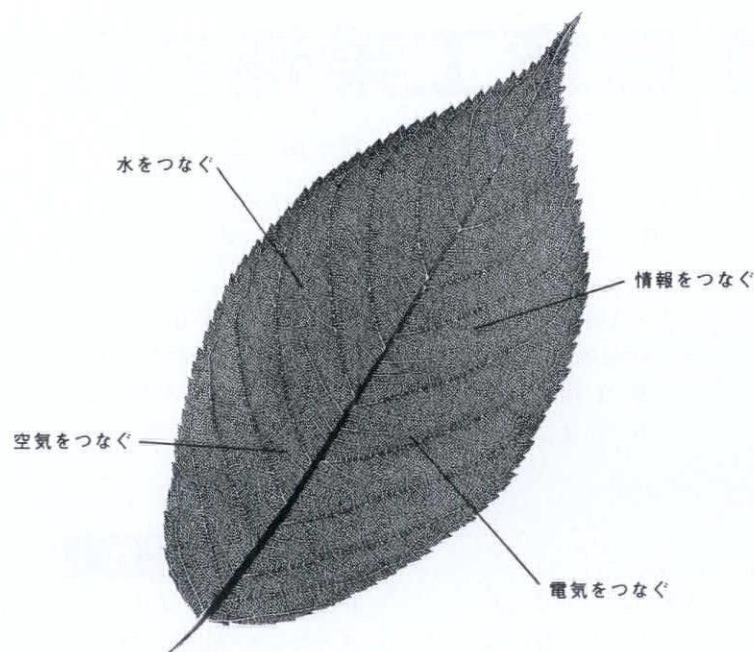
ポスト・モダニズムに関しても最大の話題の主である磯崎新の、最近10年間(1975-84)の対談集。内外の批評家17人と、日本も含めた世界の文化の具体的な状況、「ポスト・モダン」という時代の兆候について語っている。

ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



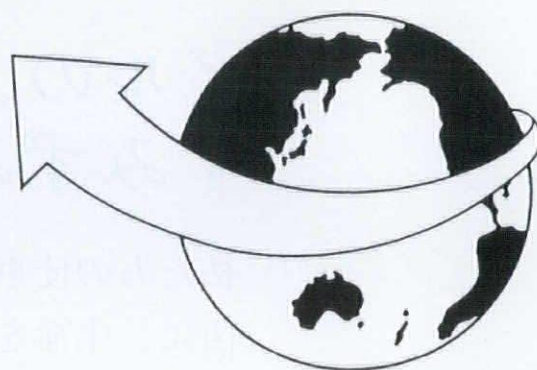
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

未来に向かって...

限りある資源
限りある空間の中で
より快適な環境づくりの
ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711

大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273

支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3-11-7(日立神田別館) ☎03-3254-3000

●大阪支店 ●横浜支店 ●仙台支店 ●広島出張所 ●福岡出張所

日立製作所電機特約店

日立化成工業特約店

日立機材特約店

日立建機特約店

旭化成建材代理店

新明和工業特約店

大和ハウス工業特約店

大昭和製紙特約店

施 設 商 品

エレベータ・エスカレータ

ホームエレベータ

機械駐車設備

ゴミ処理設備

バスユニット・流し台

洗面化粧台

集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事

受変電・自家発電設備

空調機・ポンプ・送風機

監視防犯システム

節水バルブ・節水トイレ

建 材 商 品

PHCパイプ・シテイガイ

イーゼット・現場造成杭

地盤改良

ヘーベル・グランデ

押出成形版・金属パネル

屋根・硝子工事

フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事

ハイベース・ハイスプリット

ユーボード・軽量鉄骨

プレハブ規格建築

大昭和ユニボード

九木ライトフォーム・シールド

クローラクレーン・耐火被覆

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

神奈川——神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641代

ア	株朝日工業社	A14
カ	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
	川崎電気株	A11
	株関電工	A12
ク	栗原工業株	A10
サ	三機工業株	107
ス	住友電設株	A13
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A8
チ	株中電工	A11
ト	東陶機器株	A1
	株トーエネック	A10
	東洋熱工業株	112
ニ	日新工業株	A3
	株西原衛生工業所	A9
	日章工業株	A14
ヒ	株日立製作所	表4
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業株	A2
ミ	美和ロック株	101
	三菱電機株	111
ヤ	矢崎総業株	表2
	株ヤナセ設備工業	108
	山田照明株	A16

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。

人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



高崎シティーホール(群馬)
設計監理: 久米設計



山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒104-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161
横浜支社/ショールーム 〒220-0035 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630 大阪支社 〒557-0006 東大阪市橋根 2-2-6 TEL.06-6745-6811 福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531
札幌営業所 〒005-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215 北関東営業所 〒370-0081 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111 名古屋営業所 〒460-0035 名古屋市東区東桜 1-10-9 TEL.052-963-8411
広島営業所 〒733-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031 宇都宮事務所 〒321-0871 宇都宮市海道町 818-2 TEL.0286-60-1381